

W・サマセット・モーム

英雄

宮川 誠 訳

主な登場人物

ジェイムズ（ジェイミー）・パーソンズ大尉
リッチモンド・パーソンズ大佐……ジェイムズの父
フランシス・パーソンズ……ジェイムズの母。五十五歳
ウイリアム・フォーサイス少佐……ジェイムズの叔父、フランシスの弟
メアリー・クリボーン……ジェイムズの婚約者
レジナルド（レジー）・クリボーン大佐……メアリーの父
クララ・クリボーン……その妻、メアリーの母。五十歳
アーチボルト・ジャクソン……リトルプリンプトンの教区牧師
マリア・ジャクソン……その妻
トーマス・ドライランド……リトルプリンプトンの副牧師、三十三歳
ブリチャード・ウォーレイス夫人……インド人兵士を率いる連隊長の妻
レジー・ラーチャー……戦場でジェイムズが助けようとした青年

『英雄』の翻訳に当たって

私淑する中野好夫は『二都物語』の「解説」のなかの「翻訳について」で次のように述べている。
(一九六一年)

はじめ訳出にかかったとき、あの修辭的裝飾の多い、めかしや気取りの多い(しばしば)長文を、いったいどんなふうに読める日本語に移したのか、正直にいつて、ハタと困惑した。——(中略)——あのまま原文逐語訳的に日本語に移した日には、どんな日本語になるか、これも頭痛の種だった。もともと頭痛ハチマキで小説を読む一般読者などいるはずもないし、またそんなばかな話があつていいわけのものでもないからである。どうしたら、とにかく原文にも一応忠実に、しかも面白く読んでもらえるような日本語になるものか、大いに迷った。

で、結局は、英語の先生には叱られてもよいから、思い切つて日本文的発想に組み直すことにした。べつに英語学習用の対訳でもなければ、虎の巻でもないのだから、それでよからうということにした。といつて、ことさら原文離れたわけでもなければ、まして大意訳ではない。少なくとも原文の言葉の一つ一つは、すべて含意をとつて入れたつもりである。ただ Good morning はヨイアサとやらないで、「お早う」とか、「今日は」とするとか、 Its too good to be true は「あまりによすぎて、真実では有り得ない」のかわりに「まるで夢のようだわ」とやっ

てしまった程度のことである。——(後略)——

翻訳する時いつも心掛けているのは中野氏のこの言葉であつて、今回もできるだけそうなるよう努力したつもりである。もちろん中野氏のような日本語の達人の訳業に遠く及ばないのは重々承知である。

「支配せよ、ブリタニア！」

ブリタニア、波濤を支配せよ。

イギリス人は決して奴隷にはならぬ。」

(『アルフレッド』 仮面宮廷劇 ジェームズ・トムソン作)

「おお、ソフォニズバ、ソフォニズバ、おお！」

(『ソフォニズバ』 悲劇 同じくトムソン作)

ミス・ジュリア・モームに

1

パーソンズ大佐は食堂の窓辺に腰掛け、暮れゆく最後の陽差しの中でスタンダード紙を眺めて読み残したところがないか確かめた。そして小さく溜息をつく、新聞を畳み、眼鏡を外してケースに収めた。

「読み終わりました？」妻が尋ねた。

「ああ、全部読んだと思う。大した記事はないね。」

大佐は窓の外に眼をやった。邸に通じる手入れの行き届いた道、館の前庭と村の草地とを分ける月桂樹の茂み。彼の視線は、幸福そうな笑みとともに、敷地の門の上にとまった。明日南アフリカから帰還することになっている息子を迎えるために、門は今、装飾が施され、「凱旋門」となっている。パーソンズ夫人はせっせと器用に指を動かし、夫のための靴下編みに余念がない。大佐は針がキラツ、キラツと光を反射するのを見ると、

「フランス、こんな暗い中であまり長く続けたら目を悪くするよ。」と声を掛けた。

夫人は情愛のこもった微笑みを浮かべ、「あら、見なくても編めますから。」と応えたものの、針を動かすのを止め、テーブルの上に靴下を置くと、それを手で押さえて皺を伸ばした。

「この前のより丈を少し長くしてくれると有難いんだがね。」
「どのくらい？」

夫人は立ち上がり、どのくらい長くしてほしいのか正確なところを知りたいと窓辺の夫のところへ行ったが、夫がこのくらいだと示すと、何も言わずに再び暖炉脇の椅子に座り、穏やかな表情で膝の上に手を置いて、女中がランプを持ってくるのを待った。

パーソンズ夫人は長身で、歳は五十五、夫より背が高いのを少し羞じているようなところがある。結婚このかた、この数インチの差がどうも夫への敬意を欠いているような気がしてならない。心から夫を尊敬するのが自分の義務だと頭では分かっているのだが、物理的には夫を見下ろさざるを得ないからだ。聖書によつて課された——また己の良心に照らしてもそうであるべき——妻としての義務、それを忘れてはいまいかと夫が些かでも疑いを抱くようなことがあつてはならない。だから夫人は常に注意深く夫に従っていた。真に心優しい人であると言つてよかろう。夫への深い愛、夫の理性と心性への称讃の念が揺らいだことは一時たりともない。夫人の目には夫こそは神の道を歩んでいる高貴な人なのだと映っていた。その穏やかで滑らかな顔、落ち着いた瞳を見れば、パーソンズ夫人が率直で誠実、飾らない性格の持主であることがよく判るのだが、それは中央で分けられ、頭の後ろで厳しく結ばれた髪にさえ表われていた。夫人は悪魔の誘惑とは一切無縁の人で、彼女にとつて悪魔の存在は単に理論上のものにすぎなかつた。神へと導いてくれる生き方、それだけが自分の歩むべき道であり、他に道は存在しない。義務は一つの手、一本の指しか持つておらず、その指は常に明確に一つの方向を指し示しているのだった。しかし、パーソンズ夫人のしつかりした口元、角張った顎を見た

者は、又ちよつと違った印象を受けるだろう。静かに椅子に座り、膝の上に手を重ね、愛情あふれる眼差いで夫を見つめている姿には、夫人は己の欠点に対して、また他人の欠点に対して決して甘い人ではないことが現れている。控えめそのもの人ではあつたが、ある行為は絶対に正しく、ある行為は絶対に間違っている筈だと信じている夫人は、誰かが何か間違つたことを行なえば、たとえ愛してやまない家族であつても、義務感から容赦なくそれを指摘した。

「おや、電報のようだ。配達の子が来た。」突然パーソンズ大佐が言った。「ジェイミーはまだ着いとらん筈だが。」

「リッチモンド、あなた！ まさか……。」

夫人は椅子から飛び上がった。普段は蒼白い頬は赤く染まり、心臓が早鐘を打ち、眼は期待と不安で潤んでいる。

「多分ウィリアムからだだろう。船と連絡が取れたんじゃないかな。」大佐は妻を落ち着かせようとしたが、彼自身の声も震えていた。

「何かあつたわけじゃないわよね、リッチモンド。」厭な予感に頬が再び蒼白になっている。

「ないない、そんなことは絶対ない。ばかだなあ。」召使が電報を持ってきた。「明かりがないと見えん。」

「あたしに貸して。あたしは見えるから。」

パーソンズ夫人は電報を手にして窓辺により、顫える手で封を切つた。

「コンヤ七・二五トウチャクヨテイ——ジェイミー——」

夫人は一瞬夫を見つめ、そして自分を抑えておくことができず椅子に沈み込むと、手で顔を覆って泣き出した。

「さあさあ、フランシス、」大佐は笑顔を作ろうとした。が、彼自身感極まっていた。「泣きなさんな。息子が帰ってくるんだ、笑わなくちゃ。」

大佐は夫人の肩を軽く叩いた。夫人はその手をとって、慰めを求めるように強く握った。大佐はもう片方の手でハンカチを取り出すと、涙を隠そうと鼻をかんだ。最後に夫人は頬を拭うと、

「ああ、神様、やっと終わった！」と言った。「ジェイミーが帰ってくる。もうこんな苦しみ味わうことないのよね。新聞が配達されるのをまだかまだかと待ちながら恐がっていたことを思うと、今でも軀が震えるの。戦死者の欄に目を凝らして、あの子の名前が載ってるんじゃないかって……。」

「さあ、フランシス、みんな終わったんだ。」大佐はもう一度鼻をかむと、陽気に言った。「きつとメアリーが喜ぶぞ！」

息子が予定より早く帰ってくるのが判って大佐が最初に考えたのがメアリー・クリボーンの喜ぶ姿であったのは、いかにも大佐らしいと言えよう。息子がメアリーと婚約してもう五年も経つのだ。

「そうね。でも今夜はここに来られないそうよ。さぞ残念でしょうね。タンブリッジウエルズのポルソンさんのところへ出かけて、遅くならないと戻らないって。」

「そりや残念。ジェイミーを迎えに行くには遅すぎるだろうな、もう七時近いから。」

「ええ。それに湿気もありますし。外出するのは好くないわ。」

夫人は食事のことを思い出した。

「ねえ、あなた、夕食が心配。残り物の冷たい羊肉マトンしかないんです。鶏を絞めて料理する時間もないし。」

息子の帰還を祝おうと夫妻は何人かの友人を明日の夕食に招待してあって、夫人はその時鶏料理を出すつもりでいたのだ。

「ハウのところに骨付肉チキンぐらい残っているだろう。この時間なら店はまだ開いている筈だ。」

「そうですね。ベティーを遣やりましょう。デザートにはブラマンジュがあります。」

夫人は女中に必要なことを伝えに行った。大佐は全てが整頓されていることを確かめるべく——もう百回は確かめているだろう——息子の部屋へ上がっていった。夫妻は、若い兵士が寝室として最高の客間を与えられるべきか、それとも子供の時から馴染んでいる部屋で眠やすむべきか、何日間も議論を重ねたのだった。息子の帰還を迎える準備をしながら、どうすれば一番喜んでくれるだろうかと考えるのは楽しかった。ジェイミーの部屋は、家を出た時と全く同じ状態にしておいてやりたい。夫妻は詳細に記憶をたどり、留守中に何か一つでも置き場所が変わったものはないかと、何度も何度も確かめた。そうすることで早く会いたいという熱い願いを満足させようとした。息子のために実際何かしてやっているのだと考えると、二人の幸福感は少しばかり増すのだった。愛する者のために何もしてやれないことほど耐えがたい苦痛はあるまい。何かしてやりながらも、それが喜びを与えてくれないなら、こんなに厭いとわしいことはあるまい。息子にはもう五年も会っていないかった。しかも一人息子なのだ。ジェイミーはサンドハースト陸軍士官学校から直接インドに派遣され、次には、ボーア戦争の勃発と共にそこから南アフリカ喜望峰へと派遣された。この五年に及ぶ別れを二人がどんなに寂しく

感じていたことか、たまに届く息子からの手紙をどんなに首を長くして待ちわびたことか、届けられた手紙を何度読み返したことか、それは誰にも分かるまい。

夫妻は息子ジェイミーの陸軍での経歴に強い関心を持つていたのだが、それは単に親としての愛情のゆえばかりではない。父リッチモンドが失った名声を息子が取り戻してくれることを切に願っていたのである。四世代にわたってパーソンズ家の家長は陸軍に所属し、家名を高め、己の名譽を誇ってきた。パーソンズ大佐も、勇敢で優れた軍人であった祖先の血を引き継ぎ、その経歴も祖先同様素晴らしいものだった。もつとも軍人らしく、勇敢で、誇り高かったと言つてもよからう。その大佐がパーソンズの家名を穢たがしてしまったのだ。大佐は非難の嵐の中、辱められ、不名誉にさらされ、軍を辞めざるをえなかった。家名は地に落ちたのだった。

パーソンズ大佐は、それまで、軍人としての任務を立派に果たしていた。陸軍省よりも神を重んじてはいたが、それが任務に支障を来すことはなく、部下の兵士を父親のような眼差しを持つて愛しており、指揮下にある連隊は礼節、嗜たしなみの点で軍の模範だった。彼の影響は常に良き方へと向かい、配下の誰もが大佐を信頼できる友人と見なしていた。これほど愛されていた将校は滅多にあるまい。気性は穏やかで優しく、どんな状況の中でも己を愛するように隣人を愛することを忘れなかった。どんなに卑しい階級カラスの間でも不滅の魂を持ち、神の前では彼自身と同じ権利を持つことを片時も忘れることはなかった。パーソンズ大佐の敬虔さは押しつけがましいところが全くなく、明るく素朴で、誰にも逆らえないものだったから、汚い言葉、卑猥な言葉は大佐が現れると本能的に消えてなくなり、

手のつけられない破落戸ごろうつきも大佐の前では温和おとなしくなるのだった。

ところが、退職を二年後に控えた年、イギリスの支配を良しとせず或る丘に陣を構える部族に対して小規模な討伐部隊が編成され、パーソンズ大佐がその指揮官に任命された。大佐は部族を急襲することに成功した。敵が丘の麓たむろに屯しているのを発見した大佐は、側面攻撃を仕掛けることで、敵の退路を断つ作戦を立て、銃を構えた兵士たちを右手の小高い丘の上に一列に配置したのだった。もはや敵は完全に彼の手中にあった。もしそうしようと思えば部族を殲滅せんめつすることもできたが、これほど彼の考えと異なるものはなかった。大佐は部族に投降を要求した。夕暮れ近く、部族の何人かの長おきが大佐の前に現われ、翌日銃を放棄することに同意した。夜は冷たく、暗く、嵐模様だった。善なる人。パーソンズ大佐は己の戦略が上手くいったことと慈愛が受け入れられたことを喜んだ。一滴の血も流すことなく反乱は治められたのだ。

「丁重に扱ってやれ、そうすれば向こうはもつと丁重に君を扱うというものだ。」彼は独り言ひとりごとちた。

彼は紳士として、クリスチャンとして行動した。しかし敵は紳士でもなければクリスチャンでもなかった。大佐は自分が完全に騙されているとは夢にも思わなかったが、敵は大佐が何の疑いもなく与えた一晚の猶予を利用し、丘を越えて急使を送り、援軍を求めたのである。それに応え、武装した男たちが夜の闇に紛れて忍び寄り、四方を取り囲んだ。早朝、日の出前、側面を固めていた部隊が攻撃された。パーソンズ大佐は少し驚き、すぐに援軍を送った。彼はまだ数の上でこの反抗的な部族に勝まさつていると考え、その主力部隊を攻撃した。これは敵の思う壺だった。ゆつくりと退却していると見せかけて、彼らは大佐を峡谷へ誘い出した。罠に嵌まったと思った時にはもう遅かった。彼の小部隊

は敵に取り囲まれ、それから五時間、全くの混乱状態が続いた。兵士たちは見えない敵に蠅のように撃たれた。必死の防衛の末やっと峡谷を脱した時、五十人が殺され、さらに百人以上が負傷していた。

パーソンズ大佐は直接の指揮下にある精鋭部隊の生き残りの者たちと撤退していたのだが、皆疲労困憊、狼狽していて士気は上がらなかった。それでも彼は退却を続けなければならなかった。勇敢な軍人である大佐は、部隊が総崩れし壊滅的敗走になることを防ぐために出来る限りのことをした。兵士たちを集め、士気を鼓舞した。自らの生命を進んで危険に曝したことも何度もあった。しかし、それでも、この敗北が悲惨極まりないものであることは隠しようのない事実だった。小規模な戦闘であったからということで、この件は揉み消されたが、そこから生じた影響は忘れようもない。戦いに勝利した部族はますます大胆に、ますます手が付けられなくなった。その結果、難なく治まっていたであろう騒擾が、今や大部隊を投入して鎮圧せざるを得なくなり、さらに五百名の生命が奪われることとなったのである。

パーソンズ大佐は辞表を提出するよう要求され、失意の人となつてインドを離れた。彼はイギリスに戻るとリトルプリンプトンの父の家に落ち着いたが、苦悩は続いており、将来のことを考えて、ただ恐ろしい絶望と無益な後悔とを感じるのだった。数ヶ月間、彼は誰とも会おうとしなかった。人々が自分を指さし、あいつのお蔭で沢山の兵隊さんが死んだんだと言っている姿が頭に浮かんた。人々の笑い声を聞くと、自分を軽蔑して笑っているのだと思った。人々の目に哀れみの表情を見ると、涙を抑えられなかった。実際大佐は完全に打ちのめされていた。人々の目を逃れるために館の庭を歩き回り、あの惴しい一週間の出来事を心の中で反芻するのだった。他の方法を採つていたとしても結果

は同じだったのだなどと考えて自分を慰めることは到底できなかった。自分の過失であることは明白なのだ。どこで過つたかを自らに指摘し、「ああ、神よ、何故私はあんなことをしてしまったのでしょうか?」と呻いた。暑さも寒さも忘れて庭を落ち着きなく歩き回る大佐の痩せた頬を、まるで焦がすかのように、痛ましい涙が流れるのだった。妻の慰めも受け入れようとはしなかった。

「あなたは最善を尽くしたわ、リッチモンド。」

「ああ。私は最善を尽くした。あの連中を包囲した時、もしそうしようと思えば全員殺せたんだ。しかし私は屠殺人ではない。降伏した者を皆殺しにするなんて、そんな冷酷なことは私にはできない。そんなのは戦争じゃない。それは殺人だ。そんなことをしたら神様の前でどう説明できる? 私は命は取らなかつた。連中も解つてくれたものだと思う。しかし連中はそれを私の弱さだと考えたんだ。私は、連中が畏を準備していることに気づかなかつた。私の罪だ。私の名声は地に落ちた。もう二度と顔を上げて歩けない。」

「あなたは神様の目には正しいことをなされたのよ、リッチモンド。」

「フランシス、私はクリスチャンとして行動した。そう思うし、そう信じている。」

「神様がお喜びになることをなされたんですから、人が何て言おうと気になさることありませんわ。」

「なあ、馬鹿だの弱虫だのと呼ばれても、そんなことなら耐えられる。私は正しいと思うことをしたのだから。部下を犠牲にしない、敵の生命も奪わない、それが私の義務だと思った。で、その結果は、さらに十倍の兵士が犠牲になった。ああ、私が大胆に無慈悲に攻撃してさえいたら……。未亡人とな

つた人たち、父親を失った子供たちは私を呪っているに違いない。夫が死んだのは私の所為だ。父親がインドの丘で朽ちているのは私の所為なんだ。私が野蛮人のように、獣のよう、屠殺人のように振舞っていたなら、皆んな今でも生きていたんだ。私は慈悲をかけた、そして裏切りにあつた。私は辛抱強い人間だ、それを連中は弱い男だと考えた。私は寛大な人間だ、それを連中は嘲笑った。」

パーソンズ夫人は夫の肩に手を置くと、
「忘れるようにしましょう、あなた。」と優しく言った。「終わったことなんです。もうどうしようもありませんわ。あなたは神を畏れる人として振舞った。邪悪な意図は何もなかったんですから、良心に恥じることはありません。人がどう判断するかなんて、神様の審判の前では何だということですか？ 人から非難や屈辱を受けても、神様はその何倍も何十倍も報いてくれます。だってあなたは神様の僕として振舞ったんですもの。あなたは正しいことをした、そうあたしは信じています。あなたを誇りに思っています。」

「フランシス、私は常にクリスチャンとして、そして紳士として行動しようとしてきたんだ。」

夜毎大佐はあの混乱と死地をさまよった日々の夢を見た。夢の中で再び彼は部下を鼓舞し、失地を回復すべくできる限りのことをしながら、恐ろしい退却を指揮していた。しかし自分を待っているのは破滅だけだということも意識していた。自らの指揮下にあるどんな無知なインド人兵士も、隊長は無能だ、気が狂っている、そう考えているのが分かった。下士官の目に苦々しい軽蔑と怒りが浮かんでいるのが見て取れた。彼が退却を選び、その結果、名誉と栄光の代わりに、嘲りを受けることになったからである。上官との面談を思い出すと大佐の手足は震え、煩悶の中で汗びっしょりになった。

「おまえに向いているのは間抜けな宣教師ぐらいなものだ。もう用はない。辞表を提出してよろしい。」最後は侮蔑に満ちた言葉が投げつけられたのだった。

しかし、人間の悲しみというものは土で作った鍋のようなものなのだろう、徐々に徐々にパーソンズ大佐は心の痛みを忘れていった。頻繁に自らの不幸を考え過ぎたせいで、最後には頭が混乱してしまつたのだ。そうになると、深い傷もある程度癒やされ、傷跡が残るだけとなる。大佐は生活を取り巻く様々なことに興味を持ち始めた。以前には新聞を読むとその一語一語が何らかの連想を生みだし彼を苦しめたのだが、今はそういうこともなくなつた。それに、新聞を毎日隅から隅まで読むことほど人間の脳を鈍化させてくれるものはあるまい。彼は庭をぶらつき、庭師と雑談するようになった。屋敷に幾つかの変更を加えた。煉瓦とモルタルは鎮痛剤だつた。切手収集を始め、妻とランプをするようにもなつた。そしてゆつくりとではあつたが、ついに心の平静を取り戻したのだつた。

しかし息子ジェームズが輝かしい成績で陸軍士官学校を卒業した時、大切にしてきた家名が回復できるのではあるまいかという思いに捉えられた。これまで大佐は軍を辞めざるを得なくなつたあの惨劇について息子に語ることを避けていたのだが、今は正確に語っておこうと決心した。傍に座つて話を聞く妻の目に苦悶の表情が浮かんでいた。というのは、この半分忘れかけた出来事を回想することが夫にとってどんなに辛いことか分かつていたからである。

「誰か他の人間から聞かされるより、私から聞いた方がよからうと思つたのだ。」語り終えて大佐は言った。「私が軍に入った時には私は父の名声を背負っていた。しかし私の評判はおまえにとつて害にしかならないだろう。皆んな、こっそり肘を突きあつて、『見る、パーソンズの息子だ。マッド・

ケールズの件でへまをやったパーソンズのな』と、そう言うだろう。だからおまえは自分が優秀な軍人であることを見せてやらなければならない。私は最善を尽くした、だから良心に恥じるころは何もない……、が、もしおまえが皆んなに忘れさせてくれるなら……、私は幸せに死んでゆけるだろう。」

息子が配属された連隊の指揮官は大佐の古い友人だったのだが、暫くすると手紙でジェームズを高く評価していると言ってきた。既に前線のちよつとした戦闘で目立った活躍をしたと。そしてやがて別の遠征でも勇猛に戦い、公文書に名前が記されたと。パーソンズ大佐は昔の明るさを完全に取り戻した。ジェイミーが勇敢な軍人であり、軍務に関して豊かな知識を有しているのを証明してくれたことで、ついに大佐は再び人の顔を真面に見られるようになった。そしてポーア戦争が始まった。リトルプリンプトンに暮らす両親にとって、そしてメアリー・クリボンにとって、絶え間ない不安と心配の日々だった。その不安と心配は、それを相手に知られまいとするが故に、尚更大きなものになってゆくのだった。そして、最後に、ジェイミーが同僚の生命を助けようとして深い傷を負った、その武勲によりヴィクトリア十字勲章に推挙されたとの記事が新聞に載ったのだった。

2

パーソンズ夫妻は再び台所の椅子に腰掛け、ジェイミーが到着するまで後何か数え始めた。テーブルの上に質素な夕食の準備が整っている。夫妻の習慣は何もかも質素なのだ。明日の催しのために用意したブラマンジュも、非国教会牧師のように断固妥協せずといった雰囲気で、しっかりテーブルに載っている。それにしても、イギリス料理の中で最も厭うべきこのデザートについて誰か毒舌をふるってくれないものか、と筆者は思うのだが……。さえない色、よそよそしさ、ねばねばした感じ。見た目もひどいが、口に入れてもちつとも美味くない。文化の過渡期を示す料理のように思えてならない。ちようど南洋の島々に暮らす人間が、文明の進出と共に、悪臭のする鯨肉を棄てて宣教師の丸焼きを食したように、偉大な大英帝国の中産階級は、タルトやプラムプディングは過去の頑強な胃袋をもった人々にはよかつたかも知れないが現在の人間には重すぎる、対してブラマンジュは垢抜けて見えるし、名前からしてフランス風だし、素人にも簡単に作れるし、歯で噛み砕く必要もないし、と言って最近食し始めたものに過ぎない。

「ベティーに言っただけのためにゼリーを作らせておかなくちやなりませんね。」と夫人。

「そうだな。」と大佐は答えたが、すぐに、「ジェイミーが戻ったことをメアリーにも知らせておく

べきだと思わんか？ 今夜会いたいかも知れんし……。」と付け加えた。

「もう使いを遣りました。」

ジェイミーが大尉に昇進したらなるだけ早くメアリー・クリボーンと結婚する、そう両家とも理解していた。大佐も妻も息子がメアリーと婚約したと告げに来た時は喜んだものだ。悪を知らないことは美德と同じであるという教会の見解を良しとする二人は、息子を悪の知識から守ろうと絶えず努めてきたからだ。しかしそれは決して易しいことではなかった。取分け子供がパブリックスクールへ、そしてサンドハースト陸軍士官学校へ行っている間は誰にとつてもそうだろう。インドへの派遣が決まった時、二人は、かの地での極彩色の暮らしの中で息子の純真さを保つには、穢れなく愛らしいイギリス人女性を許嫁にもつこと以上に良い方法はない、そう考えたのだった。夫妻はすでにメアリー・クリボーンを嫁と見なしていた。そして息子の留守中、メアリーは夫妻の唯一の慰めとなっていた。優しく善良で、素朴な宗教心を持ったメアリーが二人は大好きだった。この娘となら息子は間違いないく神を敬い幸せな生活を送ることだろう、そう思つて二人は自らを祝福するのだった。

メアリーはこの五年の間毎日夫妻に会いに来ていた。彼女自身の両親はどちらかというと世俗的な人で、メアリーは両親といつても、パーソンズ夫妻と一緒にいる時ほど幸せを感じなかったからだ。メアリーとパーソンズ夫妻は、留守のジェイミーについて語り合い、彼からの手紙を読み合つた。ジェイミーが書いて寄越す冗談に笑い合つたが、それはユーモアのセンスというものは悪魔の畏かも知れないと考える人々に相応しい穏やかなものだった。あるいはまた、危険な目に遭つたと書いてある時には、一緒に震えるのだった。ジェイミーに対するメアリーの愛は熱情といった品のないものとは程

遠く、彼からのラブレターを夫妻に読んで聞かせても顔を赧らめることはなかった。メアリーは淡泊な人で、手紙の中に自分にだけ宛てた内容が書かれているかも知れないなどと疑うことはなかったし、ジェイミーの繊細さを感じ取るには素直でありすぎるのだった。

馬車が門入ってくるゴロゴロという音が聞こえた。善良なる夫妻にとうとう幸福が訪れたのだ。二人はドアに急いだ。

「ジェイミー！」

夫妻は喜びに震えて息子を迎え入れ、椅子に座らせたが、喜びを伝える言葉が思い浮かばず、ただ口を開け、笑みを浮かべて、立つたまま息子を見つめていた。

「さてさて、よく来たな！ 電報をもらつて驚いたよ。いつ船を下りたんだ？」

やつと言葉を見つけたが、まるでロンドンから日帰りで遊びに来た友人を迎える時のような陳腐なことしか言えなかった。自分を抑えることに慣れきってしまった二人は、いま圧倒的な感情に襲われているにも拘わらず、それをどう表現してよいのか途方に暮れていた。

「二階へ行つて手を洗つたら？」

二人は息子を二階へ案内した。

「昔のままだろう。その方がおまえが気に入るだろうと思つてね。何か用があつたら呼鈴を鳴らしてくれ。」

息子を部屋に残し、夫妻は一階に引き返すと、暖炉の前に向かい合つて腰掛けた。台所には毛氈地のソファアー一式があつたが、パーソンズ大佐は肘掛けの付いた「主人の椅子」に、パーソンズ夫人は

肘掛けのない「主婦の椅子」に座った、——二人とも、どんな状況であろうと、相手の椅子を使つてみようなどと考えたことはない。二人は少々疲れを感じていた。

「あの子、痩せたわね。」

「美味しいものを沢山食わせてやらなくちゃな。」

それだけ言葉を交わすと、無言で息子が降りてくるのを待った。ジェイミーが姿を現した。夫人はすぐに呼鈴を鳴らして骨付肉を持つてこさせ、テーブルを囲んで腰掛けた。しかし食べたのはジェームズだけだった。両親は幸せすぎて息子を見つめることしかできなかったのだ。

「お茶の支度もあるわ。でもあなたがその方がいいなら、葡萄酒もあるけど？」

五年間離れていたがジェームズは父の葡萄酒の味は忘れていなかったからお茶を選んだ。

「濃いお茶はとっても躰にいいのよ。」そう言いながら母は子供だったジェイムズにお茶を注いだものだ。ミルクと砂糖をいっぱい加えて。

息子の好みを尋ねることは一度たりともなかった。息子のために良かれと、全てのことが親切この上ないやり方で為されてきたのだ。ジェームズは今は甘いものは嫌いだった。

「母さん、砂糖は入れないで。」母が角砂糖の入った容器に手を突っ込むのを見てジェームズが言った。

「あら、なぜ？」母親は上機嫌に、甘やかすような笑みを浮かべて応えた。「お砂糖は躰にいいのよ。」そう言つて夫人は角砂糖を二つカップに入れた。

「ジェイミー、おまえメアリーについてまだ何も訊かないが……？」パーソンズ大佐が言った。

「彼女どんなです？ 今どこに？」

「ちよつとすれば、ここに来るよ。」

そこへ夫人が口を挟んだ。

「あの娘がいなかったら、あたしたちどうなつていたか分からないわ。とっても親切だし、良くしてくれる。本当にあたしたちあの娘が大好きなの、そうよね、リッチモンド。」

「あんないい娘はいないな。」

「それにとつても思いやりがあるの。貧しい人たちのために、まるで看護婦さんみたいに働いてるのよ。手紙に書いたように、クリボンご夫妻が海外へ行っている間六ヶ月あたしたちの家で過ごしたんだけど、不機嫌になることなんて一度もなかった。いつも元気でニコニコしてるの。本当にいい性格ね。」

善なる人パーソンズ夫妻はメアリーを称讃することで息子が喜んでくれるものと思つていた。が、ジェームズが両親を見つめる目に笑みはなかった。

「彼女を気に入つてくれて嬉しいです。」

食事が終わり、パーソンズ夫人は暫く席を離れた。ジェームズはシガーケースを取り出して、父に一本勧めた。

「私は吸わないんだ。」

ジェームズが葉巻に火を付けると、大佐は驚いた表情で息子を見たが、何も言わず椅子を後ろに引いて、気にしない風を装つた。パーソンズ夫人が戻つた時、部屋は煙でいっぱいだった。夫人は驚い

て叫んだ。

「ジェームズ！」その声には非難の響きがあった。「お父さんが煙草に反対なのは知ってるでしょ？」

「なに、今回だけなら気にしないさ。」大佐は上機嫌だった。

しかしジェームズは笑って、吸いかけの葉巻を暖炉に放り投げた。

「すっかり忘れてました。すみません。」

「煙草を始めたなんて言わなかったじゃない。」夫人は喫煙自体に反対の様子だ。「リッチモンド、窓を開けましょうか？」

その時玄関の呼鈴が鳴り、メアリーの声が聞こえた。

「パーソンズ大尉はもう到着なさった？」

「さあ来たぞ！ ジェイミー、出迎えてやれ。さあ、走った走った！」

しかしジェームズは立ち上がるだけで満足な様子だった。厳粛な顔に奇妙な表情が浮かんでいる。

メアリーが入ってきた。

「メモを見て飛んできました。お久しぶり、ジェイミー！」

彼女は立ち止まって微笑んだ。健康そうな頬が赤く染まり、瞳が幸福そうに輝いている。自分はその通りだと思っていたが、今にもワツと泣き出してしまいうに違いない、メアリーはそんな気がした。

「キスしてやらないのかい？」大佐が言った。「私らの前だ、恥ずかしがることはないさ。」

ジェームズはメアリーに歩み寄ると、その手を取って、差し出された頬にキスした。

メアリー・クリボーンは、精神的にも肉体的にも、健康そのものという印象を与える。外見に特に目立ったところはないが、がっしりした体格で、強い足腰をしていた。十マイル歩いたら、疲れるどころか、ますます元気が湧いてくるに違いない。腕も筋肉質で力に溢れていた。容貌はいかなる点においても人目を引くものではなく、典型的な田舎育ちの娘といったところで、胃腸は強く、道義心も強かった。あまり可愛らしいとは言えなかったが、善良であることは確かで、その顔には意志の強さと明るさがうまい具合に混り合っていた。青い瞳には狡すずそうなどころが全くなく、率直そのもの。美しい髪を質素に後ろで結んでいる。肌は日に焼けている。風雨も彼女には親しい友人で、強い風の中、雨に頬を打たれながら田舎の道を長い時間歩くことを愉しんだ。服装もその性格に相応ふさわしく地味で、飾り物など全く付けていなかった。

「ジェイミー、あなたが帰った時ここにいられなくてご免なさい。ポールソン夫妻がタンブリッジウエルズと一緒にゴルフをしようって誘ってくださったの。パーソンズ大佐、わたし今日はワンアンダーで回ったんですよ。」

「本当かい、メアリー？ そりやすごい。」

大佐も妻も満足そうな、愛情のこもった表情でメアリーを見ていた。

「わたし、帽子を脱とります。」

彼女はカンカン帽と荒いツイード地の外套コートをジェームズに渡して、玄関ホールに掛けてもらった。コートの下は自転車に乗る時のスカートと爪先の角張ったブーツだ。

「ジェイミー、会えて嬉しいって言ってくれないの？」彼女は笑って呼びかけた。

メアリーの声はかなり大きく、はつきりしていて力強いものだったが、平板で、微妙な抑揚には欠けていた。彼女はジェームズの隣に腰掛け、今日のゴルフツアーについて陽気に、面白おかしく話し始めた。

「ジェイミー、今日はおとなしいのね。」やがて痺れを切らしてメアリーが言った。

「だって、きみが僕に話すチャンスをくれないからね、——今のところ。」重苦しい笑みを浮かべてジェームズが応えた。

一同は笑った。ちよつとした冗談にも喜ぼうと構えていたのだ。それにこうした罪のない押揃いが三人の知っている唯一のユーモアのかたちだった。

「疲れてるの？」明るい瞳を優しく和らげてメアリーが尋ねた。

「ちよつとね。」

「そう。じゃ、今夜はあなたを困らせません。でも明日はしつかり力を発揮してもらいますからね。」

「メアリーは情け容赦ないんだよ。」大佐が穏やかに笑いながら言った。「私らは何でもこの娘の言うとおりにしなくちゃならん。小指一本でみんなを支配してしまうんだ。」

「そうなんだ？」ジェームズが、短めの自転車用スカートの下に押しつけがましく突き出た、頑丈そうなブーツを見ながら言った。

「帰った途端に怖がらせないでください。」メアリーが叫んだ。「でも実際のところは、明日午前中は来られないんです、地区訪問の仕事があつて。ジェイミーはまだ一緒に回れるほど回復していません。」

「帰った途端に怖がらせないでください。」メアリーが叫んだ。「でも実際のところは、明日午前中は来られないんです、地区訪問の仕事があつて。ジェイミーはまだ一緒に回れるほど回復していません。」

「いいや。腕はあまり上手く使えないけどね。でもすぐに良くなるさ。」

「明日の午後には例の大事件について話してくれなくちゃいやよ。」メアリーが言及しているのは門に飾りを施す理由となった行為のことだった。「予定より早く帰ってきちゃって、みんなに迷惑かけたんだから。」

「僕が？ そりゃごめん。」

「今日家に帰ってくるとき何か気がつかなかった？」

「いや。暗かったからね。」

「まあ！ わたしたちあなたのために「凱旋門」を作ったのよ。それに大々的にお祝いするつもりだった。学校の子供たちもあなたの帰りを歓迎しようって待ち構えていたのに。」

「そんな目に遭わなくて良かった。」ジェームズは笑った。「虫酸が走っただろうからね。」

「あら、まだなくなつたつて決まったわけじゃないわ。何かできないか考えてみなくちゃ。」

そう言って、メアリーは立ち上がった。

「いずれにしても、明日の一時には皆んな揃って昼食会に伺いますから。」

三人はメアリーを玄関まで送った。ジェームズとメアリーが兄弟のような、姉妹のようなキスを交わすのを見て、老夫婦は改めて幸福そうな笑みを浮かべたのだった。

やつと自分の部屋で一人になれたジェームズは、安堵の溜息を吐いた。それはほとんど痛みを耐え

る苦悶の溜息といったものだった。彼は無意識にパイプを取り出すと葉を詰めた。が、すぐに今どこにいるのかを思い出し、それを置いた。父が臭いに敏感なことを知っていたからである。パイプを吸い始めれば、たちまち扉がノックされ、質問が飛んでくるだろう。「家の中で煙の臭いがするが、ジエイミー、おまえの部屋で何か燃やさないかな？」

彼は部屋の中を行ったり来たりし始めた。が、やがて疲れを感じて椅子に沈みこみ、窓を開けて夜の闇に目を遣った。何も見えなかった。空は静止した厚い雲で覆われている。しかし新鮮な空気が優しく顔に当たり、田舎の春の香りを運んでくる。小糠雨が音もなく降っている。物憂げな大地が、降りかかる恵みの水滴を、震えるような喘ぎと共に受け留めているようだ。

長い間待つていた出来事の後には必ず反動のようなものがある。ジェームズはこの再会を、一方で恐れながら、一方で熱い気持で待っていたのだった。そして再会を果たした今、疲れと混乱とで考えを纏めることができないでいた。彼は両拳を握りしめ、無理にでも明晰に考えようと努めた。すぐにも何か方針を決めなければならない、それは解っている。しかし恐ろしい躊躇いが、頭に浮かびそうになる方針を麻痺させてしまう。彼は両親を大切にし、愛していた。二人を幸せにしてやりたかった。しかし……、しかしだ！もし二人のうちどちらの方をより愛しているかと訊かれれば、それは父の方だろう。父は哀れなほどに弱く、壊れやすい。誰かが優しく守ってやる必要がある。父はこの五年でほとんど変わっていなかった。五年前も痩せて腰が曲がっていた。長く伸ばした銀髪を頭頂にブラシで撫でつけて禿を隠していた。頬は落ちこみ、皺がよっていた。白くなった口髭を生やしていたが、人の良さそうな弱々しい口許を隠すだけの効果はなかった。思い出せる限り、父は今と同じよ

うに年老い、疲れ果てていた。青い眼がいつも優しい表情を湛えていたのも今と同じだ。その自信のない物腰は見えていて痛ましいほどだった。パーソンズ大佐は、何も求めないその謙虚さ故に、愛さずにはいられない人だった。子供のようになりたいけなく、思わず同情したくなってしまふ。人生の荒波に揉まれることに向いていないことは明らかで、本能的に守ってやりたくなる、そういう人だった。

加えて、軍を去らねばならなかったことが父にとってどんなに苦い屈辱であったか、それも解っていた。父が苦悶の汗を額に浮かべてあの失態の原因を語った時、瀕死の友人から聞かされているかのように感じたことを憶えている。あの時のことは、初めて戦場で人が死ぬのを見た時のことと並んで心に焼き付いていた。皮膚は灰色になり、瞳はどんよりとして何も見えていない。——その後そうした出来事には無感覚になってしまったが。

父は優しい心ゆえに哀しみに立ち至ったのだ。近しい人たちが愛しさを感じずにはいらなくなる、あの慈愛の心ゆえに。父を不要な苦しみから守るためには何でもしよう、ジェームズはそう誓った。また彼は母のことも忘れていなかった。というのも、父よりは厳しい母の態度の中に、優しく思いやり深い愛を見てきたからだ。二人にとって彼が世界の全てであることは解っていた。二人の幸せも不幸せも全て彼の手に握られている。息子に対する愛ゆえに、二人は彼の行動を我が事のように感じ取っている。それは状況を理性的に判断できないほどのものに思われた。彼が危険な目に遭ったと知らせると、それに対する二人からの返信は、明るさを装ってはいるものの、痛ましいまでの心配と耐えがたい不安に貫かれている、それがよく判った。彼のために二人は多くを犠牲にしてきた。何かと出費のある連隊生活で、息子が無理に儉約することのないようにと、自らに贅沢を許すことはなかった。

生まれてこの方、二人は彼を愛情深く世話してくれた。そして今、二人が何よりも望んでいるのは彼が一日も早くメアリー・クリボンと結婚することなのだ。

ジェームズは窓に背を向けると、両手で顔を覆い、前後に躰を揺すった。

「ああ、無理だ。」彼は呻いた。「俺にはできない。」

3

翌日、朝食を終えると、ジェームズは散歩に出かけた。自分がどうすべきなのかよく考えてみたかったのだ。早く決断しなくてはいけない。躊躇いは最悪の事態を招くだろう。しかし今すぐ話すことはあまりにも残酷、冷たすぎる。

誰にも邪魔されたくなくて、ぶらぶらと庭を通り抜け、櫛の林に來た。ここは彼のお気に入り、子供の頃よく來た場所だ。四月の柔らかな雨上がり、大気は清々しく、空は澄み切っていて、善行を目にした時感じるような喜びを与えてくれる。

ジェームズは林に入って立ち止まると、湿り気を帯びた大地の香りを吸い込んだ。物言わぬ生命に溢れた母なる大地の艶めかしい香り！ 暫し彼は樂園の新緑に酔っていた。高く伸びた櫛の木々、柔らかに生き生きとした若葉のなかに繊細な枝が黒く輝いている。空は折り重なる葉に隠されてほとんど見えない。夏の雨より繊細で、夕暮れの露より神秘的な緑。この風景は人生の全ての哀しみ、苦々しさを忘れさせてくれるように思われる。このあまりの清らかさにジェームズも自分が清められてゆくように感じていた。彼は緩やかに起伏する大地を子供のように歩き回った。冬の名残の水が所どころで小川を作っている。

大地は枯れ葉に覆われて柔らかだった。その枯れ葉の中でカサコソと音がする。兎だろうか、それとも栗鼠リスが動き回っているのだろうか。ジェームズはそちらに目を遣る。足を野薔薇の枝に取られることもある。あちこち隠れるように桜草や葎草が花をつけている。彼は鳥の囀りに耳を澄ませた。そのあまりに楽しそうな鳴き声は、とてもこの哀しみに満ちた世界のものとは思えない。姿は見えないが樵の木の高いところで胸赤鸚わねかひびが声を限りと歌っている。黒歌鳥くろうたどり、鶉つぐみの声も聞こえる。遠くで郭公かつこうが謎めいた調べを奏でる。すると山彦のように仲間の鳥がそれに応える。

全ての自然が春の光を享受していた。全てのものが喜びに溢れていた。そして彼の心だけが鉛のように重いのだ。彼は樵の木の上に立った。それは他の木々を圧倒して高く聳えていた。大海原に一艘だけ浮かぶ船のマストのようだ。その幹は陰気で冷たく、よそよそしくも感じられるが、非難されるべき何も持たぬ人生のように真っ直ぐに伸びていた。俺の人生にも非難されるべきものはない、——ジェームズは考えていた。非難されるべきものは……、今までは……。

彼はメアリー・クリボーンを愛していた。しかしあれは愛だったのだろうか？ 単なる好意に過ぎなかったのではあるまいか？ あるいは習慣？ 敬意？ メアリーは彼が知っている唯一の若い女性だった。二人は一緒に成長した。休暇で学校から、後には陸軍士官学校から田舎に帰ると、毎日のようにメアリーと会った。彼女がいなかったらさぞ退屈したことだろう。筋肉質の躰をしていて、男の子がする遊びにも充分加わられたし、考え方も彼に似ていた。リトルプリンプトンは住人が極めて少なく、そこで暮らす人々は絶えず顔を合わせていた。隣の村タンブリッジウェルズはほんの四マイルしか離れていなかったが、その四マイルはそれぞれの村に住む人の親密な交流を妨げるには充分な距離

だった。したがって、休暇になるとジェームズがメアリーとの再会を愉しみにするのは自然の成行きなりゆきだった。この楽しい交際がなければ、村への道程は長く侘びしいものだったろう。インドの連隊への配属が決まった時、愛する人たちとの初めての長い別れとなることを思っ、彼の心は沈んだ。取分け辛く感じられたのはメアリーとの別れだった。

「メアリー、きみがいなくなったら僕は、間違ひなく、どうしたらいいか分からなくなるな。」

「一月もすればわたしたちのことなんてすっかり忘れるわ。」

メアリーはそう言ったが、唇は引きつっていた。ジェームズには彼女が何とかしつかり話そうと努力しているのが判った。メアリーはちよつと躊躇った後、

「わたしたちの方が辛いかも」と言った。「だって『去る者は忘れ、残る者は忘れない』って言うじゃない。きつとわたしたち、あなたのことを思い出すために、毎日これまでと同じことをするでしょうね。ああ、ジェイミー、わたしのこと忘れないわよね？」

最後の言葉は彼女自身の意思に逆らって思わす出ってしまったものだった。

「メアリー！」

そう叫んでジェームズは腕を彼女の躰に回した。メアリーは彼の肩に顔をおいて泣き始めた。ジェームズは泣くのを止めようと彼女にキスし、強く抱きしめた。自分は全身でメアリーを愛している、彼は本当にそう思った。

「メアリー、」彼は囁いた。「メアリー、僕のこと好き？ 僕と結婚してくれない？」

そう言って、すぐに、婚約しておくことが二人にとってどんなに好いことか説明した。

「当分結婚はできないけど、メアリー、待っててくれる？」
メアリーは涙の中から頬笑んだ。

「いつまでも待つわ。」
インドでの最初の二年間、メアリーと結ばれているという事実はジェームズにとって本当に喜びだった。たとえ、新生活の様々な新しい経験の中で、メアリーの不在を思ったより平静に受け留めていたとしても、イギリスの田舎の繊細な香を伝える彼女からの手紙は嬉しいものだった。自分が心地よく身を固めた状況の中にいることが彼に安心感を与えてくれた。婚約したということはいわば定住の地を持ったようなもので、そこからは不安も恐れもなく旅に出られる。ジェームズはメアリーへの情熱が十分に強いものかどうか自らに問うことはなかった。というのも、彼はこれまでずっと、情熱というのは決して道徳的なものではなく、結婚の基盤として相応しいものは、社会的地位の類似性であり、永続性があると考えられているし、かりした人柄、性格の良さであると教えられてきたからだ。子供の頃から、数多の諺を通して身に染みこんでいたのは、注意を怠らないことの大切さ、美の移ろいややすさ、欲望の果敢無さといった人生の知恵だった。また、正直であること、倫理的であること、家庭を大切にすること、穏やかな気性といったことは、如何なる時にも良きものであるという教えだった。

しかし、誰もが知っているように、「自然」というのは礼儀作法を知らぬ女神なのだ。女神にとって礼節など存在しないに等しい。彼女の目には男も女も一時の気紛れの対象でしかなく、勝手気儘に歩いているのは、十本の指で好き勝手に彼らを作り替えようとする。それ以外のことは眼中にない。人が

苦しもうが死のうが一向お構いなし。モーゼの十戒にも上流社会の慣例にも無関心なのだ。

やがてジェームズはブリチャード・ウォーレイス夫人と知り合うこととなった。夫人は現地人兵士を率いる連隊長の妻で、小柄で髪は黒、オリヴのような肌と大きな茶色の眼をしていた。やや品はないがおそろしく可愛かった。母親はゴア出身のポルトガル人、父親は騎兵隊の馬術教官にすぎなかったから、優秀な士官ブリチャード・ウォーレイスが周囲の御夫人方の反対にも拘わらず彼女と結婚した時にはちよつとした騒ぎがあった。が、たとえそうした善意溢れる御夫人方が疑いの目を向けるのを止めなかったとしても、殿方からすれば彼女の機智と美貌があらゆる不利の埋め合わせとなっていた。士官が集まるパーティーでは、夫人のスカートの周りに男たちが絶えず群がった。最初ジェームズは夫人を面白い女だと思つたに過ぎない。清教徒的雰囲気の中で少年期、青年期を過ごした者にとって、その不真面目さ、皮肉な言葉、快活さは、ある種の救いだった。彼が神聖視しているあらゆるもの、ロンドン塔や国会議事堂について夫人が軽い軽蔑を浴びせるのを耳にした時は吃驚した。偏見に過ぎないのかも知れないが自分が大切にしているもの、自分の信念の数々が彼女の鋭い冷やかしの前では雲散霧消してしまうのだった。彼女はウィットに溢れた遣り方で世の中を捉えることのできる人、古いものを全く可笑しい新しい角度に置いて見ることのできる、女性特有の才能の持主だった。ウォーレイス夫人にはジェームズが純真さの塊のように見えた。それは奇跡的な純真さだった。だからいつも彼を擁護して笑った。が、そのうち彼が好きになり始め、頻繁に自分の周りに置くようになった。ジェームズは得意だった。

彼は、女性は男性とは異なった土塊で作られている——より上品で、より洗練されていると信じる

よう育てられてきた。女性は信仰心が厚く、優しく、穢れなく、嫌悪すべき様々なことには全く無知である、だから男の義務は、何よりもまず、現実の人生に存在する様々な知識から女性を守ることだと教えられてきた。彼にとって女性とはか弱さと高潔さとの霊妙な混淆こんごうだった。血と肉とを持った存在とは思っていなかった。官能とか情熱とか大胆さ——取分け大胆さ——とは無縁の存在だと思っていた。だから、当然ながら、多くの話題は女性のいるところでは持ち出せなかった。実際、唯一無難な話題と言ったら天気の話だけと言っても良かった。

しかし、可愛い女性には珍しいことだが、プリチャード・ウォーレイス夫人は己の率直さを誇りとする人だった。彼女は、これまで女性のいるところでは議論されるのを耳にしたことのない話題を、何の躊躇ちゅうじゆもなくジェームズと議論した。これまで絶対に女性に語ってはならないと厳格に教えられてきた話題を前にして、失礼にならないようにどう言葉を返したら良いのか、口ごもり、しどろもどろになるジェームズを見て、夫人は嬉しそうな顔をした。また時に夫人は、悪戯半分、彼にシヨックを与えるような話をして、ジェームズが無理に礼儀正しく頬笑みながら、女性はそんなことを口にすべきではないという表情を浮かべるのを愉しむのだった。

「あなたって面白い人ね。でも、ねえ、気をつけなくちゃいけないわ。そんなだと気取屋さんだと思われちゃうから。」

「そう思いますか？」

「ちよつとくらい不道徳にならなくちゃ。立派な青年は、気分転換に付き合うにはいいけど、すぐ飽きちゃう。」

「僕が退屈なら、はつきりそう仰しやってください。二度とあなたを煩わすことはありませんから。」

「それに立派な青年はそんなに怒ったりしないものよ。それはマナー違反。」夫人は笑みを浮かべて応じた。

何が起こったのか分からないうちに、ジェームズは気が狂うほどウォーレイス夫人に恋していることに気がついた。しかし何と異なっているのか！ 自分の知っている唯一の愛……、あの青白い炎とは何と異なっているのか！ 自分は友情と常識とが穏やかに混り合っていたあの感情を愛と呼んでいたのか。それに対しこの愛は、起きている間は破壊的な力で自分を悩ませ、寝ている間は夫人の姿が夢に現れる。夫人と一緒にいる時にのみ生きていると感じる。夫人の名を口にするだけで心臓が高鳴る。夫人と会うと躰が震え、血が引いてゆく。傍そばにいと何を言っているか思いつかない。彼は夫人の手の中の蠟ろうのようなものだった。力も意思も持っていないかった。夫人の指が躰に触れようものなら、たちまち血が血管中を駆け巡る。それを知っている夫人はわざと彼の躰に触れ、全身が欲望に震えるのを見て喜んだ。恋は自制心の強い男に対してほど破壊的に働くものである。恋の炎がジェームズの中で燃えさかっていた。そしてこの目に見えぬ無意識の炎はついには彼を焼き尽くし、彼は情熱の虜ことなってしまった。と、突然、偶然耳にした言葉でジェームズは自分に何が起こっているのか理解した。自分が恋しているのは親友プリチャード・ウォーレイスの妻なのだ。そしてメアリーのことを考えた。

今は躊躇ちゅうじゆしている場合ではない。それは疑いない。自分が危険に陥おち入ったのはそれに気づかずには

たからだ。友人を、そしてメアリーを裏切っているとは考えてもいなかったのだ。ジェームズは恐怖に襲われ、己を嫌悪した。危険な崖つぶちに立っているのを感じた。下には恐ろしい罪が見える。彼は身震いして後退した。苦々しい思いで己を責めた。こんな結果を招いたのは当然自分が何か間違いをしたからだ。今なすべきことは明らかだ。どんなに辛かろうと、この罪深い恋心を抹殺しなければいけない。害虫を叩きつぶすように叩きつぶさなくてはいけない。

ジェームズは二度とウォーレイス夫人には会うまいと決意した。そして神も彼に味方してくれていると考えた。というのは一月後夫人は夫と共にイギリスに行くことになっていたからだ。ジェームズは休暇を申し出た。二、三週間この地を離れていれば、戻った時には夫人はイギリスへ去ってしまったているだろう。数日間はどうにか夫人に会わずに済んだ。が、とうとう、偶然顔を合わせてしまった。見なかった風をして立ち去ることはできなかった。

「かくれんぼが好きだなんて知らなかったわ。つまらない遊びだと思うけど。」

「何のことです？」ジェームズは青ざめた。

「どうしてわたしを避けまくるの？——まるで借金取りみたいに。それに、来れないっていう言訳は嘘くさいものばかり。」

ジェームズはどう答えて良いのか分からず、暫し立ち尽くしていた。膝は震え、額は恋の苦しみに汗ばんでいる。彼はあまりの苦痛に凶暴な怒りを感じ、この場で喉元を掴んで絞め殺してやりたい気がした。

「知らなかったんですか？——僕には結婚の約束をした女性がいます。」やっと言葉が出た。

「そうじゃない若い士官にお目にかかったことないわ。悪い習慣の中でも最悪の習慣。……で？」夫人は笑みを浮かべてジェームズを見た。長い睫毛に縁取られた黒い瞳の魅力を知っているのだ。「おばかさんね。その娘さんの写真を持って我が家へいらっしやいな。一時間でも二時間でもその人の話をすればいいわ。どう、いらっしやる？」

「ご親切には感謝しますが、行けそうにありません。」

「どうして？ それってとつても失礼なんじゃない？」

「僕は忙しいんです。」

「阿呆くさ！ 来なくちや駄目！ なんにも怖がるようなことを頼んでるわけじゃないわ。じゃあ、お茶の時間に待ってますから。」

彼女は有無を言わせなかった。ジェームズは行くしかなかった。メアリーの写真を見せると、プリチャード・ウォーレイス夫人は奇妙な表情でそれを見ていた。写真は田舎の写真屋に撮らせたもので、鯨張ったポーズ、何かを見据えるようなきつい視線。優美でもなく、可愛らしくもなく、上手く撮れているとはとても言えない。夫人はメアリーの服装がいかに田舎の女性のものであることに目を留めた。

「ホント、士官の婚約者って皆んな同様な娘さんのよね。」

ジェームズは顔を赤くした。「あまり上手く撮れていないんです。」

「そうね、いつも上手く撮れてない。」夫人は呟いた。

「世界一いい女性です。親切で、善良で、純朴で……、あなたには想像できないでしょう。メアリー

のことを思うといつもイギリスのそよ風を思い出すんです。」

「わたしはあの東風は好きじゃないの。でもこの娘がいい性質をたくさん持つてゐることは判るわ。」

「今日僕がここに伺つた理由、判りますか？」

「わたしがそうさせたから。」夫人は笑つた。

「お別れを言いに来たんです。僕は休暇を一月取ることにしました。」

「あら、でもそれじゃ、あなたが戻つた時わたしここにはいなくなつちやつてるわ。」

「分かつてます。それが理由なんです。」

ウォーレイズ夫人は素早く彼を見ると、躊躇い、それから視線を逸らした。

「そんなに重傷なの？」

「分かつてないんですか。」ジェームズは突然自制を棄てて叫んだ。「言つておきますが、あなたには二度とお目にかかりません。でもそれは問題じゃない。僕は心からあなたを愛しています。あなたに会うまで僕は愛がどんなものか知らなかった。ああ、神様！ メアリーへの愛は友情に過ぎなかつた。あなたへの愛は全然違う。ああ、自分が嫌になる。どうしようもないんです。あなたの手が僕に触れただけで、軀が熱くなつて、頭がおかしくなるんです。二度とあなたに会う勇氣はない。僕は女誑しのごろつきじゃない。こんなことを続けたつてどうにもならない。僕はメアリーと約束したんです。」

夫人の目の表情、夫人の声に、こう言おう、こう行動しようと心に決めてきたジェームズの計画は吹き飛んでしまつていた。自分を制御することができなかつた。しかしそれは一瞬のことだった。古

い習慣はしっかりと根付いていた。

「申し訳ありません。こんなこと言うべきじゃなかつた。怒らないでください——僕の言ったこと。どうしようもなかつたんです。あなたを避けていた僕を馬鹿だと思つたでしょうね。でもああする他なかつた。あなたを愛さずにいられないんです。もうお分かりでしょう？ ここまで言つた以上、あなたも僕とはもう会いたくないと思うのは分かつています。で、結局それが僕らにとって一番いいことなんです。さようなら。」

彼は手を差し出した。

「そんなに重傷だなんて知らなかつた。」夫人は優しい眼差しをジェームズに送つた。

「知らなかつたんですか？——偶然あなたのドレスが触れると僕は全身が震えていたんです。あなたの前で口が利けなくなるのに気がつかなかつたんですか？ 喉がからからになつて言葉が出なかつたんです。」彼は椅子にへたり込んだ。しかしすぐに力を振り絞つてスツと立ち上がると、「さようなら、」と繰り返し返した。「今すぐお暇させてください。」

夫人はジェームズに手を差し出した。そして半分は優しさから、半分は悪戯心から、軀を前へ屈めて彼の唇にキスした。ジェームズは叫び、むせび泣いた。もう完全に自製心を失つていた。荒々しく夫人を抱きしめると、口に、眼に、髪にキスをした。そのあまりの情熱に夫人は怖ろしくなり、身を振り解こうとしたが、ジェームズは一層強く彼女を抱きしめ、気が狂つたように唇にキスをした。

「気をつけてよ。何してるの？ 離して！」そう言つて夫人は彼を手で押し、身を振り離れた。

ウォーレイズ夫人は用心深い人で、恋の戯れが礼に適つた時間以上続くことは許さなかつた。それ

にもつと刺激の少ない恋愛遊戯に慣れていた。

「髪がおかしくなっちゃったじゃない、馬鹿な人！」彼女は髪を整えるために姿見に向かった。振り返ってみるとジェームズの姿はなかった。「おかしな人！」夫人は呟いた。

プリチャード・ウォーレイス夫人にとって男性との戯れは小さなエピソードに過ぎなかった。あのフェードルも、もし物事を真剣に受け留めすぎないことが処世の術であった時代に生きていたなら、そう考えたかも知れない。そうであったなら、あのイポリットも悲劇を避けられたであろう(注1)。ジェームズにとつて愛はそんな軽やかなものではなかった。彼は知合いになろうと近づいてくる人を、そんな時普通に見られる愛想のある好奇心ではなく、むしろ敵意を持って迎える人だった。親友さえ羞含屋はにかみやの彼との距離を縮めることは難しかった。いとも容易に人と打ち解けることのできる人もいるが、ジェームズは自分と仲間との間には壁のようなものがあると常に感じていた。深い共感が突然生まれることもあるなどとは納得できず、そうしたものを目にしても信用しなかった。だから付き合う人の眼には、彼はよそよそしく、お高くとまっていると映っていた。それゆえ、なおのこと、これまで彼は己の感情を他人から隠し、我が道を行くしかなかったのだ。そんな男が熱狂的な恋に落ちたのだから、その恋は大抵の人間の十倍は意味を持つものとなった。これは自分自身からの突然の解放だった。謂わばそれまで牢獄にいた人間が、生まれて初めて、木々や、走り去る雲といった、世界の様々な動きを見たようなものだった。ほんの暫くだがジェームズは自由の素晴らしさを知った。言うに言われぬ至福が、見たことのない多彩な絵具で全宇宙を色取っている。しかしやがて幸福は罪に過ぎ

ないことが分かり、彼は自ら進んで、元の冷たい牢獄へ引き返したのだ……。自分の情熱を抹殺しようとするまで、それがどんなに強いものか知らなかった。それが自分をこれまでとは異なる人間にってしまったことに気づいていなかった。彼にとつてこの恋は世界の全てだった。それ以外のものは何もかも無意味だった。ならば、なおさら己に無慈悲にならなければいけない、この怖ろしい罪を清めるためにあらゆる拷問を受けよう、そう彼は心に決めた。

だから、自分の意思に反してウォーレイス夫人の姿が心に浮かぶと、彼は無理にも彼女の品の無さ、不作法、香水のつけ過ぎを思い出そうとした。夫人は、それが彼にどんな結果をもたらすかなど考えも気にもせず、彼を玩もてあそんでいたに過ぎない。困った立場に自分が追い込まれない限りにおいて、できるだけ愉しもうとしていたに過ぎない。あの意味ありげな眼差し、あの洒落た会話の虜になったヒヨッコは彼が最初ではない、そのことはいろいろな噂から知っていた。仲間の士官が彼女に与えた綽名あだなは、失礼なものではあっても、的は射っていた。ジェームズはこうしたことを何十回も自分に言い聞かせた。ウォーレイス夫人はメアリーの足下にも及ばない女なのだ。彼は学校から出された課題図書で未だ読み終えていないものを数え上げるように、メアリーの長所を一つ一つ挙げていった。素朴な信仰心、善良さ、優しい心、——男が妻に求めうる限りの長所をメアリーは持っている。しかし……、しかしだ。夜、夢の中で彼が語りかけているのはもう一人の女性だった。昼間は夫人の声が耳に鳴り響き、明るい微笑みが目の前に踊る。彼は夫人の語ったすべての言葉を思い出していた。自分が夫人に与えた熱いキスを思い出していた。どうしてあの法悦を忘れられよう？ ジェームズは身悶えみもど、その執拗なイメージを追い払おうとした。しかしまったく無駄だった。

時間もその思いを弱めてはくれなかった。あの時以来ウォーリス夫人には会っていないが、夫人のことを考えるだけで血が全身を駆け巡るのだった。この気狂いじみた、希望のない感情を押し潰そうとあらゆることをやってみたが、そのたびに夫人への思いは、庭の雑草のように、さらに強くなって燃えさかるのだった。メアリー・クリボンと結婚するのが自分の義務だ、それは分かっている。が、そんなことをするくらいなら死んだ方がましだ。月日が流れるにつれ、もうすぐメアリーに会わなければならないのだと思うと、怖ろしい不安に襲われた。疑いが浮かび、それを振り払えなくなった。メアリーの思い出はぼんやりとして形を為さず、どこか冷めたものだった。唯一の希望は、メアリーに会ったとき愛情が甦り、それが今自己嫌悪を引き起こしているもう一つの感情を消し去ってくれることだった。ボーア戦争が始まった時には、これで暫くはメアリーに会わずに済むと判って救われた思いだった。戦争の間に何かが起こって、簡単に問題を解決してくれるかもしれない。何ヶ月も困難と戦闘の日々が続いた。その間にウォーリス夫人のことを考える時間も幾分か減り、望んで止まない自由を取り戻しつつあるように思えた。そして戦場で負傷し、疲れ切った牀をベッドに横たえていると、父と母への熱い愛情が湧き上がり、二人に会うことを熱望するようになった。と同時にメアリーとの再会が、失った感情を目覚めさせてくれるのではないかという希望も強まった。彼は心からそうなることを願った。

しかし、イギリスに戻りメアリーを見た時、それは無理だと感じた。彼女には敵意と言ってもいい冷やかな気持しか感じなかった。ウォーリス夫人の言葉が耳に響き、ジェームズは自嘲の笑いを浮かべた。

「士官の婚約者って皆んな同様なじような娘さんなのよね。写真もいつも上手く撮れてない。」

そして今も彼はどうすべきか分からないままだった。過去の出来事をいろいろと思い出して見ても、ますます分からなくなるだけだった。心に潜む悪魔のようなものが叫んでいる。「待て、待つんだ！何かが起こらんとしたら限らんじやないか！」確かに、もう少し様子を見た方が良さそうに思われる。ひよっとしたら——誰に分かると言うんだ——もう一日二日この田舎で昔のように過ごしたら、林の緑の中を一緒に歩いた時の気持が甦り、メアリーを愛せるようになるかもしれない。ジェームズは溜息を吐くと周りを見回した。あいかわらず鳥が陽気に歌っている。栗鼠が木から木へと飛び移っている。草もさらさらと通り過ぎてゆく微風を楽しんでいる。明るい陽射しの中、全てのものが生きる喜びに震えていた。あらゆるものが美しく色取られ、それぞれに生を享受し、何の憂いも持っていないようだった。彼だけが悲しかった。

ジェームズが家に戻ると、そこには既にリトルプリンプトンの牧師と彼の妻が到着していた。二人とも小柄で黴だらけ。真面目で、ユーモアのセンスがなく、面白味のない人間の典型だった。二十年一緒に暮らしてきたせいで瓜二つになったのか、瓜二つの人間が惹かれ合って結婚したのか、そのところは定かでない。神聖な職業への思い入れ深い二人は、そろって——というのは牧師の妻の地位は牧師のそれより劣っているなどとジャクソン夫人は認めていなかったのだ——世界は神のものであり、自分たちはその特別な補佐役なのだから教区民の行動に関心を持つのは当然の義務であると考え、その義務から逃れようなどとは決して思わないと公言していた。二人は教養も経験も乏しく、機転も利かなかった。が、お目出度いことに自分たちの欠点には気づくことなく、神の子羊たちに向かって道徳を吠え立て、かなり意識過剰に永遠の生命へと続く困難な道を示そうとしていた。真に見上げた人たちだった。自分たちが良いと考えることを次から次へ行なっていたが、陽気な態度は品位に欠けると考える二人のやり方は、おそろしく気難しいものだった。その熱意は自分たちに苦難を与えるだけでは気が済まず、周りの者全てに苦難を強いていた。苦難こそが「黄金の国」への唯一のパスポートというわけだ。

アーチボルド・ジャクソン師夫妻がリトルプリンプトンの聖職禄を与えられたのはジェームズがインドにいる時だったから、今日が初対面だった。

「わたくしお父様に申し上げておりましたのよ、」握手をしながらジャクソン夫人が言った。「きつとあなたは神様が与えてくださったお慈悲に感謝なすつてるだろうって。」

ジェームズは夫人にきつい視線を送った。「そうですか。」

彼はきわめて私的なものであるはずの問題をこんな風に論ずる、教会の人間の話し方が嫌いだった。「ジェームズ、」母が言った。「よかったら今度の日曜にジャクソンさんがあなたのために短い祈りを捧げてくださるって仰しゃるんだけど、どう？」

「その必要はありません。」

「何故かね？」牧師が訊いた。「無事帰還できたことを神様に感謝するのはきみの義務だし、それにご両親も感謝の祈りに参加なさるべきだと思うよ。」

「教会に集まった人たちの前で気持を表わさないとって、」ジェームズが応えた。「感謝していいことにはならないと思いますが。」

両親は吻つとした表情で息子を見た。牧師夫妻の精神的導きに従うのはキリスト教徒としての義務だと考える二人は、この申し出を断るのは正しい行ないではないと思っていたが、内心はジェームズと同じ考えだったからだ。ジャクソン夫人は頬を赤くして夫を見た。が、クリボン大佐夫妻と娘メアリーが到着したため、それ以上の議論はお預けとなった。

クリボン大佐は長身で、艶のある黒髪、太い眉。ただし髪も眉も染めていた。見るからに軍人で、

思い出話も軍隊時代のものばかりだった。所属していたのは騎兵連隊。彼はそこで一つの哲学的結論、すなわち、人間は皆んなクズである、騎兵を除いては、という結論に達していた。だから、ジェイミーの武勳——歩兵の武勳——も一段高いところから見おろしていた。軍事に関しては大変な権威で、南アフリカではどこで間違えたのか、どうすればそれを避けられたのかを雄弁に語って聞かせた。また、有力な軍人の同僚が沢山いて、その大半は愛称で呼んでいた。シーズンには三週間をロンドンで過ごし、明け方まで晩餐会に留まっていたから、自分を社交界の花形だと考える充分な資格を有していると言えよう。

「わしらがいなかったらリトルプリンプトンはどうなっちまう？」大佐は言ったものだ。「ここに活気を与えているのはわしらだけだ。」

しかしクリボン夫人は社交界がないのを淋しく思っていた。

「話ができるのはパーソンズ夫妻だけなのよね。」夫人は哀しそうに夫に向かって言う。「とつても良い人たちだけど……でも、歩兵連隊なのよね、レジー。」

「もちろん歩兵に過ぎん。」クリボン大佐は当り前のことを言うなという顔で同意する。

クリボン夫人は連隊の華だった。現在五十で、少し太り始めていたが、だからといって、女性の敵である年齢と戦うために自然が与えてくれた武器を使うのを止めたりはしなかった。若い士官から壮年熟年の士官まで様々な年代の崇拜者を相手にしてきた夫人は、物思わしげな視線を送るという習慣を身に付け、今はそれを無意識にできる域まで達していた。肉屋に注文する時でも、ジャクソン牧師と教区の問題を論ずる時でも、クリボン夫人の物腰は何かとても甘く繊細な事柄について語って

いるかのようだった。何故夫人が連隊の人気者だったかという点、彼女なら恋の遊びを仕掛けるのに遠回しに言う必要がなかったからだ。晩餐の席で、たとえ初対面でも、最初のスープが出された時に、あなたはこれまでお目にかかった中で最高に美しい女性ですと平気で言え、コースの中頃は、あなたに夢中ですと囁くことができた。

部屋に入った途端ジェームズの姿を捉えたクリボン夫人は、暫し何も言わずに、頭を傾げ、目を細めていた。

「ああ、なんて素敵に青年になったこと！」夫人はやっと口を開いた。「もうジェイミーなんて呼べないわね。」一言一言夫人はまるで愛撫でもするかのようにゆっくり話した。そして再び黙ると、恍惚とした表情でジェームズを見た。「パーソンズ大佐、さぞご自慢でしょう！それに、もうすぐあなたの息子になるのかと思うと……！ところで、ジェームズ、何だか痩せたように見えるけど。」

「あなたは健康そのもののようにいらっしやいますね。」

誰もが解っていることだが、クリボン夫人にはお世辞を言わなければならなかった。さもないと夫人は機嫌を損ねる。機嫌を損ねると手に負えなくなる。

夫人は笑みを浮かべ、自慢の美しい歯並びを見せた。

「あなたにキスしたいわ、ジェームズ。よろしくって、パーソンズ夫人？」

「もちろんですわ。」ジェイミーの母は答えた。本当はよろしいことなど全くなかったのだが。

クリボン夫人は頬をジェイミー近づけ、彼がその頬に軽くキスする時、天使のような表情を浮かべた。

「あたしなんてもう小母ちゃんですからね。」夫人は誰にともしに小声で言った。

彼女は一度に一文しか言わない人で、その終わりには必ず適切な表情を加える、——無邪気な表情、聖母のような表情、諦めの表情、状況次第で何でも御座れだった。ジャクソン牧師が握手しようと進み出ると、夫人は瞳に思い悩むような笑みを浮かべ、

「あら、牧師様、先日の訓話とても素晴しかったですわ。」と宣った。

全員が席に着き、オックステールスープを飲み始めた。敬虔そのものの人たちの心の中に悪魔が忍び込むやり方を思うと怖ろしくなる。昼食にオックステールスープというのも悪魔の危険極まりない策略の一つだと言ってよい(注2)。この悪しき習慣はまさに田舎や都市郊外の素朴な住人の間に広まっているのだ。

ジェームズの席はクリボン夫人の隣だった。やがて夫人は、効果的だと信じている例の愁いに満ちた眼差しで、

「ジェイミー、あたしたち皆んなヴィクトリア十字勲章をいただいた経緯を知りたいと思ってるの。」と言った。

これは他の人たちもヒーロー自らの口から聞きたいと思っていたことだったが、直接それを頼むのはあまり芳しいことだとは思われず、遠慮していたのだ。しかし今クリボン夫人がそんなことはお構いなしに訊いてくれたので、一同それに便乗した。

「皆んな知りたくてしよるがなかつたんですよ。」牧師が言う。

「お話しするようなことは何もないと思います。」ジェームズは答えた。

父と母も彼に期待に満ちた視線を送っている。パーソンズ大佐は頷いて、息子を促すようメアリーに合図を送った。

「お願い、ジェイミー、話して。わたしたち新聞でしか知らないの、それもたったの数行。それにあなたの手紙にも何にも書いてなかつたし。」

「自分が勲章をもらった話をするのは趣味が良くないと思わない？」ジェイミーは頬笑んだが、堅い笑顔だった。

「ここにいるのは友人ばかりですよ。」と牧師が言う。

クリボン大佐が妻を横目で見て加える。「レディーの頼みは断れんだろう？」

「あたしはもう小母ちゃん。」クリボン夫人は哀しげな表情を浮かべて溜息を吐く。「あたしのために話してくれるなんて期待できないわ。」

クリボン夫人がこれまでにやった唯一賢明なことは、三十歳の時に自分はまだ小母ちゃんだと認めたことだ。しかしこれは本心ではなく、術策の一つだった。「あたしはもうあなたのお母さんだと言ってもいい歳なの」と、若い士官に向かって何百回も言ってきたのは間違いない。そうすることで恋の戯れが不謹慎な領域に入らないよう用心しているわけだ。しかしそう口にする時夫人は、若い士官に手を握らせながら、必ず物悲しげに天井に眼を遣った。

「僕のしたことはそれほど大したことじゃありません。」ようやくジェームズが話し始めた。「それに結局何の役にも立たなかつた。」

「良き行ないが何の役にも立たないなどということはありません。」牧師がもったいぶって言った。
ジェームズは彼をちらつと見たが、構わず続けた。

「僕は新米の士官を助けようとしただけなんです……。でも、助けられなかった。」

「お塩を取ってくれる？」とクリボン夫人。

「ママ！」メアリーがその優しい性格が許す範囲ぎりぎりの苛立ちを見せて抗議した。

「ジェイミー、続けて」とパーソンズ夫人。

ジェームズは父の誇らしそうな、それでいて哀れを誘う表情を見て、父だけに語ろうと思った。他の人たちはぼかんと口を開けて彼の行為を称讃しているのだが、それがどんなに自分を苦しめているか全く解っていない。しかし父は自分に同情を寄せてくれている。彼はそれに心を動かされた。

「ラーチャーという十八の青年でした。金髪で青い眼をしていて、馬鹿みたいに若く見えた。家族はこの近くのアシュフォードに住んでいます。」

「ラーチャーって言った？」クリボン夫人が訊いた。「聞いたことない名字。このあたりの出じゃないわね。」

「続けて、ジェイミー。」メアリーは苛立ちが増したようだ。

「一緒の隊になって三週間か四週間だったけれど、彼のことはよく知っていました。可笑しなことに、僕の方が好きなようでした。とてもいい奴で、素朴で、頭も良くて、やる気充分で……。僕はよく言っただけです、きみはこんな荒っぽいところじゃなくて学校にいるべきだったって。」

クリボン夫人は唇に白痴のような笑みを浮かべ、無垢な少女の表情で座っている。

「一日二日すれば戦闘が始まると判っていたある晩のことです。ラーチャーが話しかけてきた。で、僕は『どんな感じだい？』と訊いた。彼はすぐには答えなかった、いつもはすぐ返事が返ってくるんですが、『ねえ、大尉、ぼくはとっても不安なんです、自分が怖気づくんじゃなかった。』彼が言うので、僕は笑って言ってやった、『気にするなって。最初の時は大抵怖気づくんだった。最初の五分かそこら、逃げ出したくならないように、上下の睫毛をしっかりとつけておくことさ。そうすりやもう大丈夫。結構楽しいもんだって思うようになるさ。』『自分が死ぬんじゃないかって嫌な予感があるんです、』と彼は言う。だから僕は答えた、『馬鹿言うな。最初の戦闘の時には誰だって嫌な予感がするもんさ。その予感が当たってるんなら、兵隊さんの半分はとうの昔に天国に召される。』

「神様の御手に全てを委ねるべきだと言ってあげたね。」ジャクソン夫人が口を挟んだ。

「神様の御力で銃弾は身を避け、刀は打ち砕かれたでしょう。」

「彼はそんな類の男じゃありません。」ジェームズは冷淡に応えた。「笑い飛ばしてやる方がいいと思っただけです。で、実際、次の日戦闘になった。僕らは無人の丘を占拠するよう派遣された。軍隊の格言じゃ、敵が実際撃つてこない丘は常に無人の丘なんです。もちろん丘は敵でいっぱいでしたよ。ポーア人は僕らが玩具の鉄砲でも当たる距離に来るまで待って、一斉に容赦なく撃ってきた。僕らもできるだけのことはしました。突撃も試みた。でも勝ち目はなかった。あんな光景は見たことありません——兵士がボーリングのピンみたいにバタバタ倒れてゆくんです。銃で応戦しろと命令が下されましたが、何を狙って撃つたらいいんです？ 見えるのはゴツゴツした岩だけです。で、結局退却す

るしかなかった。他にできることなんかなかったんです。そのうち僕はラーチャーが負傷して倒れているのに気づいた。そのまま残してゆくことはできない。で、僕は引き返して、歩けるか訊いた。『だめです。脚をやられました。』と彼は言う。僕は膝をついて、できるだけ血が出ないように包帯をしてやった。屠殺場の豚みたいに血を流していましたから。その間も愛情溢れるボーア人が僕らをこれでもかと狙い撃ちしてくれる。『どうだ？』僕は訊いた。『ちよつとまいってます。でも大丈夫です。僕はびびらなかつたですよ。』『もちろんだ、この阿呆！ 歩けると思うか？』僕は訊いた。『やってみます。』僕はラーチャーを立てさせて、片腕で抱えて歩き出した。ちよつと歩いたら、顔が真っ青になっている。『パーソンズ大尉、気分が悪いんです。』ラーチャーはそう呻いて気を失ってしまった。だから自力で運ぶしかなかった。で、もうちよつと歩いた時、その時今度は僕が腕を撃たれたんです。『おい、ラーチャー、おまえさんを運ぶなくなっちゃった。頼むから元気を出してくれ。』すると彼が目を開けた。僕は彼が倒れそうになるのを支えた。『立てると思います。』そう言った時銃弾が彼の首に当たったんです。血が僕の顔に飛び散った。ラーチャーは喘いで……、そして死んだ。」

ジェームズは話し終えた。母とメアリーは涙を拭いている。クリボン夫人が夫の方を向くと、「レジー、ラーチャーってやつぱりこら辺の出じやないわ。」と言った。「インドのシムーラでそんな名前の工兵隊員に一度会ったことがあるな。」クリボン大佐が答えた。「ラーチャーって名前、前に聞いたことあるなって思ったの。」難しいクロスワードパズルの答を見つけたように、夫人は得意満面だった。「赤い口髭生やしてなかつた？」

「パーソンズ大尉、その子のご家族から手紙か何かございました？」ジャクソン夫人が尋ねた。

「母親から手紙があつて、一度会いに来てくれと。」

「きつとお母様はあなたにとでも感謝なさっているわ。」

「どうして？ 感謝する理由なんかありません。」

「だってあなたはその子を助けるためにできる限りのことをなさつたのよ。」

「助けようなんて思わないで、あそこに残してきた方が良かったんです。解らないんですか？——あのままにしておけばまだ生きていたかもしれない。捕虜になつてプレトリアに連れて行かれて。でも、その方がアフリカの草原で朽ち果てるより良かったんです。ラーチャーが死んだのは僕が助けようとしたからなんです。」

「死より惨いこともあるが、」パーソンズ大佐が言った。「私はよく思うんだ——敵に降伏することは勇敢なことなんじゃないかつて。敵に立ち向かつて撃たれることは簡単だ。しかし、部下の生命を救うために白旗を揚げるのには勇気がいる。」

「それも一種の勇気と言えないことはありませんが、でも、よく目にしましたよ。」ジェームズの反応は冷淡だった。「プレトリア収容所での暮らしは結構気楽だったそうです。そうなると、最終的には、戦争は血を流す必要がなくなるんじゃないかって思いますね。敵対する軍隊が互いに相手の軍を偵察して、どちらが勝ちそうか判ったら、負けそうな方は全面降伏する。そうなれば会戦は演習のよなものになりますよ。勝敗は特別に選ばれた諜報員が話し合つて決めればいい。」

「敵に包囲されて退却できない時に白旗を揚げないのは罪深いことですわ。」ジャクソン夫人が言っ

た。

「僕より戦争に詳しいようですね。」ジェームズは応じた。

しかし牧師夫人は頑張る。「では、もし片方にあなた自身と部下の死が確実にあって、もう片方に降服があったら、どちらを選びます？」

「誰にも判らないでしょうね。そうしたことは自慢げに論じない方がいい。死を覚悟することは恐ろしいことです。しかし僕らの先祖は降服よりも死を選んだ。」

「戦争って厭いやね。」メアリーが身を震わせた。

「そんなことはない！」沈んだ気持を振り払うようにジェームズが叫んだ。「戦争ほど素晴らしいものはない。僕は絶対忘れないね、時々経験したあの数分間のこと。ボーア人の上に跨がって、男同士が昔ながらのやり方で戦うんだ。嗚呼ああ！ ああした時間は生きるに値するって思えた。ある日午前中いっぱいボーア人の猛攻が続いた。僕らは圧倒的に劣勢だった。でもとうとう相手の陣地を奪取してやっつたんだ。今度はこっちの番だ。連中をとことんやつつけてやった。僕らは腹の底から敵を憎んでた！ 聞かせてやりたかったよ、イギリスの兵士が敵を殺しながら叫んでたあの呪いの言葉。僕はあの時の痛快さは絶対忘れない。ああこれが本来の自分なんだって感じる喜び！ あれに比べたら鶏の喧嘩なんて屁でもない。」

ジェイミーの頬は赤く染まり、目がキラキラ輝いている。彼は自分が今どこにいるのか忘れていた。流血と雄叫びの霧もやの中から父の声が届いた。

「私も戦ってきた。」パーソンズ大佐は困惑した眼差しで息子を見ている。「私も戦ってきたが、心

に怒りを感じたことはないし、復讐の心に捉えられたこともない。私は義務を果たしたと思っているが、敵もまた人間同胞だということを忘れたことはない。敵を殺すことに喜びを感じたことはない。感じたのは痛みと哀しみだ。戦争は避けられないことかもしれない。が、恐ろしいものだ。本当に恐ろしい……。それを正当化できるのは大義だけだ。それがあつた時のみ、慈悲と赦しによつて戦争の悲惨が和らげられるんだ。」

「大義？ 戦争じゃどんな理由だつて大義になれるんです。当事者双方にはそれぞれ全く同じだけ正当な理由がある。それがない戦争なんて思いつきませんね。どんな質問だつて、▶と答える人もいれば B と答える人もいる。でもそれぞれ自分なりの理由があつてそう答えてるんです。戦争なら尚更です。どの国も自国の大義の方が正しいと必ず信じてますよ。」

「双方が共に正しいことはあり得ない。」

「あり得るんです。大概、こちらに五分の正しさがあれば相手にも五分の正しさがあつるんです。」

「きみは、軍人として、ボーア人は正当化されてしかるべきだと言うのか？」クリボーン大佐が腹を立てた。

ジェームズは笑った。

「いいですか、仮にイギリス以外の国が——どの国でもいいですが——戦争をしているとしましょう。その時僕たちはどちらの国に同情するでしょう？ きつとボーア人のように独立のために戦っている逞しい農民の側に同情するでしょう。世界の列強はこうしたことに関して利己的であると同時に判官がんびい最さい悪あくなんです。ボーア人の国はイギリスに比べたら遙かに小さいし弱い。それに前に負けている。」

だからポーア人に同情が集まるのは当然なんです。普仏戦争の後フランスに同情が集まったのも同じ理由です。でも今僕たちは戦争の当事者だから判官贖罪なんかしてられない、正に生きるか死ぬかの問題なんですから。イギリスが二回か三回戦闘に負けて退却させられた時、僕は、フェアプレイだとか平等だとか、いつもイギリス人が声高に叫んでいる信念をいつ捨てるか興味を持って見てましたよ。すると、やっぱりすぐに捨てた。政府は、イギリスの兵力がポーア人兵力の十倍なんて事はすっかり忘れてしまつて、できる限りの連隊を送ると言い始めた。あなた方イギリス本国にいる人たちは慌てふためいたんでしょね。」

皆が驚いている、驚いているどころか仰天していることにジェームズは気づいた。そこで慌てて付け加えた。

「もちろん、そうした人たちを非難したりはしません。できるだけ多くの軍隊を送ることは全く正しい。戦争の目的は栄光ある戦い方ではなくて勝つことですから。大義が平等なら、十倍の兵力で戦うことは理に適っています。英雄的とは言えませんが。」

「あなたは戦争から名誉だとか騎士道精神だとか、みんな奪っちゃうの？」メアリーが叫んだ。「戦争に言訳いわけがあるとしたら、それは戦争が人間の一番高貴な部分を引き出してくれるからだわ。自己犠牲だとか、無私むしの精神だとか、忍耐だとか。」

「でも戦争に言訳はいらぬんだよ。」ジェームズが優しく笑って答えた。「戦争は非人道的で馬鹿げてるって多くの人は言うけど、それこそ馬鹿げた考えだと思ふよ。だって、戦争はなくすことができるって考えるのは、自然つてもものを理解していない、生存競争つてもものを理解してないってことだ

ろう？ 刀や銃だけでやるのが戦争じゃない。戦争は自然界のあらゆるところで行なわれている。生物の存在の基本条件だと言つてもいいんだ。野原に咲く花は戦争をしている。それも人間より無慈悲なやり方だね。だって野生の花にとっちゃ、戦争に負けることは絶滅を意味するから。自然界の法則は、環境に適したものが適さないものを殺すってことだ。自然界での神は「万軍の主」エホバなんだよ(注3)。足の悪い者、目の見えない者は後に取り残されて、強い者だけが喜び勇んで我が道を進むんだ。」

「ジェームズ、あなた、なんて冷たいの！」メアリーが言った。「哀れみって気持はないの？」

「ねえ、僕には世界が哀れみで溢れすぎてるように思えるんだ。人間が活気を失いつつあるように見える。現実現実に尻込みして、理想という擬い物の宮殿でナマケモノみたいに暮らしている。センチメンタリスト、臆病者、気むずかしい連中が人間の気概をこなごなにってしまった。今じゃ部下が死ぬかもしれないと言つて司令官が攻撃を躊躇う。時には部下を失うことにも価値があるのに。僕らは軍人になった時、人間であることを止めた。単に或る作戦のための道具になった、そう納得してるんだ。僕らが戦場で死ぬことが司令官にとって計算ずくのことだつてある。僕は優しい心を持った司令官なんて信用しないね。他人ひとに同情したら脳の働きは弱くなる。で、挙句あげくの果て、悲惨な結果を招くことがしょつちゅうあるんだ。」

しかし、そう言つてしまった途端、ジェームズは父が自分の言つたことをどう取るかに気がつき、しまったと思つた。今の言葉を発しない状態に戻せるなら、何をあげてもいい。舌を挽ひぎ取つてもいい。父は、慈悲と哀れみから、正に今自分が言つたような致命的な過あやまちを犯したのだ。命を助けた

という優しさが生んだ行為が大惨事と死とをもたらしたのだ。思慮に欠けた自分の言葉を父は意図的な非難と受け取ったことだろう。やっと治りかけた傷口が開かれてしまった。しかも息子によって。あの死にたいほど耐えがたかった屈辱を今また感じていることだろう。

パーソンズ大佐は肝を潰したように身じろぎもせず座っている。痛ましく怯えた視線がジェームズの上に釘付けになっている。狩人に追われ、恐怖に震える動物のようだ。その一方で、人間どうしてこんなに残酷になれるのかと訝しみ、驚愕している。

「どうしたらいいんだ？」ジェームズは考えた。「どうやって償ったらいんだ？」

会話はクリボン夫妻と牧師との間で続いていた、目と鼻の先で悲劇が演じられていることには全く気がつかず、楽しそうに。ジェームズは父を見た。痛みを与えてしまったことをどんなに苦々しく後悔しているか知ってもらいたかった。しかしどう言ってもいいのかわからなかった。どんなに深く愛しているか示したかった。しかしもはや何をしてもそれが不可能なのは分かっていた。ジェームズは拷問に掛けられているように感じた。

幸いなことに、その時女中が入ってきて、学校の生徒たちがパーソンズ大尉の歓迎会を開くために外に来ていると告げた。一同は食卓を離れた。

パーソンズ夫妻はジェームズの帰還を祝う式典は必要ないと思っていたのだが、メアリーと副牧師ドライランド氏の説得に負けてしまったのだ。ドライランド氏は、公に祝典を行なうことは必ず村人たちの道徳心の向上につながる、人は誰も己の義務から逃れることはできず、ジェームズ大尉は村の人々に大尉の偉大な行為を称讃する機会を与える義務がある、と夫妻を説得した。

さらにジャクソン牧師が、ヒーローに直に会うことは村民にとって彼自身の説教と同じくらい有益であり、また若い大尉——若いゆえに思慮に欠けるところのある大尉——の責任感を目覚めさせるだろう、と主張した。しかし、ジェームズが突然予定よりも早く帰還したことで、計画が狂ってしまった。ドライランド氏は当惑して、メアリーに相談に行った。

「どうしたらいいんでしょうか、クリボンさん？ 生徒がさぞがっかりするでしょう。」

最初の計画では、駅からプリンプトンハウスに向かうヒーローの馬車を、沿道で出迎えることになっていて、副牧師はその計画を諦めたくなかった。

「どうでしょう？——パーソンズ大尉には一旦タンブリッジウエルズに行ってもらい、二時になったら丁度到着したように馬車を走らせてもらうというのはい？」

「やってくれないでしょうね。」メアリーはそれは無理だという表情で答えた。「それにそんなこと頼んだら笑われるに決まっています。式を逃のがれられて喜んでいたようでしたし。」

「ホントに？ いやー、本当ですね、——真の勇氣というのは常に謙虚だというのは。しかし、もしヒーローの歓迎会を開かなかったら、この村末代までの汚点となるでしょう。それにもう準備万端整えてしまったのですから。わが大英帝国が顕彰した人物をリトルプリンプトンは無視したなんて言わせるわけにはまいりません。」

あれこれと計画を再検討した結果、時間を計って式の行列がプリンプトンハウスに到着するようにする、そこで大尉に「凱旋門」まで出てきてもらって祝典を行なう、そう決めたのだった。歓迎会のために生徒たちが外に来てると召使が伝えた時、ブラスバンドの調子っぱずれのファンファーレが、いよいよ開式の準備が整ったことを宣言した。メアリーは急いでジェームズに皆が何を彼に期待しているのかを話し、一同は玄関に向かった。

プリンプトンハウスは緑地に面していたが、道の反対側には何件かの小さな商店があつて、そこには色とりどりの幔幕まんまくが垂れ下がりに、グルームブリッジへ通ずる街道に面して仲良く肩を並べる教会と居酒屋は、英国国旗で飾り立てられていた。大きな栗の木々、その先に広がる緑——目に入るものが心地よく、これぞ昔ながらのイギリスの田舎といった風景だ。そしてそれを完璧なものとするために太陽が、温厚で気立ての良い老紳士のように、空に輝いている。整頓好きな副牧師が道の右側には男子生徒を、左側には教員に引率された女子生徒を配置していた。男の子たちは顔と手をしっかりと洗い、ポマードの匂いをたてている。中央に立っているのはコーラスとブラスバンドとドライランド

氏。その後ろをヒーローを一目見ようと口をぽかんと開けた村人が取り巻いている。家から出た八人は「凱旋門」の下に用意された椅子に座った。クリボン夫妻はいかにも紳士然とした尊大な表情を浮かべている。八人全員が余所行きを着用していたから一行は俄然目立った。

準備が整ったのを見たドライランド氏が数歩進み出ると、音楽隊を指揮すべく後ろを向いて、勿体を付けて咳払いした。彼は大きくて白い、いかにも聖職者といった手を頭上高く挙げると、人差し指を伸ばし、拍子を取って何か唸った。ちよつと遅れてコーラスとブラスバンドが元氣よくそれに続き、トランペットがこれでもかとばかり吹き鳴らされる。

《見よ、英雄が勝利の帰還

ラツパを鳴らせ、太鼓を叩け》

副牧師は次第に自らの歌声に昂奮し、フェルト帽を持った左手も持ち上げ、それも使つて力強く拍子を取る。

曲が最後に近づくとテンポが速くなる。演奏者たちは取り残されまいと短い息継ぎで必死について行く。全員のリズムがピタッと合っているとは言えない。が、どうかそれぞれが最後の華やかなアーメンコーラスに辿り着く。

曲の終わりを告げるコルネットの音が消え、会衆がその静けさに驚いた表情を浮かべるのを確かめて、ドライランド氏は生徒代表に合図する。少年が進み出て、帽子を振りながら叫ぶ。

「パーソンズ大尉、ばんざい、ばんざい、ばんざい！」
副牧師は、額の汗を拭い、振り向くと咳払いをした。

「パーソンズ大尉、」推敲を重ねた賞賛の言葉が全員に聞こえるよう彼は声を高める。「私たちリトルプリンプトンの住人は大尉の御帰還を歓迎いたします。申し上げるまでもありませんが、今日こうしてここに集まり、大尉が御無事に愛する御家族のもとにお帰りになったのをお祝いできることは、この上ない喜びであります。諺に曰く、『我が家に勝る所なし』。(「いいぞ、その通り!」と牧師が叫ぶ。)また、垂涎のヴィクトリア十字勲章を教区の仲間が賜わったのだと思うと誇りを禁じ得ません。今やリトルプリンプトンはなんら恥じる必要はありません。大英帝国のいかなる町にも負けない誇りを手にしたのですから。大尉、あなたは御自身に榮譽をもたらしただけではありません。私たちにも榮譽をもたらしたのです。あなたは人間如何に生き如何に死ぬべきかをイギリス人が分かっていることを示してくださった。ヨーロッパの列強に、敬虔で清らかな古き良きイギリスが今でも脈々と生きていることを示してくださった。しかしもうこれ以上は申しすまい。私は私のように雄弁に自分の気持を表現できない人々のために、歓迎の言葉を二言三言述べたいと思っただけですから。これ以上は申しません。パーソンズ大尉、どうぞ末永く、まもなく妻となられる方と手を携えて、この名誉と栄光を享受なさってください。私たちはあなたが手本を示してください行爲についてずっと考えてまいりました。あなたのお蔭で私たちはより善き人間、より高貴な人間、真のキリスト教徒となったのです。最後に、——あなたは様々な危険、艱難辛苦を乗り越え、今は愛する御家族の胸にお帰りになったのですから、私たちにもう一つの良き例——忍耐と勇氣と……」副牧師は一瞬次の単語を

忘れてしまった。「……忍耐という良き例を示してください女性を妻に迎えてやってください。そしてお幸せになってください。リトルプリンプトンの住人はいつまでもあなた方二人を尊敬し愛することでしょう。それではジェームズ・ブラウンが、——名誉あるあなた御自身と同じ名前を持ち、学校で成績一番の男の子ジェームズ・ブラウンが、『カザビアンカ』という短い詩を暗唱いたします。」

ドライランド氏は、できたら新作の頌歌を特にこの日のために用意したいと考えていた。何行かの韻文の中に、英雄を歓迎し、その行為を讃え、教訓を示すことができるなら、さぞ効果的だろうと思つたのだ。しかし、あいにく、ミュージズの神は意地悪だった。これは真に奇妙なことだった。何故なら、リトルプリンプトンのエリートたちは皆、非の打ち所のない道徳観、誰もが良しとする理想、教会がそれによって成り立っている信念の持主だったし、文学的素養にも欠けてはいなかったからだ。毎日全員が新聞を読んでいた。ジャクソン牧師夫妻は教会新聞も購読していた。メアリーはルイス・モリス卿の大部の詩を全て暗記していたし、ドライランド氏は寸劇で何度もテニソンの詩を暗唱した。しかし、こと靈感の問題となると、副牧師がわざわざロンドンまで発注した押韻辞典も全く助けにはならなかった。そこで最終的には、こうした祝典に相応しい何か有名な詩にしようということでは皆の意見が落ち着いたのだった。全員が躊躇なく『カザビアンカ』に投票したことは、これら神を畏れる純朴な人たちが、いかに強い心の繋がりを持つて暮らしているか、いかに文学的素養が高いかを示していると言つてよからう。

前もってドライランド氏が丁寧に指導しておいたように成績最優秀の生徒が前に進み出て、フェリ

シア・ハーマンズの不朽の詩をそれにふさわしい身振り手振りを交えて暗唱し始めた。

《若者は燃える甲板に立ち

あやうく逃げ出しそうになる。

炎は戦の残骸を照らし出し

若者の周り、死者たちの上に輝いている。》

「凱旋門」の下に陣取った一団からの控えめな拍手の中、少年が暗唱を終えると、ドライランド氏が再び進み出た。

「次に、学校で成績一番の女の子ポリー・ゲームがミス・クリボーンに花束を贈呈いたします。さあ、ポリー、前に出て。」

これは副牧師が演出したサプライズだった。彼の期待どおり、メアリーの顔が驚きに輝いた。

ポリー・ゲームが進み出て短いスピーチをしたが、その言葉はいかにも幼いものだった。もちろんこれも副牧師の演出である。

「ミス・クリボーン、あたしたちリトルプリンプトンの女の子は、尊敬の気持でこの花束を贈ります。あなたが選んだ人と幸せに結婚して、長生きしてください。」

そう言つて花束を手渡した。花束は縁飾りの付いた紙に包まれ、紐で固く結ばれていて、羊の足関節のようだ。

「次は賛美歌第三百七十七番、」とドライランド氏。

子供たちが歌い始めた。その元気がいっばいの歌声を聞いたクリボーン夫人は微笑みながら、下層階級の人にもこんな素敵な心があるのね、とパーソンズ夫人に囁いた。ブラスバンドの最後の調べが夏の微風に乗って消えると、暫しの間があった。そしていよいよ牧師が進み出た。彼は控えめな咳払いのあと始めた。

「パーソンズ大尉、紳士淑女の皆様、リトルプリンプトンの信者の皆様、せっかくの機会ですから一言述べさせていただきます。」

牧師の演説は見事なものだった。自明の報告、決まり文句だらけの所感、そして露骨な道徳。正にこれぞ雄弁家だと誰もが感じる聞き慣れた響きを持っていた。演題に立たせたらジャクソン牧師は決して期待を裏切らない、そう誰もが認めていた。ただ、師の演説の見事さは、簡潔の中に価値を見出すものではなく、流暢多弁にあった。だからここでは、師が演説の最後を大尉へのさらなる拍手を求めて締めくくった、とだけ述べておけば充分だろう。もちろん拍手は惜しみなく与えられた。

ジェームズにはこの式典の全てが馬鹿らしく、耐えがたいものに思えた。だから、実際、何が進行しているのかほとんど気づいていなかった。彼の心は父のことでいっばいだったのだ。最初のうち大佐は鬱いだままで、式に注意を払えないようだった。時々視線をジェームズの方に送る。先刻と同じ、驚愕したような哀しそうな瞳。見えて切なかった。しかし年齢と体力の衰えのせいだろう、激しい感情は長くは続かないようだった。時が良薬となり、老人の気持ちに変化が現れた。誇りと幸福感が甦ってきたのだろう、やがて父に笑顔が戻った。

しかしジェームズは満足していなかった。何か具体的な償いをしなくては……。牧師の演説が終わった時、集まった人たちが次に自分からの感謝の言葉を期待していることに気づいた。その瞬間、これは父に与えてしまった重い傷を癒やす良い機会だと思いついた。自分の本心に反することを公に述べなければならぬのは嫌でたまらなかったが、自分に対する罰に過ぎないのだと考えることにした。この無知な野次馬に向かって話すのがどんなに辛いか誰にも解らないだろう。

「私のような者のためにこのような会を開いていただき、本当に有難うございます。」

声は緊張に震え、上手く言葉が出てこない。彼は顔を赧からめた。これから話そうと思っていることを実際に口にしなければならぬのは、おそろしく屈辱的なことだった。あまりに俗悪なことだからだ。しかし、ここで自分の本心を語ることは絶対にできない。彼は困惑していた。見ると、地元の新聞記者が彼の言葉を速記している。

「皆様の温かさに心を打たれました。ヴィクトリア十字勲章を授けられたことは、もちろん私にとつて言葉にならないほどの誇りです。しかしこの勲章は私のやったことのためというより、父のお蔭だと感じるので。皆様御存知のように、父はとても勇敢な軍人でした。私はいつも父の後ろ姿に学んできました。いつも変わらない父の愛と教えがあったからこそ、あの小さなことができたのです。今の私があるのは全て父と母のお蔭なのです。汚点一つない父の素晴らしい業績と、父の全ての行動を輝かしく色取ってきた美しい精神、そうしたものが困難の中で私を支えてくれたのです。私が強く願ってきたのは、父から受け継いだ名誉ある名前、その名前にこの私も値する人間である、そのことを証明したいということでした。皆様は私のために温かい拍手をしてくださいました。今度はそれを父の

ためにやってくださいさらないでしょうか。」

パーソンズ大佐は息子が話し始めた時そちらを向いたのだが、息子の言葉の意味を理解すると涙を抑えられなくなった。感謝と至福の涙が目に溢れ、頬を伝って落ちた。恥辱の思い出はすべて消えてなくなり、これまでに経験したことのない恍惚とした喜びを感じた。大佐はぼんやりとした頭で考えていた、「これで幸せに死ねる！」と。そしてあまりにも感情が昂たかぶってしまい、それを見せることは恥ずかしいことだという思いを忘れて、ハンカチを取り出すと人目を憚はばらず頬を拭った。

ブラスバンドが『英国讃歌』と『英国国歌』を演奏し、ドライランド氏が教えたとおりの整然と会場を後にした。「凱旋門」の下に座っていた人たちも散会となって、ジャクソン牧師夫妻、クリボン大佐夫妻はそれぞれの家路についた。

メアリーはプリンプトンハウスに戻った。彼女は目を潤ませ、ジェームズの腕を取って、「ああ、ジェイミー、あなたって本当に良い人！」と言った。「お父様のことをあんな風に言っているなんて。お父様がどんなにお喜びになったか分からないでしょうね。」

「きみが喜んでくれて嬉しいよ。」ジェームズは硬い表情でそう言うのと、彼女の腰に腕を回し、前屈みになってキスをした。

メアリーは暫し彼の肩に顔を埋めていたが、彼女にとつては激情というのはずぐに消えるものだった。彼女が何より願っていたのは、軍人の妻に相応しい雄々しさだった。メアリーはしやきつとすると、ジェイミーの抱擁を解いた。

「さあ、走って帰らないと。ママに叱られちゃう。じゃ、さよなら。またね。」

*

*

*

ジェームズが食堂に入ると、父は今日一日の様々な感情の揺れに疲れ切った様子で、朝刊の一面に目を落としていた。平常心を取り戻そうとしているのだろう。母はいつもの椅子に腰掛けて編み物をしている。母は彼の姿を見て微笑んだ。二人とも先程の言葉に喜んでいるようだ。それは、しかし、いかにもセンチメンタルで嘘臭く、無様なものとして未だジェームズの耳に鳴り響いていた。が、まあ、愛する両親を幸せにしたのだからそれで良しとしなくては、と彼はいくぶん悲しい気持で考えた。「メアリーは帰ったの？」母が訊いた。

「ええ。長居するとお母さんに叱られると言っていました。」

「クリボン夫人は苛立っていたわね。自分以外の方が注目を集めるのが気に入らないのよ。あんなに意地悪な人は見たことない。」

「おいおい、フランシス。」大佐が諫めた。

「でも、そうでしょ、リッチモンド。ホントに嫌な人なんだから。メアリーに対する態度なんか、そりゃひどいものだよ。」

「たしかに。メアリーは可哀相だ。」

「ねえ、ジェイミー、あたし、あの人のこと考えると腹が立ってしょうがないの。かわいそうに、メアリーが泣きじゃくってここへ来たのも一度や二度じゃないのよ。」

「クリボン夫人は何をしたんです？」

「ああ！ あなたには言えないわ。本当に思いやらないの。メアリーが大きくなったらあの子を嫌うようになった、あの子の方が注目を集めるから。ちよつとした嫌みを言うのはしよつちゅう。あなたは夫人のいい時しか見えないのよ。メアリーと二人きりの時は本当にひどいんだから。悪口ばかり。あなたは不細工だの、服装の趣味が悪いだの。そりゃそうよ、あの人お金は全部自分のために使っちゃうんだから。あたし実際この耳で聞いたことある——『あなた、なんて馬鹿でみつともないの。恥ずかしくてどこへも連れて行けないわ』って。それに比べてメアリーは本当に善い子よ。日曜学校で教えてるし、コーラスの指導はしてるし、それに貧しい人たちの家を訪問してる。でもあの人は娘は役立たずだって不平を言うの。あたし、クリボン大佐に話してほしいってお父さんに頼んだんだけど……。」

「そんなこと絶対しないでくれってメアリーに言われたんだ。」とパーソンズ大佐。「父さんと母さんの間に波風を立てるよりは、自分が苦しめばそれで済むんだからってね。」

「本当に、天使みたいに善い子だわ！」パーソンズ夫人が熱を込めて言った。「殉教者って表現がぴったり。あんなお母さんでもまるで世界一の女性だって風に、いつも優しく親切に接してるのよ。誰にも母親の悪口は言わせない。」

「時々言っていたな、」パーソンズ大佐が囁いた。「自分が幸せなのはおまえ、ジェイミー、おまえのことを考えている時だけだって。」

「僕のこと？」とジェームズは言っつて、ちよつと躊躇いながら、「母さん、メアリーは僕が好きだと思いませんか？」と訊いた。

「好き？」パーソンズ夫人は笑った。「あの子にとってあなたがどんな存在か、想像もつかないでし

よね。あの子はあなたの歩いた地面だつて崇拜するわ。」

「おまえさんはジェイミーを己惚れ屋にしたいみたいだな。」そう言ってパーソンズ大佐も笑った。

「いつかジェイミーが帰ってきて、あなたをここから攫さらつて行ってくれる——そう言って慰めるしかない時だつてあつたのよ。」

「結婚式の予定を早く立てなくちゃいけないな。」笑いながら、からかうように大佐が言った。

ジェームズは青ざめた。「まだちよつと早いと思いますが。」

「六月はどうかつて話してたの。」と夫人。

「よく考えてみないと。」

「もう待ちすぎただろう？」と大佐。「早く結婚したくてたまらんだらう？」

「きつといい奥さんになるわ。あんなに可愛い子を見つけたなんて、ジェイミー、あなた本当に運が好いわ。それに、あなたが幸せになつてくれることが、あたしたちにとつても嬉しいの。」

「この間、メアリーに言ったんだ。」大佐がにこやかな表情で付け加えた。「そろそろ嫁入り支度をした方がいいんじゃないかな、あいつの性格からして、帰国したら一週間以内に結婚したいだろうからつてね。最近の若い連中はせつがちで困つたものだ。」

夫人が微笑んだ。

「これは秘密中の秘密で、あなたに話したつて判つたら、あの子きつと怒るでしょうけど、実は、あなたが帰ってくるつて聞いた時、あの子花嫁道具を注文し始めたの。お父さんが、手始めにつて、百ポンドくれたんですつて。」

両親は容赦なかった。息子の幸福を願つての興味関心と愛情深い親切心ゆえに何と残酷なことか、ジェームズはそう思った。

ジェームズがイギリスを離れていたのは五年だったが、その間に奇妙な変化が起こっていた。長く静かに体内で進行していた潰瘍は全臓器に感染した時それとはつきり判る、ちようどそれと同じように、新しい考え方がついに具体的な行動にまで表われて、国の土台を蝕み始めていたのだ。病はまず大都市の一般大衆の間に拡大した。飲酒と救世軍と大衆新聞という三つの毒が人々の気力を奪っていた。集団ヒステリーと煽情主義が巨大な力となって燃え盛り、今にも爆発しそうだった。そしてこの潰瘍は田舎にまで拡がっていた。階級間での差はほとんどなく、住民全員が急速にこの病に冒されつつあった。文学の潮流もこの線に沿ったものだった。イギリス国民は、六十年に及ぶ緊張からノイローゼ気味になり、水のように不安定な精神状態にあった。そして、戦争が始まってすぐ幾つかの小さな退却を余儀なくさせられたことで、恥や外聞といった最後の障壁が崩れた。過剰にまで抱いていた大国としての自信は雲散霧消し、イギリス人はまるで征服された国民のように自分を卑下し、弁解がましく、臆病になっていた。怯えた女のように手を握りしめ右往左往していた。自制だとか、慎みだとか、我慢だとかはどこかへ押しやられてしまった。そして今や、あからさまに感情を表わすようになっていた。まさに風に揺れる葦だ。が、考える葦ではなく、偶像を求

めて叫ぶ葦だ。跪いて拝むことのできる黄金のロバを誰か提供してくれないかと叫んで、それを自慢している。恥辱と情緒不安定の中で、臉を腫らしてのたうちまわること誇りを感じている。何としても同情が欲しい、だから駆けずり回って、どうだ酷いだろう、と傷から出る血を見せ合って喜んでいる。イギリスの男は、今や、女々しいことを誇りにしているのだ。感情を顕わにする男である方が紳士であるよりも良いことなのだと考えている、——確かにその方が遥かに気楽なことだろう。思考の停止、機智の喪失、そうしたものが大手を振るようになり、精神的に軟弱な者たちが国の跡継ぎとなっていた。

五年前ジェームズがイギリスを離れた時には、こうした心の有り様は軽蔑すべきもの、大抵は大衆のクズの中に見られるもので、無知と飲み過ぎのせいだと考えられていた。ところが帰国した時には、その背後に国民全体の善悪感の変化があった。ジェームズには理解できなかった。酒を嗜まらず、平静な心と節度の持主だと思っていた人たちが、今は感情を剥き出しにして憚らないのだ。自分の婚約について副牧師が言及したことを思い出すとぞっとした。驚いたことにメアリーも、余計なことを言つてと不快感を示すどころか、何とも嬉しそうだった。本来プライベートなものであるはずの自分たちの関係を喧伝し、有象無象の評判を得ることを喜んでいるのだ。祝辞での感情過多なお追従の数々！まったく吐き気がした。集まった連中が期待していることを述べざるを得なかった自分自身の卑屈な心にも腹が立った。

加えて、昨日の式典は自分の婚約を動かぬものにしてしまった。誰もが知ってしまったからだ。

自分の名前はメアリーの名前と結びつけられ、もはやその結び目を解くことは不可能だった。そんなことをすればメアリーが皆の笑い種くまになってしまっただろう。どうしてそんな屈辱を与えることができよう？——あんなに自分を愛してくれているのに。そう考えるのは決して虚栄心の故ではない。母がはつきりそう言ったし、メアリーが自分を見る時の眼差し、自分と話す時のちよつとした抑揚からも明らかだった。ああ、どうしてメアリーは自分なんかが好きなんだろう？——ジェームズは絶望的な気分だった。ハンサムとは言えないし、無口で、およそ面白い男とは言えない。これといった魅力は何もないのに。

そんなことを考えながら自分の部屋で椅子に腰掛けていると、玄関からメアリーの声が聞こえた。

「ジェイミー！ ジェイミー！」

彼は立ち上がって、階下へ行った。

「なあ、ジェイミー、」父が言った。「メアリーがここに来るのを待つんじゃないかって、おまえが迎えに行つてやるべきだったんじゃないかな？」

「そのとおりよ、ジェイミー。」とメアリーは笑ったが、彼の姿を見て、「何だか元気ないみたいだけど……？」とちよつと心配そうに付け加えた。

確かにジェームズは寝れ、疲れているように見える。昨夜あれこれと思い悩み、よく眠れなかったのだ。

「大丈夫。まだ完全に回復してないんだ。それに昨日はかなり疲れたしね。」

「メアリーは、午前中、教区の人たちを訪問するが、おまえも一緒に行きたいんじゃないかって言うんだ。」

「とってもいいお天気よ、ジェイミー。躰からだのためにもいいわ。」

「ぜひ一緒に行きたいな。」

二人は出発した。メアリーは普段着だった——サージのガウン、セーラーハット、それに爪先が角張った頑丈なブーツ。歩みは力強く、大股で早い。会話のきっかけにと、ジェームズがこれから訪問する人たちについてあまり意味のない質問をすると、メアリーは思いを込めて長々と答えていた。が、ある小屋コテージの前に着いたので、そこで中断となった。

「この家には入らないで。」メアリーが顔を赧あからめて言った。「内なかに入つてほしい家もあるけど、ここは駄目。最初に教えておかないからいいから。」

「何を？」

「あら、そんなこと面と向かつて言えないわ。あなたを己惚ふかれ屋さんにさせたくないもの。でも待つてる間に想像できるかも。」

看護している女性は出産間近で、そのお腹なかの膨らみをジェームズに見せるのははしたないと——全く正しいのだが——メアリーはそう考えて、彼を外で待たせることにしたのだ。が、この家の善良なる女性は、これは自然の営みの一つに過ぎないのだからミス・クリボーンの言うように恥ずかしがる必要はないと考え、どうしても玄関まで見送ると言った。

「見られないように気を付けて。」メアリーは慌てて女性を押し戻した。

「何も悪いことじゃありませんよ。あたしは結婚してるんですし、お嬢さん、あなたさんももうすぐこうなるんですから。」

メアリーはジェームズが何も見なかったことを願いながら、顔を真っ赤にして、愛する者のもとへ戻った。

「こういう人たちに礼儀作法を教えるのってとっても難しい。下層階級の人ってその場に何が相応しいのか解ってないみたい。」

「何かあったの？」

「あら、何でもない。あなたにお話しするようなことじゃないわ。」そう言ってメアリーは話題を変えるべく、「婚約者の男性はお元気ですかって尋ねてた。とっても会いたそうだったわ。」

「そう？ どうしてきみに婚約者がいるって判ったんだらう？」ジェームズがちよっと不快そうに訊いた。

「あら、皆んな知ってるわ。リトルプリンプトンじゃ何でも筒抜けなの。それに、わたし、婚約した男性がいても何にも恥ずかしく思っていない。あなたは？」

「僕には男の婚約者はいないからね。」

メアリーは大笑いした。

二人は歩みを続けた。朝の気は清々しく、光に溢れ、メアリーの健康な頬を明るく照らす。青

空と引き締まった空気が彼女に自信を与え、これまでも増して自分の目的は高潔なものであり、自分の心は誠実なのだという確信を深めてくれる。くねりながら進む道は堅く締まり、足の裏を心地よく刺激する。周りに広がる野原から、隣接する農家の庭から、芳しい香りが漂ってくる。雲雀が空の高いところで楽しそうに歌っている。生垣では雀が囀っている。山榎子が新緑の葉を吹き出し、あちこちに金鳳花、鉾形草といった野生の花が咲いている。こうした長閑な風景の中、ジェームズはぶらぶら歩きながら農場の囲いに寄りかかって牛がのんびりと草を食むところなど見ていたと願ったのだが、メアリーの身体は彼のそれよりもずっと逞しく健全で、この景色も次の活動へのいい刺激にしか映らないようだ。

「ぐずぐずしてちゃ駄目よ、もう！——ナマケモノなんだから！」メアリーが陽気に声を上げた。

「一所懸命歩きなさい。さもないと一時までに廻りきれなくなっちゃうわよ。」

「別の日にできないの？」

澄んだ大気がジェームズの気持を和らげていた。取るに足らない噂話でもしながらこのまま歩いていたら、最後にはお互いをよく理解できるようになるかもしれない、彼は暫しそう考えた。太陽と野の花と気紛れな微風が新しい感情を生み出す助けになってくれるかもしれない。

メアリーは優しい、しかし、断固たる表情をジェームズに向けてと、

「ねえ、解ってるでしょうけど、わたしあなたに喜んでもらえるならどんなことでもするつもりよ。」と答えた。「でも、たとえあなたのためでも、自分の義務を疎かにすることはできないわ。」

ジェームズは凍りついてしまった。

「もちろん、きみの言うことが正しい。何でもないから気にしないで。」

二人は次の小屋コナジに着き、今度はジェームズも内うちに入れてもらえることになった。

「ここはお爺さん。とっても気の毒な人なの。わたしにそれは感謝してるのよ！」

老人はベッドに横たわり、痛みに軀からだを振まって丸まっていた。頭は枕で支えられている。

「まあ、そんな姿勢じゃ苦しいでしょう。」メアリーが叫んだ。「かわいそうに！ 一体誰が枕をこんな風にしたの？」

「娘っす、お嬢さん。」

「話してやらなくちゃ駄目ね、——もっと気をつけてお世話するようになって。」

ミス・クリボーンは枕をそっと頭の下から引き抜くと、皺を伸ばして、置く位置を変えた。

「あたしや、そんなんじや耐えられません。さっきの置き方が一等楽なんっす。」

「何言ってるの、ジョン！」メアリーが陽気に言う。「頭を片方にばかり置いてたら苦しくなるだけよ。この方がいいの。」

ジェームズは老人の顔が苦痛に歪ゆがむのを見て、無駄だろうと思いつながらも、諫いさめにかかった。

「前の位置に戻してやった方が良くないかい？ さっきの方が楽そうだったよ。」

「何言ってるの、ジェイミー。頭は胴体より高い位置に置かなくちゃいけないの。そのくらい知ってよ。」

「頼んまず、お嬢さん。これじゃ耐えられません。」

「いいえ、耐えられます。さあ、頑張がんばって。忍耐力を見せて。神様はあなたを試そうと苦痛をお与えになっっているんです。イエス様は十字架の上で黙って耐えていらっしやいました。それを考えて。」

「メアリー、きみはこの人に無駄な苦痛を与えてるんだよ。この人はどうしたら一番楽か自分で解ってる筈はずさ。」

「そうじゃないわ、頑固がんこなだけ。いつも不平ばかり言うのよ。実際、ジェイミー、看護かんごについてならあなたよりわたしの方が詳しいって認めてほしいものだよ。」

ジェイミーは何も答えられず、暗い表情になった。

「すぐにスロープを持ってこさせますからね、ジョン。」メアリーがそう言って、二人は小屋コナジを出た。

「ねえ、ジェイミー、ああいう人たちに合理的なことをさせるのは不可能に近いわね。どういう姿勢を取れば自分が楽なのかさえ解ってない。それを教えてやるのは本当に大変。」

ジェームズは黙ったままだった。

二人がさらに数ヤード歩くと、一頭立て馬車が向こうからやって来た。メアリーは顔を赤くし、いかにもこれはまずいといった表情で馬車を見つめている。見て見ぬふりをするという便利な技は身につけていないようだ。

「ああ、何てこと！」メアリーが苛いらだだって言った。「ジョンのところへ行くんだわ。」

「誰？」

「医者のヒギンズ。不法法で憎たらしい人。それにとつても失礼なの。だから無視することにしてるのよ。」

「ホント？」

「そりゃあ非道い^{ひど}いのよ。わたし医者^{いしや}って耐えられない。何でもかんでも邪魔するんだから。病気のことは医者^{いしや}にしか解らないって考えてるみたい。ヒギンズはわたしがお世話してる女性の患者も診^みてるんだけど、当然わたしには彼女がどうしてほしいのか解ってる。弱ってる体力氣力を回復させるものが必要なのよ。だからポートワインを届けさせた。そうしたら、ヒギンズがわたしの家にやって来て、会いたいって言うの。あの紳士なんかじゃないわ。ねえ、とっても無礼なのよ。『今日来たのはギャンディー夫人の件です。わたしはあの人にアルコール類は飲まないようにと特に注意しておいたんですが、あなたポートワインを届けましたね？』って言うの。『欲しがっていると思ったからです。』とわたしは答えた。『あなたからお酒に触れてはいけないと言われたって言ってましたけど、ワインを少しくらいなら躰に良いって思ったんです。』そうしたらあの人、『頼むから、自分が解つてもいないことにちよつかいを出さないでください。』って。あたしは『あなたは上流階級の女性に向かつて話しているんですよ、それをお忘れなく。』って言うってやった。そうしたら、『上流もクソもない。いいですか、あなたが私の患者にちよつかいを出すのは許さない。ワインは持って帰りました。もう二度とワインは届けない、そう理解してよろしいですね。』って、そりゃあ失礼

だった。わたし、正直言^{まこと}って、頭に来^きちゃった。だから、『ご自分が飲みたくてお持ち帰りになったんじゃないやありません？』って言うってやったの。そうしたらげらげら笑い出して、『村の酒屋で買ったのニシリングで買えるワインを？ やれやれ、まいったまいった。』だって。

ジェームズは笑いを噛み殺した。

「だから言^いってやった。『生意気な人ね。女性に向かつてそんな話し方して、恥ずかしくないの？ わたし早速ギャンディー夫人にポートワインをもう一本届けます。いくらするかはあなたの知ったことじゃありません。』って。そうしたらあの医者、『もしそんなことをして何かあったら、いいですか、あなたを殺人罪で訴えますよ。』だって。わたし呼鈴^{よびね}を鳴らして、『帰ってください。もう二度と来ないように！』って、追^おい返したの。ねえ、ジェイミー、わたしのしたこと間違^{まちが}ってないわよね？」

「メアリー、きみはいつも正しいよ。」

ジェームズは振り向いて、医者^{いしや}が小屋^{こや}に入^いって行くのを見た。老人が楽な姿勢に戻してもらえ^{かえ}ると思うと少し好い気分だった。

「パパに話したら、怒ったのなんのって！」とメアリーが続けた。「乗馬用の鞭^{むち}を持ってきて、あの医者^{いしや}を叩^{たた}きのめしてやるって飛び出していった。でも、長いこと捜^ためたけど見つからなかったって。で、結局、あなたのお母さんとわたしで、ああいう下品な男は無視^{むし}しましょうって説得^{せとく}したの。軽蔑^{けいべつ}してること解^わらせてやるにはそれが一番^{いちばん}だって。」

クリボン大佐がこの説得に応じたのはきわめて賢い決断だった、そうジェームズは考えざるを得なかった。ヒギンズは背が高く、肩幅も広い、がっしりした男だったからだ。悲しいかな、この世界では、正義が剥き出しの力に屈服することが少なくないのである。

「でも、あの先生、どこでも受け入れてもらえなくなった。わたし、あの先生には診察してもらわないようにしましょう、無視しましょうって、皆んなを説得したの。」

「そう、……。」ジェームズは口籠もった。

メアリーの次の患者は女性で、ジェームズは再び路上で足を冷やして待つことになった。しかし今度は一人ではなかった。ドライランド氏が小屋から出てきたからだ。この副牧師は太めの大柄な男で、赤みがかかった髪、莓入り生クリームを潰したような肌、大きな顔に悲しそうな表情。赤い僅かな眉以外に毛がほとんどないその顔を見ていると、なんだか裸体を見た時のような当惑を覚える。目は青。口は小さく、六十年ばかり昔若い御婦人方が「プルーンアンドプリズム」と繰り返し練習して身に付けようとした口元をしている。ねっとりとした、よく通る声で熱を込めて話すのだが、その熱意がごく当り前のことを話している時にも無意識に發揮されてしまい、祈りを捧げているように聞こえることがある。ドライランド氏は、自分は全ての人に対して全ての存在でありたいという称讃すべき願望の持主で、会話を常に相手に合わせようとした。ただしあまり成功しているとは言えなかった。——老婦人に対しては物柔らかく、活動的な人には俗っぽく、素朴な村人には面白おかしく、青少年にはいかにも若者の理解者であることを示すように子供っぽく。しかし、何

にも増して願っていたのは男らしい話し方だったから、騒々しいほどの笑い、陽気な態度を身に付けようとドライランド氏は日々努力を重ねていた。

「私を憶えていらっしやるかどうか判りませんが、」満面の笑みを浮かべて氏がジェームズに近寄って来た。「昨日、役職柄、一言三言歓迎の言葉を述べた機会をいただいた者です。ミス・クリボンがあなたが外で待ちになっていると仰しかったので、自己紹介などさせていただけこうかと。ドライランドと申します。」

「あなたのことはよく憶えています。」

「まあ、牧師の雑用係みたいな者でしてね。」副牧師は馬鹿笑いした。「如何です、病気の人や貧しい人を訪ねて教区を廻るのは、いい気分転換になるでしょう？——信仰のための戦いですから。ところで、戦場で負傷されたと伺いましたが？」

「ええ、かなり酷く。」

「私もアフリカへ行って、ボーア人に一撃加えてやりたかったものです。さぞ清々した気分になったことでしょう。ただ、私は聖職者に過ぎませんから、ね？ 正しい行ないとは思ってもらえなかったでしょうな。」大柄なドライランド氏はジェームズを上から覗き込むようにして明るく笑った。

「ところで、私があなたに捧げた昨日の歓迎の言葉、御記憶かどうか判りませんが……。」

「全部憶えていますよ。」

「即興だったんですが、まあ私の気持は伝えられたかなと。戦争のお蔭で良いことも幾つかありま

した。私たちが自分の気持を正直に表わせるようになったのもその一つでしょう。深い皺の寄ったお父様の頬を高貴な涙が流れていったのは、本当に美しい光景でした。あなたの言葉は私たち全員を心で掴みましたよ。あの巧まざる短いお話しに比べたら、私たちの準備したことなど無に等しい。タンブリッジウエルズ新聞が近々全文を掲載することになっています。」

「それは止してほしい。」

「あなたは本当に謙虚なお人だ、パーソンズ大尉。ミス・クリボーンにも昨日そう申しあげたのですよ。真の勇氣は常に謙虚である、と。しかしその素晴らしいものが藪の中に隠れてしまわないようにするのが私たちの義務ですから、勝手なことをして、なんて思わないでください。ついでに、新聞記者には私自身のコメントも与えておきました。」

「ミス・クリボーンは、長くかかるんでしょうか？」小屋の方を見ながらジェームズが訊いた。

「あの人は本当に良い人ですよ、大尉。間違いなく、天使のような慈悲の心の持主です。」

「そうお世辞を言わなくても……。」

「お世辞じゃありません。こう言えることが嬉しいのです。あの人はいくら褒めても褒め足りない。どんなにこの教区の助けになっていることか。いつも村人の精神的幸福を心に掛けている。ミス・クリボーンの道徳的影響力は飛び抜けています。」

「それは喜ばしいことです。」

「私はいつも思っているのですが、」ドライランド氏が満足そうに笑って言った。「あの人は牧師の

妻になるべきなのではないでしょうか、軍人の妻よりも。」

メアリーが出てきた。

「グレイ夫人に言っておきました、——娘さんが教会で着ていた服は良くないって。あの階級の人たちはあんなに派手な色の服は身につけるべきじゃない。そうでしょ？」

「いやー、本当に、あなたなしではこの教区の運営はできませんね。」副牧師がねっとりとした声で答えた。「何が正しいのか、何が正しくないのか、あなたのようにご存知の方は滅多にいません。またそれを恐れずに口になさる方は。」

メアリーが、これからジェームズと家に戻るが、一緒に歩かないかとドライランド氏を誘った。「喜んで。もしお邪魔でなければ。」

ドライランド氏は意味ありげな笑みを浮かべてメアリーからジェームズへ視線を移した。

「わたしの生徒たちのことであなとお話をしたかったの。」

メアリーは村の少女に裁縫や、上流階級を敬うことや、その他いろいろと役に立つことを教えていた。

「今パーソンズ大尉に、あなたは天使のような慈悲の心持主だとお話ししていたところなのです。」

「そんなことはありません。」メアリーは真面目な顔で答えた。「でも、やれるだけのことはやろうと心掛けています。」

「なんと！」ドライランド氏が目を大きく開き、天を仰いで叫んだ。鱧の目そっくりだった。「そう

仰しやれる方は滅多にいませんでしょうね。」

「わたしあの子たちのことが本心に心配なんです。住んでるのは小つぽけな汚らしい家、食べてるのはお粗末なものばかり。そんな胸の悪くなりそうな環境の中で暮らしているのに、あの子たち幸せなんです。自分が不幸だつて解らせてやりたいのに、できないんです。」

「全くです。」副牧師が溜息を吐いた。「そう考えると悲しくなります。」

「でも、子供たちが幸せなら、それ以上望むことはないでしょう。」ジェームズがかなり苛立って言った。

「でもわたしは望むの。あんな環境の中で幸せを感じることは間違ってるわ。わたしは子供たちに自分は惨めなんだつて感じさせたいのよ。」

「そりゃ残酷つてもんだよ。」

「あの子たちを向上させるにはそれしかないの。あの子たちにわたしと同じものの見方をしてほしいのよ。」

「で、きみの方が子供たちより正しい見方をしてるつて、どうして分かるんだい？」

「まあ、ジェイミーったら！」そうメアリーは叫んだが、言われたことの滑稽さが解り始めると、急に笑い出した。

「子供たちに不満を持たせて何か良いことがあると思うのかい？」ジェームズは険しい表情だった。

「わたしはあの子たちをより良い、より高貴な、より価値のある人間にしたいのよ。あの子たちに

もつと美しい、もつと神様を敬う生活をしてほしいの。」

「じゃあきみは、幸せそうに安ピカの冠を被っている人を見たら、言つてやるのかい？」『ねえ、

きみ、きみは物笑いの種になることをしてるんだよ。その冠は金なんかじゃない。だから今すぐ捨てなさい。代わりに金の冠はあげられないけど、でもそんな偽物を被つて喜ぶのは間違ってる、』そう言うのかい？ そんなの馬鹿げてるよ。あの人たちはあの人たちなりに、荒家に満足してるんだ、きみがきみのお屋敷に満足しているようにね。日曜に食べる脂ぎった豚肉を美味しく食べてるんだ、きみが茹でた鶏とブラマンジュを美味しく食べてるようにね。それで幸せなんだ。幸せだつてことが一番なんだ。」

「ジェームズ、この世で一番大切なのは幸せだつてことじゃないわ。」メアリーは真面目な表情だ。

「違うの？ 僕はそう思つてた。」

「パーソンズ大尉は犬儒家なんですよ。」ドライランド氏がちよつと揶揄うように言った。

「僕が馬鹿げてるつて言つたからですか？——自分と何も共通点がない人に自分の基準を当てはめるのは馬鹿げてるつて。そういうお節介は大嫌いですね。頼むから、自分のやりたいようにやらせてくださいよ。くだらない金ピカ物にくだらない喜びを感じているんなら、それでいいじゃないですか。」

「わたしは貧しい人たちに高い理想を与えたいの。」メアリーが言った。

「パンとチーズの方がずっと役に立つと思うね。」

「ジェイミーったら！ あなた何も解つてないからそんなこと言うのよ。」メアリーの言い方には全く悪気は感じられなかった。

「ミス・クリボーンは何年間も貧しい人々のために働いてこられたんですよ、それはそれは気高いお気持で。」

「自分の良心に照らして、わたしは間違つてないと思う。」メアリーが続けた。「ドライランドさんもわたしに同意してくれてるでしょ、ね？ あなたが嫌味を言ってるわけじゃないのは分かるけど、でもあなたは村の人たちのことがよく解つてないのよ。さてと、話題を変えた方が良さそうね。」

7

翌日メアリーはプリンプトンハウスへ赴いた。門から屋敷へつながらる徑を歩いて行くと、パーソンズ大佐が姿を認め、眼鏡を外して頷いた。人を疑うことを知らないこの近隣では玄関ドアに鍵や錠は掛けてなかったから、メアリーはそのまま居間に入った。

「さてさて、今日は何の用かな？」大佐は嬉しそうに笑顔を浮かべた。大佐は息子と同じくらいメアリーのことが好きだった。

「ジェイミーのいないところでお話しがしたくて……。あの人まだ外ですよね？ さっきわたしの家を通ったばかりだから。わたし窓のところに立ってたんですけど、顔を上げなかった。」

「きっと考え事をしていたんだよ。前より物思いに耽る事が多くなった。」

その時パーソンズ夫人が入ってきたが、メアリーの姿を見て、夫人の顔も明るく輝いた。

「いらつしやい。でもジェイミーはいま外出中なの。」夫人はメアリーにキスしながら言った。

「メアリーは私たちに会いに来てくれたんだよ。」と大佐。「多分、ジェイミーにかまけて私たちを無視していると思われたくないんだな。」

「大丈夫よ、メアリー。あなたがそんな思い遣りのない人じゃないことは分かっていますから。」パー

ソングズ夫人はメアリーの髪を撫でた。「あたしたちよりジェイミーのことを考えて当然よ。」

メアリーは暫し躊躇ためちっていた。

「ジェイミー変わったと思いませんか？」

パーソングズ夫人は素早くメアリーに目を遣やった。

「そうね、前よりちよつと無口になったわね。でもいろいろと大変なことを経験したんだから。それに今は大人になったんだし。五年前はまだほんの子供だったのよ。」

「もうわたしのこと好きじゃない、そう思いませんか？」メアリーの声は少し震えていた。

「メアリー！」

「もちろん好きさ。いつもおまえさんのことを話している。」と大佐。「それ以外のことは考えられないみたいだよ。そうだろう、フランシス？」

大佐はあまりにメアリーを愛していたから、息子の態度の中に愛する者にそぐわないものは何も見えなかったのだ。

「メアリー、なぜそんなことを訊くの？」パーソングズ夫人が尋ねた。

夫人は女性ゆえの感受性で、婚約者に対する息子の態度に何か変化が起こっていることに気づいていた。しかし冷たくなったとまでは考えられなかった。変化の原因はいくらでも説明できる。それにこれは自分の思い過ぎに過ぎないのかもしれない、そう考えていたのだった。

「ああ、あの人すっかり変わっちゃった。」メアリーが声を高めた。「どこがどうって言うんじゃないけど、でも全部にそれを感じるんです。昨晚はほとんど口を利かなかった。」

昨晚ジェームズはクリボン家の夕食に招待されたのだが、ずっと沈んだ様子だった。

「多分まだ躰の具合が悪いんだよ。傷が痛むんじゃないのかな。」

「そう思いたいんですが……。何だかわたしに話す時も無理にそうしてるみたいで、自然じゃないんです。わたしが嫌いになったんじゃないかって、とっても怖いんです。」

メアリーはパーソングズ大佐から夫人へ視線を移した。夫人は不安そうにメアリーを見ている。

「怒らないでください。他の人にはこんな言い方しないんですが、でもお二人がわたしを愛してくださっているのは分かっていますから。本当の親のように思っています。ママのこと悪く言いたくはないけど、ママにこんなことは言えないんです。馬鹿にされて笑われて、もっと惨めになるだけだから。」

「あたしたちも本当の親だと思っしてほしいのよ、メアリー。リッチモンドもあたしもいつもあなたを本当の娘だと思ってきた、ジェイミーと同じようにね。」

「そう言ってくださるなんて！」

「お母さんに何か嫌なことを言われたの？」

メアリーは言い淀んだ。

「昨晚ジェイミーが帰った後、彼はあなたを愛してないみたいねって言うんです。」

「やっばり。そんな風に考えるようになったのはお母さんのせいね。いつもあなたに嫉妬してるからジェイミーが愛するのは自分の方だって思い込んでるのよ。」

「パーソングズさん！」メアリーは、何てことを言うんです、といった調子で訴えた。

「怒らせてごめんなさい。お母さんの悪口を言われるのは許せない、そう思ってるのは分かってる。」

「ただあの人にそんなこと言う権利はないわ。」

「でもそれだけじゃないんです。わたしもそう感じるんです。」

「大丈夫、ジェイミーはおまえさんが大好きだよ。」パーソンズ大佐が優しく宥めた。「五年も会っていないかったんだ。おまえさんだって、自分が変わったと思うだろう？ 私たちもジェイミーに違和感を感じることがある、なあ、フランシス？ やれやれ、二人とも困った子だ。」大佐は笑ったが、その笑顔はたまたまなく優しい笑顔だった。「えつ、つい一昨日おとといジミーが浮かない顔でやって来て、おまえさんは自分が好きなんだろうかって訊くんだ。」

「本当？」メアリーが驚いたように、嬉しそうに叫んだ。大佐が言ったことを信じたくてしようがないといった表情だ。「わたしがどんなにあの人を愛してるか、ぜひ知ってほしい！もしかしたら、わたしが素っ気ないと思ってるのかも……。わたしジェイミーが好きで好きでたまらないんです。もし嫌になられたら、わたし、死にます。」

「メアリー！」パーソンズ夫人の目は潤んでいる。「そんなこと言わないの。あの子もあなたが好きで好きでたまらないのよ。あなたみたいに優しくして善い子はいなんですもの。あなたたち二人とも考え過ぎるのよ。それにあの子はまだ躰の調子が完全じゃない。ちよつとの間我慢してやって。ジェイミーはもともと無口で恥ずかしがり屋だし、長いことあしたちに会っていなかったから、まだ慣れなくて、どう気持を表しているのか分からないのよ。そのうち何もかもうまく行くようになるわ。」

「あいつはおまえさんを愛しているさ。」パーソンズ大佐も言った。「愛さないでいられる男なんていないんだ。えつ、もし私が若かったら、結婚してくれて五月蠅うるくせがんだだろうよ。」

「それで、あたしはどうなるの、リッチモンド？」パーソンズ夫人が微笑んだ。

「さて、どうしようか？二人と結婚して重婚罪で訴えてもらおうかな。」

大佐のこのちよつとした冗談に三人とも笑った。それまで重く覆っていた疑いという雲が通り抜けたようで嬉しかった。

「あなたって本当に良い方かた。」メアリーは大佐にキスをした。「わたしって馬鹿ですね、勝手な空想ばかりして。」

「ヴェクトリア十字勲章をもらった男の妻になるんだから、おまえさんも強い心を持たなくちゃいけないな。」大佐はメアリーの手を優しく叩いた。

「あれは本当に立派な行為でしたよね、本当に！」メアリーが声を高めた。「それを謙虚に、誰もがすることをしただけだ、何でもないことなんだって考えてるなんて！仲間を助けるために自分の命を危険に曝す姿ほど神様がお喜びになる姿はないでしょう。」

「メアリー、それが保証しているんじゃないかな？——ジェームズは人を棄てるような卑劣なこととはしない男だつて。あいつを信じて、嫌だなと思っても、ちよつとしたことは忘れてやってくれ。大丈夫、あいつはおまえさんを愛している。もうすぐ結婚だろう？二人とも幸せになるさ、申し分なく幸せにね。」

メアリーの表情が再び曇った。

「ジェイミーが帰ってもう三日になります、あの人一度も結婚のことを口にしないんです。それで

わたし、ああ、怖ろしいんです。どうしようもないんです。何か一言でも言ってくれたら。一言だけでいいです、——わたしを本当に愛していることが判るようなことを。あの人、わたしたちが婚約していることさえ忘れてるみたいで……。」

パーソンズ大佐は妻を見た。メアリーを慰めることを何か言っただけで、とその眼が懇願していた。パーソンズ夫人は落ち着かない不安な様子で視線を床に落とした。

「パーソンズさん、こんなことお話しして、軽蔑なさらないでくださいね。」

「軽蔑！ とんでもないわ。こんなにあなたを愛してるんですもの、どうして軽蔑なんか。あたしからジェイミーに話してみましようか？ あなたをいたたまれない気持ちにさせてるって分かったら、あの子の態度も変わるかも。本当に優しい心を持った子なのよ。これまでに酷いことをしたところなんて見たことないし、聞いたこともない。」

「ダメ、何も言わないでください。多分何でもありません。愛してるなんて無理に言わせたくないです。」

一方ジェームズは広々として肥沃なケントの田舎を物思いに沈んで彷徨っていた。低い丘が次々と現れ、土地はゆるやかに起伏を繰り返す。寒り豊かな畑と牧草地を楢や栗の木が取り囲んでいる。このいかにも「自然な風景」は、しかし、何代にも渡る裕福な地主たちによって、庭を手入れするように入念に手入れされてきたものだ。だから野性味や自由さは感じられなかった。人の手によって注意深くきちんと整えられた「自然」であることは明らかで、その型に嵌まっていること、古典派の画家

たちの類型的作品を思い起こさせる。が、そんな土地も今は新しい春の若い草花で新鮮だ。金鳳花が、夜の冷たさなど気にもならないのだろう、生気を与えてくれた昨夜の雨を喜んだように今は陽射しを楽しみ、此見よがしに咲いている。雛菊の上にはまだ雨粒が気持良さそうに残っている。蒲公英の丸い綿毛が微風に乗って漂ってゆく。まるで人生を象徴するかのようだ、——行き当たりばつたりの存在、微かな風の流れにも逆らえず、肥沃な土地に自らの種を撒き散らすことしか使命を持たない存在。来るべき夏に芽を出し、誰にも世話されることなく花を咲かせて自らを再生産し、そして死んでゆく存在。

ジェームズは今晚こそ必ず婚約を解消しようと心に決めた。もはや先送りはできない。日が経てば経つほど困難は増してゆく。結婚についての話し合いを避けることはこれ以上は不可能だ。単なる友達としてメアリーと付き合い続けることも不可能だろう。彼女が多くの良い性質を持っていることは分かっている。率直で、正直で、純朴だ。常に正しいことをしたいと願っているし、彼女なりに貧しい人々を助けようとしている。親切そのものと言っている。彼の両親に示してくれる愛情の籠もった優しさとその他諸々のことには心から感謝している。友人として、あるいは妹として見るなら申し分ない人だ。しかし愛してはいなかった。結婚のことを考えると胸が悪くなった。メアリーだって自分を本当に愛しているわけじゃない、——彼は声に出して言った。自分は愛がどんなものか知っている。あんな生気のない単なる好意、単なる敬意とは全く異なるものだ。メアリーが感じられるのはその程度のものに過ぎない。自分を愛しているというのは、彼女の目から見て、自分が幾つかの取り柄を持っているからだろう。社会的地位は見苦しくないものだし、礼儀作法もそれなりだし、倫理観に特に

論うところもないからなのだ。

「メアリーはいっそ十戒と結婚した方がいいんだ。」ジェームズは我慢ならないといった風にかん

自分を愛しているというのは習慣からであり、上流階級は斯くあるべしという信念からであり、家柄、年齢などいろいろな事情がうまく合っているからにすぎないのだ。しかしそれは愛ではない。ジェームズは軽蔑するように肩を竦めると、あの生温く心地よいが心乱されるところのない感情を表わす単語はないかと考えてみた。本物の愛に悩まされ、恐ろしい罪と格闘するようにそれと格闘し、最後には喉に噛みつき生き血を吸おうとする蛇を殺すようにそれを殺した経験を持つジェームズは、愛の何たるかを知っていた。それは血管の中で燃える火であり、痛苦の熱情であり、狂気であり、精神の錯乱なのだ。彼の知った愛は血と肉とを持つ愛だった。生命を生み出す愛であり、生命を殺す愛だ。その根底にはセックスがある。女が美しいのは男が女の肉体を愛するからだ。女の唇が赤く情熱的なのは男がそれにキスするためだ。女の髪が美しいのは男がそれを手に掬い取るためだ——砂金を川から掬い取るように。

ジェームズは立ち止まった。死んだはずの愛が甦り、猛獣のように内蔵を引き裂いた。彼は苦しみに喘いだ、そして苦い喜びに。ああ、あれこそが真の愛だったのだ！あの女にはあれが欠けている、これが欠けている、と言われたところで何を気にしたことがあつたらう？自分があの女を愛したのは、自分があの女を愛したからなのだ。女の欠点ゆえに愛したからなのだ。女が与えた苦悶にもかかわらず、彼は心の底から感謝していた。愛を教えてくれたからだ。女は数限りない苦痛を与えた。が、

同時に、それに耐える力も与えてくれたのだ。ひよっとしたら女は彼の人生を滅茶滅茶にしたのかも知れない。しかし人生生きるに値することも教えてくれたのだ。あの拷問に掛けられているような苦痛も絶望も、あの光を放つ熱情に比べたら何だったと言うのか。あの時自分は神々しく輝いていた。本当に生きていると言えるのは愛する者だけなのだ。愛する者の人生では全ての瞬間が激しく燃えている。ジェームズにとって最も貴重な思い出はあの狂ったような一月だった。その一月の間について彼は、眩しいばかりの色彩の中で回転しながら彼の若さを歌い、彼の喜びと一緒に笑っている世界を目にしたのだ。

その切なる思い、強烈な欲望に与えられてきた忌まわしい名前もジェームズは気にしなかった。俗世間の連中はそれを肉欲と呼び、その言葉を聞くと顔を赤らめるか顔を隠そうとする。異性にうつつを抜かすのは恥ずべきこと、好色は不名誉なものだと考えている。連中は解っていないのだ、——彼らにショックを与えるその欲望こそが全ての源泉であること、人間の持つ最高の属性は全てそこから生まれることを。肉体を不浄なものとしてしまったのは彼ら——生命の活動を真面に見ることを恐れる弱虫、老いぼれ、感傷的な連中なのだ。彼らは裸のアフロディテを彼ら自身の不浄の襪褌切れで覆ってしまった。古の偉大な愛の物語をむりやり書き替えて、クレオパトラを淑やかな女王に、ランスロットを道徳の鑑にしてしまった。ああ、母なる自然よ、我らに再び自由を与えてくれ！逞しい筋骨と活力を与えてくれ！それなくしては、我らは偽りの恥の中で死に絶えてしまうだろう。無花果の葉は我々が不謹慎であることを世界に示しているのだ。愛は安っぽい感傷ではない、子供を産むための神聖な炎なのだ、それを教えてくれ。肉体の名誉を穢さないよう教えてくれ。肉体は美しく、純

粹なものだ。そしてその為すところのものは全て甘美なものだ。もう一度言おう、——慈悲深い神よ、我らに教えてくれ、男は女のために作られていることを。男の肉体は女の肉体のために存在^{ある}ことを。そして肉が罪であるはずのないことを。

また、教会の勤めの中で喚^{おぼ}きすぎないよう教えてくれ。確かに我々は預言者、偉大な説教者を生んだ。が、時には鯁^{しやちほほ}張^はつた自分を笑い飛ばすことを忘れないよう教えてくれ。

やがて帰路についたジェームズの思いは昨夜の晩餐へと戻った。クリボン家に招かれたのは彼一人で、到着すると客間でメアリーとクリボン大佐の二人が待っていた。クリボン夫人は昔から、その方が効果的だと考えて、客人が揃うまでは姿を現さないことにしていたのだ。大佐のシャツの襟は途轍もなく高く、なにか顔が白く長い茎の上の奇妙な花のように見える。髪と眉毛は染め直したばかりで、油を付けたユダヤ娘の髪も敵^{かた}わないほどきらきら輝いている。宝石を嵌^はめた指輪といい、香水の匂うハンカチといい、まことにダンディーだ。氏の客人に対する扱いを特徴づけるのは親しみやすさと腰の低さの絶妙な組み合わせだったが、それが横に立つメアリーの気取らない純真さと奇妙な対照をなしていた。今日のメアリーは散歩の時好んで着る服ではなく夜^{イブニング}会服^{ドレス}を身につけて、いつもよりぎこちなく見える。自由で男のような身のこなしが絹のドレスと相^あ容^いれないのだろう。加えて、そのドレスの作りは田舎じみたもので、レースもリボンもひどく不^ふ恰^{かつ}好^{こう}だ。また、彼女は客間の雰^{ふん}圍^い気とも合っていないかった。客間の調度はいかにも流行の先端を行っていますよといった俗^ぶ悪^{あく}な趣味だ、——飾り布、保護カバーの薄紙、居心地の悪い小さな椅子、ぐらぐらするテーブル。そして至る所に

クリボン夫人の写真が置かれていた。あれこれの服に身を包んだ全身写真。座っている姿、立っている姿、ソファーに横になつての姿。上半身を撮った写真も、正面からのもの、斜め横からのもの、真横からのものと様々だ。真面目な表情、明るい表情、物思わしげな表情、美しい歯を見せて微笑んでいるもの、ふくよかな腕を見ているもの、広い肩を見せているもの。完璧にめかし込んだ写真、そして、大胆にもドレスを脱^だごうとしている写真。

衣擦れの音をたて、華やかな魅力満開、やっと佳^か人^{じん}が入ってきた。髪には白い粉が散らされている。確かに、かなりの器量好しだ。

「お待たせしなかつたわよね。」夫人が小声で言った。「もしそうなら自分が赦せなくなっちゃう。」ジェームズは礼に適^あつた返事をした。そして四人は食堂へ入った。食卓で話されたのは、夜遅くに食事をする上流階級の人々に当然期待される高級な話題ばかりだった。文学について——ということ、最新作の一つ前の小説のこと。美術について——ということ、王立美術協会のこと。社交界について——ということ、四輪馬車を所有している友人たちのことである。クリボン夫人はジェームズが自分に注意を払わないであろうことは勿論予想していた。メアリーのことばかり考えているに違いないからだ。そこで彼の注目を全面的に自分に向けさせようとし始めた。

「ジェイミー、退屈でしょう。死ぬほど退屈に違いないわね。」夫人は悲しげにそう言うと、残酷^{さくご}の上ない笑みをメアリーに向けた。「メアリー、あなたどうしてそんな野暮^{やぼ}つたいドレスを選んだの？ そんなもの誰かにあげちゃいなさいって何度も言ったのに。あなたったらあたしの言うことに全然耳を貸してくれないんだから。」

「あら、これで充分よ。」メアリーは自分が着ているドレスに目を落とし、ちよつと顔を赧らめて笑いながら言った。

クリボーン夫人は再びジェームズの方を向いた。

「女性が美しく装わないのはとてもない間違いだと思いませんか？ あたしはもうお婆ちゃんだけど、いつも見苦しくない姿を見せるように努めてる。レジーはあたしが野暮ったい服装をしてるとこんなに見たことないと思うけど、どう、レジー？」

「どんなドレスでもおまえさんには似合うよ、クララ。」

「あら、レジー、そんなことジェイミーの前で言わないで。将来のお母さんを老人って見なしてるに違いないんだから。」

そして食事が済むと、

「レジー、食後のワインに時間を掛けすぎないでね。」と釘を刺した。「楽しませてくれる人がメアリーしかないんじゃないじゃ、退屈しちゃうわ。」

クリボーン夫人は、小さかった頃はそれなりに娘が好きだった。その必要があれば追い払ったが、時にはペットのよう可愛がったものだ。しかし娘が大きくなり自分の意思を示すようになると、たまたまなく迷惑な存在だと思ふようになった。娘は良心というものを発達させ、ちよつとくらい可愛い嘘を吐いたらどうかと言うと、猛然それを拒否する。母親の願いよりも自分の善悪感を優先する。それが、不埒とは言わないまでも、従順さに欠けると思われるのだ。夫人が何より入れ込んである芝居見物も、芝居は不道德なものだと主張して一緒に出かけるのを拒む。それはほとんど生意気と言つて

もよかつた。さらに、小さな誤魔化しや狡猾な言い逃れは全てお見通しのように、夫人が何か取分け狡いことを陰で目論んでいる時など、遠慮なくそれを非難する。そしてもう一つの不満の種は、メアリーが母親の美貌を受け継いでいないことだった。今や自分の美貌も衰えつつあることを自覚している夫人は、虚栄心も手伝つて、自分の顔に表われる新しい皺の一本一本を娘が密かな喜びを持って観察していることを疑わなかつた。しかし夫人は娘を少しばかり怖れてもいた。あのよう到我慢強く、穏やかな人間を打ち負かすのは容易なことではない。だから夫人が娘を鼻であしらうのは、娘の自尊心を懲らしめてやろうというばかりでなく、自分自身を安心させるためでもあつたのだ。

女性たちが食堂を下がると、大佐はジェームズに安物の葉巻を寄越した。

「さて、特別なワインを飲ませてやることにするか。」

そう言つて彼は赤ワインを注意深くグラスに注ぎ、誇らしそうにそれをジェームズに手渡した。ジェームズはメアリーが語つた医者との話を思い出した。そしてワインを味わい、医者に同情した。病人がワインを飲んでも元気が出るわけではないのは別に驚くべきことでもない。

「どうだ、良いワインだろう？ 何年も地下室で寝かしておいたんだ。」大佐はグラスを揺すつて香りをかいだ。「古い友人のセイント・オルファーツ公爵から貰つたんだ。『レジー、』公爵は私をそう呼ぶんだが、『レジー、良いポートワインがあるんだ。いらんかね？』『良いポートワインだつて、ビル！』公爵の洗札名はウィリアムだが、私はいつもビルと呼んでいたんだな。『是非とも頂戴したいもんだね、ビル。』『そうか。なら、かなりあるから、ちよつと分けてやるよ、』というわけさ。」

「ワイン商だつたんですね？」ジェームズは尋ねた。

「ワイン商！ きみきみ、セイント・オルファーツ公爵！ 公爵だよ。オーストリアの貴族から倉ごと買い上げたんだ。だから余分が沢山あったんだ。」

「で、これがその内の一本というわけですね？」ジェームズは陰気な色をした液体を明かりにかざして見つめながら、真面目な顔をして訊いた。

大佐は足を投げ出すと、戦争の話をはじめた。ジェームズは戦争の話にはうんざりしていたから話題を変えようとしてみたが、無駄だった。クリボン大佐は経験者であるジェームズに、南アフリカでの戦闘はいかに為されるべきだったか、自説を語りたくてしうがなかったのだ。ジェームズは全くくだらないお喋りを、驚歎と憤怒の入り交じった気持で聞いているしかなかった。一生の間軍務につきながら、戦闘についての初歩すら解っていない男がいるのは驚きだった。しかし口を閉じているという術を身に付けていたジェームズは、喋りたいだけ喋らせておいた。するとそれが報われ、戦術の話は終わった。が、何かがこの勇ましい騎兵に古い逸話を思い出させたらしく、今度は、過去三十年駐屯地から駐屯地へと重い足を引き摺ってゆく間に溜め込んだ、面白くも何ともない逸話を次から次へと披露してくれた。そうなれば話が若かりし頃の女遊びへと進むのは自然の成行きである。大佐が女誑しであったことは明らかだった。もう疾うに忘れ去られた、七十年代活躍の踊り子とは大抵知合いで、数々のきわどい思ひ出話をいかにも楽しそうに喋りまくった。

「なあ、きみ、当時は皆んな道楽をしたものさ。ここだけの話だが、私は結婚する前はかなり遊び人だったんだ。」

二人は客間へ戻った。クリボン夫人はソファアに座っていたが、ジェームズを見て退屈そうな笑顔を浮かべると、自分の隣に座るよう促した。数分すると、いつも通り大佐は目を閉じ頭を垂れて気持良さそうに眠りに落ちた。クリボン夫人はゆっくりとメアリーの方に軀を向けた。

「眼鏡を取ってきてくれない？」夫人は声を落として言った。「お裁縫箱の中か、朝の間のテーブルの上にあると思う。そこになかったら、お父さんの書斎かな。ジェイミーに手紙を一つ読んであげたいの。」

「探してみる。」

そう言つてメアリーが出て行くと、夫人はジェームズの腕に手を置いて、

「ねえ、ジェイミー、あなたあたしがそんなに嫌いなのか？」と優しく囁いた。

「とんでもない！」

「あなたのお母さんはあたしが好きじゃないみたい。」

「そんなこと！ 大好きですよ。」

「あたし女性には好かれれないのよ、何故か分からないけど。でも、どうしようもないでしょ？——あたしが……器量好しだからって。神様の思し召しなんだから。」

なら、神は紅と白粉と懇意に違いない、これは新発見だ。ジェームズはそう思った。

「ねえ、知ってる？ あたし、あなたがメアリーと婚約しないようにって、精一杯努力したのよ。」

「あなたが？」雷に打たれたようにジェームズは叫んだ。「全然知りませんでした。」

「自分の口で話しておいた方がいいと思つたの。怒つちやダメよ、あなたのためを思つてやったことなんだから。うまく行つてれば、婚約しないで済んだんだけど。あなたはまだ若すぎると思つた

の。」

「五年前……のことですよ？　つまり、あなたが努力なさったのは。」

「あなたはほんの子供、とつても良い子だった。ジェイミー、あたしいつもあなたのことが好きだったのよ、心配してたの。それに、永すぎる春って良くないわ。あなたの気持もその間に変わっちゃうだろうって思った。若い男の人って気紛れだから。でも、それでいいのよ。若い人はそうでなくちゃいけないのよ。」

ジェームズは突然、夫人は知っているのだろうか、あるいは何かを見抜いているのだろうか、そう思っただけの顔をまじまじと見た。そんなことはあり得ない。この馬鹿な夫人に判るはずがない。

「賢明なお考えですね。」

「あら、そんなことないわ。」夫人は満更でもないといった風に低く笑った。「何だか中年の小母さんみたいに聞こえるわね……。メアリーはあなたと歳が近すぎる、いつもそう思ってたの。お嫁さんはお嫁さんより十ばかり若い方がいいのよ。」

「で、その努力の結果は？　全部話してください。」

「皆んなあたしの言うことなんか聞いてくれなかった。是非婚約しておくべきだって言うのよ。その方があなたのために好いって、——あなたの道徳のために。あたしは断然反対だった。若い男の子って、余計なものに縛られてない方が好いのよ。つまり、道徳なんかには。」

その時メアリーが戻ってきた。

「ママ、どこにも見つからなかった。」

「そう。気にしないで。」クリボン夫人は優しく微笑んだ。「あつ、そうだ、思い出した。昨日タンプリッジウェルズへ修理に送ったんだっけ。」

「ジェームズはその日の午後ジャクソン夫人が牧師館で開くお茶の会でメアリーに会うと分かっていた。リトルプリンプトンの社交界は排他的で、結果、同じ人たちが毎日々々顔を合わすことになる。ときたま現れる侵入者と言えば、タンブリッジウェルズからのこれまた素性卑しからぬ客人くらいのものだった。名士というのは謂わば室内の苗床で大切に育まれる植物のはずなのだが、それが当節では戸外でも蔓延るようになってしまった。どんな悪条件の下でも逞しく生い茂り、至る所で見られる針金雀児のように、風が強ければ強いほど、霜が冷たければ冷たいほど、ますます誇らしげに頭を擡げる。しかし今日の集まりはリトルプリンプトンの隣人に限られていて、パーソンズ家の人たちが到着した時には、牧師夫妻の他にはクリボン家の三人と、当然のことながら副牧師の姿があるだけだった。お決まりの長々しい握手、出席者全員 of 健康状態に関する質問、天気の話題などがあって、一同は席に座り、最近の出来事について話し始めた。

「ドライランドさん、あの本どうも有難う。」メアリーが言った。「とつても面白いわ。」

「きつとお気に召すと思えましたよ。」副牧師は穏やかに微笑んだ。「あなたが私同様ミス・コレツリ(注4)を高く評価していることは知っていましたから。」

「ドライランドさんが『誠のキリスト教徒』を貸してくださったんです。」メアリーがジャクソン夫人の方を見て説明した。

「わたしも次に読もうと思つてたんですよ。」

リトルプリンプトンには十二人から成るクラブがあつて、年の初めにそれぞれが六シリングの本を一冊ずつ購入し、一定期間の後それを次の人に回すことにしていた。そうすることで皆が現代文学の傑作十二冊を一年間で読めることになるわけだ。

「すぐに買いたいと思つたんです。」とドライランド氏。「マリー・コレツリの本は誰もが持つておくべきだと思いますね。今イギリスで真に偉大な小説家は彼女しかいないでしょう。」

ドライランド氏は趣味は高踏、文学に関しては権威者と見なされていたから、誰もが氏の評価を当てにしていた。

「もちろんわたしは文学に詳しいなんて言うつもりはありません。」メアリーが謙遜して言った。「人生には文学より大切なこともありますし。でも彼女は素晴らしい、本当にそう思います。大抵の小説は読んでいて時間の無駄じゃないかと思うんですけど、マリー・コレツリの作品でそう思ったことは一度もありませんわ。」

「女性が書いたものとは誰も思わんだろうな」と牧師。

これに対して副牧師は、「天才に性別はありません。」と答えた。

副牧師以外の人たちは学者ではなかったからフランス語がよく解らなかつたが、解つたような顔をしていた。

「新聞がコレツリの本について嘲笑するような書き方するのは情けないって、いつも思ってるんです。」とジャクソン夫人。「それで、理由は女だからってことだけでしょ。」

「それに天才だからさ。」ジャクソン氏が割って入った。「度量の小さい連中がいるんだよ。偉大なものを見ると、自分を大きく見せたくて、馬鹿にしたがる。まったく、軽蔑すべき連中だ。太陽を見るためには驚の目を持っていくちゃならんのだよ（注5）。」

牧師の発言に、一同満足そうな表情で互いを見合った。と言うのはこの場に集う優れた人々は、恐れを知らぬ鳥類の王のように、輝く恒星を真面に見ることができたからだ。

「批評家なんてのは金のためなら何でもやる。ミス・コレツリ自身言ってたが、連中は結託して彼女を貶めようとしてるんだ。そうに違いないね。彼女に化けの皮を剥がされるのが怖いんだ。」

「それに、大抵の批評家は小説家としてはモノにならなかつた連中ですからね。」とドライランド氏。「嫉妬心でいっぱいなんですよ。」

「本当に腹が立って腹が立って。」とメアリーが声を高めた。「人間にあんな卑しいことができるのかと思うと。ミス・コレツリの悪口を言う人たちは、あの人の靴紐を解く資格もありませんわ。」

「そういう心からの讃辞を聞く嬉しくなりますね。」副牧師が顔を輝かせた。「でも、天才は常に迫害されてきたということをお忘れなきよう。キーツやシェリーをご覧なさい。批評家連はキーツもシェリーも悪し様に言った。シェイクスピアだつて中傷を受けました。しかし時間が我が沙翁の汚名を晴らしてくれた。我がマリー嬢もきつとそのうち正しく評価されますよ。」

「一体ここにハムレットを欠伸しないで読み通せる人は何人いるかな。」牧師が考え深げに言った。

「仰しやるとおり。」ドライランド氏が目を大きく見開いて叫んだ。「それに対して『悪魔の悲しみ』なら一気呵成に読める。私はもう三回も読みましたが、読めば読めば驚かされます。ミス・コレツリは疾うに御自身の手で復讐を遂げていますよ。批評家連の負け犬の遠吠えなど何を気にすることがあります。不滅の花輪がすでに額に冠せられているのですから。私は躊躇わずにそう言えますし、自分の見解を恥ずかしいとは思いません。ミス・コレツリはあらゆる点でウィリアム・シェイクスピアと同じくらい偉大な作家です。彼女の作品は子細に検討してきましたので、良ろしければ自説を申し述べてみたいのですが、私の考えでは、その機知、滑稽味、言葉の選択、どれを取っても沙翁に引けを取りません。」

「彼女の文章は本当に美しいわ。」とジャクソン夫人。「ミス・コレツリの本を読んできると、何だか賛美歌を聴いているような気がする。」

「それに沙翁の作品のどこに、」と副牧師が声を高めて続けた。「『誠のキリスト教徒』に描かれたようなあんな多種多様な人物が描かれているでしょう?」

「それにもうひとつ忘れちゃならないことがある。」牧師が厳粛な面持ちで言った。「彼女の作品には深い宗教性を感じられる。それはシェイクスピアには見られないものだ。彼女のどの作品を取つても崇高な道德的目的がある。それがあつて初めて創作は正当化されるんじゃないかな。小説家というのは、まあ、自覚できればの話だが、高い使命を担っているんだ。小説家は読者に繰り返し教え込むことができる、——權威に従うことや、希望や博愛や、素直な心の大切さ、そういうあらゆる美德をね。つまり、教会の僕になれるんだ。現代のように、宗教心や道德心に欠ける懷疑主義が蔓延つてい

る時代においては、大衆と神様との媒介となってくれる謙虚な作家というのは大切な存在なんだよ。」

「あなたの言うとおりですわ」とジャクソン夫人。

「もし小説家が皆んなマリー・コレツリのようななら、私は喜んで小説家すべてに手を差し伸べるね。」

『盗賊バラバ』はキリスト教徒なら誰もが読むべき作品だ。キリストについて全く新しい視点を提供している。福音書に記された出来事を誰も考えもしなかったようなやり方で処理していて、あんな感銘を受けたのは生まれて初めてだったよ。」

「でも、『盗賊バラバ』だけじゃありませんわ。」マアリーが言った。「ミス・コレツリのどの本を読んでも、自分がより善く、より高貴に、より真のキリスト教徒になっていくような気がします。」

「コレツリは下品で冒瀆的だと思うわ。」クリボン夫人が至極当然の観察結果を報告するように小声で言った。

「ママ！」マアリーは大変なショックを受けた。他の人々も憤りと嫌悪感に少し体を動かした。

クリボン夫人が場を弁えずこころした無教養な発言をして娘に恥ずかしい思いをさせるのはしよつちゆうだったが、何よりうんざりするの、夫人に自分が途方もなく愚かなことを言っているという自覚がまるで無いことだった。クリボン夫人は自信たっぷり続けた。

「あたしは一冊も読み通せなかった。電気の話が出てくる本があったけど、全然解らなかった。他のみんな同じ。どんな話か忘れちゃったけど、薔薇を敷いたベッドが出てくる本があって、イヤらしかった。マアリーに読ませたいとは思わないわ。でも、まあ、最近の若い女性ほどどんな本でも読んじ

やうから。」

一同苦々しげに口を閉じてしまった。それは誰かがおそろしく淫らな発言をした時自然と生まれるような沈黙で、皆困惑の表情で互いの顔を見やっていた。ただマアリーだけは母の品の無さを恥ずかしく思っ、視線を絨毯に落としたままだった。しかしクリボン夫人の愚行はお馴染みのものだったから、やがて、やれやれまたかと憤りも収まり、お喋りが再開された。救出に乗り出したのは副牧師だった。彼は大きく咳払いすると、

「パーソンズ大尉、マリー・コレツリはよくご存知ですよね？」と訊いた。

「一冊も読んだことがないような気がしません。」

「一冊も？」皆が驚愕して叫んだ。

「では何冊かプリンプトンハウスにお送りしましょう、」とドライランド氏。「私は全作品を所有していますから。マリー・コレツリを読まずして教育の完成はありません。」

これはクリボン夫人への見事な当て擦りだ、——上品な人々はそう考え、微笑みを浮かべて意味ありげな視線を交わした。マアリーでさえ真面目な表情を保っておくのが難しかった。

その時軽食が運ばれ、大体は静かな雰囲気の中でお茶の時間は進んでいった。当世風にお喋りをしながらのクリボン夫人以外は、皆当り前のこととして黙って食事をとったからだ。カップを手にしたまま皿を揺らすことなくケーキを食べるといふ芸当はどうしてなかなか難しい。一時に一つの動作、それで充分なのであって、同時に生き活きた会話を交わすことはない、そう考えているのだ。が、どうにかカップが全て無事テーブルの上に戻されると、ジャクソン夫人が少し音楽を楽しみましょう

と提案した。

「メアリー、あなたから始めてくれる？」

副牧師がミス・クリボーンのところへ行ってお辞儀をすると、慇懃に腕を差し出し、ピアノの前に導いた。賢明にも自宅から楽譜を持参してあったメアリーは、メンデルスゾーンの『無言歌』の中の一曲を演奏し始めた。彼女はリトルプリンプトンではピアノの名手と見なされていて、その弾きっぷりは真面目で豪快なものだった。これ以外にやり方はないといった猛烈な打鍵、押しっぱなしのラウドペダル。一音も見逃すまいと一心に楽譜を見つめ、正確に拍子を取ろうと唇を動かしながら弾く姿には、社会的責務を果たそうとする熱いものが感じられた。一音も間違えることなくメアリーが弾き終えると、大きな拍手があった。

「いやー、クラシック音楽に勝るものではありませんね。」副牧師が熱を込めて叫んだ。

メアリーはちよつと息を切らしていた。というのは、ピアノ演奏であれ何であれ、彼女は力一杯、徹底してやるからだ。「これ、本当に大好きな曲なんです。」

『無言歌集』はどれも美しいね。」ピアノの反対側に立っていたパーソンズ大佐が言った。

「メンデルスゾーンは一番好きな作曲家なんです。」メアリーが答えた。「精神性に溢れますわ。」

「そう、」ドライランド氏が小声で言った。「彼の音楽の全てに心臓の鼓動が聞こえるようです。ユダヤ人だったのが不思議ですね。」

「あら、でもイエス様もユダヤ人じゃなかったかしら？」とメアリー。

「いや、そうでしたね。ついつい忘れがちで。」

メアリーは楽譜のページを捲ってお得意の曲を選ぶと再び弾き始めた。皆満足そうにその演奏を聴いていた。メアリーの断固とした打鍵には彼女の性格がよく表われているように感じられる。素朴で、率直で、気取りがなく、しつかり嗜み^{たしな}を弁^{わきま}えた打鍵。その演奏姿には彼女の全ての行動を生き活きとさせている高い目的意識が見て取れる。純粹で、健全で、徹底的にイギリス的な姿。そして演奏全体が教訓のようでもあった、——人生は軽々に捉えるべきものではなく、辛い努力の連続である。世界は戦場であり（取分けこのことが感じられるのは、彼女が何十小節の間ペダルから足を離すのを忘れた時だ）、人にはそれぞれ果たすべき使命と義務があり、それを全うしなくてはいけない。彼女の演奏を聴く者は皆改めてそのことを思わずにはいられない。

一方ジェームズはクリボーン夫人と会話を交わそうと努めていた。

「メアリー上手ですね。」

「そう思う？　あたしは素人の演奏には耐えられないの。いつそ弾かないでいてくれたらって思うわ。」

ジェームズは驚いて夫人を見た。自分の知る中で一番の馬鹿な女が、今日聞いた中で唯一理に適ったことを言うとは！　それに、忘れてならないのは、夫人は彼がメアリーと婚約するのを止めようことができるだけのことをしたのだ。

「あなたは素晴らしい人ですね。」ジェームズは言った。

「まあ、ジェイミーったら！」

クリボーン夫人は微笑み、溜息を吐いて、手をジェームズの膝の上に滑らせた。が、ジェームズは

自分の思考に没頭していて、その動きに気づかず、夫人の手を取ることはなかった。

「本当にあたしのが好きなのね。」と夫人は囁き、恋する鳩のように喉を鳴らした。

その時ジェームズに何か歌ってくれとリクエストがあった。彼は断った。

「お願い、ジェイミー！」メアリーが笑顔で頼んだ。「わたしのために、ね。前はよく歌ってくれたわ。とつても上手だった。」

ジェームズはそれでも拒んだが、皆がどうしても催促するので、嫌々ながらピアノのところへ行った。下手くそな歌だった。加えて、自分でも下手だと解っているから尚更のこと、無理強いされたことに苛立った。ドライランド氏も歌は上手くなかったが、自分の歌声に満足しているらしく、順番が来ると、いそいそと歌い始めた。氏のお得意は古いイギリス民謡で、『死者たちを後に残して』という愉快な歌を、いかにも聖職者らしく、声を限りに轟かせた。

パーティーの最後は食堂へ戻つての玉突き遊びだった。バガテルというのは全く単純なゲームで、プレーヤーは鼻で笑つて始めるのだが、いざボールが尻でもない穴に入らないと急に怒り出す、そんなゲームだ。メアリーはバガテルの達人で、何をどうすべきか嬉々としてジェームズに教授してくれた。彼女は副牧師と相談して組合せを決め、誰に対しても遠慮なくアドヴァイスした。どうやら二人が全てを取り仕切っているようだ。ただ一人クリボン夫人だけは明け透けに、こんなくだらぬ時間潰しはないと言つて、ゲームに参加しようとしなかった。

が、どうとうパーティーもお開きとなり、皆互いに別れの挨拶を交わした。

「メアリー、もしよければ家まで送るよ。」ジェームズが言った。「で、一服させてもらいたいな。」

メアリーの顔が嬉しそうに輝いた。パーソンズ大佐が笑みを浮かべて、良かったねといった風に彼女に頷いた。やつと機会が訪れた、ジェームズはそう思った。メアリーが楽譜を集めたりして帰り支度をする間彼はぶらぶらしていたが、なかなか支度が終わらないので、今度はパイプに火を付けて待った。その結果、やつと二人が牧師館の門を後にした時には、もう他の人たちの姿は全く見えなくなつていた。外は暗く陰鬱だった。平らな空を小さなごつごつした黒雲が、なにか未亡人のたつぷりした喪服が引き裂かれ、風に吹き飛ばされてるように流れてゆく。空気は冷たくなっていった。暖かい気候に慣れているジェームズはちよつと身震いした。田園が痙攣し、縮こまつたように見える。辺りが暗くなるにつれて、高い木々も生け垣も色彩を失つてゆき、ひどく気が滅入る。二人は黙って歩いた。ジェームズは言葉を探していた。どう自分の気持を表わしたら良いのか、彼はそのやり方を今日一日中考えていたのだが、混乱し疲れ切った頭は助けを拒んでいた。メアリーの家まではどんなにゆつくり歩いても五分だ。時間は滑るように過ぎてゆく。もし何かを言うつもりなら、すぐに言わなくてはいけない。なのに、どう切り出し、どう本題へ進めるか、それが浮かんでこない。ジェームズは口が渴いて、物理的にも言葉を発することができそうもなかった。さらに、この沈黙を破らなくてはならないこと自体が苦しかった。

が、メアリーが最初に口を利いてくれた。

「ねえ、ジェイミー、わたしちよつと心配してたの。」

「なぜ？」

「昨日あなたの気持を傷つけちゃったんじゃないかって。憶えてるでしょ？——患者の家を訪ねた時、

わたし……言い方がかなりきつかったと思う。そんなつもりはなかったのよ。ごめんなさい。」
「忘れてたな。」ジェームズはメアリーを見て言った。「気を悪くするようなこと？ 何にも憶えてないよ。」

「そう言ってくれて嬉しい。」彼女は微笑んだ。「でも、謝って気が楽になった。ねえ、わたしがあ

ることを言ったら、馬鹿だと思う？」

「そんなことないさ。」
「わたし言っておきたいの、——もしわたしがあなたが嫌だなんて思うことや、賛成できないなんて思うことをしたら、遠慮なくそう言っ

てほしいの。」
こう言われた後すぐに、もう彼女を愛していない、だから婚約を解消して自由にしてほしいなどと、どうして言えよう。

「きみは僕をたいそう恐い人間だと思ってるみたいだね。」

メアリーの言葉で婚約解消の話は持ち出せなくなりました。また一日が経ってしまいました。自分の弱さだ。

「どうしたらいいんだ？」ジェームズは声には出さず、唇だけを動かしてそう言った。「俺は何て臆病者なんだ。」

クリボン家の玄関に着くと、メアリーはさよならを言うためにジェームズの方を向いた。そして頬笑み、顔を赧らめて軀を前に傾けた。ジェームズは急いで彼女にキスをした。

*

*

*

その晩、ジェームズは食堂の暖炉の脇に腰掛け、心を占めるただ一つの問題について考えていた。他のことは何も考えられなかった。パーソンズ大佐夫妻はテーブルでバックギャモンに興じている。

これは夫妻が夕食と就寝前の祈りとの間の時間つぶしに好んでやるゲームだった。賽子の音が、夢の中にいるように、ぼんやりとジェームズの耳に届く。なにか目に見えぬ力が自分の運命を決めるために賽を振っているのではないか、そんな空想がふと心に浮かんだ。彼は両手を頬に当て、炎を見つめていた。見つめていればそこにこの苦境を解決する方法が見つかるのではあるまいか……。しかし炎は、彼を嘲るように、ウォーレイス夫人の姿、愛撫するような澄んだ眸を映し出す。彼は我慢ならぬといった風に炎から目を逸らした。丁度その時ゲームが終わった。パーソンズ夫人は息子の表情を捉えて、

「何を考えているの、ジェイミー？」と尋ねた。

「僕？」ジェームズは素早く顔を上げた。秘密を察知されてしまったのだろうか。「何も。」

パーソンズ夫人はバックギャモンの盤を片付けると、もうこれ以上息子に話さないでおくことはできないと覚悟を極めた。というのは夫人も内気な性格で、心に掛かってやまない問題は、実は一番話したくない問題だったからだ。

「ジェイミー、いつ結婚するつもりでいるの？」

ジェームズはびくつとした。

「ねえ、母さんは昨日も同じことを訊きましたよ。」彼はこれを冗談で済ませようとした。「何としても僕を追い出したいみたいですね。」

「あなた、メアリーをちょっと不幸にしてるって、そう考えたことある？」

ジェームズは立ち上がり、マントルピースに寄りかかると片手を頬に当てた。

「もしそうだとしたら申し訳ありません。」

「もう帰って四日なのに、あなたがメアリーを愛してるって判るような言葉は一言もないわ。」

「感情を言葉にするのが苦手なんです。」

「私が言ったとおりだろう！」大佐が得意そうな表情で言った。

「あの子に、一言でも二言でも、愛してるってことが判るような言葉を言ってあげられないの？」母は続けた。「メアリーは本当にあなたが大好きなのよ、ジェイミー。あたしはあなたたちのプライベートなことに干渉したくはないけど、あなたが思い遣りに欠けてるってことは確かだわ。あなただってメアリーを惨めな気持ちにさせたくはないでしょ？ かわいそうに、あの子は家ではとっても不幸なのよ。ちょっとした愛情に飢えてるのよ。お願い、結婚について何か言ってあげて。」

「そう言ってくれてメアリーに頼まれたんですか？」

「違うわ。メアリーはそんなこと絶対にする子じゃない。あたしが何か言たって考えただけで嫌に思う子なんだから。」

ジェームズは暫し無言だった。

「母さん、明日メアリーに話すよ。」

「それがいい！」大佐が陽気に言った。「午前中はずっと家にいるはずだ。クリボーン大佐夫妻はタンプリッジウェルズへ出掛けることになっている。」

「それはいい機会かも。」

翌朝、パーソンズ夫人が玄関ホールで花瓶に花を生けていると、ジェームズが帽子を取りに来た。

「メアリーのところへ行くの？」

「うん。」

「それがいいわ。」

夫人は息子がいつも以上に真面目な表情であることにも、唇が青褪めていることにも、瞳が心痛に
寒れ輝きがないことにも気づかなかった。

雨が降っていた。新緑の若葉も色彩のない大気の中で活力を失い、楡の巨木も霧に霞んでいる。空
は陰鬱な色合いで、人間が描いたものようだ。気が滅入る侘びしさ、無限の哀しみを表わす命を持
たぬ色合い。

クリボン家に着いた。

「お嬢様は客間にいらっしゃいます。」召使はジェームズを公認の恋人として、押しつけがましい笑
顔で迎えた。

客間に入ると、メアリーはピアノに向かって熱心に音階スケールを練習していた。頭には風雨で傷んだ麦藁

帽がある。これを被っていないと落ち着かないらしい。

「来てくれたのね、ありがとう。」メアリーはジェームズに躰かたを向けた。「今日は一人きりだから、
思い切り練習できるの。」そう言って回転椅子を廻すと、再び片方の手で半音階和音の練習を続けた
が、その間もジェームズが来てくれたことが嬉しくてたまらないといった笑顔を浮かべていた。「散
歩に行く？ わたし雨はちつとも気にならないわ。」

「よかったら、ここにいたいんだけど。」

ジェームズは座ってペーパーナイフを弄り始めた。まだ何をどう言ったら良いのか分からないでい
た。相反する二つの感情に引き裂かれていたのだ。今日こそは絶対に話さなくてはいけない、が、そ
れがメアリーに与えずにはおかない苦痛には耐えられない。ジェームズは優しい心の持主で、これま
でにどんな生き物に対しても意識的に痛みを与えたことはなかった。そんなことをするくらいなら自
分自身を傷つけただろう。

「リトルプリンプトンに帰ってからですと、二人きりで話したいと思ってたんだ。」

「そう？ なら、どうしてそう言ってくれなかったの？」

「僕の言いたいことはかなりややこしいことだから。それに、メアリー、僕たち二人に、とても……
とても苦しみを与えることになるから。」

「どういうこと？」

メアリーは突然真剣な表情になった。ジェームズはそれを見て躊躇ためらった。しかし今は躊躇っている
余裕はない。言おうと思っっていることを何とか最後まで言ってしまうなければならない。ただその打

撃をできるだけ柔らかなものにするよう努めることだ。彼は立ち上がると、マントルピースに寄り掛かってペーパーナイフを弄った。メアリーもピアノから離れてテーブルの前の椅子に座った。

「メアリー、僕らが婚約してから五年以上経つよね？」

「ええ。」

彼女はジェームズをしっかりと見つめている。彼は視線を外して下を向いた。

「メアリー、僕はきみが僕のためにしてくれたことに感謝している。きみが僕の両親にどんなに尽くしてくれたかも知っている。きみがいなかったら二人がどうなっていたか分からない。」

「ジェイミー、わたし、お二人をとっても愛してるの、自分の親と同じくらいに。だから本当の子供のように振舞おうって努めてきた。」

ジェームズは暫く黙っていたが、やがて、

「婚約した時、僕らは二人ともとても若かった。」と口を開いた。

そう言っつて顔を上げたが、メアリーは答えず、怯えた表情で彼を見つめている。既に理解してしまったのか？ 思っつた以上に苦しい試練だった。ここで止めて今言っつてしまったことを撤回できないものだろうか、彼は必死の思いで自問した。飲み干さねばならぬ杯はあまりに苦しい。しかし他にどうすることができよう？ 自分の感じていることを隠して、愛情の真似事をし続けることはできない。これからずつと詐りの人生を送ることはできない。自分の前に途は一つしかない、彼はそう感じていた。今すぐ手術しなければ死に至る病を持つ病人のように、自分は全てに耐えなければならぬのだ。どんなに苦しかろうとも。

「きみはとても親切だった。僕のためにあらゆることをしてくれて、辛抱強く僕を待っていてくれた。いろんな意味で自分を犠牲にしてくれた。だからきみを不幸にしなくちゃならないのは恩を仇で返すようで居たたまれないんだけど……。ああ、きみに感謝してないなんて思わないでほしい。いくら感謝しても感謝しきれない、本当にそう思っつてる。」

ジェームズはメアリーが何か言っつてくれることを願っつた、何か言っつて助けてくれることを。しかし彼女は床に視線を落とし、何も言わなかつた。その顔はまったく無表情に見える。

「僕はどうすべきなのか、昼も夜も自分に問いかけてきた。けれどどうしたら良いのか分からないんだ。もつと前にきみに話すべきだったんだけど、怖くてできなかった。きみらは僕が勇敢な人間だと思っつてる。でも違う。僕は惨めな臆病者なんだ。時には自分が厭で厭で、自己嫌悪に陥入ることもある。僕は自分の義務を果たしたいと思っつる。でも、その義務が一体何なのか分からないんだ。自分がどちらへ進むべきか分かりさえすれば何とか進んでいけると思っつるんだけど、その道がまったく見えないんだ。」

ジェームズは哀願するようにメアリーを見た。が、メアリーは彼を見ていなかった。その視線は今も床に釘付けになっている。

「メアリー、僕は……、何もかもきみに話した方が良いと思っつる。——なんだかひどく堅苦しい言い方だね。自分が演技してるとみたいなき感じだよ、下種な男の役をね。でも他にどんなやり方があるのか分からないんだ。ああ、神様！」

「あなたがもうわたしを愛してないことはほとんど初めから分かつた。」メアリーが小声で言っつた。

が、最後には嘔きに近かった。顔には何の表情も浮んでいない。

「ごめん、メアリー。きみを愛そうとはしたんだ。……ああ、なんて非道い言い方なんだ。僕は自分が言っていることが分かってない。どうか理解してほしい、——もし僕の言葉がきつくて不快に聞こえるとしたら、それはどう表現したら良いか分からないからなんだ。でも何もかも話さなくちゃならない。大事なのはきみに対して正直であることだ。それが、きみがこれまでしてくれたことに対して、僕にできる唯一のことだから。」

メアリーは頭をさらに深く垂れた。大粒の涙が頬を伝っている。

「ああ、メアリー、泣かないで。」ジェームズの声は掠れていった。彼は一歩進み出ると、メアリーを宥めようとするかのように腕を差し出した。

「ごめんなさい、泣いたりして。」

メアリーはハンカチを取り出し、涙を拭いて頬笑もうとした。その勇気ある自制心にジェームズは心臓にナイフを突き刺されたように感じた。

「僕は全く下種野郎だ！」彼は噎れた声で言った。

メアリーは何の反応も示さなかった。ただ軀を硬くしてじっと座っている。感情を隠そうとするのではなくそれを乗り越えようと一心に努力している、それがはっきり見て取れた。

「本当に申し訳ない、メアリー。どうか赦してほしい。……僕は婚約を解消してほしいと頼んでるわけじゃない。ただ僕がどんな気持なのか正直に話したいだけなんだ。あとはきみが決めてほしい。」

「あなたは……誰か他に愛する人がいるの？」

「それはない。」

ウォーレイス夫人の軽蔑するような笑みが脳裡に浮かんだが、ジェームズは歯を食いしばった。俺はあの女を憎んでいる、軽蔑している。あの女を愛するなんてあり得ない。

「わたしに何かあなたの気に入らないところがあるの？ わたしはそれを直せないの？」

メアリーが自分を卑下している姿は見るに忍びなかった。

「そんなこと、絶対ない！ どうやらきみを納得させることは到底できそうもないな。きみはただ僕のことを碌でもない非道い奴だっと思って考えてくれれば良い。きみは男が女性に望む全てを持っているよ。優しく、親切だし、善良だ。良き女性が持っているべきものは何もかも持っている。僕はきみを心から尊敬している。深い感謝と好意を感じている。そう感じないではいけないんだよ、きみは。」
そう言ったものの、ジェームズの耳には全ての言葉が空虚でどこちなく、生意気にさえ聞こえていた。今は何を言っても醜悪なほど傲慢にしか響かないだろう。しかし彼は自分を卑しい男にしたかった。メアリーの自己卑下がどんなに悲痛なものであるか分かっていたからだ。

「きみをひどく傷つけているようだね。でも、きみを傷つけないで済む言い方が思いつかないんだ。」

「あなたがわたしを愛してないことは分かった。感じてたわ。五分も話してれば、あなたが窮屈そうにすることはわたしにだって判る、そう思うでしょ？ 皆んなはわたしのことを馬鹿だ、現実が見えてないって言うけど、そんなに馬鹿じゃないわ。」

「ほんとにきみを傷つけちゃったみたいだね。」

メアリーは答えなかった。ジェームズは彼女に対する憐れみと、己に対する後悔の念を感じながらメアリーを見つめていた。が、やがて熱っぽく語り始めた。

「僕は自分の愛情を支配できないんだ。愛っていうのは自由自在に制御できるようなものじゃない。もし自由に制御できるなら、きみにこんな苦痛を与えようと思う？ 愛っていうのは計算できないものなんだ。すべてが想定外なんだよ。愛は飼い慣らせる、犬のように鎖を付けてどこへでも連れて行けるって考えてる人がいる。愛っていうのは優しい感情で、礼儀だとか慎みだとかそうしたものを考慮して、それに従わせることができるって言う人がいる。ああ、分かっちゃいないんだ。愛っていうのは狂気なんだよ。それに捉まったらどうしようもないんだ。風に吹き飛ばされる葉っぱみたいなものさ。愛を偽ることは僕にはできない。愛情を持つている風をすることはできない。躰の神経組織を制御することはできないんだ。」

「わたしには愛がどんなものか理解できないって、そう思うの、ジェームズ？ わたしのことがちつとも分かってないわね。」

ジェームズは椅子に身を沈め、顔を隠した。

「僕らはだれもお互いを理解していない。皆んな似ているけれど、でもとても違ってるんだ。僕は自分のことさえ分かってない。僕は一生懸命きみを愛そうとした、——そう言ったらなんて独善的な男だって思うかもしれないけれど、本当なんだ。もし五年前の気持ちに戻れるんなら、僕は全てを擲っても構わない。でもできないんだ。ああ、神様……メアリー、きつと僕を軽蔑するだろうね、憎んでるだろうね。」

「軽蔑？ 憎む？」メアリーは悲しそうに首を振った。「そんなこと絶対ない。わたしは何もかも隠さず話してほしいの。お互いを理解しようとするのが何より大切だと思うの。」

「僕もそう思った。隠し事があるままきみと結婚するのは誠実じゃないと思った。僕らが幸せになれるかどうかは分からない。ただ本当の気持ちを話すしかないと思った。」

メアリーは悲しみに打ち拉がれ、力なくジェームズを見た。

「こうなることは分かってたわ。毎日毎日こうなることを恐れてた。」

メアリーの眸に浮かぶ苦悩の表情に、ジェームズは居たたまれない思いだった。こんな苦しみを与えるとは何と残酷なことか。自分にはこれ以上はできない。メアリーが可哀想でならなかった。その時ある考えが浮かんだ。この困難を和らげる方法があるかもしれない。ジェームズは暫し躊躇った後、視線を床に落として低い声で話し始めた。

「僕は自分の義務を果たしたいと心から願っている。僕はきみに結婚の約束をした。その約束を破りたくはない。だから婚約を解消してほしいとは言わない。ただ僕に差し出せるものだけで満足してほしいんだ。僕は良い夫になるように努める。きみが幸せになれるようにできるだけのことをする。僕はきみに好意を持っているし、信頼している。だから友達のような夫婦にはなれる。だけど愛情は持てないと思う。このことは先に言っておいた方が良いと思う。後で判って苦しむよりは……、遅すぎたと感じるよりは。」

「あなたは婚約を解消したくてここに来たんでしょ？ なら、なぜ今更躊躇うの？ わたしがいやだっと思うと思うの？」

ジェームズは何も言えなかった。

「あなただって、わたしがそんな中途半端な申し出を受け入れるとは思わないはずよ。わたしが女からそんなこと言うの？ 女には血も肉もないって思うわけ？ あなたは隠し事はしたくない、本当の気持ちを話したいって言ったでしょ？」

「ごめん。今言ったことはたった今思いついたんだ。」

「それでわたしの苦しみを和らげられるだろうって思ったわけ？ 立場としての妻にはしてやる、でも本当の意味での妻ではない。そんな状態でわたしがあなたと一緒にいられると思って？ いくら好意を持ってくれたって、妻にしてくれたって、愛がなければそんな何の意味もないわ。ジェームズ、あなたはわたしを可哀想だと思ってるだけなのよ。だから家政婦として雇ってやろう、法律的には妻にしてやろうって言うてるだけなのよ。」

「ごめん。そんな風に考えるとと思わなかった。非道い言い方だったね。憤らす気はなかったんだ。ただ、今の難しい状況を打開する一つの方法として頭に浮かんだだけなんだ。何にしても、この家でこのまま暮らし続けるよりは幸せになれると思うんだ。」

「あなたもわたしを蔑んでるわけね。」

「メアリー！」

「わたしは痛みには耐えられません。同情してもらっても必要なんてない、屈辱を受けるのは何もこれが初めてじゃないんだから。騒ぎ立てるようなことじゃないわ。よくあることよ。あなたはわたしを愛してると思って結婚を申し込んだ。あの時あなたが本当にわたしを愛してたのかどうか、わたしには分

からない。でも今は愛してない、それは確かだわ。だから婚約を解消してくれって……。わたしはいやだとは言えないし、言うつもりもない。それはあなたも分かっている。」

「どうしたら良いか、僕には分からないんだ、メアリー。」ジェームズの声は囁かれていた。「ああ、神様、どうしたら良いんだ。きみにとって残酷すぎる。」

「わたしは耐えられません。それにあなたを非難するつもりもないわ。あなたが悪いんじゃないんだもの。きつと神様がわたしに力を与えてくださいます。」メアリーは母が残酷に自分に同情する姿を想像した。両親が皆んなから、ジェームズは飽きた玩具を棄てるようにメアリーを棄てた、と言われる姿を想像した。「神様がきつと力を与えてくれる。」

「メアリー、本当に申し訳ない。」ジェームズは彼女の横に跪いた。「きみが苦しまなくちゃならぬのに、僕は何もしてあげられない。」

「できることは一つだけ。皆んなに本当のことを話して、あとは言いたいように言わせておく、それしかないでしょう。」

「僕はプリンプトンを出てった方が良いんだろうか？」

「なぜ？」

「そうすればきみにとって少しは楽になるかと思って。」

「何をしたらって楽になるなんてことはないわ。でもわたしは耐えてみせます。それに、あなたがここを出てったら、皆んなはあなたが何か恥ずかしいことをして身を隠したって思うでしょう。そんなの嫌なの。それに、ご両親はあなたを必要としている。ああ、ジェイミー、二人には優しくしてやって。」

できるだけ優しくしてやって、お願い。二人はとつても……がっかりすると思うから。」

「父さんも母さんも僕らの結婚を望んでた。」

「とつても悲しむでしょうね。でもしょうがないわ。何にしても、愛のない結婚よりはましよ。」

自分自身苦い悲しみの中でありながら、メアリーは他の人の痛みに思いを馳せることができるのか。ジェームズは深く心を打たれた。

「ああ、僕にきみの勇気があったら！ メアリー、きみのように強い人は見たことない。」

「有難いことに、わたしにも長所は幾つかあるのよ。あなたに愛してもらえる力はないけど。でも、それを埋め合わせてくれるものはあってもいいでしょ？」

「ああ、メアリー、そんな言い方しないで！ 僕は本当にきみが大好きなんだ。僕がこんなに純粋に、心から好きな人は他にいない。だから、僕が与えられるものだけで満足してくれないか？ きみは今僕がどんな人間かよく分かっているはずだ。弱い人間。でも、正しいことをしようと願っている。ねえ、僕たちどうして結婚しちや駄目なの？ ひよつとしたら、いろんなことが変わっていくかもしれない。時間が経てば何が起こるか誰にも分からないだろう？」

「できないわ。あなたはわたしに力以上のものを求めている。それにあなたがそんなことを言うのはお情けからよ。それはよく分かっている。わたしは、たとえあなたからだって、お情けは受けないの。」

「僕が心から願っているのはきみを幸せにすることなんだ。」

「で、そのために喜んで自分を犠牲にするって言うのね。でもわたしだって自分を犠牲にできるのよ。あなたは、結婚すればそのうち愛も生まれるって考えてる。でも、そんなこと有り得ない。もしわた

しと結婚したら、あなたいつもわたしから非難されてるって感じるわ。それでわたしを憎むようになる。」

「そんなこと絶対ないよ。」

「どうして分かるの？ わたしたち同い年よね。でも毎年毎年わたしは老けていく。四十になったらわたしはもう小母ちゃんよ。だけどあなたはまだまだ若い。深い愛情がなかったらこの違いは耐えられないわ。でも愛するのはわたしだけ、……もしその時にもあなたを愛していればの話だけ。きつとわたしは気難しい厭味な女になってるでしょうね。ああ、ジェイミー、結婚なんて有り得ないわ。それはあなたにも分かっている。きっぱり別れましょう。そして婚約はご破算にしましょう。わたしに愛情を感じないのはあなたの責任じゃない。あなたを責めない。時間が経てばどんなことでも乗り越えられるわ、そうでしょ？ だからお願い、わたしのことであんまり悩まないで。なにもこれで死んじゃうわけじゃないんだから。」

メアリーが手を差し出し、ジェームズはその手を取ったが、目は霞み、言葉は出なかった。

「あなたに感謝してる。」メアリーは続けた。「ここに来て何もかも正直に話してくれたこと。まだわたしを信頼してくれてるって分かって嬉しかった。この先あなたに辛く当たるなんて心配、全然しなくていいわよ。あなたが苦しんだことは分かる。もしかしたら、わたしが苦しんだ以上に苦しかったんでしょね。じゃあ、さようなら。」

「僕にできることは何もないの、メアリー？」

「何も。」メアリーは微笑もうとした。「心配しないでってことだけ。」

「じゃあ、さようなら。できたら、僕のことあまり悪く思わないでほしいんだけど。」

メアリーは何か言ったら泣き出しそうで、ジェームズが出て行くまで黙ったまま立っていた。が、姿が見えなくなると、もう抑えておけず、呻き声を上げて床に蹲り、手で顔を覆って泣き出した。なにか自制心を粉々にする肉体的苦痛を味わっているようで、叫びたい気持だった。胸が締め付けられ、涙に噎ぶが、それを止めようとはしなかった。完全に打ちのめされていた。

「ああ、なぜ？ なぜなの？」メアリーは声を上げた。「ジェイミー、どうしてこんなことを！」

夢見ていた幸せは完全に消えていた。これまで彼女は人生の喜びをジェームズとの暮らしの中に見出していたのだった、様々な嫌なことに耐えてゆく力も。ジェームズが傍にいて協力してくれない生活など考えたこともなかった。彼女の未来はジェームズの未来と分かちがたく混り合っていた。しかし今、これまでは明るく輝いていた将来の年月が、突然輝きを持たぬ憂鬱な空と同じ灰色に変わってしまった。リトルプリンプトンでの生活はかつてと同じ単調で退屈なものとなるだろう。ちよつとばかり義務を果たし、ちよつとばかり苛々し、ちよつとばかり喜びを感じる、そんな侘びしいものとなるだろう。

「ああ、神様、助けて！」

メアリーは力なく跪くと、この悲しい重荷に耐える力をお与えくださいと神に祈った。しっかりと耐えてゆく勇氣と、これは神様の御意思なのだと思える諦念を。

救われたという思いは全くなかった。ジェームズは、専制君主下の奴隷状態から逃れて再び清々しい大気を思うがままに呼吸する、そんな圧倒的な自由を期待していたのだ。メアリーから解放された瞬間、悪魔払いに悪霊を追い出してもらったように、鬱々とした気持も消えてなくなるだろう、そう思っていた。しかし反対だった。憂鬱はさらに重くのしかかった。彼は自分がやったことが正しかったのか未だ確信が持てず、メアリーとの会話を一語一語振り返って見たが、およそ満足のゆくものとは思われなかった。彼のつもりでは、気まぐれとか浮ついた気持から婚約を解消したのではないこと、メアリーが苦しむのは重々承知しているし、自分も悲しく不本意であることを伝えたかった。しかし言えたのは陳腐なことばかりで、全てが徒労だったように思われる。

ジェームズはプリンプトンハウスへ向かってゆつくりと歩いた。まだこれから父と母にメアリーとのことを報せなければならない。彼は考えを纏めようとした。

家事を終えたパーソンズ夫人はいつものように靴下を編み、大佐はテーブルに向かって新しく手に入れた切手をアルバムに整理していた。時々妻に質問をぶついたり、寄付金付きの切手を見せながら楽しそうにお宝について蘊蓄を披露するのだが、そうすると、善なる人パーソンズ夫人は夫に調子を

合わせて興味を示す。

「このあいだニュースミス将軍がコレクションを見せてくださったけど、リッチモンド、あなたものほどじゃなかったわ。」

「そりや嬉しいね。ただモーリシャスの切手は素晴しかったろう？」大佐はちよつと羨ましそうに言った。将軍はモーリシャスに数年間派遣されていたのだ。

「ええ、綺麗だったわよ。でも思ったほどじゃなかったわ。」夫人は夫を安心させるように答えた。

「良い切手コレクターになるには頭がいるんだ。もちろん、こんなこと他^{ひと}人には言わんがね。」

ジェームズが入ってきて、二人は顔を上げた。

「おまえが持ってきてくれたオレンジ自由州の切手を整理していたんだ。良い切手だ。」大佐は反り返って切手を眺めた。その顔には古い巨匠の絵画を検分する人のような、悦に入った表情が浮かんでいる。

「切手を持ち帰ってくれるなんて、ジェイミーも気がつくわね。」とパーソンズ夫人。

「なに、分かってたさ、この年寄のことは忘れないだろうってね。フランシス、『あの子はきつと何枚か切手を持ち帰る』って、私がそう言ったのを憶えているだろう？ この切手も一、二年すれば価値が出る。切手とはそういうものさ。金の無駄遣いにはならん、いつもそう言ってるんだ。例えば宝石だが、宝石蒐集は今じゃ流行遅れだ。陶磁器？——あれは割れることがある。しかし切手は安心だ。切手を買うのはコンソル公債（注6）に投資するのと同じさ、そう思わんかね？」

「それで、メアリーはどんな様子だった？」

「色々話しました。」

「で、日取りが決まったんだな？」分かっているんだよ、という表情で大佐がちよつと笑った。

「いいえ。」

「やれやれ。フランシス、私らで決めてやらなくちゃならんようだぞ。昔はそんなじゃなかった。いか、ジェイミー、母さんと私はクロケット（注7）のパーティーで紹介されて六週間後には結婚したんだ。」

「あたしたち、ちよつと慌てたかもね、リッチモンド？」パーソンズ夫人は笑った。

「で、後悔する時を待っているわけだ、もう三十年以上も。」

「今さら後悔しても遅いわ、そうでしょ？」（注8）

大佐は妻の手を取ると優しく叩いた。

「ジェイミー、おまえも私のように良い嫁を手に入れば、何の不平不満もないだろうよ。そうだろう、フランシス？」

「それはあたしには何とも言えないわ、リッチモンド。」満足そうな笑みを浮かべて夫人が答えた。

「父さん、そんなに僕に結婚してほしいんですか？」

「もちろん。ずっとそう思ってきた。死ぬ前にパーソンズ家の次の世代の顔を拝みたいからな。」

「リッチモンド、ジェイミーは何か話があるのよ。聞いてあげて。」

パーソンズ夫人は先刻から息子の様子を眺めていたのだが、この時初めてその苦しそうな表情に気付いたのだった。

「何なの、ジェイミー？」夫人は尋ねた。

「きつとすぐぐがっかりすると思う。申し訳ないけど……、僕ら婚約を解消したんです。」

暫し部屋は沈黙に包まれた。年老いた大佐は当惑して妻から息子へ、息子から妻へと視線を移していた。

「フランシス、ジェイミーは何を言ってるんだ？」

パーソンズ夫人が答えなかったので、大佐はジェームズの方を向いた。

「本気じゃないんだろう？ からかつてるんだろう？」

ジェームズは父の方が母よりも精神的に弱いことを知っていた。だから父に近づき、その肩に腕を回した。

「父さん、悲しませてごめん。でも本当なんです、あいにくなことに。僕はメアリーとは結婚できない。」

「ジェイミー、メアリーは五年も待っていてくれたのよ。なのに婚約を解消するって言うの？」

「他にどうしようもないんです。メアリーを愛していません。気が付いたらそうなった。もし結婚したら二人とも不幸になっていたでしょう。」

大佐は徐々に平静を取り戻し、振り向いて息子を見た。

「ジェイミー、おまえ、何てことをしたんだ。」

「父さんが言いたいことは、僕も自分に向かって何遍も言ってきました。僕がこのことを軽く考えていると思う？ でも、僕はメアリーを友達としてしか感じられない。愛しているとは言えないんです。」

す。」

「しかし……」と言いかけて大佐は止めた。そして顔を輝かせて笑い始めた。「こりや痴話喧嘩だよ、フランシス。何かちよつと諍いさかいがあったんだ。で、二度と口を利いてやらないとか何とか、まあ、そんなところだな。もう二人とも後悔しているさ。今夜になれば婚約復活。うん、これまでに以上に愛し合っている。」

ジェームズは何か言ってくれるよう母に視線を送った。夫人はその視線の意味を理解し、悲しそうに首を振ると、

「違いわ、リッチモンド、そういうことじゃない。辛いけど、この子は真面目よ。」

「しかし、フランシス、メアリーはこれを愛しているんだぞ。」

「それは分かっています。」ジェームズが言った。「そこが一番辛いところなんです。メアリーは僕を愛していないって、もしそう思えたら何でもないんですが。」

パーソンズ大佐はがっくりと椅子に沈み込んでしまった。躰しほが萎しぼんだようで、これまでになく小さく、弱々しく見えた。禿はげを隠かくしていた髪が見苦しく顔に掛かっている。その顔にはもはや習性となつてしまったあの不安の表情が張り付いている。

「ああ、父さん、そんな顔しないで！ どうしようもないんです。だからこれ以上辛い気持ちにさせないで。母さん、父さんに説明してやって、——僕が悪いんじゃないって。僕はこうするしかなかったんです。」

パーソンズ大佐は頭うきを垂れたまま黙っていたが、パーソンズ夫人は、

「メアリーには何て言ったの？」と訊いた。

「僕が感じてるとおりに。」

「あの子を愛していないって？」

「ええ。そう言うしかなかった。」

「ああ、かわいそうに！」

暫くの間三人とも黙ったままそれぞれの思いに耽っていた。が、やがて、

「リッチモンド」とパーソンズ夫人が話し始めた。「この子を責めてはいけないわ。この子が悪いんじゃない。メアリーを愛していないとしても、それは、どうしようもないことなのよ。」

「父さん、愛していないのに結婚させるなんてこと、しないでしょ？」

これに答えたのはパーソンズ夫人だった。

「ええ。愛していないなら結婚しちやいけないわ。でも、どうしたらいいの？ かわいそう。かわいそうに、メアリーどんなに辛いことか！」

ジェームズは両手で顔を覆って座っていた。大きな混乱の輪を引き起こしてしまったことが解り始め、ひどく惨めな気持だった。パーソンズ夫人はそんな息子と夫とに視線を送っていたが、やがてジェームズに近づくと、

「ジェイミー、ちよつと席を外してくれる？ お父さんと二人だけで話したいの。」

「うん。」

ジェームズは立ち上がった。夫人は息子の両肩に手を置いてキスをした。

ジェームズが出て行くと、夫人は同情の眼差しを夫に送った。大佐は顔を上げ、夫人の視線に気づいて微笑もうとした。が、それは虚しい試みで、溜息だけが漏れた。

「リッチモンド、どうしたら良いと思う？」

パーソンズ大佐は何も答えず、首を振るだけだった。

「何か起こるかもしれないってあなたに言っておくべきだった。わたし、ジェームズの気持が変化していることには気づいてたの。だけど、そのうち元に戻るだろうって、単なる気のせいだろうって信じてた。メアリーはあの子をとつても愛しているから、あの子もすぐに前みたいにメアリーを愛するようになるだろうって、そう思ってたの。」

「しかし、フランシス、あいつのやったことは恥ずべきことだ。」やつと大佐が口を開いたが、感情を抑えきれず、声は震えていた。「恥ずべきことだ。」

「でも、愛してないなら仕方ないわ。」

「メアリーと結婚するのがあいつの義務だ。五年も待っていてくれたんだ。青春の一番良い時を捧げてくれたんだ。それを棄てるなんて！ そんなことはできないはずだ。なあ、フランシス、あいつは紳士らしく振舞わなくちやいけないんだ。」

心痛に疲れたパーソンズ夫人の頬を、微かにゆつくりと涙が流れた。長い間悲しみに耐えてきた女性の涙だった。

「あの子を裁くのはよしませよ、リッチモンド。あたしたち世間のことはよく分かってないんだから。あたしたちの考えはもう古いのかもしれないのよ。」

「誠実に古いも新しいもない。」

「ウィリアムに来てもらったらどうかしら。あの人なら何か良いアドヴァイスをくれるかもしれないわ。」

パーソンズ夫人の弟ウィリアム・フォーサイス少佐は、ロンドンに暮らす独身者で、親類一同から世故に長けた男だと考えられていた。

「弟ならわたしたちより上手にあの子に話してくれると思う。」

「分かった。じゃあウィリアムに来てもらうことにしよう。」

二人とも婚約解消という事態の激変に打ちのめされていたが、しかしその全貌を把握しているわけではなかった。二人の希望は未だこの結婚を中心に回っていたし、二人の将来の計画はこの結婚の中に複雑に編み込まれていたから、その破壊の凄まじさが理解できないでいたのだ。言ってみれば、二人は突然の事故によって手足に重傷を負いながら、それでもなお自分は自由に五体を使えると思いつている人だった。パーソンズ夫人は電文を認めて女中に渡した。女中は部屋を出て行ったが、ドアを閉め終える前に再びそれを開けると、

「奥様、ミス・クリボン様です。」と告げた。

「メアリー！」

メアリーが入ってきて、ヴェールを取った。顔色の悪さと、泣いたために腫れて充血した眼を隠すために被っていたのだ。

「ちよっとお邪魔してお話しした方が良いと思っただけです。もうお聞きですよね？」

「メアリー、メアリー！」

パーソンズ夫人は彼女を抱きしめ、優しくキスした。メアリーは無理に笑顔をつくると、再び溢れ出した涙を急いで拭いた。

「小母さま、泣いていらつしやっただけですか。いけません……。さあ、座ってください。落ち着いて話しましょう。」

次にメアリーは大佐の手を取り、優しく握った。

「本当なのかね、メアリー？」大佐が言った。「信じられん。」

「ええ、本当です。最終的に、わたしたち、お互い結婚を望んでいないという結論に達しました。それで、ジェイミーのことを悪く取らないでほしいとお願いに来たんです。あの人この件でとても……傷ついています。あの人が悪いんじゃないやありません。」

「あたしたちが心配していたのはあなたのことなのよ。」

「わたしなら大丈夫です。耐えられます。」

「あいつのやったことは恥ずべきことだ。」大佐が言った。

「どうかそんなこと仰しやらずに、お願いです。急いでここに来たのもそのためなんです。ジェイミーは自分が正しいと思ったことをした、そうお考えになってほしいんです。どうかあの人を悪く取らないで、わたしのために。わたしを愛せないからといって、それはしょうがないことなんです。わたしあんまり魅力的じゃないし……。きつとインドでわたしなんかよりずっと素敵な女性をたくさん知っただけです。どうして五年も引き留めておけますか？ できると考えたわたしが馬鹿でした。」

「メアリー、本当にごめんなさい。」パーソンズ夫人が声を高めた。「あたしたち心からこの結婚を楽しみにしてたのよ。ねえ、あの子はそれは良い息子だった。心配を掛けたことなんて一度もない。あなたと結婚してほしかった。心から願ってた。あたしたちあなたが大好きだし、本当に良い人だって分かっているから。これからどんなことが起こっても——あたしたちが死んだ後でも——ジェイミーはあなたと一緒に心配ない、幸せでいられるって、そう感じてたの。」

「でも仕方ありませんわ。思い通りになることなんて滅多にないんですから。だから、どうかあまり悲しまないでください。それに、お願いです、ジェイミーのやったことは間違っている、そうお考えになっているのが分かっちゃもうようなことはなさないでください。」

「どうしてそんな風にあの子のことを考えてくれるの？ だって、あなたこそ、いま胸が張り裂けそうなんじゃない？」

「ねえ、小母さま、わたし何年もジェイミーのことを思ってきました。」メアリーは寂しそうな笑顔で浮かべて答えた。「でも、もうどうしようもありません。わたしあの人に苦しんでほしくない。苦しんだって良いことはありません。ジェイミーには本当の幸せを手に入れてほしいんです。」

パーソンズ大佐が溜息を吐いた。

「あれは私の息子だ。あれがこんな恥ずかしいことをするとは！」

「そんなこと仰しやらずに。ジェイミーがかわいそうです。あの方が婚約を解消してくれて頼んだんじゃありません。わたしを愛していないことが分かって、わたしの方がジェイミーとは結婚できないって思ってたんです。」

「時間を掛ければ、あなたを愛するようになったかもしれないわ。」パーソンズ夫人が言った。

「そんなことあり得ません。わたしが婚約は解消しましたよって言っても、ジェイミーは結婚しようと思った。でも、わたし分かったんです、——あの人を全身がどうか断つてくれますように願っているの。もし結婚したら、わたしを憎むようになったでしょう。もうお終い（まわい）です。元には戻せません。わたしたち永久に別れたんです。わたしこの試練を乗り越えるように精一杯努力します。だから、どうかご心配なさらないで。」

三人は黙り込んでしまった。やがてメアリーが立ち上がった。

「もう帰ります。ママに話さなくちゃならないし。」

「きつとヒステリーを起こすでしょうね。」パーソンズ夫人がちよつと軽蔑するように言った。

「きつと喜びますよ。」メアリーが応じた。「ママのことはよく分かっています。」

「ああ、メアリー、あなたがどんなに辛い目に遭うかと思うと……。」

「良い勉強になりますわ。これまでが幸せすぎたんです。」

「伝えるのをちよつと待てんのかな？」大佐が言った。「フオーサイス少佐が来ることになっている。上手く取りなしてくれるかもしれん。世間をよく知っている男だから。」

「少佐ならジェイミーを説得できる、わたしを愛するようにさせられるって言うんですか？ あり得ません。時間の無駄です。わたしがその気になっているうちに全部済ませてしまうのが一番です。それに、何かしなくちゃならないって考えている間は、余計なこと悩むこともないし。ちよつと鼻で笑われて、嘘の同情を受ければそれで済みますから。」

「大いに同情してくれるさ、心からね。」

「人間って、知合いに何か不幸が訪れると喜ぶものなんです。あら、そんなつもりじゃ……。ごめんなさい。邪慳じょうけんなことを言うつもりはなかったんです。どうかわたしのことも悪く思わないでください。明日になれば別の人間になってますから。」

「あたしたち、あなたに対しては、本当に心から愛してるっていう思いしかないのよ。」

その時、ジェームズが部屋に入ってきたが、メアリーが来ていることは知らなかったもので、その姿を見て驚き、顔を赤らめた。しかしメアリーは覚悟を決めると、女性特有の沈着さで、

「あら、ジェイミー、ご両親とちよつとお話ししてたところなの。」と言った。

「そう。邪魔して悪かったね。」ジェームズの方はぎこちなかった。「きみがいるなんて知らなかったんだ。」

「婚約を解消したからって、何もわたしを避けることないわ。とにかくわたしを怖がる理由はありませんから。じゃあ、さようなら。ちよつど家に帰るところだったの。」

メアリーは出て行った。ジェームズはどうしたら良いのか分からず、両親を見た。父は床に目を落としたまま何も言わなかったが、母は、

「メアリーはあなたに腹を立てないでって言いに来てくれたの。あなたが悪いんじゃないって。」

「優しいんだ。」

「ああ、でもどうして？ どうしてなの？」

昼食がほぼ終わろうとした時、メアリーはさらなる試練に立ち向かう覚悟を決め、午前中何があつたかを、冷静に、落ち着いた声で両親に語った。往年の美貌の衰え隠しようもないクリボン夫人は、ちよつと頬笑んで、感じやすい下士官たちの心を虜こわにしてやまなかった表情でシヤンデリアを見上げた。

「こうなるだろうと思ってた。」夫人は言った。「分かったのよ。お母さんを騙だますことはできないの。あたしも女ですものね。」

しかしクリボン大佐は暫し言葉が出なかった。顔面は紅潮し、染めた眉毛が怒りに逆立っている。「あり得ん。」やつと口角沫くかくあわを飛ばして言った。

「お水でも飲んだら、レジー？ あなた引付けでも起こしそよよ。」

「何を言つとる！」大佐はテーブルを叩いて叫んだ。チーズの皿ががたがたと揺れ、ビスケットが踊った。「あいつをおまえと結婚させる。えつ、あいつ、わしを誰だと思つとるんだ！ 大体だな、この結婚には最初から反対だったんだ。そうだろう、クララ、えつ？ 身分が下の男と結婚するなど許さんと言つたんだ。」

「パパ！」

「話し掛けんでくれ、メアリー！ あいつは歩兵にすぎん。親父だってそうだ。おまえだって分かるだろう。しかしわしはあいつをおまえと結婚させる。首根っこを引つ捕まえて祭壇の前へ引き摺っていつても、おまえと結婚させる。」

チーズには目もくれず椅子から飛び上がると、大佐は食堂の中を行ったり来たりし、ジェームズとその父親、彼らの祖先について、これでもかとはかり自説を展開した。どの連隊に所属していたかを始めとして、そもそもは豚の屠殺業者であったこと等々、知る限りのことを述べ立て、どうせ碌な死に方はしないと予言した。そして時々メアリーに、心配することはない、あの悪党はおまえと結婚させる、さなければ打ち殺してやると息巻いた。

「でも、パパ、もう何も言ってくれなくて良いのよ。わたしたち、友好的に別れることにしたんだから。だからジェームズに対して何もなかったように振舞ってほしいだけ。」

「鞭で打つ叩いてやる。おまえを侮辱したんだ。土下座して謝らせてやる。クララ、鞭はどこだ？」

「パパ、冷静になって！」

「わしは冷静だ。」勇猛な兵士は怒鳴った。顔は紫色になっている。「有難いことに、わしは何が自分の義務か分かつとる。だから、その義務を果たすまでだ。娘が侮辱されたら、その男を鞭で引つ叩くのが、紳士として、将校としての義務だ。あの藪医者がおまえに無礼な振舞をした時、わしは死ぬほど打ちのめしてやった。あいつが命だけはお助けをと言うまで蹴っ飛ばしてやった。もつと沢山の男がわしのように自分の手で制裁を加えてやる気概を持てば、悪党の数はずんと減るんだ。」

実際は、大佐は医者を殴りもしなければ蹴りもしなかった。ただそう考えることで喜んでいたのである。何かをしようと意図することは褒めるべきことである、実際に乱暴な行為をするよりは、——道徳家たちはそう教えている。したがって、この恐れを知らぬ騎兵が、やろうとは考えたが、自分はどうしようもない諸般の事情により、やらなかったことについて、その功を認めたとしても異存はあるまい。

メアリーは父の恐ろしい脅しにも全く不安は感じなかった。父という人間が解っていたからである。しかし母についてはまだ疑っていた。

「ママ、前と同じように振舞ってくれるわよね？」

クリボーン夫人は微笑んだ。太った天使のような笑顔だった。

「メアリー、大丈夫よ。あたしはエチケツトを弁えてますからね。」

「あいつには二度と我が家の敷居を跨がせん！」大佐が叫んだ。「いいか、クララ、あいつがわしの前に姿をあらわさんように気をつける。あいつに会ったら、何があっても責任は持たんからな。叩きのめしてやる。」

「レジー、あなた落ち着いて。また胃の具合が悪くなるわよ。食事が終わって昂奮するといつもそうなんだから。」

「恩知らずめ！ 餓鬼の頃にくれてやった小遣いのことを忘れたのか。えっ、大きくなってからは葉巻だってワインだつてくれてやっただろう。一昨日だつて取って置きのワインを一本開けてやったんだ。二度とあいつとは食事はせん、いいか、クララ、忘れるな。まったく、けしからん！ 生意気な

若造だ！　しかし、おまえとは結婚させる、メアリー。さもなけりや、何故なのか、理由を吐かせてやる。」

「約束を守らないからって、裁判に掛けることはできないわ、レジー。」クリボン夫人が甘い声で言った。

「いいか、紳士たる者、こうしたことは自分の手で制裁を加えてやるんだ。剣を使って決着を付けた、あの昔が懐かしいよ。」

そう言って、大佐は自分の言葉を補強するように、剣を使つての果し合いの姿勢を取った。左手を頭の後ろに立て、右手で相手に思いざま突きを食らわす、あの姿勢だ。

「メアリー、眼鏡を取ってきてくれる？」クリボン夫人が娘の方を向いて言った。「裁縫箱の中か、お父さんの書齋にあると思う。」

メアリーは部屋を離れられて嬉しかった。大佐はますます怒りに燃え、床を踏み鳴らしてフェンシングの稽古をし、時々パンとチーズを口に入れている。メアリーに眼鏡を取ってくるよう頼んだのは、娘を追い出すためのクリボン夫人のいつもの口実だった。うっかりしない限り、夫人は何事も正直にはしない人なのだ。ドアが閉じられると、豊富な肉体を持った夫人は両手を握り合わせて声を上げた。

「レジナルド！　レジナルド！　あなたに打ち明けなくちゃならないことがあるの。」

「どうかしたのか？」大佐は稽古を中断した。

「この件については、あたしに責任があるの。」夫人は上を向くと、今の場合それが天の代わりとな

る唯一のものである天井を見つめた。「ジェームズ・パーソンズがメアリーを棄てたのは……あたしのためなの。」

「一体、おまえ、今度は何をしたって言うんだ？」

「ああ、赦して、レジナルド！」そう叫ぶと、夫人は椅子を離れ、床にドスツと膝をついた。「あたしが悪いんじゃないの。でも、ジェイミーはあたしを愛してるの。」

「馬鹿馬鹿しい！」大佐は怒ってそう言うと、稽古を再開した。

「嘘じゃないわ、レジナルド。嘘を言ってると思うなんて、ひどい。」

もつともらしい涙が夫人の白粉を塗りたくった頬を流れ始めた。

「あの子はあたしを愛してる。それは分かっているの。女と母親を騙すことはできないのよ。」

「おまえはあいつより二十五も歳が多いんだぞ。」

「あのくらしい青年は自分より年上の女性に恋するものなのよ。何度も目にしてきたわ。それに、あの子の言葉をよく聞いてれば、あたしを愛してることはすぐ分かる。もちろん、あたしの方から仕向けたことはなかったけど。」

「馬鹿馬鹿しい！」

「信じないでしょうけど、あのアルジー・ターナーは、かわいそうに、あたしに恋して自殺したのよ。」

「違うね。あいつはコレラで死んだんだ。」

「レジナルド！」夫人がきつく遣り返した。「あの子の死には謎が多いの。どのお医者さまもはつき

りした死因が分からなかった。もし毒を飲んだんじゃなかったら、失恋が原因よ。あたしを信じてくれないなんて、ひどいわ。」

夫人は立ち上がろうとしたが肥満ゆえ大変そうで、よっこらしよと何とか無事立ち上がった時には花巨頭鯨のように喘いでいた。

大佐は話が横道に逸れていたことに気づいて、今やるべき義務を思い出した。

「クララ、馬の鞭はどこにある？ 持ってきてくれ。」

「レジナルド、もしあたしへの愛が欠片でも残ってるなら、あのかわいそうな青年を傷つけるなんてなさらないでしょう？ アルジー・ターナーは自殺しちゃったのよ。ジェームズがメアリーと結婚したくないからって責められないわ。メアリーは、かわいそうだけど、美人じゃない。男の人ってそうしたことがとても気になるのよ。」

大佐は大股で部屋を出て行った。夫人は椅子に座って考えに耽った。

「あたしの時代は終わったと思ってたけど、」夫人は呟いた。「あたしには最初から分かった。ジェイミーがあたしを見つめる時の目、あれで充分。あたしたち女にはすぐ分かるのよ。かわいそうに、どんなに苦しんでることか。」

夫人はジェイミーに酷なことは言うまいと決めた。酷なことを言って、恋人に棄てられて死を選んだアルジー・ターナーのような気持に追い込んではいけない。あの子はまだ若いのだ。夫人は溜息を吐いた。何てあたしは呪われてるんだろう、神様がこんな恐ろしい贈り物を下さるなんて！ 美貌という贈り物を。

*

*

*

リトルプリンプトンはこのニュースに沸き立った。なるほど、婚約解消を知って悲しんだし道徳的見地から憤慨もしたが、同時に、変り映えのしない日々の暮らしの中では滅多にお目にかかれない魅力的な話題に、村は騒然とし、興奮を抑えられなかった。内情をよく知る人々は生き生きとした表情で、足取りも軽やかに歩き回った。生活に新しい興味が生まれたのだ。それは語るに値する新鮮な話題、考えてみるに値する話題、誰憚ることなく同情と憤りを感じられる話題、国家の一大事に政治家が覚えるような、普段は眠っている血が血管を駆け巡る話題だった。さあ、諸君、感謝しようではないか、我らが隣人を脆いものとしてお創りになった神様に。夫婦が喧嘩するのも、トムやディックやハリーがみつともない恋に落ちるのも、友人が財産を失くすのも、女友達が評判を落とすのも、これ全て神様のお慈悲なのだ。さあ、熟れた果実のように我らが足下に落ちてくる醜聞に、離婚裁判所に、あな恐ろしやと外観を繕いながら辛辣に滑稽に詳細を伝えてくれる新聞に、我ら皆謙虚に感謝しようではないか。時々は慎み深く、自分は惨めな罪人ですと告白するならば、神様も、おまえは大抵の人間の半分も悪くないのだと、我らを慰めてくださるだろう。

「ドライランド副牧師は教区の戸籍簿に結婚証明を記載するために牧師館へ行った。書齋にいたジャクソン牧師が鉄の金庫の鍵を渡した。」

「ソフィー・バンチが昨晩来て、結婚予告を掲げました（注9）。」と副牧師。
「教区外の男と結婚するんだったな？」

「ええ、タンブリッジウェルズの男です。」

副牧師は吸取紙で丁寧インクを乾かすと、分厚い戸籍簿を金庫に戻した。

「ドライランド、食堂へ来てくれるかね？」厳粛な面持ちで牧師が言った。「妻がきみに話があるそうだ。」

「はい。」

ジャクソン夫人は教会新聞チャーチタイムズを読んでいるところだったが、その痩せて角張った顔には到底是認できないという表情が浮かんでいる。ぎゅっと結ばれた唇、尖った鼻ばかりでなく、骨張った臍全体が、夫人の道徳観が蹂躪しゅうりゆうされていることをはっきり示していた。彼女は素早く手をやってスカートの裾飾りが歪ゆがんでいないか確かめると、立ち上がってドライランドと握手した。副牧師は瞬時に真面目な表情になった。彼も道徳的憤慨を感じていたからである。

「ドライランドさん、お聞きになりました？ 非道ひどいと思いませんか？」

「ええ、まったく。悲しむべきことです。」

二人の声は極めて厳粛なものだったが、そこに微かな喜びの響きも感じられた。

「あの人に初めて会った時、何か問題を起こしそうな気がしたの。」夫人は首を振りながら行った。

「ねえ、アーチボルト、あたし言ったわよね？——あの人の顔つきが好きになれないって。」

「ああ、確かにそう言った。」夫人の主人あるじにして主でもある牧師が請け合った。

「メアリー・クリボーンはあの人には勿体ない良い子です。」夫人は断固言った。「聖人です。」

「実際、付け上がっていますね。」副牧師は俗っぽい言葉を使った。それが男らしさだと思っているのだ。

「そうよ、アーチボルト。」勝ち誇ったように夫人が言う。「あたしは何て言いましたっけ？」

「己惚うぶれてると思うと言ったな。」

「『思う』なんてもんじやありません。絶対己惚うぶれてます、呆れるほど。あたしに話し掛ける時なんか、いつも見下みくだしたような態度！ 朝の礼拝であなたのために祈りをしてさしあげましょうかって提案したら、断られた。良心的な人なら絶対しませんよ。」

「ああした軍人というのは、大概、自分は偉いと思っていますね。」ドライランド氏は座っている椅子の向い側にある鏡を利用して、髪の毛を整えた。

氏は朗々とした声で話すので、何でもない単語が如何にも重みを持って聞こえる。

「あの人のやったことだって、そんなに威張るようなことじゃない。同じ立場にたてば誰だって同じことをしましたよ。英雄的だって言うんなら、教会の人たちが毎日やっていることだって英雄的だわ。でもそれを自慢したりはしないでしょ？」

「真の勇氣は常に謙虚だと言いますからね。」ドライランド氏が応じた。夫人への返答としてはどこかしっくりこないが、まあ、それなりにジェームズへの中傷にはなっただろう、そう副牧師は考えた。「ここへお茶に招待した時だってひどかった。退屈してるのが丸見えだった。きつとあの人たいして賢くないのよ。」

「賢い人は紳士的でない振舞はしない、——そういうものです。」そう言って副牧師は笑みを浮かべた。無意識ではあったがなかなかの警句を發したと思っただのだ。

「あの人がメアリーに対してやったことについて、あたしどうこの気持を表現したら良いのかわから

ない。」声を高めてそう言いながらも、ジャクソン夫人は次々と怒りの言葉を吐いた。

これまで三人は自分たちがジェームズに——かわいそうに本人の意思に反してだったが——押しつけた英雄のレッテルに少々悩まされていたのだった。彼を台座に祭り上げ、称讃の嵐で包んだまではよかったが、自分たちの頭上に聳えるその姿に戸惑いを覚え、その後光が眩しすぎると感じていた。彼を時の人にしてあげようとしたのに、穏やかに抵抗されたことで自尊心も傷つけられていた。だから、今ジェームズが持て囃す価値などない男だと判って、救われた思いだったのだ。台座も後光も即座に取り去られた。黄金のアイドルの足は土で出来ていたのだ。元称讃者たちは、自分たちが贈り物を与えた時、彼が欲しくないからと言ってそれ相応の謙虚さを示さなかったことを、ここぞとばかり非難した。ジェームズは英雄どころか、実際明らかに自分たちより劣っていると確信できたことで、三人の虚栄心は慰められた。およそ道德的優越感ほど強い優越感はあるまい。十戒の頂点に堂々と立つ者は地上の王の前に跪く必要などないのだ。

村人は皆リトルプリンプトンは徳高い村である意識していた。だから糾弾に躊躇いはなかった。

「あの男も評判を落としたもんだな。」

「まったく。悲しいよな。絶頂の時こそ、素直な気持、自分は罪人だって気持を忘れないのが大事だ。っていう良い手本だよ。驕ってる奴はいつか必ず没落するのさ。」

ジャクソン夫妻とドライランド氏は耳に届く様々な情報について話し合った。メアリーとパーソンズ夫人は堅く沈黙を守っていたが、クリボン夫人はお喋りだったし、パーソンズ大佐から一部始終を聞き出すのに、さしたる策を弄する必要もなかった。

「残念だけど、一つ確かなことがあるわね。」ジャクソン夫人が敬虔な人に時に見られる復讐心を見せて言った。「パーソンズ大尉は言語道断なことをしたんだから、何かするのがあたしたちの義務だ。ってこと。」

「クリボン大佐は鞭打ちを食らわしてやると息巻いています。」

「それは良いかも。」ジャクソン夫人が声を高めた。「その場において見物したいものだわ。」

暫し三人はジェームズが折檻されることを想像し、満足げな表情を浮かべた。

「本当にとんでもない人だわ。かわいそうに五年も待っててくれたのよ、それを棄てるなんて。何としてもメアリーと結婚させるべきよ。」

「紳士ならあんな風にはしなかつただろうな、それは絶対言える。」牧師が言った。

「アーチボルト、あたし、あなたにパーソンズ大尉のところへ行つて話してほしかった。あたしたちがどう思ってるか、大尉に話しておくのがあたしたちの義務よ、絶対そうよ。」

「夫妻はとても苦しんでいる。ほとんど何も言わないが、見れば判る。」

「苦しむだけじゃ何にもならないわ。息子を説得してメアリーと結婚させなくちゃいけないでしょう。なのに、何でもあの子の肩を持つんだから。息子は完璧だと思ってる。二人がジェームズを褒めるみたいに人間を褒めるのは、神様を軽んじてるってことよ。」

「確かに息子を過大評価していますね。」ドライランド氏が賛成した。

「理由が知りたいわ。男前でもないし。」

「まあ、極めて普通ですね。」ドライランド氏は近くにある鏡にちらっと眼をやって同意した。「男

らしいとは言えないと思います。」

自分の欠点が何であれ、——自分にもよろしくない点はあるが、それを認めるだけの謙虚さは持ち合わせていると副牧師は自画自讃していた、——誰も自分が男らしいことは否定できまい、そう氏は密かに考えていた。なるほど、あながち間違っていないかもしれない。氏に山高帽を被らせ、ベルボトムの外套を着させたら、充分辻馬車の馭者で通るだろう。

「眼だつて特に魅力的だつてわけじゃないし、髪の毛だつて……。」ジャクソン夫人は続けた。

「まあ、整った顔立ちではありませんがね。しかし、整っているということは男としての魅力には欠けるということでしょう。」

「それに、話してて楽しくないわ。」

「そうだな。あれが気の利いたことを言うのは聞いたことがない。」牧師が言った。

「確かに。」副牧師は笑った。「警句を作るのが得意とは言えませんね。」

「それに、教養があるとは思えないわ。」

「まあ、それは……。軍人に教養は期待できませんから。」副牧師は馬鹿にするような笑いを浮かべて肩を竦めた。「正直申し上げて、マリー・コレツリを読んだことがないと言った時には笑えませんでした。」

「ホントに、信じられないわ。読んでない風をしているだけかと思つた。」

「情けないことですが、私の経験から言つて、若い士官は皆んな呆れるほど無知です。」

三人はジェームズから全ての美点を剥ぎ取ってしまった。メアリーの目には魅力として映っていた

かも知れない精神的な美点、肉体的な美点の全てを。従つて、副牧師の次の発言はその当然の帰結と見えよう。

「己惚れのように聞こえるかも知れませんが、一体ミス・クリボンがああ男の中に何を見ていたのか、疑問に思わざるをえません。」

「愛は盲目なのよ。」ジャクソン夫人が答えた。「もっとふさわしい相手もいたでしょうに。」

暫し三人は、恋心がしでかす予想もできない行動と、メアリーがその気になればできたであろうジェームズ以外の男との結婚に思いを巡らしていた。

「アーチボルト、」やがてジャクソン夫人が彼女独特の断固とした調子で言った。「あたし決めました。教区牧師として、あなたがパーソンズ大尉に話さなくちゃいけないわ。」

「私が？」

「そうよ、アーチボルト。メアリーとの約束を果たすように説得しなくちゃ。——自分はショックを受けた、悲しんでる。あなたは良心に照らして間違つたことをしていないと言えるかつて。」

「あれに道理が通じるとは思えないが。」牧師は気が進まない様子だった。

「やるだけやってみるのがあなたの義務よ。大抵の人は普段、やらなくちゃいけないのは分かっているけど、お節介だつて言われるのが厭で一步を踏み出せない。だけど今は慎みなんて気にして場合じやない。この非道いことはどうしても止めさせなくちゃいけない。時には他人のやることに干渉するのが義務だつてこともあるのよ、特にあたしたちのように聖職に携わる者にとつて。あたしは自分の義務に尻込みなんかしない。お節介な奴だつて言いたいなら言わせておけばいい。何を言われたつて

死ぬわけじゃないわ。」

「パーソンズ大尉はあまり感情を表に顯わさないが、私が出向いたら無礼だと思っくんじやないかな。」

「どうして？　あたしたちの教区の人が約束を破られたのよ。なら、行って話すのがあたしたちの義務でしょう。あなたが行かないんなら、あたしが行く。どう、アーチボルト？」

「じゃ、やってみたら？」

「いいのね？　こんな嬉しいことはないわ。思ってることを全部言ってやります。あなたは自分で思ってるほど偉いわけじゃないってはっきり言ってやったら、良い薬になるでしょうよ。楽しみだわ。あたしは尻込みなんかしません。」

「なあ、マリア、」牧師は諫めた。「私が話すべきだと、そうおまえが本当に思うなら……」

「奥様に任せた方が良いでしょう。女性なら私たち男には言えないことも色々と言えますし。」

これは牧師にとって有難い提案だった。というのも、ジェームズが激高のあまり、話し合いではなく、腕力——あるいは脚力——に訴えるのではないかという嬉しくない思いを拭えないでいたからだ。ジャクソン氏は宗教上の拷問ならどんなに恐ろしいものであっても敢然耐えたであろうが、殴られた蹴られたと笑いものになるのは、想像しただけで身が縮んだ。その点、妻の方が勇敢だった。あるいは想像力に欠けていた。

「じゃあ、あたしが行く。確かにアーチボルトになら何か失礼なことをするかもしれないけど、女性にはそんなことできないでしょう。そうと決まったら、今すぐ行ってきます。」

ジャクソン夫人の帽子は玄関ホールベグの釘ベグに掛けてあったから、出かける準備はすぐ出来た。黒の子山羊キッドの手袋を填めた夫人の口元には決意の固さが、眉間にはキリスト教徒の美德が表われていた。

夫人はきびきびした足取りで歩を進めたが、その動きの全てから己の義務を確信していることは明らかだった。マリア・ジャクソンは神軍が吹き鳴らす喇叭フッパの響きに耳を塞ぐような人ではない。彼女は主の御声しゅを自らの中に聞きながら、ヘブライの預言者のように歩いて行った。

ジャクソン夫人がプリンプトンハウスへ向かっている間、ジェームズは家の庭を彷徨っていた。三日前にメアリーとの婚約に終止符を打って以来、両親との間でそのことが話題に上ることはなかったが、二人が何を考えているかは想像できた。フォーサイス少佐の到着を待っているのだ。二人は婚約解消が本当のこと、最終的な決定だとは信じられず、諦めきれないでいる。それではあまりに酷い、何か手があるはずだ、そう考えて少佐に来てもらうように頼んだ。世故に長けていると評判の少佐ならこの問題を何とか解決してくれるだろうと信じている。ジェームズは苦笑いを浮かべた。あんな叔父さんを当てにするなんて！ 叔父さんの到着は確か今日のはず……。

ジェームズの叔父フォーサイス少佐は五十三歳。いくつかの陸軍倶楽部の常連で、無精なくせに、常に忙しく動き回っている。人から道楽者と見られているのを誇りにし、放蕩三昧の生活を送っているのではないかと疑われるのをこの上なく喜んだが、実は、非の打ち所のない美徳の持主で、その暮らしぶりは聖職者の娘のように清らかなものだった。ここ何年も軍隊の方は休職中だった。しかしそれは自分が無能だからではない、無能なのは役人の方だと陸軍省を非難していた。今のような墮落した時代にはコネがなければ昇進はできない、しよつちゅうそう言っていた。確かに、少佐は有力な友

人が機会を与えてくれなければ何もできない人だった。が、残念なことに彼には有力な友人はいなかったから、役人たちの腐敗した官僚主義を痛烈に批判するしかなかったのだ。しかし、そうした腐った公の機関への恨み節の一方で、社交には強い関心を持っていた。様々な活動に参加するのは男にとって常に良いことだ。視野を拡げてくれるし、何かと人の役に立っているという気にさせてくれる。仮に彼の関心がお役所関係だけに限られていたなら、親しい人からも偏った男だと思われたかも知れないが、そうした批判を受けなくて済んでいるのは、少佐が礼儀作法に精通した社交家で、いつも洒落た身形みなりをしていたからである。加えて、セレブたちの行動を詳細に報道する新聞を熱心に読んでいたから、彼に訊けば、爵位を持った連中が今どこにいるか常に正確な情報が手に入った。もし弱点があるとするとしたら、それは、実際は一度もお目に掛かったことのない貴族の話をする時、まるで自分の知合いであるかのように仄めかすことだった。こうした時、明らかな嘘こそ吐かないものの、少しくらい曖昧な言葉を遣っても良心の咎めを感じることにはなかった。また少佐は様々な倶楽部のゴシップにも通じていた。自分が世の中のことを知らないなら、一体誰が知っているというのだ、そう少佐は自負していた。しかし一方で少佐は極めて厳格な行動原理の持主でもあった。何かいかがわしいことでもあるかのように隠していたが、パーソンズ夫人の弟である少佐は、日曜の朝には必ず教会へ行った。また経済的困窮もあって、その生活ぶりは貧しく心清らかな人たちのそれと変わらなかった。だからパーソンズ夫妻が少佐に好印象を持つのは当然なのだ。

「確かに弟は道楽者です。」夫人は言ったものだ。「でも心根こころみは良い人ですよ。お嫁さんをもらって落ち着いてくれれば良いんですがね。」

「同感だな。」

二人は、フォーサイス少佐が人生の浮き沈みの中で手に入れた狡猾さと、その裏に真つ直ぐな性格を持つていることが、いま役立つにちがいないと考えた。ではどのようにこの重大な岐路において助けになるのか、それはよく分からなかったが、ともかく豊富な世智によって、この難局の解決策を何か見つけてくれると信じて疑わなかった。

ジェームズは小さかった頃叔父がどんな人間か見抜いてしまい、その馬鹿馬鹿しさに、以来、悪気はないものの彼を軽んじていた。

「父さん母さんは叔父さんに何が言えると思ってるんだろう。」

ジェームズは父をすっかり項垂れさせてしまった不孝を思うと、心が痛んだ。自分の帰還をこれ以上ない喜びをもって待っていたに違いないのに、何という悲しみをもたらしてしまったことか！

「帰ってこなけりや良かった。」彼は呟いた。

ジェームズはオレンジ自由州の流れるような起伏を繰り返す平原を思い出した。そして無限の自由を感じさせる青空を。それに比べ、この整えられたケントの景色には閉塞感しか感じない。雲が低く垂れ込めると息ができないような気がする。また、父と母が自分を他人のように丁寧に扱う気兼ねした様子を見るのも辛かった。両親との間には今は一時的に回避されている痛ましい問題があった。二人はメアリーの名を口にしないよう明らかに気を遣っていたが、それがはつきり言われる以上に心に堪ええし、自然に見えるようにと少し悲しそうに黙って座っている姿は、かえってひどく不自然に見えた。その困った様子は、ちょうど息子が何か法に抵触する罪を犯したのではないかと疑っている親

が、息子の気持を考えると何も言えない、しかし心配でたまらない、そんな時に取るであろう態度に似ていた。そこには、息子は自責の念に苦しんでいるに違いない、だからその苦しみをさらに増すようなことをしてはならない、それが親としての務めだ、そう信じている様子が窺えた。父は俺のしたことは恥ずべきことだと確信している。では俺は？——俺自身はどう考えているんだろう？

ジェームズは一日に何度となく、あれで良かったのか、ああすべきではなかったのかと自問した。そして、あれしかやりようがなかったのだと無理にも答えてみるのだが、心の深いところには、怖ろしい、気がおかしくなりそうな疑いが存在するのだった。彼はそれを押し潰そうとした。その声を聞くまいとした。そんな不安に駆られるのは馬鹿げている、そう知性は語っている。しかしその不安は知性より強力だった。知性という刀をいくら振るっても、まるで空気か水のように、何の傷跡も残さず元に戻ってしまう。それは心に巣くう小鬼で、彼の理屈にいちいち「間違いないかな？」と囁く。

時に彼が悩み抜いていると、その鬼は薄ら嗤いを浮かべて耳障りな声で詰問する。
「確かかな、きみ？ 本当に間違いないな？ それなら、教えてくれ、——つい先刻まできみがあんなに大切だと思っていた、あの名誉とやらはどこへ行ってしまったのかな？」

ジェームズは自分自身と世の中に苛立ち、落ち着きなく庭を行ったり来たりした。

しかし、やがて、風に運ばれてくる薔薇の香りと、赤や黄色のその姿に、突然ウォーレイス夫人を思い出した。抗うことはできなかった。どうして考えていけないことがある？ もう自分は自由なのだ。それに二度と夫人と会うことはないのだから、何ら害を与えることもないではないか。自分の

人生では夫人のことを考えるのが唯一の光なのだ。悦びを何もかも否定するのはもううんざりだ。どうして夫人を愛していないなどと偽り続ける必要がある？ 永く夫人と会っていないことは、聊かも自分の情熱を冷ましていなかった、そう思うことそれ自体慰めだった。その思いの強さこそ、夫人への愛の証だろう。逆らうことは無意味だ。自分の魂の一部なのだから。抵抗するのは心臓の鼓動と戦うに等しい。たとえインドでのあの日々を思い出すことが拷問であろうとも、自分はそれを悦ぶ。その痛みは息苦しいばかりの南国の花の香りより強烈だった。苦行僧が、神に憑かれ、自らの肉を引き裂く時感じるであろう官能的な悶えだった……。全ての小さな出来事がまるで昨日起こったことのように儼に浮かんでくる。

ジェームズは夫人と交わした或る取るに足らない会話を心の中で繰り返した。ほんの十分ほどの漫然としたゴシップだったが、しかし、それは夫人の魅惑的な微笑み、愛撫するような瞳によって豊かなものに感じられた。ウオーレイス夫人がすぐそこに立っているような気がした。身に着けていたもの、動かたたびに漂ってきた噓せかえるほどの香水の薫りを思い出していた。あの人は香水の量を減らせたのだろうか。それとも相変わらず人工的なものを好んでいるのだろうか。それまで厳格な女性しか身近におらず、女性とはそんなものだと思っていたジェームズにとって、ウオーレイス夫人の衣化粧はなんと蠱惑的だったことか。

その頬に紅が塗られていたとしても、眉が墨で描かれていたとしても、それが何だと言うのだ。ジェームズにとっては夫人の全ての欠点が悦ばしいものだった。どんな些細な点もそのままであって欲しかった。夫人の全てが複雑微妙で、何とも表現のしようのない魅力的なものだった。それにあの柔

らかで上質なベルベットのよう肌、小さな手。あの手を取ってキスしたとしても、夫人は少しも気にしなかっただろうに。なんて俺は馬鹿だったんだ。ジェームズは己の臆病さを悔やんだ。そして、空想の中で、情熱的に夫人の暖かな掌に唇を押しつけた。夫人の指を飾り立てる奇抜な指輪の数々が唇に当たる。彼はその感触も楽しんだ。

「どうしてこんなに指輪を着けていらつしやるんです？ 着けなくても充分素敵な手なのに。」

もちろん自分にはそんな質問をする勇氣はなかっただろう。しかし今は何の危険もないのだ。ジェームズの耳に夫人の答えが軽やかな笑いととも聞こえてくる。腕を伸ばし、輝く宝石を満足そうに見つめながら、

「わたし、キラキラするものが大好きなの。全身を宝石で覆ってみたいわ。肘にはブレスレット、腕にはダイヤモンドのスパンコール、ベルトも宝石、髪にも首にも宝石。頭から足先までエキゾチックな宝石で輝かせてみたいわ。」

そう言つて、夫人は楽しそうにジェームズを見つめる。

「もちろんあなたは俗悪だつて思うでしょうね。でも気にしない。あなたたちは皆んな他の人と同じでなくちゃ俗悪だつて思つてる。でもわたしは他の人と違つていたい。」

「皆んなに振り向いてほしいわけですね？」

「当然でしょ？ それつて罪なの？ あなたたちにはホントに苛立つわ。趣味の良さだとか、デリカシーだとか、どうしようもない退屈さだとか。女性を褒める時だつて、美しいつて言っちゃいけないつて思つてる。自分が男前でも、それは恥ずかしいことだつて思つてる。」

彼も大胆に応じる。

「でも、あなただって、ご自分の中に外国人の血が混じっていないければって願っているんですよ？」

「あたしが？」嘲るように夫人は目を輝かせる。「あたしは東洋の血が混じっているのを誇りにしてゐるわ。わたしの血管を流れてるのは血なんかじゃない。火よ。金色に輝く火。あたしが偏見を持つてないのも、人生の楽しみ方を知ってるのも、そのためね。」

ジェームズは笑みを浮かべて、答えようとしなない。

「信じないの？」

「ええ。」

「そう？ ひよつとすると、あたしは典型的なイギリス人になりたいのかもしれないわね。そうなれば、連隊のご婦人方があたしを見下す理由がなくなつて、あたしもあの人たちを今よりもつと氣持よく馬鹿にできるでしょうから。」

「あの人たちはあなたを見下してなんかいませんよ。」

「そう？ 軽蔑して、毛嫌いしてるわ。」

「あなたが病氣になつた時、できるだけのことをしてくれただじゃないですか。」

「お馬鹿さんね！ 知らないの？——軽蔑してるのを見せてやる一番の方法は、敵に塩を送ることなのよ。」

こんな具合にジェームズは空想を続けた。質問し遣り返し、夫人に冗談や当意即妙皮肉混じりの言

葉を口にさせた。時には實際声に出すこともあつた。すると、豊かで情熱的な夫人の聲が、まるで生身の夫人が傍に立っているように、はっきりと耳に聞こえた。そして最後はいつも、夫人を抱きしめ、その唇と、雪花石膏のように透き通る脛にキスをする。加えて、その艶やかな髪に手を置くのは無上の悦びだった。もう空想をたくましくしても何の問題もない。メアリーには縛られていないし、ウォーレイス夫人を傷つけることもないのだから。夫人のいるのは一万マイルも離れたところなのだ。

このうっとりする空想を破つたのは父パーソンズ大佐だった。大佐が疲れた様子で身を屈め、芝生を横切つて自分の方へ向かつて来る。その弱々しい、哀れを誘う姿にジェームズは苦い現実を思い出した。彼は溜息を吐き、父親に近づいた。

「父さん、帽子を被らないで外に出るなんて、良くないですよ。取ってきましょうか？」

「いや、すぐに戻るから。」息子の親切な言葉に笑顔で応えなくてはいけないのは分かっていたが、大佐にはできなかった。「ただ、ジャクソン夫人が来ていて、おまえに会いたいと言っている、そのことを伝えるに来ただけだ。」

「何の用ですか？」

「自分で説明するだろう。おまえと二人だけで話したいそうさ。」

ジェームズは夫人の用向きを想像して憂鬱な表情になった。

「二人だけで何を話したいんでしょうね、分からないな。」

「まあ、ジェイミー、話を聞いてやってくれ。あの人には賢い人だから、きつとおまえのためになるこ

とを言ってくれると思うよ。」

大佐は誰に対しても悪いことを言う人ではなかった。普通の人なら余計なお節介だと思うジャクソン夫人の干渉にも、氣立ての良い大佐は、いつも正当な理由を見つけていた。ある問題で他人と意見が異なる時きつと自分の方が間違っているのだと考える人がいるが、大佐はその種の人だった。仮に訳の分からない譴責を受けたとしても、なるほどあなたの仰しやるとおりですと穏やかに自分の非を認めたとし、それが牧師夫人からのものだったら大いに感謝もした。

ジャクソン夫人は背凭れが真つ直ぐの椅子に背筋をぴんと伸ばして座っていた。夫人の嗜みの良さは称讃すべきもので、くつろいだ恰好は今から果たそうとする義務にそぐわないと考えているのだ。両手は軽く握られて膝に置かれている。唇は、正義の道は困難ではあるがその道を歩む力を神様が与えてくださるに違いないという確信を、これ以上ないほど明瞭に示している。

「こんにちは、ジャクソン夫人。」

「こんにちは、大尉。」夫人は堅いお辞儀をした。

火は入っていないが、ジェームズはマントルピースのところに行つて、それに寄り掛かり、夫人が話すのを待った。

「パーソンズ大尉、今日はとても辛い義務を果たさなくてはなりません。」

そうは言ったが、余程鈍い人でなければ、夫人がその義務を辛いなどと如何程も考えていないことは判つたであろう。彼女の声には、異端審問官が火炙りの刑を言い渡す時のような厳しい響きがあった、——自らが多額の借金を負っているユダヤ人に。

「きつとお節介な奴めとお思いになるでしょうね。」

「なに、あなたはご自身が関係していない事に干渉なさるような方ではないと確信しています。」ジェームズはゆつくりと答えた。

「もちろんですわ。わたくしがここへ参つたのは、良心に促されたからです。お話ししたいことはわたくしたち全員に関係しています。」

「では父と母を呼びましょうか？ きつと興味があると思いますよ。」

「ご両親にはあなたと二人だけでお話ししたいとお伝えしました。」夫人は冷ややかに答えた。「それに、その方があなたのためにも良いと思いますよ。耳の痛い事実を聞かされる時は、聴衆がいない方が良いでしょう。」

「そう、——耳の痛い話をなさろうつてわけですか。」ジェームズは笑った。「どうやら僕をお人好しだと思つていらつしやるようですね。あなたとは拝顔の榮に浴してからどのくらいになりましたっけ？」

ジャクソン夫人は厳しい表情を崩さなかった。

「一週間でもその人がどんな人か充分判ります。」

「そうですね。僕は十年でも短いと思つてゐるんですが。あなたは余程人間観察が鋭いんですね。」

「その人の行動を見れば判ります。」

「行動ほど当てにならないものはないと思いますよ。人の行動なんて、大抵は、その人の性格とは無関係な偶発的状况によつて決まってしまう。僕なら行動によつて人を判断はしませんね。」

「大尉、わたくしは抽象的なことを議論しに来たんじゃありません。」

「どうして？ 具体的なことより面白いですよ。一般化が可能ですからね。料理に塩を振りかけると味がぴりっとするように、一般化することで会話に味わいが出ますよ。」

「わたくしは忙しいんです。」 相手には真面目に話しを聞く気がないとみて、ジャクソン夫人はびしやりと言った。説いて聞かせるのは思っていたほど容易ではなさそうだ。

「お忙しい中をわざわざ時間を割いて、僕とお喋りをしていただけるとは有難い限りです。」

「お喋りをしに来たんじゃありません。」

「あつ、そうでした、——耳が痛くなる話でしたよね。シェイクスピアか、それともグラスハーモニカの話ですか？」

「パーソンズ大尉、わたしが聖職者の妻だということをお忘れにならないで頂きとうございます。あなたはそうした人たちには慣れていらつしやらないようですが。」

「憚りながら、僕は副主教を知っていますが、とてもユーモアを解する方ですよ。絹の前垂れを召される方にはぜひユーモアのセンスを持ってほしいものです。」

「大尉、」ジャクソン夫人は厳しく咎めた。「擲楯の対象にしてはならないことがございます。あなたにはできるだけ穏やかに話そうと思っています。おひやらかすことは止めてください。」

ジェームズは夫人をにこやかに見つめていた。

「まったく！ 俺も我慢強くなったもんだ！」彼は独りごちた。「今までこんなに我慢強いとは思わなかった。」

「遠回しに言っても塚が明きませぬね。」牧師夫人は続けた。「わたくし、やりたくはないんですけど、義務だからやります。」

「なるほど、それで躊躇なさっていたわけですね。」

「わたくしが何故二人きりでお話ししたと言ったか、お分かりでしょうか？」

「いいえ、まったく。」

「あなたにも良心があるでしょう？ その良心に責められるようなことをあなたはしていませんか？」

「嬉しいことに、僕の良心はお行儀が良いから、不愉快になるようなことは絶対言いません。」

「それはそれは。お気の毒なことで。」

ジェームズは笑みを浮かべた。

「まったく。立派なご夫人だよ。」彼は思った。「俺が今どんなに苦しんでるか判らないのか！」

しかしジャクソン夫人にはジェームズの動じない態度は頑固さの証だと思われなかった。その無責任としか思われない瞳の裏側で、熱く燃え上がる様々な感情が、互いを引き裂きながら渦を巻いているとは夢にも思わなかった。

「お気の毒ね。」夫人は繰り返した。「悲しいと思いますわ。本当にとつても悲しい、——そこにそうやって突っ立って、鈍感なことに、ご自分の良心の声が聞こえないとは。大尉、良心の声は神様の声です。あなたの良心が語りかけないなら、代わりにそれを語ってやるのが誰か他の人の義務です。」

「もし僕があなたの仰しやりたいことが判っているとして、僕がそれを聞きたいと思っている、そうお考えですか？」

「聞きたくないでしょうね。」

「じゃあ、何も言わないでおくのが礼儀ってものじゃありませんか？」

「いいえ、大尉、どんな耳障りなことでも、道徳的に見て、言わなくちゃならないことはあります。」

「楽に生きていく最善の方法は、できるだけ耳当りのいいことを言っておくことじゃないでしょうか？」

「わたくしの生き方は違います。それにそんな生き方は間違ってます。」

「僕は思うんですが、困難だからという理由だけでそれが正しい生き方だと結論づけるのは性急です。同様に、耳に痛い話が必ずしも正しいとは限らない。」

「も一度言いますが、わたしは下らないお喋りをするためにここに来たんじゃないありません。」

「なるほど、そうでしたね。ジャクソンさん、なのに何故あなたがすぐ本題に入らないのか、不思議に思っていたんですが。」

「あなたがわざと邪魔してたからでしょう。」

「それはそれは。申し訳ありません。僕としてはあなたが喜びそうな話題を取り上げていたつもりなんですが。」

「パーソンズ大尉、メアリー・クリボーンさんの件で良心に疚しいところはなんでしょうか？」

ジェームズは夫人に冷たい視線を送ったが、彼がかりうじて自分を抑えていることは夫人には想像もできなかったろう。

「僕は、また、イギリスに関係する問題かと思いましたがよ。イギリス軍の勝利を祝ってリトルプリンプトンの教会で感謝の祈りを捧げるミサを行ないたいとか何とか。」

「違うことはもう判ったでしょ？」パーソンズ夫人が邪険に遣り返した。「あなたがメアリー・クリボーンさんにしたことは、わたしたちみんなに関係する問題です。」

「懼りながら、僕の考えは違います。僕のプライベートな問題についてあれこれ言ってもらいたくない。どうせこれでもかと悪いことを言うに決まっていますから、もし言いたいなら僕のいないところで言ってください。」

「大尉、わたくし、あなたは紳士だと思ってきましたが。」

「でしょうね。」

「なら、紳士らしく、わたしをレディーとして扱ってくださいると嬉しいんですが。」

ジェームズは笑みを浮かべた。ここで腹を立てても始まらないだろう。

「ジャクソンさん、お互い穏やかに話すように努めましょう。しかし、それでも、あなたに関係のないことには口を挟むべきではないと思います……。」

「あんな非道いことをしておいて、非難を受けそうになったらこそ逃げ出す、そんなことができるとお思いですか？」自分がメアリー・クリボーンさんにしたことがどんなことか解ってらっしゃる

So」

「僕が何をしたにせよ、よく考えてしたことは確かです。ですから、あなたが何と仰しやろうと結果は変わりません。もうこの辺で終わりにしませんか？」

ジェームズはドアの方に行きかけた。

「あなたのご両親に話してくれるよう頼まれたんです。お二人はあなたがわたしの言うことに耳を傾けるのを望んでいます。」

ジェームズは立ち止まった。「いいでしょう。それで？」

彼は椅子に腰掛け、夫人が話すのを待った。ジャクソン夫人は自分でもよく解らない不安を感じていた。たかが一兵士がこんなに扱いにくいものだとは考えたこともなかった。だから、いま躊躇しているのは夫人の方だった。ジェームズの厳しい視線に、夫人は何だか自分が被告人になったような気がした。それでも、夫人は咳払いして、背筋を伸ばした。

「悲しいですわ、わたくしたちがあなたを誤解していたと思うと。大尉の帰還を歓迎しようとおあれこれ準備していた時は、あなたからこんな報いを受けるとは思ってもいませんでした。心は痛みますが言わなくてはなりません、——あなたのなさったことは罪深いことです。あなたがご自身の良心に照らして何らかの反省の言葉を仰しやるのではないかと期待していましたが、残念ながらそれも誤解でした。あなたはメアリーを説得して婚約したんですよ。何年も待たせて、その間には手紙をしょっちゅう送って愛している風をした。ホントに非道い騙し方です。人生で一番良い時をメアリーから奪った。そうしておいて、何の理由もなしに、言訳もせずに、もう飽きたから結婚しないと平然と言いつつた。これは非道すぎます。残酷です。紳士の風上にも置けない振舞いです。平民だつてこんなこと

はしないでしよう。もちろんあなたにとつてはどうつてことないんでしょけれど、メアリーにとつては一生を台無しにされたも同然なんですよ。もう若いとは言えない年齢になって、どうして結婚相手を見つけられます？ あなたはメアリーの結婚のチャンスを潰してしまつたんです。顔に泥を塗つたんです。これから先、誰かがメアリーのことを考える時、必ず今回の件を思い出すんです。ホントにあなたつて人は、残酷な人です。どうやってヴィクトリア勲章を手に入れたか知りませんが、あなたがそれに値しないことは確かです。」

ジャクソン夫人は言葉を切った。

「それで全部ですか？」ジェームズが穏やかに尋ねた。

「充分すぎるでしょう。」

「そう、充分ですね。では、これで面会は終わりということに。」

「何か言うことはないんですか？」夫人はまったく勝利感が得られず、怒り心頭だった。

「僕が？ 何も。」

ジャクソン夫人は困惑した。例の視線は夫人に注がれたままだ。礼に適った、しかし軽蔑しきつた視線。夫人は冷静さを失い、憤然として言った。

「これはまったく恥ずべきことです！ あなたは恥知らずです！」

「ジャクソンさん、あなたは話を聞けと仰しやつた。で、僕は聞いた。もし僕が反論するとお考えなら、残念ですが、間違っています。しかし、あなたが忌憚なくご意見を述べたのですから、僕も忌憚なく申し上げても気になさらないでしょう。あなたを含め、あの馬鹿げたお祭り騒ぎに参加した

人たちが、僕のプライベートな問題に口を挟むやり方には、断固抗議します。僕はあなたにとって赤の他人です。僕とクリボンさんとの婚約、あるいはその破談はあなたとは何の関係もないことでしょう。最後にもう一つ言わせていただけるなら、あなたのこの干渉はお節介もお節介、お節介の極みです。……と、まあ、率直に申し上げましたが、明快な言葉を使わないとあなたには絶対通じないだろうと、残念ながら、そう思いましたので。」

ジャクソン夫人の堪忍袋の緒が切れた。

「パーソンズ大尉、わたしはあなたより遙かに年上です。それが年長者に対する言葉遣いですか！ それに、わたしがレディーだってお忘れですか！ もしご両親と知合いでなかりや、あなたは紳士なんてもんじゃないとはつきり言いたいくらいです。それに、お忘れのようですが、わたしがここへ来たのは教会の人間でもあるからです。そのわたしに対してこんな無礼なことを言うなんて！ まったく、あなたはキリスト教徒でもない。」

「そんなつもりはなかったんですが。」ジェームズは微笑んで答えた。

「レディーに対してこんなに失礼だと分かってたら、夫に来てもらったのに。」

「まあ、そうしなくて良かったでしょうね。蹴りを入れられたかもしれませんから。」

「大尉、夫は福音の使徒ですよ。」

「福音の使徒になるのに、別にひどいお節介焼きになる必要もないでしょう。」

「まあ、何て情けない！ 思い上がりも甚だしい。あなたは最悪の己惚れ屋だわ。」

「僕がこの三十分、注意深く、そして或る程度の敬意を持ってあなたのお話^{はな}に耳を傾けていたこと、

それが僕の謙虚さを証明していると思いますが。」

「はつきり言わせてもらいます、——神様のご深慮でメアリーがあなたと結婚しないで済むことになって、正直喜んでます。あなたは全くの悪人です。でも、今はあなたをあなたの心の中の善なるものに任せます。わたくしはキリスト教徒ですから、あなたを赦します、——ああ、神よ、感謝します。ですが、あなたの邪悪なものを神様が罰する時がいつかきつと来ると信じてます。」

ジャクソン夫人は立ち上がると、跳ねるようにドアに向かった。ジェームズは礼儀正しく、ドアを開けてやった。

「あら、お構いなく。」夫人は当て擦るように言った。「一人で帰れますし、傘を失敬していくようなことはいたしませんから。」

フォーサイス少佐が到着したのはお茶の時間の少し前だった。真新しい、染み一つないチェックのスーツ、ズボンの折り目もくつきりと美しく、カラーもネクタイも今流行りのもので、まさに粋な姿。赤ら顔で、薄くなりかけた髪を注意深く真ん中で分け、口髭を軍人らしく固めている。最近高額な義歯を購入したのだが、それを「どうだ、すごいだろう」と、誰彼構わず、嫌味にならない程度に自慢して見せていた。フォーサイス少佐の一番の願いは若く見られることだった。好んで俗語を使い、活潑に動き、元気よく歩いた。自分は少年のように感じるのだと宣い、体調の好い日なら、光を背にすれば、まだまだ三十五で通ると己惚れていた。

「女はな、」少佐はよく言ったものだ。「女は見たとおりの歳だが、男の歳はそいつの感じ方次第なんだよ。」

過度なお洒落も二十歳前の青年なら笑って許されるだろうが——二十歳前には大抵の男は派手な服装をしたがるものだ——しかし少佐のダンディーさは、皺のよった肌、黄色くなった白目とは奇妙な対照をなしていて、若さを強調すればするほど、薄気味悪く感じられるのだった。何か死の舞踏に登場する、めかした若者の横を勿体ぶって歩き回る目の窪んだ骸骨を思わせるのだ。

パーソンズ夫妻を感心させるのはいとも容易いことで、フォーサイス少佐は二人に対して完全に優位な立場にあった。どんな事柄であれ、夫妻は少佐の意見を感じと敬意を持って受け入れていた。少佐は世故に長けた人であり、世間の好ましくない出来事にも通じているからだ。夫妻は、今回少佐がリトルプリンプトンに来ることで、招待を断られた公爵夫人たちが落胆しているのではあるまいかと心配していた。自分たちのような田舎者に付き合ってくれるのは、腰の低い少佐の親切心ゆえだと感じているのだ。夫妻は少佐のためにいつもの習慣を変更し、昼には午餐を、夕刻には晚餐を準備した。パーソンズ夫人は弟を歓迎するために、安息日用の黒絹の服を着て、肩にはレースのスカーフを巻いた。駅まで出迎えに行った夫と共にフォーサイス少佐が到着すると、夫人は玄関で弟を迎えた。

「ようこそ。どう？——旅は楽しかった？」

「ああ、楽しかったさ。最近お目にかかった中じゃ最高に可愛いご婦人と客室が同じでね、ずっと目の保養をさせてもらった。相手はまったくこっちを向いてくれなかったがね。」

「ウィリアムったら！」パーソンズ夫人が困ったものだと微笑んだ。

「弟さんはこの前会った時からちっとも変わっていないな。」少佐を客間へ通しながら大佐が笑った。「可愛いご婦人を眺めたって不都合はない……、だろ？ 神様のご配慮で私はまだ独身だしね。あ、それで思い出した。こないだ倶楽部で面白い話を聞いたんだ。」

「あなたの面白い話って、何だか聞くのが怖い。」

「そうだな。時々きわどいことを言うからな。」大佐が首を振りながら楽しそうに賛成した。

歳をとった独身者にだけ許される特権かもしれないが、フォーサイス少佐は逸話の達人で、取分け、

品がないと少佐自身考える小話こはなしが得意だった。しかしそれは自身考えるほど不謹慎なものではなく、そうしたものを聞いて顔を赧かからめるのは無垢むくの人パーソンズ大佐くらいのもだった。

「ちよつとぐらいスパイスを利かしても害はないさ。」フォーサイス少佐が言う。「それに、姉さんは結婚してるんだし……、な？」

色っぽい話が大好きな少佐は、妙齢のご婦人が道路を渡るのを助けた男が、その時婦人の足首をどうやって眺めたかというたわいもない話を、いかにもご満悦の様子で微に入り細にわたって語り、その落ちを少なくとも六回は繰り返した。

「ウイリアム、あんたときたら！」パーソンズ大佐は心から笑った。「そういう話は喫煙室まで取っておくものだろう。」

「で、姉さん、ご感想は？」自分の冗談に酔いながら、少佐が悪戯いたずら小僧のように尋ねた。

パーソンズ夫人はちよつと頬を赧かからめたが、体面上、微笑むことは差し控えた。そして、なんだか自分が弟の悪さに荷担しているように感じて、

「ウイリアム、もうこれ以上あなたの話は聞きたくありません。」と言った。

「はっ、はっ！」少佐は笑った。「姉さんがこういう話が好きなのは分かってるさ。それに、なあ、リッチモンド、馬車の中じゃペチコートのことも話したよな？」

「しっ！」パーソンズ大佐が笑みを浮かべて制した。「レディーに向かって話すようなことじゃないだろう。」

「ま、そうだろうな。しかし面白い話だったろう？」

二人は笑った。

「まったく、もう、男の人って！ 男だけになるとすぐにそんな話になるんだから！」

二人の老兵は神を恐れる人ではあったが、自分たちのやった悪さを思い出してまた笑った。

「人は何か話さなくちゃならないのであります。」と少佐。「で、男にとつて女性についての話題ほど面白いものはありません。」

そこにジェームズが現れ、少佐と握手しながら言った。

「ようこそ、叔父さん。今日はこれまでになく若々しく見えますね。叔父さんを見てると、自分が年寄に思えてきます。」

「どうもどうも。私は歳は取らないんだ。ついこの間も古くからの馴染みのグリーン夫人と話したんだが、——グリーン夫人つてのは昔の名字はレイク、知ってるかな？——そのグリーン夫人が言うんだ。『なんとまあ、フォーサイス少佐、素敵ですわ。きつと、永遠に若さを保つ秘密を発見なさったのね？』そこで答えてやった。『実は、私は歳を取ることを自分に許していません。一旦許してしまうとそれでお終しまいですからね。』すると夫人が、『どうやって？』と訊く。で、『いとも簡単なことですよ。規則正しい生活をして、ちゃんとフランネルの下着を着ること。』

「やれやれ。」ジェームズが笑った。「叔父さん、まさかご婦人に向かって自分の下着の話なさったんじゃないでしょうね？」

「なに、言ったことを正確に再現してるつもりだよ。」

「女性とも随分自由に話をなさるんですね。」

「なあ、きみ、ご婦人方は私にそれを期待してるんだよ、それは分かてる。もちろん一線を越えるような話はないがね。」

それから少佐は今流行の服装について、自分の着ている服について、巷まちの醜聞うすんげんについて、それに関係する人たちの家系について、そして戦争について語った。

「まあ、人間、好きなことを言っても良いわけだから言わせてもらおうが、」と少佐が言う。「私の考えじゃ、ロバーツ(注10)は過大評価されてるな。こないだも倶楽部で或る男に会ったんだが、そいつの実際の従弟いとこがインドでロバーツの部下だった。いいか、実の従弟だよ、だから信憑性は充分だ。で、その男が、もちろん絶対内緒の話だがと断ことわった上で、従弟はロバーツを全然評価してないって言うんだな。まあ、実際ロバーツに仕えた男の評価はそんなとこさ。」

「それは確かに決定的ですね。」とジェームズが言う。「叔父さんの友人のその従弟の人は、なぜ陸軍省へ行ってロバーツ將軍が派遣されることに反対しなかったんでしょう？」

「陸軍省へ行ってどうなるって言うんだ？ あそこの連中は、腐り切った、無能な奴ばっかりなんだ。もし私に任せてくれりゃ、全員まとめてゴミ箱行きだ。官僚主義と言えばだな、一つ面白い話がある。こりゃ本当のことだよ。これを話してくれたのは、当事者の伯父さんの義理の弟だ。」

そう言ってフォーサイス少佐は陸軍省のお役所根性を長々と語り、最後に、これで陸軍が墮落しないとしたら一体墮落とは何なのか解らなくなる、と締め括った。

ジェームズは、その間に、父と母との間に交わされる視線に気づき、二人が重大な問題について叔父さんに相談しようとしていることを思い出した。彼は、内心なつか半ば軽蔑しながらも、その機会を与えてやった。

「僕はグルームブリッジまで散歩に行ってきます。夕食までは帰らないと思います。」
「良かった！」ジェームズが出て行くと、人を疑うことを知らぬパーソンズ大佐が声を上げた。「ウイリアム、三人だけで話したいと思っていたんだ。あんたは世間をよく知っているから。」

「確かに私の知らないことはあまりないな。」少佐は気取ってワイシャツの袖を引っ張った。
「フランシス、おまえから話してくれ。」

夫のスポークスマンの役割に慣れている夫人は話し始めた。時々少佐は己の抜け目なさを示すべく口笛を吹いたり、こんなのは赤子の手を捻ひねるより簡単なことさという風に大きく頷うなづいている。

「姉さんの言うとおりで。」聞き終えて少佐が言った。「こうしたことは世間をよく知ってる人間の目を通して見なくちゃいかん。」

「あんたなら力を貸してくれると思っていたんだ。」とパーソンズ大佐。

「勿論だとも。五分もありや全部解決してみせる。任せてくれ。」

「なっ、言ったとおりでだろう、フランシス。」大佐は嬉しそうに笑った。「ウイリアム、ジェームズはこの子と結婚するべきだろうか？」

「ああ、絶対そうだ。自分の気持がどうであれ、紳士として、軍人として行動しなくちゃいかん。まあ、ともかくジェームズと話させてくれ。あいつは私の言うことは尊重してる、先刻さつぷくそのことに気が付いた。」

パーソンズ夫人は疑わしそうに弟を見た。

「あたしたち、どうしたら良いのか分からないの。」夫人が小声で言った。「神様に導いてくださるようお祈りもした、——そうよね、リッチモンド？ あの子にきつく当たりたくはない、でも、正しいことをしなくちゃいけないと思うの。」

「まあ、この私に任せとけ。」少佐は繰り返した。「私は世間が解った男だ。この種のことには慣れる。」

少佐は深謀を巡らして、パーソンズ夫人に夕食が終わったらすぐに大佐とバックギャモンを始めるように提案していた。夫人はその計画に乗って、

「リッチモンド、いつものように一局やりましょうか？」とバックギャモンの盤を取り出した。

パーソンズ大佐も計画どおり義理の弟を見て、

「ウィリアムは気にしないかな？」と訊いた。

「気にしない、気にしない。私はちよつとジェイミーと話したいことがあるんだ。」

夫妻はテーブルの隅の椅子に腰掛けて駒を動かし始めたが、なんとも不安そうな様子だった。ジェームズはいつものように無言で窓際に立って、暮れゆく外を眺めている。空は牛乳を混ぜたような青色で、赤褐色の雲がうっすらと浮かんでいる。フォーサイス少佐はジェームズの向かいの椅子に座ると、口髭を引っ張った。

「さて、ジェイミー、良い子だから教えてくれ。聞いたところじゃ、おまえとメアリー・クリボーンとの間に問題が起こってるそうだが……？」

予想していた質問ではあったが、パーソンズ大佐はビクツとして、息子の方を盗み見た。夫人は二つの賽子さいごうを筒に入れ、大きな音を立ててそれを振ると、盤の上に転がした。

「丸ね。」夫人が言った。

ジェームズは振り向いて叔父を見た。少佐は夕食のために服装を替えていたが、それが途方もなく若ぶつたものなので、ジェームズはいささか軽蔑の念を覚えた。

「馬鹿馬鹿しい、愚にも付かんことじゃないか、えっ？」

「そうお考えですか？」ジェームズが疲れた様子で言った。「僕らは真面目に話し合ったんですが。」

「この田舎には旧弊な人間しかおらん。こうした問題を解決するには世智せいちに長けた人間が必要なんだ。」

「なるほど、ウィリアム叔父さん、あなたがその世智に長けた人ってわけですね？」ジェームズは頬笑んだ。

賽子を入れた筒がやかましく鳴った。パーソンズ夫妻は必死に無関心を装ってゲームを続けている。「紳士なら五年も婚約していた女性を袖にするなんてことはしない。」

ジェームズはフォーサイス少佐にはつきりとした返答を与えようと身構えた。午前中のジャクソン夫人との会心のせいでかなり苛立っていたこともあるが、この機会に言いたいことを何もかも言ってしまうって、全てに片を付けてしまおうと決心した。何もかも言えば、両親と自分との間の緊張も少しは和らぐかもしれない。

「メアリーとの婚約を解消したのは僕にとつてもとても悲しいことでした。でも、誠実に生きようとするならこれしか道はなかった。なぜって僕はもう彼女を愛していないからです。愛がないのに結婚するなんて、それ以上非道いことは想像できません。」

「確かに、それは遺憾なことではある。が、一番大事なのは約束は守るってことだ。」

「違います。それは偏見です。約束を守ること以上に大切なことは沢山あります。」

パーソンズ大佐はゲームをしている風を続けていられなくなった。

「メアリーは胸が張り裂けそうな気持でいるんだぞ、分からないのか。」大佐が低い声で言った。

「苦しんでいるのは分かります。でも、どうしようもないんです。」

「リッチモンド、私に任せておけ。」少佐が苛立たしげに遮った。「おまえさんが出てくると打ち壊しだ。」

しかしパーソンズ大佐は無視して続けた。

「あの子はおまえと結婚するのを心から楽しみにしていたんだ。両親ともあまりうまく行っていないから、おまえがあの家から連れ出してくれる、それが唯一の希望、慰めだったんだ。」

「この件を解決するのは私なのかね、リッチモンド、それともおまえさんなのかね？ 私は世の中のことが分かってる。」

「もし僕が愛してもいないのに金持の女性と結婚したら、皆さんは恥ずべきことだと言うでしょう。」

それは、女性が金持だからじゃない、愛がないからです。」

「それとこれとはちよつと違うんじゃないかな？」フォーサイス少佐が応えた。「おまえは約束した

んだ。それを今になって撤回しようとしてる。」

「僕の方では守り通すことのできない約束だったんです。あの時僕はまだ子供だった。世の中のことも何も分かっていたいなかった。女性は母さん以外知らなかった。そんな時メアリーを一生愛すると約束してしまった。ああ、父さんと母さんが婚約を許したことが間違いだっただけです。残酷ですよ。少しは自分たちにも責任があるとは思わないんですか？」

「他に何ができたと言うんだ？」

「どうして周章てるなって言ってくれなかったんです？ 婚約するにはまだ若すぎるって言ってくれなかったんです？」

「婚約すれば落ち着くだろうと思ったんだ。」

「でも若い男は落ち着きたくなんかないんですよ。若い男には人生を見させるべきなんです。人生が与える色んなことを経験させるべきなんです。その機会を与える前に足枷を填めてしまうなんて、酷いですよ。誘惑の入り込む余地がないという理由だけで、それが美徳だなんてどうして言えるんです？」

「ジェイミー、あなたが解らない。」パーソンズ夫人が悲しそうに言った。「昔はそんな言い方しなかったのに。」

「いつまでも無知な子供のままでいてほしかったんですか？ 母さんは僕に全然自由を与えてくれなかった。思いつく限りの垣根をこしらえて僕を閉じ込めた。首輪と紐を着けて、さあこれで迷子にならないと神様に感謝した。」

「あなたが善い人に、真のキリスト教徒になりますように育てたつもりよ。」

「今僕が皆さんのような、どうしようもない俗物にならないで済んでるのは奇跡としか言いようがないですよ。」

「ジェイミー、お母さんに向かってそんな口の利き方をするもんじゃない。」フォーサイス少佐が言った。

「あつ、ごめんなさい、母さん。傷つけようなんて気はなかったんです。ただ、お互い自分の言いたいことを率直に言うべきだと思っただんです。これまでは当り障りのないことしか言ってきましたのでしたから。」

「言っていることが解らない。あなたは自分の意思でメアリーと婚約したのよ。あたしたちは何の邪魔もしなかったし、無理強いもしなかった。ただ結果的にはとても嬉しかったし、感謝したわ。優しく清純な英国女性の愛は、きっと良い影響を与えてくれると思っただから。」

「止めろと言ってくれた方がよっぽど親切で賢明だったでしょうね。」

「あなたたちの邪魔をしたとして、責任を取れたと思う？」

「クリボン夫人は止めるようにと言いました。」

「あんな人の考えに従えっていうの？」

「常識らしい常識を示してくれたのはクリボン夫人だけです。」

「ジェイミー、あなた本当に変わってしまった。」

「あの時、婚約するにはまだ若すぎると言ってくれば、僕はそれに従ったでしょう。だから母さん、

母さんは僕以上に責任があるんです。僕は子供だった。自分で自分に足枷を填めさせるなんて、残酷ですよ。」

「あたしたちにそんな話し方をするなんて、……。」

「なーに、こんなことは昔からよくあることさ。」とフォーサイス少佐が茶化すように言った。滑稽な役を演じるのが自分の務め、そう密かに思っている少佐は、世故に通じた男なら当然そうするように、この問題も軽く扱うのが一番だと考えているのだ。しかし、この仲裁の言葉は無視された。

「あたしたちは良かれと思ってやったのよ。ねえ、分かるでしょ？ あたしたち、いつも何があなたにとつて一番良いのかを考えているの。」

ジェームズは答えなかった。答えればそれは苦々しいものにならざるを得ないだろう。これまでずっと、父も母も彼が彼自身の人生を生きることを良しとせず、自分たちのような人生を送ってくれることを願っていた。彼に対する二人の愛は暴君の愛、自分たちの偏見に従わせる愛だった。なるほど優しさに溢れ、愛情は深かったが、息子には自分たちの演奏に合わせて踊ることを願っていた。言ってみれば彼は両親に糸を引かれる操り人形だったのだ。

「それで、僕にどうしてほしいんですか？」

「約束を守ることだ。」父が答えた。

「それは無理です。愛していないのにメアリーと結婚しろだなんて、どうしてそんなことを言うんです？ それこそ道徳に反することじゃないですか。僕にはそう思えます。」

「便宜上の結婚より悪いってこともなからう。」フォーサイス少佐が言った。「少なからぬ人間が

そうした結婚をしてるが、皆んな結構幸せにやってる。」

「僕にはできません。僕から見れば、そんなのは売春と同じです。それなら、街角に立っている女が金を出す人間に躰を売るのがだって悪くないことになる。」

「ジェームズ、ここに母さんがいることを忘れなさんな。」

「お願いですから、率直に話し合いませんか。あなた方は人生の経験者だ。自分の理想に合わないからといって、目を瞑つぶつても何にもなりません。あなた方の理想なんてまやかしにすぎないんです。いま僕は、約束を破るか、あるいは躰を売るかどちらかをしなくちゃならないんです。その中間はない。あなた達の人生に対する見解はどれもこれもおかしい。まがい物の道徳の上に作られた人生観が真面まともであるはずはないんです。あなた達は肉体は不純で下品で、恥ずべきものだと言う。ああ、分かっちゃいないんだ。僕はその上品ぶった態度にはうんざりです。お上品ぶっているから見るもの全てが醜みにくくなってしまふ。精神と肉体は一つのもの、分けることなんてできないんです。精神は肉体で、肉体は精神なんです。愛は生殖のための神々こころづかいしい本能なんです。あなた達は性的魅力は無視されるべきものだと考えて、代わりに、まるで情熱の感じられない、お涙頂戴センチメントの感傷を持つてくる。そんなのは駅で売ってる三文小説ですよ。軽薄で、俗悪だ。僕が結婚するとしたら、それは相手の女性が僕の子供の母親になるからです。燃える情熱こそが結婚の唯一の理由なんです。もしそれが存在しなかったら、結婚は不潔けがれもので、獣けもののようなものになってしまう。いや、獣より悪い。野生の動物は清潔ですからね。僕が何故メアリーと結婚できないか、これでもまだお解りいただけませんか？」

「おまえが愛と呼んでいるものは、」パーソンズ大佐が言った。「性欲だ。私ならそう呼ぶ。」

「そうとも呼べます。」ジェームズは苦々しく応えた。

「愛とはもつと崇高で、純粋なものだ。」

「肉体より純粋なものを僕は知りませぬ。自然が与えた本能より純粋なものはありません。」

「でも、ジェイミー、そういう愛は長続きしないわ。」パーソンズ夫人が優しく言った。「そうした気持は暫くすれば消えてゆくものよ。そうなるとお嫁さんの中に何か他のことを求めるようになる。友情だとか、仲間意識だとか、信頼だとか、辛い時の慰めだとか、あなたの成功と一緒に喜んでくれることとか……。そうしたものに比べたら、性的なものとはつまらないもの思えてくるものよ。」

「かも知れません。性的な欲望は自然が自分の目的のために生じさせるものだから、目的が達成されれば消えてゆくんでしょう。でも、その思い出が二人にとって一番確かな、一番優しい絆を生み出してゆく、僕にはそう思えます。そしてその頃には二人の愛の果実が実っている。その果実——自分たちの子供が独り立ちするまで育てるのが楽しい義務になっている。そうやって世界はいつまでも続いていくんです。」

暫しの沈黙があった。フォーサイス少佐は何か気の利いたことを言つてやろうと頭を絞つたが、世智に長けた少佐も言う言葉が見つからなかった。

それまでは腰掛けていたパーソンズ大佐が立ち上がった。大佐は息子の肩に手を置くと、

「あの子があんなに苦しんでいるのを知つても、おまえはどうしても結婚しないと、そう言うんだな？」と訊いた。

ジェームズは首を横に振つて、その意思のないことを示した。

「おまえはほとんど知らない兵士のために自分の命を犠牲にしようとした。そのおまえがメアリーのためには自分を犠牲にできないと言うのか？ あの子はずっとおまえを愛していたんだぞ、優しい気持で、自分よりもおまえのことを考えて。」

「もしメアリーの命が危ないと言うのなら、僕はきつと自分の命を危険に晒すでしょう。でも今お父さんが求めているのは、それ以上のことなんです。」

パーソンズ大佐は暫く何も言わないで息子を見つめていたが、次に話し出した時その声は震えていた。

「ジェームズ、おまえは私を愛してくれていると思う。私は常に良き父親であろうと努めてきた。神様もご存知だが、おまえを幸せにするためにできるだけのことをしてきた。もしおまえを婚約させたことが間違っていたなら、謝る。」ジェームズは、そんな必要はありません、と身振りで示そうとしたが、大佐がそれを制した。「ちよつと待て。続けさせてくれ。これはおまえを非難するつもりで言うわけではないが、お母さんも私もおまえが幸せに気持よく暮らせるようにと、自分たちの楽しみはできるだけ少なくしてきたんだ。しかしそれは喜びでもあった。私たちは心からおまえを愛しているからだ。私が軍を離れた時何があったかは知っているよな。ひどい恥辱に苦しんだことは何年前に話した。もし神様への信頼とおまえへの信頼がなかったら、私は生きていなかっただろう。私が失った名誉をきつとおまえが回復してくれる、そう心から期待していたんだ。戦場へ行ったおまえをどんなに心配したことか、そしておまえが立派なことを成し遂げたと知った時どんなに喜んだことか、おまえには分からないだろう。『ああ、これこそ誉れある男だ、』そう私は思ったんだ。それが今、お

まえはその名譽に泥を塗りがっている。なあ、ジェームズ！ ジェームズ、私はもう老人だし、そう長くは生きられないだろう。もし私を愛しているなら、私に感謝の気持を持っているなら、私の頼みを、この小さなたった一つの頼みを聞いてほしい。私のために、頼む、メアリーへの約束を守ってくれ。」

「でも、お父さんの仰しゃっているのは道徳に反することをしろということです。」

パーソンズ大佐は力なく息子の肩から手を離すと、他の二人に眼を向けた。その瞳には涙が溢れていた。

「言っていることが理解できない。」

大佐は椅子に沈み込み、手で顔を覆った。

フォーサイス少佐は仲裁に入った件についてまったく落胆していなかった。

「戦場の地形がどうなってるか解ったよ。全て順調だ。まずは偵察、それから戦闘というわけさ。」

さっそく翌日、朝食が終わると、少佐は庭で煙草を吸いながら勇猛にジェームズに攻撃を仕掛けた。少佐はかならず煙草に金の吸い口を付けるのだが、それについてジェームズは軽蔑を隠さなかった。

「ジェームズ、昨日おまえが言ったことを考えていたんだが……。」と少佐は始めた。

「お願いですから、叔父さん、その話はしないでください。うんざりです。僕はもう決めたんです。

叔父さんが何と仰しゃろうと、気持は変わりません。」

フォーサイス少佐は作戦を暫時退却に切り替え、話題を変えたが、後で姉には、ジェイミーの答えで知りたかった情報は全部手に入れた、種は蒔いておいたからそのうち芽が出るだろうと伝えた。

「順調、順調。まあ、見てなさいって。すぐにでも結果が出るから。」彼は満足そうだった。

一方メアリーは称讃すべき態度を貫いていた。ジェームズを避けることも、追い求めることもなかった。偶然二人が一緒になった時にも、まるで二人の間には何もなかったかのように、ごく自然に振舞い、ごく自然に話し、愛情を明白にする様子も、彼を非難する様子もまったく見せなかった。実際、

ぎこちなかったのはジェームズの方で、会話を成立させるために努力していること、メアリーと一緒にいるのが苦痛で神経質になっていることは明らかだった。盗み見るような視線をメアリーに送り、彼女はまだ苦しんでいるのだろうかと自問していた。しかしメアリーの表情にはほとんど何の感情も表われていなかった。屋外の活動で日に焼け、健康そのものの肌も何も変わっていない。もし変わったところがあるとすれば、それは瞳の表情だろうか、——ジェームズはそう思った。何も悪いことをしていないのに打たれた犬のような、困惑した、悲しそうな表情。良心の咎めを感じている彼の想像が生み出したものかも知れないが、その柔らかな茶色の瞳の中にさまざまな苦悶が見えるような気がしてジェームズは苦しかった。口元は微笑んでいるものの、己の意思に反して今も彼を慕ってやまない哀しさがそこに見て取れるような気がしてならなかった。自分はメアリーの瞳に見える苦しみを過大視しているのかも知れない。が、遂にはそれが耐えがたい脅迫観念となって容赦なく彼を責め立てた。もしメアリーが復讐を願っていたなら、さぞや満足なことだったろう。しかしメアリーは復讐など露ほども考えていなかった。彼女は、ジャクソン夫人が自分への同情からジェームズを悪し様に言うのを聞いて怒りを覚えた、とパーソンズ夫人に語った。それを聞いてジェームズは有難く思った。メアリーがジャクソン夫人に何と言ったのか、後に母が教えてくれた。

「ジャクソン様、わたしはパーソンズ大尉の悪口を聞くつもりはありません。あの人が何をしたのであれ、そうする権利はあったのです。あの人は立派な紳士としてそうなされた。それ以外の何ものでもありません。」

メアリーの振舞は彼女を知る全ての人から称讃を受けた。が、それゆえ一層、ジェームズへの非難

は高まった。

英雄として崇め奉ったことも御都合主義で忘れてしまい、今は誰もがジェームズへの嫌悪、いや軽蔑を隠そうとしなかった。まさに落ちた偶像だった。彼の名が出るや誰もが憤りを表明する。彼のすることはどれもこれも間違っている。彼の謙虚な態度も傲慢な己惚れだということになってしまう。ジェームズは村の人々の道徳観に激しい怒りを覚えた。

怒りを覚えながら、しかし可笑しなことに、彼は人々の非難に深く苦しめられていた。もともと口数が少なく内向的なジェームズは、自分に対する周りの人々の評価には極めて敏感だった。彼らの方が馬鹿で、無知で、狭量なのだと思いに言い聞かせてはみるもの、人々の敵意は彼を惨めな気持ちにさせた。彼らを軽蔑はしていても、好かれないと願ってしまう。人々の偏見に迎合する気は毛頭ないし、こちらから歩み寄るのは自尊心が許さなかったが、面と向かって嫌悪感を示されるとひどく傷ついた。今や彼は自分自身を苦しめ始めていた。何故なら、リトルプリンプトンの人々のお追従を軽蔑してきた自分が、今その誹謗中傷を軽蔑できないでいるからだ。

日曜になって、リトルプリンプトンの善なる人々が教会に参集した。ジェームズが席に着くと、クリボン夫人は振り向いて笑顔を見せたが、娘が婚約を破棄されたことに怒りの治まらぬ大佐は硬い背中を向けたままだった。

礼拝が進み、ジャクソン師が講壇に登って旧約聖書「箴言」の一節を読み始めた。「主を恐るるは悪を憎むことなり。我は己惚れと傲慢、悪しき道と虚偽の口とを憎む。(注11)」

やる気満々の牧師は、説教の原稿には常に細心の注意を払っていた。そして日曜には二回、教養のない人々のために聖書の有名な一節を取り上げて、二十分から三十分にわたってそれについて解説し、陳腐な意見を付け加えた。彼は、どんなに教養のない人にも解ることを懇切丁寧に説明するという、素晴らしい才能の持主なのだと思し上げて良からう。

同時に、他の人間の思想にも精通しているジャクソン師は、自分は思想家の一人だと自負していたから、機会があると講壇から、蔓延る異端を攻撃し、教会に集まった知性溢れる田舎者と幼い子供たちに、アタナシウス信条(注12)の幾つかの難しい点について詳細な解説を加えてやった。しかし、師が最も得意とするのは無神論者、ローマカトリック教徒、非国教徒、そして科学者たちの誤った信念に嘲笑を浴びせることだった。進化論などはお笑い種の最たるもので、今世紀を代表する哲学者たちの仮説など、九柱戯(注13)の柱よろしく、恐れを知らぬ知性をもって堂々薙ぎ倒してみせた。ただし会衆は牧師の言葉に注意を払うことはなかった。そうしたことは議論するまでもないことと思っていたからだ。それゆえ彼らは敬虔な英国国教会の信者のままでいられたのである。

しかし牧師は、熟慮を重ねた結果、今日のこの講話ではもっと差し迫った問題について語ろうと決めていた。彼は「箴言」の一節を繰り返した。次に何が起こるかを知っているジャクソン夫人は、副牧師と目を合わせ、ジェームズに興味ありげな視線を送った。実際この講話は彼を非難するためのものだったのである。ジェームズはまさに己惚れと傲慢、悪しき道を地で行く人なのだ。が、幸いなるかな、ジェームズには自分にこうした欠点があるという意識はなかったから、最初のうちこの一節が自分に向けられたものとは思っていなかった。しかし己が義務だと信じるものに一心なりトルプリ

ンプトンの牧師は、誤解があつてはならないと決めており、醜聞スキャンダルを広めようとする人が悪意ある物語を語る時の用意周到さで、或る若者のことを語った。もちろん語り手は、慈悲深くも名前を挙げることはしないが、誰のことを語っているかは聴く者全員に判つてもらいたいのである。

突然パーソンズ大佐は講話がどちらの方向へ流れているのかを理解し、恥ずかしさに下を向いてしまった。パーソンズ夫人は視線を真つ直ぐ前に向けたままだったが、普段は蒼白い頬は赤く染まつている。隣に座っているメアリーは、軀を動かすことも息をすることもできなかった。動揺を抑えられず、今にも気を失うのではないかと思つた。

「どんなにジェームズは苦しいことだろう！」彼女は声にならない声で呟いた。

聖職者の白い衣装を身にまとつたことで新たな威厳を手に入れたジャクソン師は、厳肅に、しかし激しく、非難の言葉を吐きだしている。さながらめらめらと燃える地獄の炎のようだ。三人は心からジェームズを思い遣つた。一体ジェームズはどう耐えているのだろうか。

「こんなに責めるなんて酷ひどすぎる。」そうパーソンズ夫人は思つた。

しかし大佐はさらに低く頭を垂れ、息子への叱責を受け入れていた。責任は自分にもあるのだ、こゝうやつて辱められて当然なのだ、ただじつと耐えるしかない、大佐はそう感じていた。ひとりジェームズだけが平然としているように見えた。皆の視線がちらちらと彼に注がれるが、その落ち着いた、無関心な表情には何の変化も見られない。臉が閉じられていたので、眠っているのではないかとさえ思われる。その態度を目にしたジャクソン師は、なんと不埒ふちち、なんと強情なのだと思つた。己の間違ひを認め、悔い改めた罪人になら完全なる赦しを与えるであらうに。しかしジェームズはなら

悔恨の様子を示さない。罪を犯して何が悪いといった頑固な態度を見て、ジャクソン師はさらなる折檻が必要だと考えた。

「勇氣？ 勇氣とは何でしょう？」師は尋ねた。「血が熱くなっている時勇敢な行為を成すこと、これほど容易なことはありません。しかし、柔和な心とキリスト教徒に相応ふさわしい従順さをもつて、純朴に、謙虚に毎日の生活を送ること、——これは道德的価値を伴わない、獣けだもののような勇氣とは異なり、その何倍も難しい勇氣なのです。」

師は続けて、正直で誠実であるという虚飾のない美德の方が遥かに賞賛に値するものであること、約束を守り、優しい心を持つて己の義務を果たす方が遥かに良き行ないであることを語り、さらに焦点を絞つて、今自分たちに深い悲しみをもたらしている出来事に言及し、己惚れと慢心でいっばいの若者に警告を与えた。

「奢れる者久しからず。権勢を誇つた者は必ず没落してゆくのです。」

教会からの帰り、口を開く者はいなかった。パーソンズ夫妻は皆に見られているように感じ、視線を落としたままだった。辛さに胸がいっぱいで、互いに話し掛けることもできなければ、ジェームズに言葉をかける勇氣もなかった。しかしそうした繊細さを持たぬフォーサイス少佐は、夕食の席に着くや、躊躇ためらうことなくジェームズに襲いかかった。

「さて、ジェームズ、今日の説教はどうだったかな？ ちよつとばかり心が痛んだかな？」

「どうしてです？」

「あの説教は直接おまえに向けられていた、それは明らかだと思いがね。」
「僕もそう思います。」ジェームズは明るい笑みを浮かべて答えた。「余計なお世話だつてことだけで、特に面白いとも思いませんでしたね。」

「ジャクソン師はおまえをあまり高く評価していないようだな。」少佐は、黙っていてほしいと懇願する妹の視線を無視して、笑つて言った。

「あのくらいのことでは傷ついたりはしませんよ。僕は自分が偉い人間だなんて全然思つてませんから。」

「あたしは牧師さんが間違つてると思う。ラーチャー少年を助けようとしたあなたの行為は立派よ。」パーソンズ夫人が優しく言った。

「どうして？」ジェームズが訊いた。「ジャクソンさんが言ったことは当たつてるところもある。生命を危険にさらす勇氣なんて、実際、偶然の産物ですからね。戦場じゃ偶然に身を任すしかないんです。頭の上を飛び交う砲弾だつて、見た目ほど危険じゃない。だからすぐ慣れて、そのうち何にも考えなくなる。そりゃ、時には当たりますがね。でもその時はもう怖がつたつて遅いんです。」

「でもあなたはその子を助けるために戻つたんでしょ？——いつ殺されてもおかしくない戦場に。」
「自分でも何故あんなことしたのか解らないんです。自分が死ぬかもしれないなんて全然考えてなかつた。ごく当り前のことに思えたんです。僕は実際勇敢だつたわけじゃない。なぜつて、危険だなんて思つてなかつたんですから。」

*

*

*

午後ジェームズの元にクリボン夫人から、家に来てほしいとの手紙が来た。娘と夫は散歩に出かけて留守だから、誰にも邪魔されずにお話ができるというのだ。この招待は煩わしさの極みだった。あの馬鹿な夫人の憤慨にも付き合わなければならないのか、そう思つてジェームズは苦笑いした。しかし、行くしかないだろう。こうした面倒なことはすべて自分が引き起こしたものだ。そうである以上、それらを回避したら名誉に関わる。こうしてリトルプリントンに留まつているのも、一つにはそうした厄介なこと全てに立ち向かうためなのだ。

「どうして会いに来なかつたの、ジェームズ？」小声でそう言つたクリボン夫人は、驚くほど優しい笑みを浮かべていた。

「来てほしくないんじゃないかと思ひましたので。」

「ジェームズつたら。」

夫人は溜息を吐いて天を見上げた。

「あたしはずつとあなたのことが好きだった。これからもその気持は変わらなくなつてよ。」

「有難うございます、そう仰しゃつてくださつて。」幾分か安心してジェームズは答えた。

「しよつちゆう会いに来てくれていいのよ。慰めになるんじゃない？」

「あなたもクリボン大佐も僕に腹を立てているに違ひないと思つていましたから。」

「あたしはあなたに腹を立てたりなんかしないわ、ジェームズ。……かわいそうに、レジナルドは分かつてないのよ。でも、女は騙せない。」クリボン夫人はジェームズの腕に手を置くと、瞳を覗き込んだ。「ねえ、教えて、——誰か他に好きな人がいるんでしょ？」

ジェームズは素早く夫人に視線を送り、暫し躊躇った。

「この間そう訊かれたら絶対否定したでしょうが……、でも今は……。」

クリボン夫人は笑みを浮かべた。

「そう思ったわ。ねえ、隠すことないでしょう？——あたしには。」

夫人はジェームズが自分を熱愛していると確信していた。しかし彼自身の口からそう言ってほしかった。御存知だと思いが、美しい女性にとってはたとえ道路掃除の男からのものであっても称讃されるのは嬉しいことなのだ。

「ああ、もうこれ以上自分に隠そうとしても無駄だ。」誰に向かって話しているのかを忘れ、ジェームズは声を高めた。「メアリーには申し訳ない。どんなに申し訳なく思っているか誰にも分からない。でも僕は他の人を愛しているんです。心の底から愛しているんです。この愛を諦めることはできない。」

「分かってたわ。」クリボン夫人は満足そうに溜息を吐いた。「分かってたの。」彼女は恥ずかしそうにジェームズを見た。「その人のこと話して。」

「できません。この愛は馬鹿げてて、絶対に報われないんです。でも愛さずにいられない。運命なんです。」

「人妻に恋してるのね、ジェームズ。」

「どうして！ どうして判るんです？」

「ジェームズったら。あたしを騙すことはできなくってよ。で、その人は軍人の奥さんなんじゃないやな。」

「い？」

「ええ。」

「古くからのお友達なの？」

「だからなおさら辛いんです。」

「分かってたわ。」

「ああ、クリボンさん、断言できませんが、この村で常識を持っているのはあなただけです。もし五年前、皆さんがあなたの言うことを聞いていれば、僕らはこんな惨めな状態にはなっていなかったでしょう。」

「一体全体どうして名立たる気取り屋で愚行の人クリボン夫人が唯ひとり自分の秘密を嗅ぎつけたのか解せなかった。が、今ジェームズは思っていることを隠し続けることに疲れ果てていた。」

「あなたに全てを話せばいいんですが！」

「それは止めておいた方がいいわ、後悔するだけだから。それにあなたの言いたいことは、あたしみんな判ってる。」

「この気持とどんなに戦ったか、お解りいただけじゃないでしょう。愛していると分かった時自殺も考えた、この愛を抹殺しようと。でも駄目なんです。この愛の力は僕の力より強いんです。」

「でもそこから何も生まれないのよね。」

「分かってます。勿論分かってます。僕は女誑しじゃない。苦しみながら生きてゆくしかないんです。」

自分への愛ゆえに自殺したあの可哀相なアラン・ターナーもこれほどまでは苦しまなかっただろう、——クリボン夫人はそう考えていた。

「話を聞いてくださって有難うございます。僕には話せる人がいないんです。それで時々気が狂いそうになる。」

「ジェームズ、あなたはとても良い子よ。騎兵にならなかつたのがホントに残念だわ。」

ジェームズはほとんど聞いていなかった。床を見つめたまま、辛そうに考え込んでいる。

「僕は運のない人間なんです。」

「状況がちよつと違つていさえすれば……。かわいいそうなレジナルド！」

クリボン夫人は、もし自分が未亡人だったら、この不孝な青年の求愛に絶対逆らえないだろうと思つた。

ジェームズは暇すべく立ち上がった。

「駄目でしたね。お話ししても何も良くならない。この気持を抹殺するようにこれからも頑張るしかない。で、最悪なのは、本当は抹殺したくないんです。僕は自分が恋をしているというこの自分の気持を愛している。不幸になるに決まつてるけど、この気持を失うくらいなら死んだ方がましなんです。さようなら。親切にしてください。感謝しています。あなたが同情してください。さうしてどんなに救われたか、お分かりいただけにくいからです。」

「分かるわ。惨めだつてあたしに告げたのはあなたが最初じゃない。これも運命だと思つて。」

ジェームズは何を言っているのか理解できず、困惑して夫人を見た。女の鋭い直感で、ジェームズ

の瞳の中に叶えられない恋情を読み取つたクリボン夫人は、一瞬、いつもの厳格な美德を失つてしまつた。

「ジェイミー、あなたに辛く当たることはできないわ。」夫人は例の効果観面の、悲しそうな笑顔を浮かべた。「あなたを惨めな気持で帰らせたくない。」

「あなたに何ができて仰つてやるんですか？」

クリボン夫人は素早く窓を見て、誰にも覗かれていないのを確かめると、ジェームズに手を差し出した。

「もしそうしたいんなら、ジェイミー、あたしにキスしてもよくつてよ。」

夫人は白粉を塗りたくつた頬を彼に向けた。ジェームズはかなり驚いたが、その頬に唇を当てた。

「あたしはいつもあなたのお母さんだから、いつでもあたしを頼ってくれていい、何があつても……。さあ、行って。あなたはホントに良い子。」

夫人はジェームズが庭を横切つて帰って行くのを眺めていた。そして深く溜息を吐くと、目頭の涙を拭つた。

「かわいいそうな子。」夫人は呟いた。

帰宅したメアリーは母がいつになく愛情深く優しいことに驚いた。実際、クリボン夫人は己の勝利に酔つており、敗戦が決まつたライバルに余裕を持って思い遣りを示せたのである。

数日後、驚いたことに、メアリーの許もとにドライランド氏からの短い手紙が届いた。

前略、メアリー・クリボン様

今あなたにこの手紙を書くにあたり、手の震えを感じております。それはこの手紙が、少なくとも私にとって、とても大切な問題についてのものだからです。私たちは多くのことで同じような考え方を持っていますので、申し上げたいことは御推察のことかと拝察いたします。ですから、おそらく、私の躊躇いは馬鹿げたことだと思いでしようが、状況が状況ゆえ、それもお赦しいただけるのではないかと思考する次第です。今更申し上げるまでもありませんが私は極めて内気な人間ですので、この手紙をお送りさせて頂くことにいたしました。用件を手短に申しますと、ほんの短い時間で結構ですから、私と会って頂けないかということです。これまであなたとは私にお目に見掛かる機会がほとんどなく、申し上げたいことを申し上げる機会がありませんでした。実際、長い間、私は私に与えられた義務ゆえ、この気持を抑えておく必要がありました。しかし今、状況は変わりました。そこで、数分お話しする機会を与えてくださるよう、厚かましくもお

願う次第です。

匆々

トーマス・ドライランド

追伸

つい先刻お父様に公園でお目に掛かったのですが、今日の午後はタンブリッジに御夫婦でお出掛けになるとのこと。ですから、あなたから断りのお手紙が届けられないなら、午後三時にお宅にお邪魔させて頂きたいと思っています（DV）（注14）。

「一体なぜ会いたいのかしら？」氏の意図するところは心に浮かんだが、そう思うのは自分のとんでもない虚栄心にすぎないとメアリーはその考えを追い払った。きっとドライランドさんは何か慈善事業を計画していて自分に協力してほしいということなのだろう。

「いずれにしても、メアリーは冷静に考えた。「いらつしやれば判ることだわ。」

教会の時計が三時を打つと同時に、ドライランド氏が玄関の呼鈴ベルを鳴らした。

応接間に通された氏はこれから成そうとする英雄的行為を意識してか、一張羅いっしょうらのコートを羽織り、正直そうな赤ら顔は石鹸で磨かれていた。

「会ってくださって有難うございます。『お嬢様はただいま御不在です』と言われるんじゃないかと恐れていました。」

「あら、わたしはそんな嘘は吐きません。ママはそうした嘘を悪いことだとは考えていませんが、でも嘘は嘘です。」

「素晴らしい性格をお持ちですね。」副牧師は熱を込めて言った。

「そんなことありませんわ。ただ、嘘は嫌いなんです。」

「手紙、驚きました？」

「何のことか良く理解できませんでした。」

「かなり明瞭に書いたつもりなんですが。」ドライランド氏は愛想よく微笑んだ。

「わたしはお利口ぶるつもりはありません。」

「でも、クリボンさん、あなたは賢いですよ。それは否定できません。」

「そう考えられたらいいんですけど。」

「謙虚なんですね。あなたは凄いい知性の持主だといつも思っていました。美術や文学に知的な興味を持つ人が近くに来てくれて、私は本当に恵まれています。こうした田舎では知的な話のできる人はあまりいませんからね。」

「嘘じゃなく、あなたから色んなことを教えていただきましたから。」

「全然そんなことはありません。私はただ、幸運にも、ラスキンとマリー・コレツリの作品をお貸しすることができただけです。」

「それで思い出しました、——『誠のキリスト教徒』をお返ししなくちゃ。」

「お急ぎになる必要はありません。あれは普通のつまらない小説と違って、熟読すべき本ですか。」

「さ。」

「最近本を読む時間がなかなか取れないんです。」

「分かります、クリボンさん。色々ありましたからね。本当にお気の毒に思っていました。おつと、お気の毒などと言ったら無神経ですね。」

「気にかけてくださって有難く思いますわ。」

「もつと正直に申し上げますれば、実はあまり気の毒だとは思っていないのです。『泣く者あれば笑う者あり』です。」

「どういうことなのか解りかねますが。」

「クリボンさん、私が今日ここへ伺ったのは、思い切って大切なお話をしたかったからです。少なくとも私にとって大切な……。遠回しに申し上げますつもりはありません。こうしたことに関しては、単刀直入に申し上げますのが常に最善の途だと信じています。」副牧師は咳払いをすると、誠に聖職者に相応しい態度を取った。「クリボンさん、わたくしは謹んであなたにわたくしの妻となつてくださるようお願い申し上げます。」

「えっ!」

メアリーの頬は真っ赤になった。心臓は困惑と不安とで早鐘を打っている。

「申し上げておくべきだと思いますが、私は齢は三十三。財産も——多いとは言えませんが——多少はあります。ですから、贅沢さえしなければ、教会からの手当てで充分に妻を養ってゆけます。なお、私の父は四半世紀にわたってイースタムの教区司祭を務めておりました。」

メアリーはこの時には落着きを取り戻していた。

「結婚のお申し込み、とても名誉に思います。わたしがあなたに値するような者でないことは、わたしが一番分かっておりますから。でも、お断りしなくてはなりません。」

「クリボンさん、今すぐお返事をいただきたいというわけではありません。あなたが顔を赧らめたのを見て、驚かれていますのは判りました。パーソンズ大尉との婚約が破棄されて幾らも経っていないのに、こんなことを申し上げたのですから。ですが、よく御検討いただければ、それほど驚くには当たらないことがお解りいただけるかと。あなたがパーソンズ大尉と婚約している間は、私は義務としてこの気持を抑えておりました。が、今はもう抑えておけない。事実私は長い間あなたに好意を寄せていました。今それを隠しておくのは間違っていると思うのです。」

「わたしをそんなに高く買っていたら嬉しく思います、……」

「いえいえ、あなたは最高の……、ええ……、最高の称讃、評価に値する方だ、そうはつきり言えません。」ドライランド氏はメアリーを勇気づけるように言った。「クリボンさん、私はこの教区に来てすぐにあなたを密かに愛するようになりました。あなたを見た瞬間に、何と言うか、親和力のようなものを感じたのです。私たちは趣味がよく似ているし、芸術、文学を解する力がある。あなたがピアノでメンデルスゾーンあの素晴らしい旋律を奏でた時、私がテニソン卿の流れるような詩を読んでさしあげた時、私は感じたのです、——私の幸せはあなたと共に生きることだと。」

「でもわたしは、ずっと愛してきた人を裏切ることではできません。」

「すみません。ちよつと性急すぎたようですね。」

「時間が経つてもこの気持は変わらないと思います。あなたにはとても感謝していますが。」

「その必要はありません。私は常に私の義務を果たしてきただけです。あなたが婚約なさっている間、私は自分に溜息を漏らすことも許しませんでした。しかし今、状況は変わったと思うのです。」

私は勇猛な士官ではありませんし、勇ましい行為をしたこともありません。ですからヴィクトリア勲章がこの胸を飾ることもない。パーソンズ大尉と比べたら、財産も多くない。しかし、私は真心をあなたに差し上げられる。真実の敬意に満ちた愛を差し上げられます。ああ、クリボンさん、時が経てばこの結婚の申し出を好意的にお考えになるかもしれない、——その希望を与えてはくさいませんか？」

「申し訳ありませんが、気持が変わることはありません。それは確かです。」

「私は間もなく聖職禄を与えられることになっています。私たちがキリスト教の同志として結ばれ、人々の役に立つ生活を送る、それをどんなに願っていることか！ あなたは慈愛の天使です。今私が厚かましくも申し出ている地位にあなたほど相応しい人はいない、そう思わずにおられないのです。」

「聖職者の妻になることほど心惹かれることはありません、それは否定しません。周りの人たちに良い影響を与えて、その人たちの生活を向上させられるでしょうから。でも、わたしはパーソンズ大尉を愛しています。たとえ大尉の気持がわたしから離れてしまったとしても、それは少しも変わりません。」

「いやア、胸にグサつとくるお言葉です、クリボンさん。」と副牧師は熱心に続けた。「あなたの

そのお気持は立派だと思えます。称讃に値する。本当に素晴らしい。ところで、もしよろしければ、ちよつと秘密を告白させていただきたいのですが……」副牧師は顔を赧らめ、躊躇った。「実は、あなたをペネロペ（注15）になぞらえた詩を幾つか書いたのです。差支えなければ、お送りしたいのですが。」

「ええ、是非読ませてください。」メアリーはちよつと頬を染めて微笑んだ。

「もちろん私は詩人ではありませんから、大したものではありません。詩人になるには忙しすぎるのです。しかしこれは私の気持を正直に吐露したものです。」

「そうでしょうね。」メアリーは励ますように言った。「正直であること、誠実であることは世界一の詩人であることより大切なことですわ。」

「そう仰しゃっていただいて、有難うございます。クリボンさん、一つお訊きしたいことがあるのですが……、私には、あなたから御覧になつて、何か御不満な点がおありなのでしょうようか？」

「そんなこと！ 何もありませんわ！ どうしてそんなことをお尋ねに？ あなたには最高の敬意と称讃を感じています。今日あなたが下さった、勿体ないほどのお言葉は一生忘れません。これからまずと、あなたが一番の友達だと考えさせていただきますわ。」

「それだけですか？」副牧師は落胆したようだった。

メアリーは手を伸ばすと、「あなたの妹になります。」と言った。

「ああ、クリボンさん、あなたの愛が報われないのを考えると悲しくなります。どうして私はパーソンズ大尉ではないのか。クリボンさん、本当に私に希望はないのでしょうか？」

「パーソンズ大尉が生きている限り、わたしの気持が変わることは絶対ありません。そう申し上げるのが、あなたに対しての正しい態度だと思います。」

「私も軍人だったら良かったのに。」ドライランド氏は呟いた。

「あら、そういうことじゃありません。聖職者ほど高貴な仕事はありませんわ。もし慰めになるのなら、正直に申し上げても良いと思いますが、仮にわたしがパーソンズ大尉を知らないでいたら、事情は違っていたかもしれません。」

「さて、そろそろお暇して、この痛手に耐えることにした方が良さそうですね。」

メアリーは手を差し出した。副牧師はこれ以上ないほど慇懃に屈むと、その甲にキスをした。それから聖職者用の平たい帽子を手にとって、急ぎ足で館を後にした。

ジャクソン夫人には女の鋭い勘があったから、何が起こったかたちまち見抜いてしまったのも不思議ではない。ドライランド氏は牧師館でお茶に与りながら、生来の男らしさをもって己が落胆に向き合っていた。氏は一人鬱ぎ込んだり、寝室に籠もったりする人ではなく、むしろ果敢に戦場に赴こうとする人だった。そして、さしあたりの戦場となるのはジャクソン夫人の応接間だった。

しかし、いかに剛胆なドライランド氏といえども、不首尾に終わった求婚の傷みを隠しきれるものではない。氏は、いつもは旺盛な食欲で食らいつくプラムケーキに手を着けることなく、暗い表情で紅茶を掻き回していた。

「ドライランドさん、どうかなすったの？」ジャクソン夫人が尋ねた。その視線はどんなに深く匿さ

れた秘密でも見抜いてしまいそうだ。

ドライランド氏はそう訊かれてハツとした。「いえ、別に。」

「あなた、今日は何だか変ね。」

「ちよつと落ち込んでいます。」

「あら！ 夫人は、異端審問官が被告を問い詰める時のような、いかにも疑わしそうな調子で応じた。「何でもありません。ただ、人生面白可笑しいことばかりではないなど。ハツ、ハツ。」

「今日クリボンさんのお宅を訪ねたと仰しゃったわよね？」

ドライランド氏の顔が赤くなった。氏は困惑を隠すため、ケーキを口いっぱい頬張った。

「ええ。」話せるようになると、氏は答えた。「ちよつとお邪魔しました。」

「ドライランドさん、あたしを騙すことはできなくってよ。あなた、クリボンさんに結婚を申し込んだんでしょ。」

彼は口の中に残ったケーキを丸呑みにした。「その通りです。」

「で、断られた。」

「ええ。」

「ドライランドさん、あなたは立派なことをなすったわ。是非アーチボルトに話さなくちゃ。」

「いえ、それは止めてください。噂が広まるのは困ります。」

「いいえ、話します。『燈火を灯して柵の下に置かず（注16）』ですわ。あの気の毒なお嬢さんにプロポーズするなんて！ でも、あなたならなさりそうなことね。いつも言ってるんですけど、聖職に携

わる者は、誰も見ていなくても、常に立派なことをしてらるんですよ。あなたこそヴィクトリア勲章に値すると思うわ、ヴィクトリア倫理勲章。あの邪悪な、非道い男なんかより、ずっと。」

「私は特に褒められるようなことをしたわけではありませんから……。」副牧師は慎み深く夫人を諫めた。

「いいえ、立派な行為よ。かわいそうに、婚約を破棄されて苦しんでるメアリーにとって、どんなに慰めになったことか。」

「ジャクソン夫人、事実私もパーソンズ大尉の薄情さには腹が立ちましたが、それ以上に、私は前からずっとクリボンさんを愛していたのです。」

「判つてた。判つてましたよ。二人がご一緒のところを見て、あたし、アーチボルトに言つたんです——ホントに似合いの二人ねって。あのつまらない男なんかより、絶対あなたの方がメアリーに相応しい。」

「クリボンさんもそう思ってくれるといいんですが。」

「あたしが行って話してみます。メアリーはあなたを受け入れるべきよ。あなたはまるで中世の騎士みたいに振舞ったんですもの。ドライランドさん、あなたこそ真の聖人ですわ。」

「ジャクソン夫人、照れ臭いことを仰しやらないでください。」

噂は野火のように広まり、副牧師は一躍男を上げることとなった。異教徒の英雄も、キリスト教の殉教者もこれほど気高い行動は取れない。かつてはジェイミーに与えられていた尊敬の念がまるごとドライランド氏に移行された。氏はまさに時の人となったのである。誰もが氏の雄々しい行為を考え、

自分もより高貴に、より純粹になったように感じていた。氏は自分の足下に供せられるオマージュを密かな満足を持って受け入れていたが、自分は何も特別なことをしたわけではないと言って、謙虚そのものだった。何が起こったか知らないであろうジェームズについては寛大な保護者のように語り、メアリーについては優しく、敬意を持って、控えめに語った。大主教だとして、これほどの繊細さ、男らしさ、上品さを示すことはできなかったであろう。

「皆んながどう言おうとあたしは気にしない。」ジャクソン夫人が声を高めていった。「ドライランドさんはパーソンズ大尉の十倍は価値のある人よ。とつても謙虚で本物の紳士だわ。それに比べて、パーソンズ大尉は……、勇敢ですねって言われた時だって、ただ、うんざりだって顔してたんですよ。」

「あの若造はどうしようもない自惚れ屋なんだ。」ジャクソン牧師は吐き捨てるように言った。

しかし、プリンプトンハウスではこのプロポーズに戸惑いを覚えていた。

「もしメアリーが受け入れたら？」パーソンズ大佐が心配そうに言う。

「そんなこと絶対ありません。」とパーソンズ夫人。

フォーサイス少佐はジェームズに報せるべきだと言う。そうすればきつと嫉妬心を覚えて事態が変わるだろう、と。

「あたしから話します。」

夫人は息子と二人きりになると、裁縫の手を休めることなく、突然言った。

「ジェームズ、ドライランドさんがメアリーにプロポーズしたって、聞いた？」

ジェームズは顔を上げたが、特に驚いた風でもなかった。「それで、受け入れたの？」

「ジェームズ！」母親は憤慨して叫んだ。「どうしてそんなこと訊くの？メアリーに失礼よ。分かっているでしょ？——あの子は絶対あなたを裏切るような子じゃない。」

「結婚すればいいのに。副牧師とならお似合いのカップルだと思うな。」

「ジェームズ、そんな、あの子を侮辱するようなこと言う必要ないでしょ。」

ジェームズと両親との間の緊張は和らぐどころか、ますます高まっていった。そもそもジェームズが帰国した時から双方の間には壁があつて、三人ともそれに心を痛めていたのだが、その壁はどんどんと迫り上がり、もはや打ち壊せないとどこまで達してしまつたように見える。壊そうと努力すればするほど壁は強靱な姿を現す。まるで刈れば刈るほど繁茂する熱帯の植物のようだ。また、会話を交わそうとすると、そこには悪戯好きな悪魔が潜んでいて、双方に異なる言語を使わせているかのようになり、互いを完全に誤解に導く。親子としての愛情はあつたものの、赤の他人と一緒にいるようで、同じ観点からものを見ることは全くなかつた。

パーソンズ夫妻はその全人生を固定観念の下に生きていた。当時の同じ階級の人々同様、確な教育を受けておらず、知識といえば独善的、狭量なものだつた。己の無知を知るには膨大な情報が必要とするものだが、善なる夫妻はそれを意識することすらなかつた。自分たちは必要十分な知識を持つていると感じ、最も議論を要する種々の問題についても、当然ながら、自分たちの考えが絶対だと思つていた。夫妻のものの見方は考えられないほど偏屈だつた。己の義務を立派に果たそうとする意思は十二分に持つていたが、何がその義務であるかは、同じ階級の人々が言うことをただ闇雲に信じ、受

け入れていたにすぎない。実際の範囲は狭く、誤つた理想と醜悪な偏見に取り巻かれていた上に、神慮だと言つて己の道に無理矢理不要な障害物を置き、これしか行くべき道はない、他の道は全て地獄に通じると信じて疑わなかつた。新しい何かを自分で見つけ出そうとすることもなく、自分で考へて行動することもなかつた。常に自分たちが属す階級の習慣に従つて考へ、行動していたのである。夫妻は生きた人間ではなかつた。教条主義の機械だつた。

社会に出てすぐにジェームズは、自分が育てられてきた環境が現実とは程遠いものであることを悟つた。彼は謂わば模型の船——帆は役に立たないし、綱は強度不足、舵は動かない——そんな船に乗つて大海洋に乗り出した水夫だつた。だから、さして強くない世間の風に暫く当たつてはいるうちに、確固とした基盤を持つてるように思われた慣習は綿毛のように吹き飛ばされてしまつた。しかし同時に、好奇心でワクワクしている自分があることにも気付いた。危険に身を曝すことになる冒険に、果敢に挑戦してみたくて堪らなくなつた。それは物理的な危険ばかりでなく、これまでは知らなかつた知的な分野においても同様だつた。彼は手当たり次第むさぼるように本を読み、様々な事象、様々な考へ方を知つた。目の前に拡げられる知の宇宙は、息を呑んで見入つてしまふ演劇のようだつた。知識とは地中に広がる木の根っこである。その巻きひげのような根は、自分を取り巻く生の諸相に吸い付いて離れない。ジェームズは生活のなかに新しい美、新しい興味、複雑な多様性を発見し、うきうきした気分になつた。しかし取分け感じたのは何とも言えない開放感だつた。やがて彼は、それまでの生活を振り返つて、恐怖のようなものを覚えるようになった。自分は無知という手枷足枷に雁字搦めにされていたのだ。

リトルプリンプトンに帰ってみると、しかし、父と母はジェームズが家を出た時のままで、昔と同じことを行ない、どんなに喫緊の問題に関しても昔と同じ陳腐な意見を述べた。無邪気と言ってもいいその純真さを見ると、ジェームズは、文明化し教育を施してやったつもりでも、何年か経って訪ねると、相変わらず鼻には金の輪をぶら下げ、顔には黄色の粘土を塗りたくっているアフリカの原住民を思い出すのだった。両親は、誰もが当然知っているはずのものを無視し、疾うに死に絶えたと思っていたものを信じ切つて、彼から見れば時代遅れの考え、因習の数々を、金科玉条、鉄の掟と捉え、全てそれに副つて毎日を送っていた。最初のうちジェームズは、肩を竦めてそうした偏見を軽くあしらうことに吝かでなかった。が、やがて父と母が自分をその牢獄に戻そうとしていることに気がついた。無意識にであることは間違いないし、最大の愛情を込めてではあったが、二人は再び彼にあの煩わしい軛を掛けようとしているのだ。外すのにあんなにも苦勞した軛を。

ジェームズが学んだことがあるとすれば、それはどんな危険を冒しても自分で考えろということ、権威を疑ってみること、人生を批判的な目をもって眺め、いかなる既存の解釈も受け入れることなく理解しようとするのだった。そして何よりも、あらゆる問題には二つの面があることを学んでいた。しかし彼の両親はそのことを全く認めようとしなかった。二人にとつては一つの見方だけが絶対に正しく、もう一つの見方は絶対に間違っているのだ。その中間は存在しない。自分たちが信じているものを疑うことは、馬鹿げたこと、さらには邪悪なことだった。時にジェームズは、父が底知れぬ無知ゆえに独断的な意見をさも満足そうに述べるのを聞いて、激しい怒りを覚えるのだった。確かに父ほど謙虚な人はいないだろう。しかし、不確実であるとしか言いようのない問題に関しても、父は自分

の考えに固執した。そうした時の父の態度はほとんど傲慢と言ってもよかった。

さらにジェームズは両親がいかに器が小さく偏見に満ちているかを知って怖ろしくなった。時間の無駄だと言つて本は読まず、関心があるのは、隣人のことや、自分たちを取り巻く生活の些事といったことばかり。そうした狭い世界にどっぷり浸かつて、それで良しとしている。その一方で自分たちは高い理想を持っている、高潔な人生を送っていると思ひ込んでいる。その様はナマケモノが自分の巢のなかに閉じ籠もっているようだった。いや、ナマケモノ以下かもしれない。ジェームズがちよつと変わったことを話題にすると、面白くない、難しく理解できないと言う。だから両親と話す時にはまるで子供に話すように話さなければならぬ。ジェームズはこうしたうんざりする日々が果てしなく続くのかと思うと居た堪まらない気持だった。

時には父が仕掛けてくる議論を避けられず、気が狂いそうになることもある。パーソンズ大佐には弱い人間によく見られるしつこさがあった。何か生憎の、有害な力が働くと、かつて大変な苦痛を与えたあの傷口が広がるようで、そうなる、いつもの優しさは影を潜め、抑えられない苛立ちを見せるのだった。ある日のこと、新聞を読んでいた大佐が、

「残念ながら、またまた退却させられたようだ。」と新聞から目を上げて言った。

「あら！」

「おまえは喜んでいるんだろう、ジェイミー？」

「とんでもない。どうして喜ぶんです？」

「おまえはいつも祖国の敵を支持してきたからな。」大佐はフォーサイス少佐の方を向いて説明した。

「ジェームズはもし自分がボーア人だったらイギリスと戦ったと言うんだ。」
「そりゃ、また、軍法会議もんだ！」少佐が叫んだ。

「本気で言ってるんじゃないやありませんよ。ねっ、ジェイミー？」パーソンズ夫人が言った。

「いえ、本気でですよ。」ジェームズが分かったこと以外の発言をすると、両親は決まって単に受け狙ったものだと考えるのだが、ジェームズはいつもそれに苛立っていた。「ねえ、母さん、もし母さんがボーア人だったら、絶対干し草の陰から僕らを狙い撃ちしますよ。」

「ボーア人は泥棒だ。イギリスのものを略奪しようとしているんだ」と大佐。

「ボーア人も僕らについて同じことを言ってますよ。」

「しかし正義はこちらにある。」

「ボーア人もそう確信してます。」

「神様が両方に味方することは不可能だ。」

「不思議なのは、イギリス人もボーア人も神様が、敵じゃなくて、自分たちを守ってくれると信じてることです。」

「神様はあたしたちと共にいらっしやる。それを疑うなんて良くないわ。これは正義の戦争なのよ。」とパーソンズ夫人。

「ボーア人があの悪党のクリューガー（注17）に騙されなかったら、イギリスに戦争を仕掛けたりはしなかったんだ。」

「ボーア人ってのは変わってますよね。」ジェームズが言った。「イギリスに従ってればいろいろ結

構な恩恵を受けられるのに、それより独立の方がいいって言うんだから。僕が不思議なのは、ボーア人がクリューガーは偽善者だと思ってること、——これ本当ですよ。でも彼の言うことなら何でも従うんです。本心から自分の正しき、自分の使命を信じてない指導者なら、あんな影響力持てないはずなんですがね。力を持ちたかったら、信念も持つてなくちゃいけないでしょう。でも、強い信念を持つてる人ってのは、得てして、度量が狭くて、意地悪になりがちですよね。」

「もしクリューガーが真つ当な男だったら、政治家の腐敗や汚職を看過するなどということはなかっただろう。」

「同じ一人の人間の中に色んな矛盾した性格、矛盾した感情が併存（へいぞん）してることとは珍しくも何ともない。首尾一貫した人間なんて僕には考えられませんね。」

「嬉しいことに、根っからのイギリス人は皆クリューガーはやくぎでござるつきだと考えている。」

「でも百年後には、ひよっとしたらイギリス人は彼を愛国者だった、英雄だったって考えてるかもしれませんよ。百年前には父さんのような感情的な見方をする人もいたんだなってことになってるかもしれない。トランスヴァールだって、今のポーランドのように見られてるかもしれない。」

「ジェームズ、おまえはボーア人の回し者か。」

「そんなことありません。でも、世論がこんなに割れてるんです。僕はこの戦争を正当化するのに苦労しました。僕にとっちゃどうでもいい人たちを何故殺しに行ったのかって。」

「それが女王陛下に仕える士官の義務だからだ、そうだろう。」

「ちよっと違うんですね。で、結論として、僕は人を殺すのが好きだからなんじゃないかって。僕の

血の中に闘争本能があるんです。鉄砲で何かを撃つる時ほど幸せを感じることはない。虎狩は楽しいスポーツですよ。標的が人間じゃスポーツとは呼ばませんが、充実感はある。それが僕個人としての戦争の正当化です。じゃあ社会の一員としては？　するとまた別の理由が見つかるんですね、——戦争するのはすべての生き物が生まれながらに持つる本能だからなんだって。闘争本能があるから進歩もあるし文明も生まれる。でもそれだけじゃない。この本能は存在の条件そのものなんです。その点じゃ人間も獣も植物も同じ条件に置かれてる。絶えず戦つてないと自分が抹殺されちまう。脇に座つて傍観してはられないんです……。ある国が隣の国の領土が欲しけりゃ、それを奪う権利は充分ある、——可能ならばですがね。勝てば官軍なんですから。僕らイギリスはトランスヴァールが欲しかった。増え続ける人口のために、貿易のために、大国であり続けるために。それがトランスヴァールを奪う僕らの権利です。ただ一つ残念なのは、イギリスがああでもないこうでもない、くだらない理由をこじつけてるんです。見苦しいですよ。」

「それがおまえの考えなのか。私にはまったく卑しい考えに思える。」

「僕は科学的だと思えますが。」

「人間が科学的な理由で戦争に行くと思うのか。」

「いいえ、勿論違います。良く解つてない人が大部分ですから。大抵の人間は抽象的なことは考えられないんです。お目出度いことに、感情的で情緒的だ。大袈裟に飾り立てた言葉で煽ればイチコロですよ。そういう大衆のために、新聞という新聞、劇場という劇場でユニオンジャックが振られて、イギリスは輝かしい由緒ある歴史を持つてるんだと愛国心が吹聴されるんです。そうした大衆のために、

戦場で残虐行為があつたと報告される、——大抵は捏造ねつぞうですがね。文明なんて野蛮な人間を覆つている薄いベニヤ板にすぎません。そんなものは簡単に剥がされてしまう。そうなればアメリカインディアンと何も変わらない。でも、一般的にはずつとお行儀は良いですがね。ポーア人は悪い人間じゃありません。イギリス人も悪い人間じゃない。でも、両方とも生きていけるだけの土地はない。だからどっちかが出て行かなくちゃならないんです。」

「私の父は義務と名譽のために戦つた。祖父もそうだ。」

「人間が戦うのは、実際は、いつも同じ理由です、——自己保存と自己利益、このどちらかです。あるいはこの両方のためです。でも、ひよつとしたら、大袈裟な言葉が叫ばれている今ほど、この真実がはっきり判つたことはないんじゃないでしょうか。なにもここ数年で世界と人間が急に変わったなんてことはありませんからね。」

暫くしてパーソンズ夫妻だけになった時、夫が息子の言葉を気に病んでいる様子を見て、夫人はその肩に手を置いて言った。

「心配しないで、リッチモンド。神様を信じて祈れば、きつとうまく行くわ。」

「あいつをどう考えたらいいのかわからない。」大佐は悲しそうに首を振った。「フランシス、あれは私らの子供じゃない。冷淡で、冒瀆的で……、我が家の面汚つらよごしだ。こんな言葉を使って、神よ、赦し給え。」

「あの子をそんなに悪くとらないで。本気で言つてたんじゃないと思うわ。それにずっと躰の調子が

悪かったのよ、ねっ、そうでしょ？ だからまだ元のジェイミーに戻っていないのよ。」

大佐は辛そうに溜息を吐いた。

「あいつが戻るのを楽しみにしていた頃は、こんな風になるだろうとは思ってもみなかった。」
一方、ジェームズは外出していた。人気がない道を彷徨し、新鮮な大気を胸一杯に吸い込んでいた。というのも、家は温室のようだったからである。閉め切られ、空気の淀んだ空間。そこでは自由に考えることもできなければ、理性の光に照らしてものを見ることもできなかった。時に頭に重りが載せられているように感じることさえあった。彼を下へ下へと押し潰し、遂には脆かなくてはならなくなる、そんな感じなのだ。

彼は節度を欠いたことで自分を責めていた。父の不幸と病気を思い出せば、もつと上手く対処することもできただろうに。何と言っても、か弱い老人なのだ。もつと自制することも難しくなかったはずだ。今頃家では両親が悲しい思いをしていることだろう。腹を立てているかもしれない。しかし二人を喜ばすことは、取りも直さず、自分の考え、自分の行動をすべて二人の指図に合わせることであって、自分が自分であることを諦めることなのだ。二人は圧政のなかでも最も耐えがたい圧政を彼に行使したいと願っている、——愛の押し付けだ。その愛に報いるためには、行動の自由も、精神の自由も棄てなくてはならない。それは、二人を幸せにしてやりたいと心から願っていたとしても、あまりに大きな代償だ。そう考えた時ジェームズは、突然、怒りに襲われた。なぜ自分たちは間違っていないとあんなにも自信を持って言えるのか。歳を重ねた者の考えることは絶対正しいなどというのは途方もない推定にすぎないではないか！ 子供としての義務と二人が考えているのは親の権威を受け

入れることだが、その権威がどこから来るかと言えば、二人が賢いからではなく、二人の方が歳が多いからなのだ。小さかった頃にも親の言葉には絶対従うように言われたが、今また、同じ服従が要求されている、——その偏見、その狭量、その無知に従えと。口にしそ出さないが、二人は自分たちの信念は間違っていないと確信し、それに満足している。しかし馬鹿げているとしか言い様がない。それは、自分が王であるのは神の意志なのだから、自分のすることが間違っているはずがないと王が言い張るのと同じではないか。

彼は父が辞職せざるを得なくなったあの恐ろしい失態のことを考えて、軽蔑の念を覚えた。親を軽蔑するのは苦く辛いことだった。父を信じきっていたジェームズは、最初のうち、父が誤った行動を取ったとは想像もできなかった。父がある作戦を選んだということ自体、その作戦が適切なもの、正しいものであった証拠なのだ。責任を負うべきは上官にある、父を適切に使えなかったのだから。そうジェームズは思っていた。しかし、あの出来事を子細に検討してみれば、真実はあまりに明らかだった。その考えに至った時、彼は思いがま毀られたようで、暫くは屈辱感から立ち直れなかった。事実は証明していた。ああ、あまりにもはっきりと証明していた、父に隊を指揮する能力がなかったことを。ジェームズは愕然とした。耳の中で唸りを上げる残酷な言葉を聞くまいとした。が、聞かざるを得なかった。頓馬、間抜け、大馬鹿、気狂い。しかもそれだけでは済まなかった。あの愚行は犯罪と言ってもよかった。軍法会議に掛けられなかっただけでも有難く思わなければいけないのだ。

ジェームズはこんな苛立たしいことは考えまいと、先を急いだ。豊かで肥沃なケントの草原はきちんと鉄線で囲われ、人間の手が加えられているのが判る。視界に入るものに手付かずのものは何もな

い。不格好な枝が切り落とされ、剪定された木々の一本一本が、全体の調和を保つよう配置されている。どこか「自然」自身が或る形式の影響下にあり、それに厳格に従って生きているようだ。美しいには美しいが、しかし、暫く眺めていると退屈になってくる美しさだ。それは人間の不自由さを強調し、どうしても逃れられない因習を思い起こさせる。緑の木々に覆われた谷間も、陽が当たっていれば心地よく涼しげだが、西の空に雲が湧き、丘を厚く覆うようになると、周囲を取り囲まれて圧迫されていくように感じられる。そうなると、整った自然の姿が耐えがたいものになる。躰に傷を負った時のように叫びたい気持になる。黒ずんだ楡の木々が整然と並び、牧草が丁寧に手入れされた風景は、大きな監獄の艶めかしい庭のようだ。空気は囚人の吐く息で淀んでいる。

ジェームズは新鮮な大気を求めて喘いだ。南アフリカの広大さを思った。無限に続く大草原、見上げれば、真つ青な空がさらに広く拡がっている。あそこでは、少なくとも、自由に呼吸ができる。手足を自由に伸ばせる。

「なぜ俺は帰って来てしまったんだ？」彼は叫んだ。

一瞬一瞬がまさに生きるに値した日々のことを思うだけで、ジェームズの血は騒ぐのだった。あそこでは、実際、何の束縛もケちな思惑もなかった。人間は断固としていて、強かった。それに比べてイギリスは、憐れになるほど弱く、卑しく、虚栄心でいっぱいなの、くだらない人間ばかりだ。心躍る冒険、奔放な生き方、自分が自分の主なのだという気持があれば、困難や窮乏が何だというのだ。

灰色の雲が谷間を覆い始めた。雨になりそうだ。水滴を含みながら、それを落とすのを我慢している雲を見ていると、ジェームズは不快な気分になった。

「こんなところには居られない。」彼は呟いた。「こんなところに居たら気が狂ってしまう。」

ジェームズは、突然、逃げ出したい気持に襲われた。雲はますます低く垂れ込め、それに押し潰されないうちには頭を低くしていなければならぬような気がした。少しなりともここを離れられれば、心の平穏を取り戻せるかもしれない。自分が居なくなることが、愛情を回復する唯一の方法かもしれない、——少なくとも、父との間の。ジェームズは苦い思いでそう考えた。

彼は家に戻り、両親に自分はロンドンへ行くと告げた。

淀んだようなリトルプリンプトンの後だったから、ヴィクトリア駅の騒々しさは殊更救いに感じられた。荷物を待つ間、彼は様々な動きを眺めていた。「ほら、退いて退いて！」と押されてゆく荷車。辻馬車の屋根に重い荷物を持ち上げる赤帽。あっちへ走る人、こっちへ走る人。客を待つ馬車の群れ。彼は一台を選んでそれに乗った。車窓から見る駅前駅前の混雑！ ウイルトン街は陽気でむさ苦しく、遅い生活なまぶりが感じられる。そうしたものに彼は浮き浮きした気分になった。フォーサイス少佐の助言に従って借りたジャーミン街の部屋に着くと、早速歩いて倶楽部に向かったのだが、ロンドンロンドンは本当に久しぶりだったので余所者になったような気がして、商店の輝き、ピカデリーサーカスの喧噪といった見慣れた風景に嬉しい驚きを感じ、掲示板に貼られた様々な広告を子供のよう立ち止まっては眺めた。昔の仲間に会うのを楽しみにしていたから、ピカデリーへ向かっている間、もしかしたらぶらぶら歩いている仲間に出会えるのではないかと期待してもいた。

クラブに着いて、一応形式的に、自分宛の手紙があるか尋ねた。

「なかったように思います……。」と受付の男は言いながら振り返って、棚から手紙の束を取り出し、ざっと調べた後、一通をジェームズに手渡した。

「あれ、誰からだろう？」

突然心臓が驚掴みにされた。血が頭に上り、手足が震えるような気がした。プリチャード・ウォーレイス夫人の筆跡だったからだ。封筒には一ペニーの切手が貼ってある。ということは夫人はイギリスなのだ。しかも消印はロンドンになっている。

彼は玄関ホール玄関ホールの窓辺に置かれたテーブルのところへ行った。数々の思い出が波のように押し寄せる。封筒からは香水が匂う（何と夫人らしいことか、そして何と悪趣味なことか）。夫人の笑顔と瞳の表情が脳裡に浮かび、手紙に熱くキスしたい衝動に駆られた。倦怠感倦怠感は吹き飛んでいた。嵐模様の黒雲がちりぢりに消えてなくなり、地上が輝かしい太陽で穏やかに覆われたような、気が狂わんばかりの幸福を感じた……。と、その時、突然の衝動に駆られ、手紙を開封することなく何度も引き裂くとゴミ箱に棄てた。彼は背筋を伸ばして喫煙室に入った。

部屋を見回したが知合いが誰もいなかった。テーブル上の雑誌を手にして椅子に座った。が、何か恐ろしいことが起こるのではないかと思うほど、激しく血管が頭の中で脈打っている。どこか見えない離れたところで小鬼ソームが鉄床かたどを叩いているように、それは規則正しく忙しく響いていた。

「ロンドンにいるんだ。」ジェームズは繰り返した。

いつ投函されたんだろう。消印くらいは見ても良かったんじゃないか。一年前だろうか。それとも最近だろうか。何ヶ月も棚に置かれていたようには見えなかった。あれはパルマヴァイオレットの香りじゃなかっただろうか。まだあのひどい香水を使っているのか。俺が負傷してアフリカから帰ったのを新聞で知ったに違いない。何が書いてあったんだろう。どうせ一言二言お目出度うの言葉だけだ

つたんだらう。それとも……、もつと？

三年経った後でも、筆跡を見るだけでこんな苦しい気持ちにさせる力を持つていたとは！ 夫人に会いたい、会って話したい。ジェームズはかつてと同じ恐慌パニックに捉えられた。俺は自分の弱さ、怖ろしい屈辱感に負けて逃げ出したのだ。それが唯一、夫人への抵抗だった。だから手紙を読まないで捨てたのだ。夫人が何千マイルも離れたところにいる分には、自分は夫人を愛しているのだと認めても危険はなかった。しかし今は違う。夫人は手紙に何を書いたのだろうか。何か女性特有の不思議な力で、今でも愛していることが分かったのだろうか。会いに来てと書いたのだろうか。ジェームズは夫人との会話を思い出した。

「ああ、わたしロンドンへ行くのって大好き！」夫人は他の女性とは全く違うエキゾチックな科こなを作り、両手を拡げて叫んだのだ。 「思う存分楽しめるんですもの。」

「何をなさるんです？」

「何もかも。で、かわいいように、一人で待つてるデイックには週に三回手紙を書いて、まだやってないことを教えてあげるの。」

「旦那さんをないがしろにする女性には我慢できませんね。」

「あなたったら。あなた楽しいことは何でも我慢できないのよね。あなたの理想の女性像、——そんなの持つてる人、他にいないわ。野暮ったくて、堅苦しくって、もう、聞いているだけで嫌なっちゃう。」

ジェームズは黙っていた。

「ねえ、今わたしと一緒にロンドンにいられたらって思わない？」 婦人は続けた。「あなたとわたし。どう？ わたしが色んなところへ連れてってあげる。赤ちゃんみたいに初心うぶなんですもの。」

「そうお思いですか？」 ジェームズはちよつと傷ついた。

「で、ロンドンへ行ったら——わたしただけだよ——あなた何がしたい？」

「さあ、判りません。そうですね、ちよつとしたパーティーをやって、どこかで夕食をとって、それから、サヴォイ劇場で『ミカド(注18)』を観る。」

夫人は笑った。

「そうね。判るわ。パーティーって四人のパーティーなのよね。あなたとわたしと、それに二人の伯母様、——独身のね。きちんと坐って、お天気の話をして、それから四人乗りの馬車で帰る、——悪さをしないように。そういう夜になるのよね。で、伯母様たちに無事見送られて、部屋に帰ったら、わたしは「ああ、退屈だった」って叫ぶのよね。ねえ、わたしここじゃ誰にも文句を言わせない、ごく当り前の生活してる。だから、自由になったら羽目を外したいのよ。で、二人でロンドンへ行ったら何をしたいか話してあげる。一緒にやってってくれるって約束してくれる？」

「もしできることでしたら。」

「よろしい。では……、まず、あなたはできるだけ速い二人乗りの馬車でわたしを迎えに来る。馭者には今日は思いっきり飛ばすようにって言うておくこと。で、ロンドンでも一番高価なレストランで——お願い、一番高価なお店よ——そこで二人だけで食事する。テーブルは部屋の真ん中にしてね、周りにはいる気取った、いかかわしい人たちがよく見えるように。評判のよくない女性を見ると、わ

たし、何だか自分がとつても貞淑に思えるの。あら、ショックだった？」

「いつもと同じくらいです。」

「あなたって、何てお莫迦さん！ それからエンパイア劇場へ行って、その後他のレストランで軽い食事を取る。周りの人たちが先刻よりもっと気取っていかかわしい処がいいわ。それからコヴェントガーデンの舞踏会へ行く。ああ、分らないでしょうね、あたし無茶苦茶なことがしてみたくてしようがないの！ お行儀だ、礼儀作法だなんてうんざりよ。」

「ディックが知ったら、何て言いますかね。」

「あら、あの人には、貧しい親戚の人たちと会っていたって手紙に書いておくわ。それを証明する確実な証拠を八ページぐらい書いておく。」

ジェームズはディック・プリチャード・ウォーレイスのことを考えた。あんなに親切で、上機嫌な男は他に知らない。大柄で、口髭をもしやもじやと生やし、優しい目をしていた。困った者がいればいつでも助けたし、慰めの言葉と励ましも忘れなかったから、皆助けが必要になると至極当然のことのように彼のところへ行った。妻への忠犬のような献身も心打つものだった。全面的に彼女を信頼し、彼女が他の男と恋を弄んでいることには全く気づいていなかった。本人は自分のことを退屈な男だと考えていたから、妻には自由に楽しんでほしいと願っていた。こんな才気煥発な女性が自分のような無口で気の利かない男と一緒に楽しむ暇ないだろうというわけだ。

「きみの好きなようにやってくれ、」彼は常々言っていた。「きみなら大丈夫だって判ってるから。頭の片隅にちよつとだけ僕が入り込む余地を残しておいてくれれば、何をしたらって構わないさ。」

「あなたって莫迦ね。わたしにはあなた以外の男のことなんてどうでもいいの。」

そう言つて、夫人は口髭を引っ張り、唇にキスする。すると彼は感謝に満たされて仕事に出掛けるのだった。神様がこんなにも美しく魅力的な女性をお与えくださり、その口から不滅の愛の誓いを聞いたのだから。

「ディックはあなたの十倍は良い人間です。」ある時、夫人のあまりに傍若無人な恋愛遊戯を目撃して、ジェームズは腹を立てたことがある。

「あら、あの人はそうは思っていないわ。そこが肝心なの。」

ジェームズは夫人に会う勇氣はなかった。手紙を破り捨てて正解だったのだ。おそらくは形式的、御座なりの祝福に過ぎなかっただろうから、読めばその冷たさに胸が張り裂けただろう。また、いつも夫人のことを思っているうちに、愛する人を実際とはまるで違ったものに変えてしまっている怖れもあった。旺盛すぎる想像力がほんの僅かの思い出に作用して、多くの誤った喜びを付け加えていることは充分あり得る。ウォーレイス夫人に会えば、ひよつとしたら、幻滅に心が痛むだけかもしれない。それが一番怖かった。というのも、魂の全てを占めているこの情熱がなくなれば、彼は今この世に全くの独りぼっちだったからだ。彼が作り上げていたのは素晴らしく魅力的な姿で、その姿なら何の危険もなく、何の恥ずかしさもなく崇拜できた。この夢を余計な事実の進入から守りとおしておく方が賢明なのではあるまいか。しかし、なぜ香水の香りが記憶に絡まって離れないのだろうか？ その香りが夫人の姿に新しいイメージを与える。目を瞑れば、夫人がすぐ近くにいて、吐く息の芳しい香り

が顔に当たるのを感じる。

ジェームズは一人で食事を摂ると、読書に数時間を費やした。その間、何故か知合いには一人も会わなかった。彼は退屈になってベッドに入った。頭痛がした。友達のないロンドンの侘びしさをもう既に感じていた。

翌朝彼はセントジェームズ公園を散歩した。躑躅が今を盛りと咲き誇っていたが、彼は心に痛みを覚えた。目にする人々が皆幸せを絵にかいたようなのだ。イギリスは世界一の国だ、それは理性を持った人間なら誰でも解る、——皆そう確信しているように、暢気で陽気に見える。ポニーや自転車に乗った少女が、いかにも苦勞を知らぬ人が持つ魅力を発散して、整備の行き届いた徑を駆け抜けてゆく。それを見ていると、ジェームズは自分自身の孤独がますます耐え難く思えてくるのだった。陽光に輝く少女たちの頬、ひとつひとつの動き、笑い声が羨ましいほど活き活きしている。馬に乗ったすわりとした少女が若い男に微笑みかけた。男は帽子を取って挨拶を返す。すると、それを見た少女が、やつたとばかり、目に甘い表情を浮かべた。一度、ジェームズの方に向かって一頭の馬が早足で駆けしてきたのだが、鞍上の女性がウォーレイス夫人に似ているように思われた。心臓が停まった。もう一度、もう一度だけでいいから夫人を一目見たい——夫人に気づかれずに——そうジェームズは切望していた。馬は近づき、離れていった。夫人ではなかった。全く知らない人だった。

疲れ、心に痛みを感じて、彼は倶楽部に戻った。退屈な一日だった。翌日、彼は大都会に一人逗留する者に特有の悲哀に捉えられていた。忙しそうに動き回る群衆に孤独感が増した。倶楽部で知合い同士が挨拶を交わしたり、歩道をお喋りしながら歩いて行くのを目にすると、自分に友達がいないこ

とが耐えられなくなってくる。彼らは共通の話題、共通の興味関心を持ち、既に自分たちの世界だけで充足していて、新参者に対しては敵意を含んだ視線を送っているようにさえ感じられる。人で溢れたこの都会にいて、先を急ぐ人々に取り囲まれているよりは、無人の孤島にいる方が孤独を感じないのではあるまいか。彼はどうやって一日を遣り過ごしたら良いのか分からなかった。喫煙室に籠もっているのにも、街を歩き回ることもうんざりしていた。フォースイス少佐が紹介してくれた貸間もひどかった。間口の狭い、高い建物の最上階にあるその部屋は、ただっぴろく、窓から見えるのは向かいの建物ののっぺりした壁だけで、おそろしく陰鬱な部屋だった。ジェームズが果てしない階段を上ってゆくと、他の部屋から陽気な笑い声が聞こえて苛立つことがある。これら入ることの許されぬ閉じられた扉の向こう側では、人々が何の愁いもなく幸せに暮らしているのだ。自分だけが孤独なのだ。自分だけが永久にこの自分自身という牢獄に繋がれているのだ。彼は劇場へ足を運んでみた。しかし、ここでもまた、他の観客との間に壁を感じて、気が狂いそうになった。芝居それ自体も何の幻想も与えてくれない。顔にドローンを塗った役者たちが不自然な衣装を着て、気取って歩いているだけだ。背景も布に画を描いたものに過ぎず、台詞も気が利かない空虚なものだ。ああ、もう一度アフリカに行きたい。やるべきことがあって、立ち向かうべき危険があるところへ戻りたい。あそこでは一人でも決して孤独だとは感じない。静まりかえった夜の濃紺の空。輝く無数の星……。

ロンドンに来て一週間ほど経った或る夕刻、彼はピカデリーを歩いていた。特に目的があったわけではない。ただ人々を眺めては、この人たちは心の奥の奥では何を考えているのだろう、そんなことを思っていた。と、肩に手が置かれ、陽気な声で名が呼ばれた。

「やっぱりおまえか、パーソンズ！　また一体どこから湧き出したんだ？」
振り向くと、インドで知合いだった男が立っていた。孤独と退屈を感じていたジェイミーは気持ちを抑えられなかった。

「あれあれ、誰かと思ったら！　会えて嬉しいよ。」彼は男の手をぎゅっと握った。「どこかで一杯やろう。ここ何日も誰とも会ってなくて、話し相手が欲しくて堪らなかったんだ。」

「じゃあ、一杯だけ付き合うか。八時の汽車に乗らなくちゃならんから、それまでな。スコットランドへ行くんだ。」

ジェームズの表情が沈んだ。

「夕飯と一緒に思ったんだが……。」

「すまん！　そりゃ無理だな。」

二人はビールを飲みながらあれやこれやと話した。が、やがて友人が、汽車の時間があるからこれで、と言った。二人は握手をした。

「あつ、そうだ、」と友人が突然思い出して言った。「この間おまえの知合いに会ったんだが、大層おまえに会いたがってたぞ。」

「俺に？」

ジェームズは赤くなった。誰のことか本能的に判ったからだ。彼女でしか有り得ない。

「プリチャード・ウォーレイス夫人、憶えてるだろう？　今ロンドンにいる。あるパーティーで顔を合わせたら、おまえについて何か知らないかと訊いてきた。ハーフムーン通り二〇一に滞在してる。」

会いに行つてやれよ。じゃあな！　さて、急がないと。」

彼は慌ただしく店を出て行つた。自分の発した短い言葉がジェームズに及ぼした影響には気づいていないようだった。夫人はまだ俺のことを考えてくれている。俺について質問し、俺に会いたがっている。住所が判つたのは神々のお慈悲だろうか。心臓の鼓動が聞こえるようだった。彼は軽やかな足取りで店を出た。歩道の群衆は消えてなくなっていた。何か、靈妙な炎で出来た道の上を歩いているようだった。熱愛してやまぬ人のところへ向かつて一直線に……。彼の歩みに合わせて拵こしらえられた道。ただウォーレイス夫人のところへ導いてくれる道。思い焦がれる人が自分を歓迎しようと待っているのだ、あの何とも言えぬ微笑みを浮かべて、アフロディーテの愛撫がそのまま肉体となったようなあの手を広げて、俺を待っているのだ。ジェームズは他のことは考えられなかった。ああ、あの微笑み、あの掌……。ジェームズは突然立ち止まった。

「しかし、それが何になる？」彼は苦々しく声を出して言った。

愛を象徴するような太陽が、都会の様々な生活を柔らかく包み込みながら、沈みかけていた。それを見ていると、心は悲しみでいっぱいになった。というのは、この太陽と共に自分の短い喜びも死んでゆくように思えたからだ。徐々に長くなってゆく影は、彼の魂に忍び入る、現実という悲しい事実を象徴しているかのようだ。

「行かない。俺は行かない。そんな勇氣はない！　ああ、神よ、私に力をお与え下さい。」

彼はグリーンパークに入つていった。ベンチでは恋人たちが寄り添い、心地よく暖かな芝生では散歩途中の人たち、仕事に疲れた人たちが眠っている。ジェームズもベンチの一つに重い躰をあずけ、

惨めさに身を任せた。

日が暮れ、ピカデリーの街灯が点された。増してゆく静けさのなかでロンドンのざわめきが大きく聞こえるようになった。ジェームズは暗闇のなかから、まるで舞台の一場面でもあるかのように、光のなかを駆け抜けてゆく二人乗り馬車や乗合馬車、肉体を離れた魂が当てもなく風の中を漂うように歩む、果てしない人々の群れを眺めていた。夜の闇に紛れて人に見られることなく座っていられるのは、慰めであり救いだった。彼は私心のない新しい興味を持ってその喧噪を観察した。もはや自分が生きた人々の間に存在しているのではないような、不思議な感覚だった。人々が慌ただしく、苦勞を背負って生きることに価値を見出しているのは新鮮な驚きだ。ベンチの恋人たちは沈黙のなかで恍惚としたままだ。時々、悲しそうな、何か訳のありそうな人影が、前屈みになって通り過ぎてゆく。

夜がすっかり更けたことに驚いて、ジェームズは公園を出た。劇場が観客を吐きだしている。ピカデリーは相変わらずの人ばかりだ。皆陽気で、元気があって、この世に愁いなど何もない様子だ。暫しピカデリーはその悪徳よりも或る種の豊かさが勝っているように感じられた。街娼は古代ローマ帝国の高級娼婦の勿体を身に着け、野卑な放蕩者は、疑い物ではあっても、熟れたデカダンス芸術の輝きを放っている。

ハーブムーン通りに入った。そこは人通りが全くなく、静かなものだった。ジェームズはウォーレス夫人が借りている家に向かってゆっくり歩いた。苦悶で心臓が引き裂かれそうだった。一つの窓にまだ明かりが灯っている。夫人の部屋だろうか。ブラインド越しに夫人の影だけでも見ることができれば！ 見間違えることは絶対ない。やがて明かりが消され、建物全体が暗闇に包まれた。彼は待

ち続けた。特に理由があったわけではない。夫人の傍にいられるだけで嬉しかったのだ。何時間そこにいただろうか？ 彼は疲れ切った軀を引き摺って自分の部屋に戻った。

翌朝、ジェームズは身体が重く、気分が優れなかった。それに幻想からも覚めていた。頭は割れそうに痛かった。四肢はこれまで経験したことがないほどに懈かった。どうして俺はあの女のためにこんなに悩むのだろう。俺のことなど歯牙にも掛けていない女のために。彼はこれまで何度も口にした夫人の悪口、軽蔑の言葉を繰り返した。そして、突然、もう自分は夫人に無関心になったのだと考えた。

「プリンプトンに帰ろう。ロンドンにはぞつとずる。」

頭痛と倦怠感には理由があったのだ。リトルプリンプトンに着いた翌日、ジェームズは病気になるてしまった。医者の見立ては腸チフスということで、ケープタウンから帰った人間にはよく見られる症状なのだという。パーソンズ夫妻がすぐ考えたのは、メアリーに来てもらうことだった。メアリーは看護になれているから、何でも上手にやってくれるだろう。

「ラドリー先生が看護婦さんにももらった方が良^いいって言うの。一人にしておくべきじゃないって。それで、あたし一人じゃ無理だから……。」

メアリーは顔を赧^{あか}らめて、暫し躊躇^{ためら}っていた。

「わたしに看護させてくれれば良^いいんですけど。お母様とわたしとなら、全然知らない看護婦さんより上手くやれるでしょうから。でも、ジェイミーが気にするんじゃないでしょうか。」

パーソンズ夫人は不安そうにメアリーを見た。

「そうね。あなたに看護してもらおう資格はないわよね。それに、とても疲れる仕事だし。」

「あら、わたしは丈夫ですわ。看護したいんです。ジェイミーに訊いてみてもらえませんか？ 嫌なら嫌って言えばいいんですから。」

「分かった。」

夫人は息子の寝室へ行った。大佐がベッドの横に腰掛けて、心配そうに息子を見ている。ジェイミーは仰向けに寝ていたが、息づかいが荒く、大儀そ^うで、何も考えていないようだった。時々、赤黒くな^つた唇が引き攣^ひる。頭痛が突然耐えがたいほど酷くなるようだ。

「ねえ、ジェイミー、ラドリー先生が、わたし以外にもう一人看護する人間が必要だって仰しやるの。それで、タンブリッジウェルズから来てもらおうかとも考えたんだけど……。ねえ、代わりにメアリーじゃ駄目？」

ジェームズが目を開けた。霞^かんではないが、普段と違って瞳孔が不自然に大きく開いている。どことなく何かを刺すような、不思議な表情だ。

「メアリーはやりたいって言うてるんですか。」

「ええ、看護できたら嬉しいって。」

「腸チフスの患者の看護が重労働なのを知ってるのかな？」

「あなたのためなら何でもするって。」

「なら、頼もう。」ジェームズは微^かかに笑みを浮かべた。「泣く者あれば笑う者あり、か。副牧師がそう言っていましたね。」

メアリーがやって来た時、腕を伸ばして微笑みかけるだけの力はあった。

「ありがとう、メアリー。」

「ありがとうなんて要らないの。」メアリーは明るく答えた。「だいたい、話しちや駄目よ。いい？

——わたしの言うことは何でも聞くのよ。小っちゃな子供になったつもりで世話してもらおうの、いい？」

何日間も容体は変わらなかった。ジェームズは頭痛に悩まされ、ずっと仰向けの状態で横たわっていた。無表情でいかにも苦しそうだ。蒼白い顔。唇は死者のそのように青黒く、頬だけが異様に赤く輝いている。ほとんど目を閉じているのだが、時折瞼が開くと、瞳孔は思わずぞっとするような虚ろな輝きで、どうしても追い払えない何か恐ろしいものを見ているように感じられる。そこには盲目の人間が一心に目の前のものを凝視しようとしている時の気味悪さがあつた。

一方、パーソンズ夫人とメアリーは献身的に看護に当たっていた。取分けメアリーは素晴しかった。慈愛の人メアリーは、同時に、よく気が付く人でもあつたから、ジェームズが欲しがらるであろうものは前もって手配した。だから、ジェームズ本人がそれと気づく前に大抵の物は用意されているのだつた。またメアリーはいつも明るく、穏やかで、生き生きしており、病人を看護する時にはどうしても避けられない、胸の悪くなるような作業にも、面倒も嫌悪感も感じない様子で、常に楽しんで仕事に当たつた。看護の大半は彼女が引き受けた。ジェームズの枕元を離れるのは、パーソンズ夫人にどうしても休むよう説得された時だけ。毎晩毎晩、愚痴一つこぼさず起きていた。召使に自分の着替えを取りに遣らせ、母の抗議にもかかわらず、プリンプトンハウスで寝泊まりした。

クリボン夫人は娘の行為は慎みがないと言つた。プロの看護婦の方が当然メアリーより有能だし、パーソンズ一家にはそうした看護婦を雇う資力は充分にある。それにジェームズが病気で何も抗議できない時に自分の親切を押しつけるのはデリカシーに欠ける、と。

「メアリー、おまえさんがいてくれなかったら、どうしていいか分からなかつたよ、」とパーソンズ大佐が目には涙を浮かべて言つた。「もしあいつが助かつたら、おまえさんのお蔭だ。」

「もちろん助かりますわ！ お願いしたいのは、わたしのことはジェイミーに言わないでおいてほしいということだけ。あの人の役に立てることが嬉しいんです。ですから感謝していただくには当たりませんし、その必要もありません。」

しかしジェームズを救えるかどうかは目を追つて疑わしくなつてきた。戦場で負つた傷と栄養が摂れないことで体力は弱まり、病気はますます悪化している。衰弱は著しく、常に譫妄状態にある。頬は瘦け、黒ずんだ顔は見ていて怖ろしかった。自分をコントロールする力も残っていないようだ。ベッドに深く沈み込んだその姿は、生きようとする意思さえ失くしてしまったように見える。

医者もはや危惧の念を隠しておけなかつた。パーソンズ夫人はついに意を決し、医者と二人きりになると、どうしても真実が知りたいと言つた。

「助かる見込みはあるんですか？」夫人は震える声で尋ねた。「最悪のことでも知っておきたいんです。」

「お気の毒ですが、非常に少ないでしょう。」

夫人はラドリー医師と握手を交わすと、ジェームズの部屋に戻つた。ベッドの横にメアリーと大佐が腰掛けている。

「で、先生は何と？」

パーソンズ夫人は頭を垂れた。涙が静かに頬を伝っている。二人にはその意味が分かりすぎるほど

分かつていた。

「御名のごとくなし給わんことを（注19）。」パーソンズ大佐が呟いた。「御名の讃えられんことを。」

三人は悲痛な思いでジェームズを見つめた。ジェームズに対する苦々しい思いは疾うになくなり、再び昔と同じ心からの愛情を感じていた。

「なあ、私はこの子に敵しすぎたかな？」

メアリーは大佐の手を取ると、それを優しく握った。

「そんなこと気になさらないで。ジェイミーがお父様を恨んだことなんて一度もないと思いますわ。」

ジェームズは今や昏睡状態だった。時に何かに反応するように躰がピクツとすることがあって、シートを弱々しく攪むのだが、それはまるで魂が肉体に別れを告げているようで、見ていて怖ろしかった。

「こんな風になるためにこの子は戦争や疫病から生き延びたのか。」大佐が力なく呟いた。

運命の神々は人間をからかうのが何よりも好きなのだ。小っぼけで哀れな人々の行く末に絶えず干渉し、その切なる願いを容赦なく拒絶し続け、待たせるだけ待たせて、もう願いが叶うことはないのだらうと諦めるのを待って、初めて救いの手を差し伸べるのだ。ジェームズは死ななかつた。毎日毎日、昼も夜も彼を見守り続けた三人の熱意が、死神を追い払ったようだ。ジェームズはほんの少しだが回復した。さまよえる無数の原子を結びつけ一つに纏める不思議な未知の力を総動員して、頑強な

肉体が生きるための戦闘を繰り返していた。ジェームズ自身はまだ大儀そうで、生きようが死のうがどうでもいい風だったが、生きようとする意思が彼に代わって戦っていた。ジェームズはかなり良くなった。そして急速に危機を脱していった。

大佐とメアリー、そしてパーソンズ夫人は驚きの表情で互いを見つめた。自分たちがジェームズを救ったのだとはほとんど信じられなかつた。メアリーも含めて三人は、これまであまりにも苦しんできたので、この幸運を当てにして良いのかどうか躊躇っていた。早く喜びすぎると何か恐ろしいことが起こって、愛する者が再び致命的な危険に襲われるのではあるまいかと、迷信を怖がるように、怖がった。が、とうとうジェームズは立ち上がるほどに回復した。八月の緑豊かな庭に出て、ベンチに腰掛けることもできるようになった。三人は徐々に肩から不安という重荷が取り除かれてゆくのを感じた。恐る恐る笑つてもみた。くだらないお喋りをしたり、未来について話すようにもなった。あの青ざめ、寒れ果てた姿を見つめていた時の身も世もない恐怖はもう感じなかつた。

老夫婦はあらためてメアリーにお礼を言った。そして感謝の印としてちよつとした贈り物を買おうと、隠密裡にタンブリッジウェルズに出掛けた。大佐はブレスレットがいいだろうと言ったが、夫人はメアリーに喜んでもらえるのは何か実用的な物だと主張した。そこで二人は手の込んだ高価な筆箱を持ち帰り、恥ずかしそうに一言二言感謝の言葉を述べながら、それをメアリーに渡した。純朴なメアリーは嬉しさと胸がいっぱいになった。

「あら、何て素敵！ ありがとうございます。本当に、わたし、何もしていませんのに。いつも村の人たちにしてているのと同じことをしただけですわ。」

「あいつを救ってくれたのはおまえさんだよ。おまえさんが……、死神の口からあいつを引つ張り上げてくれたんだ。」

メアリーはちよつと黙っていたが、手を差し出すと、

「一つ約束してくださいませ？」と言った。

「何をだね？」大佐は性急に約束すると言いたくなかったので、一応尋ねた。

「えーと、ジェイミーはわたしに借りが出来た、といったようなことは絶対仰しやらないでいただきたいんです。わたしが何かそんなことを期待して看護したと思われるのは耐えられないんです。どうかそれだけは約束してください。」

「それはできかねる。」大佐が声を高めて答えた。

「リッチモンド、この子の言っていることが正しいわ。メアリー、約束する、——あたしたち、そんなこと絶対言いません。でも、あの子はきつとそう思うでしょうね。」

両親の希望は蘇りつつあった。そして息子の病気は偽装した神の恩寵なのだと敬虔な二人は考えるようになった。午前中パーソンズ夫人が家事をしていると、時々大佐が嬉しそうに両手を揉み合わせながら入ってきて、

「台所から二人が一緒にいるところを見てきたよ。」と言う。

ジェームズが葉陰の長椅子に横になり、メアリーはその隣に座って本を読んで聞かせるか、編み物をしているとの報告だ。

「あら、あなた、そんなことしちやいけないわ。」夫人は甘やかすような笑みを浮かべる。「邪魔で

しよ。」

「いや、止められないね。つがいの鳩みたいだったよ。」

「話してた？ それとも本を読んだ？」

「メアリーがあいつに読んでやってた。あいつはメアリーを見つめていて、一度も視線を逸らさなかった。」

パーソンズ夫人は嬉しいような、悲しいような溜息を漏らした。

「神様のお慈悲ね、リッチモンド。」

ジェームズが予想もなかったことは、メアリーと過ごす毎日がとても楽しいことだった。朝起きるとすぐに庭に連れて行かれ、日中は大抵そこにいる。メアリーはいつもどおり疲れた様子もなく献身的に面倒を見てくれ、彼のちよつとした気まぐれにも喜んで応じてくれる。間もなく彼は両親の心の中に二人の結婚という希望が蘇っていることに気づいた。メアリーが何か用事で出掛けようとするとき、ジェームズが早く帰ってきてほしいと頼む、それを耳にした時、あるいは二人が穏やかに言葉を交わしたり、ジェームズの頭の下に置かれたクッションの位置をメアリーが直している姿を目にした時、二人が意味ありげな視線を交わすのに気が付いたのだ。

隣人たちはお見舞いに伺いたいと伝えてきたが、ジェームズは断固として断った。そしてメアリーを守ってくれるよう訴えた。

「きみとここにいれば充分幸せなんだ。他の誰かが来たら、僕は絶対また病気になるっちゃうよ。」

するとメアリーは頬を赧らめて微笑み、大尉は皆さんの同情には心から感謝しているが、まだお目にかかれるほどには恢復していない、そう伝えておくと約束した。

「ちっとも感謝なんかしてないけど」とジェームズ。

「じゃあ、今からでもいいから感謝しなくっちゃ。」

メアリーの態度はジェームズが病氣である故にずっと優しいものになっていた。厳しい道徳観も彼が弱っていることに免じて和らぎ、常識重視の姿勢も以前ほど攻撃的ではなくなった。これまでどおり考え方は実際の、散文的だったが、譲歩するのを恐れなかった。それは寛容の精神を獲得したと言ってもよいほどだった。ジェームズが拗ねたり誤魔化したりしても、笑って赦した。彼が健康な時だったら、こうした人間としての弱さには——己の義務として——到底妥協できなかったであろうに。メアリーは彼を子供のように扱った。相手が子供なら多少大目に見てやっても原理原則を譲り渡すことにはならないだろう。ジェームズの体調はまだ、甘やかされ、可愛がられ、大事にされて当然の段階なのだ。

ジェームズは或る満足感のようなものをもって、これから展開されるであろう状況を心に描いていた。メアリーにもう一度求婚すれば受け入れてくれるだろう。それで厄介なことは全て終わる。そのどこがいけないと言うのか。彼はメアリーの愛情あふれる不断の介護に心打たれていた。それがどんなに大変なことだったかは、父が何も言わずとも、充分解っていた。彼女は親切そのものだった。優しく、思いやり深く、明るかった。プロポーズを躊躇っている自分は偏屈としか言いようがない。さらに、再びメアリーに慣れてくるにつれ、ジェームズは実際自分は彼女が大好きなのだと思うように

なっていた。病氣であることも手伝って、彼女の頑健な肉体は取分け慰めに感じられた。メアリーなら全面的に頼り、信じてることができる。あの正直さ、公正さは称讃に値する。ジェームズはメアリーの姿に、スコットランドの無人の小島に立つ御影石の十字架を思い出した。風雨にも負けず、時の浸食にも負けず、真っ直ぐ、堅固に立ち続ける十字架像。しかし、その荘嚴、孤高の姿にはどこか悲愴なところもある。

肉体の純粹さ、自然が与えた本能の純粹さについて俺の考えたことは全くナンセンスだったのか。

世間一般の連中は俺の考えは馬鹿げたもの、卑猥なものだと言う。連中が正しいのかもしれない。何だかんだ言ったところで、大衆がいつも間違っているわけではない。病氣になったために、現在のジェイミーと過去のジェイミー——俗悪な連中には分かりっこない肉体の純粹さという高邁な理想を持っていたジェイミーとの間に空隙が生じていた。病氣で体力が衰え、他人の力に頼るようになって、以前持っていた見解がかなり不確かなものに思えてきた。誰もが持っている考えに従って生き方がどんなに楽か。人は自分が他の人たちと違った考え方をすると、時に少しばかり良心の呵責を感じないではいられない。だから社会は一体感を保っていられるのだ。良心というのは最も有能な警察官なのだ。世間の皆と同じ考えを持っていれば、文明という権威が全面的に自分を後押ししてくれ、口では言い表せないほどの自己満足が得られる。世間の偏見にどっぷり浸かっていることが一番簡単で、一番満足感が得られる生き方なのだ。千九百年の年月を費やして、我々は肉体は恥ずべきもの、魂にとつての落とし穴、悪魔の誘惑だという考えを身に着けた。人間には純粹な魂があつてしかるべきだと考えるようになった。というのは、人が魂について心配し始めた時から、肉体は欠陥だらけの

ものだったからだ。肉体は穢らわしいもの、魂は神聖なものというのが世間一般の考えだが、それはそれで充分理に適っているように思える。なぜなら、もしそうでないなら、気にする必要のあるものなど全くなくなってしまう、世界は永遠に意味のないことの繰り返しにすぎなくなってしまうからだ。確かなのは、ただ、この世に絶対確かなものなど何もないということになってしまふからだ。

衰弱の中、ジェームズには何もかもがどうでも良かった。悲劇的絶望を伴ったかつての激しさも、少なからず馬鹿げたものに思われた。愛のない結婚は躰を売ると同じことであって、絶対そんなことはすまいと誓っていたことも感傷的で下らなく思えるし、肉体こそが純粹であるという考えも馬鹿馬鹿しく感じる。もし、子供の頃から教えられてきたように、肉体が穢らわしいものであるなら、それをどう使おうと何の問題があるというのだ。俺が神聖だと考えた肉体も、どうせ何年か後には腐り果て蛆虫に食われるのだ。ジェームズは、今、喜んで流れに身を任そう、周囲の人間と波風立てることなく付き合ってゆこうという気になっていた。そうすれば、やがて連中得意の仰々しい言葉が俺の墮落を正当化してくれるだろう。人間という儂い種しゅのそのまた儂い一人に過ぎない俺が、どう行動しようとは重要ではないのだ。思い悩むのは止めにして、なるようになるのが一番なのだ。メアリーは素晴らしい妻になると皆んなが言ったが、あれは全く正しい。親切で、助けになって、信頼できる。妻に求められる全ての性質を備えている。そう俺自身何度も自分に向かって言ってきたではないか。それで充分ではないか。

それにこの結婚は父と母に喜びを与えるのだ。メアリーに幸せを与えるのだ。もしメアリーの善意に少しなりとも報いることができるなら、そうすべきではないのか。ジェームズはかつて抱いだいていた高邁な理想を思つて苦々しく笑つた。軽蔑の笑いだった。所詮あの理想は凡庸な世界には合わないのだ。現世的な基準に自分を合わせる方が遥かに安全で楽なのだ。で、面白いのは、自分には墮落としか思えないこの考えに関して、他の人間がまったく逆の見方をしてることだった。男は自然が否応なく自分を駆り立てるあの神聖な本能ゆえではなく、ある女が善良な主婦になるだろうという理由で結婚すべきだ、——その方がより純粹でより靈的だと考えている。

ジェームズは肩を竦めた。足音がしたので振り向くと、メアリーが手紙を持ってこちらへ向かつて歩いてくる。

「ジェイミー、手紙が来てるわよ、三通。」

「誰から？」

「自分で見たら？」メアリーは一通を差し出した。

「そりゃきつと請求書だよ。開けてみて。」

彼女は開封して、靴屋からの勘定書かんじょうがきを読んだ。

「捨てといて。」

メアリーは目を剥むいた。

「ジェイミー、払わなくちゃ駄目よ。」

「もちろん払うさ。でも、暫くは大丈夫。もう二、三回来てからにする。で、次のは？」

彼は封筒の文字を見たが、馴染みのないものだった。

「それも開けてみて。」

ラーチャーの両親からのものだった、ぜひ会いに来てくれと繰り返している。

「まだ息子が死んだことを気に病んでるのかな。」

「えーと、あれはたしか六ヶ月前だったわよね。」

「半年も経てば、悲しみなんて大抵忘れるもんだと思うがね。でも、一度行かなくちゃならないだろうな。で、三通目は？」

ジェームズは筆跡を見てちよつと顔を赤くした。ウォーレイス夫人のものだった。しかし今回は感情が動かされることはほとんどなかった。体調が悪すぎて関心が持てないのかもしれない。

「開けましょうか？」

ジェームズは躊躇った後、

「いや、いいよ。破っちゃって。」と答えたが、メアリーの驚いた様子を見て、笑って付け加えた。

「いいんだ。別に頭がおかしくなったわけじゃないから、破っちゃって。それに、これ以上何も訊かないで。」

「そうしてほしいんなら、もちろんそうしますけど……。」メアリーは困惑した様子で言った。

「破ったら、生垣まで行って、原っぱに捨てちゃって。」

彼女は言われたようにすると、ジェームズの元に戻って腰掛けた。

「本の続きを読んであげましょうか？」

「勘弁して。『好古家』（注20）はうんざり。登場人物は一体全体どうしてあんな変な喋り方をするんだろう。全く理解できない。」

「でも、読み始めたんだから、お仕舞まで読まなくちゃ。」

「仕舞まで読まないで、何か恐ろしいことが起こるって言うのかい？」

「本というのは一旦読み始めたら最後まで読むべきだと思う、どんなに退屈だって思っても。そうすれば、きっとどこか良いところが見つかるはずよ。」

「メアリー、きみは正に良心の化身だね。」

「もし読んでほしくないなら、わたし、編物を続けるけど。」

「それもやってほしくないな。話してほしいんだ。」

メアリーは葉の間から漏れる、和らげられた陽射しの中で魅力的だと言っても良かった。これまでついぞ見たことのないほどに柔和な表情をして、艶のある肌は豊かに輝いている。それに夏用のワンピースを着ているためか、いつもより少女っぽく、寛いで見えた。

「メアリー、きみはここずっと、僕にとっても良くしてくれた、とつてもね。」突然ジェームズが言った。

メアリーは頬を赧らめた。「わたしが？」

「どんなに感謝しても感謝しきれない。」

「あら、そんなこと……！ お父様がくだらないことをいっばい言ったんでしよう。言わないって約束したのに。」

「父さんは何にも言わなかったよ。言わないって約束させたんだ？ そりゃ良い。きみらしい。」

「余計なこと言うんじゃないかって心配だったから。」

「僕が分からなかったと思う？ 僕がいま生きてるのはきみのお蔭だ。」

「神様のお蔭よ、ジェイミー。」

彼は微笑んで、メアリーの手を取った。

「僕はとても感謝してる、——とっても。」

「あなたの看護をするのが楽しかったのよ。あなたはホントに良い患者だったし。」

「きみがこんなに良くしてくれたのに、僕はきみを惨めにしただけだ。ねえ、僕を赦してくれない？」

「あら、赦すも赦さないも、そんな心配すること何にもないわ。わたし、あなたのこと、いつもお兄さんだつて考えてるんですもの。」

「そりゃ副牧師に言った科白せりふだ！」ジェームズは大声で笑った。

メアリーは頬を赧かくした。

「どうして知ってるの？」

「あいつがジャクソン夫人に喋しゃべってね、ジャクソン夫人が親父に話したんだ。」

「わたしのこと、怒いらってないわよね？」

「お兄さんじゃなくて、従兄いとこくらいにしておいても良かったんじゃないかと思いますがね。」ジェームズは微笑んだ。

メアリーは答えず、ジェームズに握にぎられている手を引ひっ込めようとした。が、彼は手に力を込めた。

「メアリー、僕はきみに酷ひどいことをしてしまった。もしきみが僕を憎にくんでないとしたら、それはきみ

が天使のような人だからだ。」

メアリーはうつむくと、顔を真っ赤に染めて、

「あなたを憎にくんだことなんて一度もない。」と囁ささくように言った。

「ねえ、メアリー、赦ゆるしてくれるよね。忘れてくれるだろう？ もう一度言うのは図々しつこし過ぎるとは

思うけど……、メアリー、僕と結婚けっこんしてくれない？」

彼女は手を引ひっ込めた。

「……ありがとう、ジェイミー、そう言いってくれて。でも、あなたはわたしがちよつと病気のお世話をしてあげたから、感謝かんしゃの気持きもちでそう言いってるに過ぎないのよ。感謝かんしゃしてもらもらう必要ひつようはありません。楽しかったし、あなたが良よくなつて本当に嬉うれしかったんだから。」

「僕は本気だよ、メアリー。単ただに感謝かんしゃの気持きもちから申し込んだんじゃない。僕はきみに屈辱くつじやく的な思いをさせてしまった。きみが僕を思おもってくれてる気持きもちを殺ころしてしまおうと最悪さいあくなことをしてしまった。でも今は、本当にきみを愛あいしてるんだ、——心こころから。もし今でも僕のことを少しは好きだと思おもってくれてるんなら、どうか、お願いだから、いやだつて言いわないで。」

「今でもあなたが好きよ。」メアリーの声は哽しやがれていた。「ああ、神様！」

「メアリー、僕を赦ゆるして。僕と結婚けっこんしてほしい。」

彼女は放心しんしたようにジェームズを見ていた。心臓しんざうが熱あつく燃もえている。ジェームズが両手りょうてをとつて彼女かのじょを自分おのれの方に引き寄せた。

「メアリー、イエスと言いって。」

メアリーは力尽きたように彼の横に跪いた。

「結婚してもらえぬなら、とつても幸せよ。」彼女はいじらしいばかりの謙虚さでそう呟いた。

ジェームズは身を屈めると、優しく彼女にキスをした。

「じゃあ、父さんと母さんに知らせに行こう。きつと喜ぶぞ。」

メアリーは嬉しそうに笑顔を浮かべると、ジェームズが立ち上がるのを助け、できる限り楽に歩けるようにと支えながら、家に向かった。

パーソンズ大佐は昂奮した様子で Panama 帽をぐるぐる廻しながら、居間の椅子に腰掛けていた。大佐は家計簿を付けている夫人の邪魔をしたのだった。夫人は老眼鏡の上からにこやかに夫を見つめている。

「きつと何か起こるぞ。」大佐が言った。「スープを持って行ったら、あいつがメアリーの手を取っていた。わざと咳払いをしてやったが、二人とも全然気が付かなかった。で、邪魔しちゃ悪いと思つて戻ってきたわけさ。」

「さあ、二人が来ましたよ。」

「母さん、」とジェームズが言った。「メアリーが何か言いたいことがあるって。」

「わたしは何にもないわよ！」メアリーが顔を赧らめ、笑つて言った。「ジェイミーが何か言いたいことがあるんですって。」

「じゃあ、僕から。実はメアリーに結婚を申し込んだんだ。で、メアリーは受けてくれるって。」

ジェームズは救われた思いだった。父と母が大喜びしている様子、メアリーが幸せを噛み締めている様子を見ると、彼自身嬉しくなるのだった。時に俺も道徳的になつてしまったものだ自嘲の笑いを浮かべることがあつたが、それでも、自分は三人に幸福を与えたのだと考えると、やはり嬉しくならずにはいられなかつた。今は婚約を破棄した後良心に疚しさを抱いていたことを認めるに吝かでなかつた。勿論あのとき理は絶対自分にあると確信はしていたものの、周囲の非難、自分の生育環境が、不本意ながら、心に何らかの影響を与えていたのだろう。

「メアリー、結婚式はいつにしようか？」四人揃つて庭に腰掛けていた時、ジェームズが言った。

「早いに越したことはない。」大佐が大きな声で言った。

「一ト月後、それとも六週間後でどう？」

「ジェイミー、躰は？ 体力は回復してると思う？」メアリーが彼を優しい表情で見つめて答えた。そしてちよつと頬を染めて、「わたしの方はすぐ準備できるけど。」

昨夜メアリーは家に戻つて、婚約が破断となつたとき涙を溢しながら片づけた花嫁支度を取り出したのだった。様々な布の皺を丁寧に伸ばし、再び畳んだ。これまでにこんな優雅なリネンを使ったこ

とはなかった。これからまた細々とした生活品を集めるのだと思うと、喜びに声をあげて泣いてしまった。タンブリッジウエルズの何軒かの商店に注文を取り消す手紙を書いた時のあの切なさ！ 口こそ出さなかったが、そうした物をこれから買い足してゆくのが楽しみでしようがなかった。

最終的に、結婚式は十月初旬にと決まった。パーソンズ夫人は弟のフォーサイス少佐に手紙を書いた。少佐は、自分とジェームズとの会話がきつと最後には花開き、やがてこうなるだろうと予想していた、と返事を寄こした。彼は自分の外交手腕が実を結んだので鼻高々だった。世故に長けた人間の見解を受け入れるなら、大抵の困難は容易に克服される、そのことがまた証明されたというわけだ。ジャクソン夫人も同様に喜んでいた。夫人の考えでは、二人が再び婚約に至ったのは自分が間に入っただけなのだ。

「大尉があたしの話にすっかり耳を傾けてたのは話してて判りました。」夫人が夫に言う。「あの人には善意をもって率直に話してやる必要だったんです。」

「ドライランドが可哀想だな。」と牧師。

「ええ。だから、あの人をできるだけ慰めてやらなくちゃなりませんね。ねえ、アーチボルト、一ト月ほど休暇を与えて、旅行にでも行かせてあげたらどうかしら。」

ドライランド氏がお茶にやって来た時、牧師夫人は気を遣って、紅茶の中に角砂糖を一つ余分に入れてやったり、ケーキを普段よりも大きく切ってやったりした。

「もちろん、もうお聞きになったわよね？」夫人は重々しく尋ねた。

「クリボーンさんとパーソンズ大尉の婚約の件ですか？」彼は暗い表情で答えた。「ええ。悪い報せ

には羽根がついていると言いますから。」

「あたしたち、本当に同情してます。できるだけのことはしたんですけど。」

「大いにショックだったのは否定しません。正直申し上げて、時が経てば、私の忍耐にクリボーンさんのお気持も変わるのではないかと期待していましたから。しかし、あの方が幸せになれるなら、不平は言えません。諦念をもってこの不幸に耐えなくてはなりません。」

「でも、幸せになると思う？」夫人の声には幾分か危惧の響きがあった。

「心からそう願っています。まあ、ともかく、大佐のところへ行ってお祝いの言葉を述べるのが私の義務でしょう。」

「そうしてくれるの？ 何て立派な方！」夫人は声を高めた。

「ドライランド、もし休暇を取りたいなら、そうしてあげられるがね。」と牧師。

「有難うございます。でも結構です。私は戦場を見捨てて逃げ出すような男ではありません。」ジャクソン夫人は溜息を吐いた。

「この世では大抵のことは思うようにならないもの、——あたしいつもそう言ってるんです。世間の人は解ってくれませんが、聖職に携わるあたしたちは絶えず英雄的行為をしてるんですよね。」

副牧師はプリントンハウスに起き、パーソンズ大尉にお目にかかれるかと尋ねた。

「具合がどうか、会えるかどうか見てくださいませ。」パーソンズ大佐は感心するほどに聖職者を大切にする人だった。

「僕の魂についてでも話したいのかな。父さん、どう思いますか？」ジェームズは笑った。

「判らんが、とにかく会うべきだと思うよ。」

「わかった。じゃあ、通してください。」

ドライランド氏は部屋に入ると、物柔らかな表情でジェームズに握手を求めた。愛する人に拒絶された者がライバルを前にして取るに相応しい態度、と同時に、一人のキリスト教徒として彼に何も悪意を抱いていないことを示す誠意ある態度、そうした聖職者としての威厳を保とうと努力しているのが判る。

「パーソンズ大尉、私がクリボンさんに妻になつてくれるよう頼んだことはご存じないでしょうね？」

「そのことなら、この村で知らない人はいないと思いますよ。」ジェームズは笑いを噛み殺して答えた。

ドライランド氏は顔を赤くした。

「事情が知れ渡つてしまったことに当惑しております。こうした小さな村の最悪な点は、人々がお喋りだということです。」

「でも、立派な行為だと思えますよ。」ジェームズは村人が口々に言っていることを真面目な顔で述べた。

「決して、そんな。」副牧師は彼の性格の一部となっている謙虚さをもって答えた。「決して立派なこととは言えませんし、それにクリボンさんがあなたをお選びになった以上、私の今の正直な気持ちを申し上げるのが義務かと思ひまして、こうして参上した次第です。要は、つまり、心からのお祝い

をもう一度申し上げさせていたいただきたいのです。」

二日後、同じ用向きでジャクソン夫人が訪ねてきた。

夫人は小股でちよこちよこことジェームズに近寄ると、例によって黒革の手袋に包まれた手を差し出して、率直に握手を求めた。艶のある羊革の手袋は夫人の手にぴったり合っている。

「パーソンズ大尉、握手させてください。それで終わったことは終わりました。あなたにはあたくしの忠告を受け入れてください。で、もしあの時二人とも熱くなつて、あとで後悔するようなことを言ってしまったとしても、それは、何だかんだ言っても、あたくしたちが人間に過ぎないからです。」

「僕は、確か、礼儀作法を守っていたように記憶しますが、——あなたが僕は間違ひなく地獄に落ちるだろうと仰しやうした時。」

「あの時のあなたはとっても腹立たしかったわ。」牧師夫人は微笑んで言った。「でも赦してあげます。あなたは最後には期待以上にあたくしの言葉に注意を払ってくれたんですから。」

「満足でしょうね、そう考えられて。」

「お分かりでしょ？——あたくしはあなたに何の悪意も持っていません。義務だと考えたから、思ったことをちよつと申し上げただけです。もしあの時あたくしが限度を、——礼儀作法の限度を超えていたとお考えなら、喜んで謝罪するつもりです。」

「おかしな人ですね、あなたは。」ジェームズは上機嫌な、しかしかなり驚いたような笑みを浮かべ

て夫人を見た。

「おかしい？ おかしいって、なぜそう思うんです？」夫人は幾分立腹した様子で、顎を引いて、身を反らせた。

「あなたがその『思ったことをちょっと』言いに僕のところへやって来た時、本心から自分は正しい行動をしていると思っていたなんて、考えもしませんでした。僕を痛めつけてやろうっていう意地悪な理由でやって来たんだと思っていましたよ。」

「あたくしは聖職者の妻として、自分の義務に関しては高いところに目標を置いてます。」

「人間ってのは可笑しな動物ですね。」

「大尉、あたくしは自分を動物だとは考えてません。」

ジェームズは頬笑んだ。

「人間ってのはなぜ不必要に自分を苦しめるんですかね、まったく。理性を一番よく働かせるのは、自分自身にできるかぎりの痛みを与える時みたいだ。自分だけじゃない、お互い同士に。」

「仰しゃつてることが、さっぱり分かりませんが。」

「ジャクソンさん、これまでに何かする時、自分のしていることは正しいのか間違っているのか悩んだことはありませんか。」

「一度も。」夫人は断固として答えた。「何にでも正しい道と間違った道がありますが、あたくしは神様のお蔭でどちらが正しくてどちらが間違っているか充分判断できます、——ああ、神よ、感謝いたします——、そしてわたくしは常に正しい道を選んできました。」

「さぞ御満足でしょうね。僕には、どんな正しい道も一部は間違っている、どんな間違った道にも正しい部分がある、必ず両者にはそれぞれ充分な言い分がある、そう思えて仕方ないんです。どっちがどっちか判断するのは僕にはとても難しい。」

「弱い人間だけがそう考えるんです。」

「かもしれない。僕はとつくの昔に自分は強い人間だなんて己惚れるのは止しにしました。そう己惚れるのは大抵無知な人間です。」

メアリーは自分のことを真面目に考える人だった。決してジェイミーの欠点が見えていないわけではない、その欠点を認めた上で愛しているのだ、そう思うと嬉しかった。しかし一方でそれを矯正してやろうと決意してもいた。彼のものの見方は普通ではない、時に蓮葉な物言いをする。この二つの欠点をいつか根絶してやろう。忍耐と優しさ、それに威厳を持ってすれば、女性でも男性に影響を与えることはできるはずだ。

メアリーの友人の中に、神を冒瀆するような汚い言葉を吐くという悪しき習慣のある旦那さんを持つ女性がいたのだが、彼女はそれを簡単な方法で止めさせることに成功した。主人がそうした言葉を使うたびに自分もそれを使ったと言うのだ。例えば、「そりゃクソ面白くない、」と言ったら、「そうね。クソ面白くないわね、」と微笑んで応える。主人はかなり吃驚していたが、間もなくそうした汚い言葉を使わなくなったと言う。（この話は夫が妻を愛するという習慣からも抜け出せたかどうかは語っていない。が、まあ、それは些細なことだろう。）メアリーは常にこの友人を一つの手本にして

いた。

「ジェームズは本当にシニカルなわけじゃない」と彼女は考える。「本気で言ってるんじゃない、人を驚かすのが好きだからあんな風な言い方をするんだわ。」

自分たちは同じような育てられ方をしてきたのだから、様々なことについてジェームズが自分のように考えないということは有り得なかった。彼の独創的なものの方はメアリーの目には、当然のことだが、どれも一種のポーズと映っていた。しかし今は病気なのだからと、ある程度のことには許容していた。普段なら是認できないことを言っても反論は控え、子供をあやすように微笑むだけにして、話題を変えた。この先時間はたっぷりあるのだ。結婚すれば高みへ引き上げてやるだろう、わたしが心地よく過ごしているこの高みへ。その機会はいくらでもあるだろう。純真なキリスト教徒の女性と一緒に暮らせば必ず効果が出るはずだ。ジェームズも根は善なのだ。黄金のような善さを持っている。それをわたしが磨いて、それと気付けさせることなく正しい道へ戻してやるのだ。わたしにはそれだけの賢さがある、そうメアリーは考えた。

ジェームズはこのことに気づいた時、腹を立てるべきか愉快地思うべきか判らなかった。彼はメアリーの無邪気な己惚れと、吃驚するような意見を述べる時の独善的な確信に何かユーモラスなものを感じることもあった。しかし、自分の偏見と相容れない考えを馬鹿にしたように手を振って退けたり、そんなことは聞いたことがないとジェームズの見解を撥ねつけて自己満足しているような時には、我慢できないほど苛立つのだった。何も途轍もないことを言っているわけではない、これはもう二十年前から受け入れられている科学の常識に過ぎないのだと説得しようとしても、メアリーは自分の見解

が正しいことには絶対確信があると言って、堅い岩陰に身を隠してしまう。

「あなたと議論できるほど頭は良くないかもしれないけど、わたしは自分が正しいことは分かっています。それで充分満足しています。」

しかし普通はちよつと笑みを浮かべて、

「ジェイミー、何てお馬鹿なこと言うの。本当は自分の言っていること信じてないんでしょ？」と言うだけだった。

「でも、メアリー、これは厳然たる事実なんだよ。疑う余地はない。自明の理なんだ。」

すると彼女はジェームズが病人であることを思い出して、素晴らしい自制心を發揮し、「ええ、そうですね。でもそんなことどうでもいいんじゃない？ 勿論あなたはわたしなんかより遙かに賢いわ。さあ、そろそろスープを飲む時間よ。栄養を取らなくちゃ、」と彼の手をポンポンと叩く。

やれやれどうしようもないなど、ジェームズはベンチに沈み込む。メアリーの無知はどんな刀も通さない鎧だった。彼女は理解しようとしれない。自分が間違っているかもしれないなどとは考えることすらできない。自分が不問にしていることは知る価値がないからだとは本気で考えている。最近では教育の進歩ということが話題になるが、それは庶民には少しは当てはまるかもしれないが、しかし、イギリスの紳士階級が今ほど無教養なことがあったらどうか。どこの田舎へ行っても——こぢんまりした別荘でも大邸宅でも——偏見と迷信は使用人が働く台所だけでなく紳士淑女が寛ぐ居間でも相も変わらず蔓延っている。新しい考えを受け入れようとしれないことにかけては、主人のほうが使用人より頑固かもしれない。加えて、尊大にも、自分の無知蒙昧に満足しきっている。

メアリーや両親の偏見に対処するには我を折るしかないだろう。喋るのは両親とメアリーに任せ、自分は口を噤んでいよう、そうジェームズは決めた。三人と自分を繋ぐ糸はないし、これからも見つからないだろう。そうである以上、自分は自分の殻に閉じこもるしかない。この人たちは自分には理解不可能な人たちなのだ。暮しのどんな細かな点を取っても見方が異なる。今は常識となっていることにも興味を持たず、考えようとさえしない……。そんななか、結婚の準備は進んでいった。

ある日のこと、メアリーはそろそろ覚悟を決めて宗教についてジェイムズと話し合っておくべきだろうと考えた。彼の言った幾つかのことで少し不安になっていたのだ。それに、体調も十分に回復したようだから、真面目な話をしてもう大丈夫だろう。

「ねえ、ジェイミー、教えて、」彼の或る発言に、きつと巫山戯て言っているんだろうと考えて、メアリーは応えた。「あなたは本当は神様を信じてるんでしょ？」

ジェームズはこうした質問への対処法は心得ていた。

「メアリー、それは僕のプライベートな問題だと思うよ。」

「口にするのが恥ずかしいの？」彼女は真剣な表情で言った。

「そうじゃないけど、でもそんなこと話し合っても何にもならないと思うな。」

「言ってくれるべきよ、わたしはあなたの妻になるんだから。わたし、あなたが無神論者なのは嫌なの。」

「無神論なんてとつくの昔に論破されてるんだよ。無知な連中だけが無神論にしがみついているんだ、自分にも解つてないことにね。」

「じゃあ、どうして神様を信じてるって口にするのを怖がるの？」

「そうじゃない。僕の言いたいのは、ただ、きみにはそういう質問をする権利はないってことだ。結婚しても、お互い、相手には全面的に自由を与えるべきだ。きみもそう思ってるだろう？ 僕も昔は、夫婦ってのは別々の考えを持つべきじゃない、同じ考えを持つのが理想だって思ってた。でもそれは全くナンセンスだね。お互いがそれぞれ自分の考えを持って、相手のプライベートを尊重する、それが一番だ。相手を完全に信頼してれば、自ずと完全な自由が生まれる、そう思うね。」

「随分と立派な結婚観ですこと。」

「僕はきみのプライベートに口を出したりしない、メアリー、それは絶対保証する。」

「質問なんかして申し訳ありませんでした。わたしには関係ないことなのね。」

ジェームズは読みかけの本に戻った。彼はひっきりなしに本を読むという以前の習慣に戻っていた。そこにしか日常生活からの解放を感じられないからだ。しかし、メアリーが去ると、彼は本を置いて考え始めた。今自分がメアリーに言ったことが可笑しくもあり、苦々しくもあった。そして奇妙なことに、メアリーが鸚鵡のように繰り返している言葉が彼の唇から漏れ、なぜメアリーのような結婚観が流布しているのか解つたような気がした。普通の人にとって結婚とは、夫婦が一緒に暮らすことで夫にとっては妻からの支えを、妻にとっては夫からの物質的安定を確実なものにしてくれる一つの制度なのだ。深くものを考えない人々はそれで良しとしている。愛のないところでは、夫婦が互いから様々な保護を求め合うのは極めて自然なことだ。しかし愛のあるところでは、そんなものは一切不要なのだ。これで結婚の逆説がよく説明できる。情熱的愛による結婚を淫らなものとし、互いの社

会的地位の考慮による御都合主義の、生温い愛しかな結婚を高貴なものとしている逆説が。

可哀想なメアリー！ 彼女が心から自分を愛しているのは分かっていた、以前同様のかたちで（しかし繊細な良心と数多の原理原則が情熱的な愛を生むわけじゃない）。彼は自分がメアリーに与えられるのは友情だけでと改めて自らに認めた。躰が弱っていたこと、感謝を感じたことが自分を再びメアリーに引き寄せただけで、それは束の間の優しい気持に過ぎなかった。もしそれを愛だと考えていたとしたら、間違いだっただけだ。しかし、それがどうしたというのだ。自分たちは結構うまくやっていけるだろう、大抵の人たちと同じように。もし互いに好意を持ち続けるなら、人並み以上に。というのは、情熱が平穏な生活の助けになることはないからだ。幸い、メアリーは冷静で控えめで、愛に溺れることはほとんどない。ジェームズに何かを要求することもなく、教区の仕事と花嫁道具の蒐集に専心して、彼が読書三昧であることに満足している様子だ。

結婚式の日が近づいてきた。

ついにジェームズは抑えがたい嫌悪感に捉えられた。父が彼の隣に座っていた。

「メアリーのウェディングドレスが完成間近だそうだ。」と突然父が言った。

「もう？」ジェームズは声をあげた。心が沈んだ。

「しかし、メアリーは最後の最後に何かが起こって、間に合わなくなるんじゃないかと心配している。」

「どんなことが？」

「なに、仕立屋に何か起こるんじゃないかって。」

「なんだ、そんなこと？ 心配ありませんよ。」

暫しの間があつて、大佐が口を開いた。

「ジェイミー、おまえが結婚して幸せになるかと思うと嬉しいよ。」

ジェームズは答えなかった。

「しかし人間ってというのはどこまで行っても満足しないものだ。おまえが結婚すれば私の望みは全部叶う、そう思っていたが、今は、早く可愛い孫の顔が見たい、孫を膝に載せてあやしたいと願っている。」

ジェームズの顔が曇った。

「子供を養う余裕はありませんよ。」

「なに、欲しがるうと欲しくなかうと、そのうち出来るものさ。そうなったらおまえの生活費を増やしてやろうと思っている。余裕のない生活はさせたくないからな。」

ジェームズはこれに答えることなく、考えていた、——もしメアリーに子供が出来たら、俺はその子を憎むんじゃないだろうか、と。すると突然気が滅入り、どうなろうと構うものかという気持がなくなっていた。この間まではそう考えられたのに。ああ、俺はメアリーなんか大っ嫌いだ。

ジェームズはもうこれ以上愛情の真似事は続けられないと感じるようになった。所詮真似事に過ぎなかったのだ。優しく愛情をもって接しようとする努力は苦痛以外の何ものでもない。そう努力していると、苛立ちに全神経が震えるようだ。時に自分を抑えようと拳を握りしめなければならぬことすらある。全てが演技だったのだ。どうしてメアリーはそのことが判らないのか？ 結婚する嬉しさ

に目が眩くらんでしまったのか？ 昔、軍隊に入る前は、なんと易々やすやすと言葉が交わされたことか。時間のことなど忘れて何時間でも一緒にいられた。取るに足らないお喋りをして、時々黙りこくって、それで充分幸せだった。ところが今は、頭を絞って話題を考え出さなければならぬ。少しでも間が空くと、それが不自然に感じられて苦しかった。メアリーと一緒に時間が死ぬほど退屈に感じられることもあった。そんな時、彼は何か凶暴で冷酷なものに捉えられ、メアリーを傷つけるようなことを言うてしまうのを恐れて、その場を離れるしかなかった。本がなかったら俺は気が狂っていただろう。それが分からないとはメアリーは盲目めくらに違いない。彼は二人の結婚生活を想像した。どれだけ続くのだろうか？ 侘わびびしく単調な年月としつきが果てしなく続いている。俺たちは幸せになれるのだろうか？ 遅かれ早かれメアリーは俺がほとんど愛情をもっていないことに気づくだろう。気づいた時どんなに苦しむことか！ それは絶対避けられまい。しかし、もう何が起ころうと後戻りはできないのだ。今更説明するのは不可能だ、遅すぎる。いつか俺の中にメアリーへの愛が生まれるのだろうか。有り得ない。それどころか、むしろ、今押し潰そうとして押し潰せないでいる肉体的嫌悪が、ついにはメアリーの姿を見るのも嫌だというところまで行ってしまふのではあるまいか。

彼は猛烈に運命を怨うらんだ、何度も彼を死地から救ったからだ。猫が鼠ねずみを弄ぶように神々は俺を弄んでいる。危険な目に遭ったことは数え切れない。永遠の闇の入口まで行ったことも二度ある。しかし二度とも引き戻された。こんな屈従と絶望の中で生き続けるより、勇猛な戦士として死んでいたらどんなに良かったことか。一発の慈悲深い銃弾がこの様々な面倒事、この惨めさから俺を救うことができたのだ。それに、なぜ病氣から快復してしまったのか。メアリーはなぜ俺を快復させたのか。やら

なくてもいいことをやって、それで感謝を求めるとは、何と皮肉なことか！

「俺はメアリーを怨む。」彼は叫んだ。「心底怨む。」

ジェイムスの神経の糸は今にも切れそうなどころまで来ていた。もはや彼を破壊しようとする苦悶を隠しておくことはできそうになかった。しかし何ができるといえるのか。何もできない、何もできないのだ。

ジェームズは頭を抱え、哀れむべき己の弱さを呪った。どうしてあの快復期に気づかなかったのか？——メアリーを愛いとおしく思う気持は一時的なものに過ぎないと。自分は何としてもメアリーを愛したかった、皆んなを幸せにしたかった、だから優しく看護される中で生まれた小さな愛情を喜んで受け入れてしまったのだ。しかし俺は本物の愛がどんなものか分かっていたはずだ。愛に理由など要らないのだ。あの時感謝の気持に抗あむかう勇氣を持つべきだったのだ。

「なぜ自分を犠牲にしなけりやいけないんだ。俺の人生だって他の連中と同じように価値があるはずだ。どうしていつも俺ばかり犠牲を求められるんだ。」

しかし今更逆らっても無駄なのだ。メアリーは感謝を求めて当然なのだ。だから生きている限り、俺は感謝の気持を表わし続けなければならぬ。しかし今は、神経を休めるための休息がどうしても必要だ。暫くリトルプリンプトンを離れてみよう。ロンドンは大嫌いだ、ここにいるよりはましだろう。この圧迫感、日々自分に課さざるを得ない緊張の中にいるよりは。

彼は数分の間庭を行ったり来たりして心を落ち着かせた後、母のところへ行った。そして、できるだけ自然に話しかけた。

「メアリーのウエディングドレスがほぼ完成したって父さんが言ってましたが。」

「ええ、予定よりちよつと早いんだけど、遅いよりはいいでしょう。」

「そこで思いついたんですが、結婚式じゃ僕もそれなりのものを着ないとね。で、ちよつとロンドンへ行って買い物をしてきます。」

「どうしても行かなくちゃいけないの？」

「そう思います。色々揃えたいものがあるし。」

「そう？ 分かった。長くならなけりやメアリーも気にしないでしよう。でも躰に気をつけて、病み上がりなんだから。」

二度目のロンドン訪問は前の時より運が良かった。というのは倶楽部に入るとすぐに古くからの友人に遭えたからだ。パーカーという男で、ジェームズが所属していた連隊の副官だった。食事をしながら、パーカーは互いの知合いについてあれこれ語った。その後は一緒にミュージックホールへも出掛けた。ジェームズはこのところよりは晴れやかな気分になって、その気分は翌日まで続いた。翌日の午後、新聞を読んでいるとパーカーが近づいてきた。

「そうだ、おい君、昨日言い忘れてたんだが、ウォーリス夫人を憶えてるだろう？——プリチャー・ウォーリス夫人。今ロンドンにいるんだが、御立腹だったぞ。おまさんに二度手紙を出したが、梨の礫だつてな。」

「本当か？ 今はシーズンじゃないから、ロンドンには誰もいないと思つてた。」

「夫人はいるんだ、何故かは忘れたが。何か長い話をしてたが聞いちゃいなかった、どうせ嘘八百に決まつてるからな。多分なにか悪戯でも企んでるんだろう。どうだ、夫人のところへ行って、お茶でもご馳走になろうじゃないか。」

「無理だな。」ジェームズは顔を赤らめて答えた。「四時に約束があるんだ。」

「約束？ そんなの放つとけ。さあ、行こうぜ。相変わらず素晴らしく魅力的だ。まったく！ おまさんにも喪服姿を見せたかったよ。」

「喪服？ どういうことだ？」

「知らないのか？ ウォーレイスは死んだんだ。戦争が始まった頃、確かコレンソ(注20)の戦いの後だったと思う。」

「ホントか？ 知らなかった。新聞でも見なかった。」

「ああ、俺もイギリスに戻って初めて知ったんだ。……さあ、行こうぜ。夫人は次の旦那を探してるんだろうが、金持がお望みだから、俺たちが狙われる心配はないさ。」

ジェームズは機械的に立ち上がり、帽子を被るとバーカーに従って行ったが、バーカーは自分の言葉がジェームズに与えた激震には全く気づいていないようだった。

ウォーレイス夫人は在宅だった。階段を上りながらジェームズは、自分の愛する女性が自由になったことしか考えられなかった。自由になったのだ！ 鼓動は速まり、ほとんど息ができないほどだった。心の動揺が顔に出てしまうことを恐れて、彼は自分を抑えようと殊更ゆつくり階段を上った。

ウォーレイス夫人はジェームズの姿を見ると小さく驚きの声をあげた。夫人は何も変わっていないかった。身に纏った流行の黒のガウンは少しばかり風変わりなところがあって、それが透き通ったオリヴの肌と鮮やかな黒髪を引き立てていて目に眩しい。ジェームズは情熱に焼き尽くされたように青ざめ、口を利くことができなかった。

「ひどい人！」そう夫人は叫んだが、目は笑っている。「二度も手紙を書いたのに。最初のはおめで

とうって、次のは会いに来てくださって。なのに何の返事もくれないんだから。」

「すみません。手紙を書いてくださったってこと、つい先刻聞いたばかりなんです。」

「そうね、受け取っていないのかもって思った。いいわ、赦してあげる。」

本来なら足首を飾るような物を手首につけ、首には野蛮人がつけるような首輪を巻いた夫人は、ロンドンの下宿にいても東洋風な神秘的な魅力を放っている。女性らしいしなやかな動き、その優雅さを見ていて心地よい。が、同時に、どこか怖ろしくもあった。人間ではないものを内に宿しているのではないか、残忍な動物が女性の姿を借りているのではないか、そんなことを考えてしまう。青年を誘惑して性の虜にしたラミア(注21)と、最後には彼女に食べられてしまった青年たちの物語が、ぼんやりとジェームズの頭に浮かんだ。

三人はインドでの思い出や戦争のことなどを話し始めた。ウォーレイス夫人は、気の利いた人たちが皆ロンドンを離れてしまった今、ここに留まっていなければならないことを歎き、バーカーは愉快的な話を次々と繰り出す。どうしてそうなったのか分らないが、ジェームズもいつのまにかこの軽妙な会話に加わっていた。そして、心が激しく動揺しているというのに、こうして軽口をたたいたり素直に笑ったりしている自分の自制心に驚いた。やがてバーカーが帰り、ジェームズはウォーレイス夫人と二人きりになった。

「僕も帰った方がいいですか？ お望みなら追い出してくれて構いませんが。」

「そうすべきかも——躊躇なく……ね。」そう言って夫人は笑った。「でも、わたし、退屈でしょうがないの。だから、もう少しここにいて。面白い話をしてくれたら嬉しいわ。」

不思議なことに、長く会っていないにもかかわらず、夫人との間に壁のようなものは生まれていなかった。時には意思に反して、時には喜びをもって夫人のことを絶えず考え、空想の中で会話を交わしてきたジェームズは、かえって以前よりも夫人と親しくなった気がしていた。二人の間に何かが生まれたようだった、二度と再び二人を赤の他人にすることのない絆のようなものが。夫人は自分に何でも打ち明けてくれる、——そんな気がして、ジェームズは以前は臆病さゆえにできないでいた率直で素直な物言いができた。夢の中に現れた想像上のウォーレイス夫人と話した時のように、ごく親しい友人と話す時のように。

「ちっとも変わってませんね。」ジェームズは夫人を見つめて言った。

「皺くちやお婆ちゃんになつてのを期待してたの？ 残念でした。わたしは歳を取るのを自分に許さないの。知らなかった？——女はその気さえあればいつまでも若くいられるのよ。」

「驚きましたよ。僕が思ってたとおりでしたから。」

「しよっちゅう考えてくれたの？」

ジェームズの瞳に一瞬炎が走った。熱く語ってしまったかと思った、——いつも夫人との思い出の中で生きてきたこと、夫人が自分にとっては命を支える食べ物であり、飲み物であり、空気であったことを。しかし彼は自制した。

「時々は。」ジェームズは微笑んで答えた。

ウォーレイス夫人も微笑んだ。

「あなた、いつもわたしのこと思ってるって、いつでしたか、そう誓ってくださいましたように記憶しま

すが……？」

「人間、誓うだけなら何でも誓いますからね。」彼は夫人が声の震えに気づかないでいてくれることを願った。

「ジム君ったら、今日はとっても冷静ね。それに前ほどシャイじゃない。前は恥ずかしがり屋さんを絵に描いたようだった。それに凄すごく道徳的で、わたし、怖くなっちゃった。でもそれは檻に入れてしっかき鍵を掛けたようね、動物園の動物みたいに。」

ここにこうして留まっている俺は馬鹿だ、すぐにここを出て二度と戻ってくるべきじゃない、——そう彼は自分に言い聞かせていた。メアリーの姿が浮かんだ。麦藁帽を被った姿、泥の付いたサージの服を着た姿、父と母と一緒に居間に座っている姿。一時も無駄にすまいと編物を持ち込んでいる。皆で彼の噂をしている間も、鉤針は行き来を繰り返す。その音が聞こえるようだ。一方、ウォーレイス夫人は長椅子の上でとぐるを巻いた蛇のように撓垂れている。夫人お得意の姿勢だ。夫人が身を振るたびに圧倒的な香水の薫りが漂ってくる。微笑む唇、愛撫するような視線。ジェームズは気が狂いそうだった。夫人への愛は彼の想像を遙かに超えていた。その熱情は盲目的、破壊的だった。俺はここを今すぐ飛び出さなければいけない、——そう思うのだが、四肢は重く、彼を夫人の横に釘付けにしている。意思も力もなくなっていた。夫人の言葉、夫人の表情の全てに頭を垂れる葦だった。夫人の魅力は人間のものではなかった。その穏やかでいて官能的な瞳はあまりに残酷だった。そして夫人は今にも跳びかからんとする蛇のようにそこにいる。

しかし、とうとう、ジェームズは暇を告げるべく立ち上がざるをえなくなった。

「こんな時間だとは気が付きませんでした。」

「そう？ わたしも気が付かなかった。」

夫人は自分を愛しているのだろうか。ジェームズは別れの挨拶をするために夫人の手を取った。が、その瞬間、夫人の手の感触に血が逆流した。この間別れた時のあの情熱的な抱擁がまざまざと蘇った。あの時はもう二度と夫人と会うことはないのだと思った。そして今日、運命が自分をここに連れてきたのだ。ああ、今夫人を抱きしめ、この柔らかな唇をキスの雨で濡らすことができたなら！

「今晚のご予定は？」

「何も。」

「わたしをカールトンに連れて行ってくださる気はおあり？ 憶えてるかしら、前にそう約束して下さったわ。」

「ああ……、ええ、喜んで！ もちろん喜んでご一緒します！」

ジェームズは歓喜に震えて答えた。もう心の炎を隠すことはできなかった。そのあまりの激しさに、夫人は吃驚した表情で彼を見上げると、握られていた手をそつと引つ込めた。

「じゃあ、八時十五分前に迎えに来てくださる？」

ウォーレイス夫人を家に送った後、ジェームズは街を一時間ほど歩き回った。心は狂喜乱舞していた。二人はカールトンで——夫人が高価なものと言うので——贅沢な食事をとってから、帝国劇場へ馬車で乗り付け、ボックス席を取ったのだが、その間ずっとジェームズは、どうやって冷静を保つ

たらしいのか、どうやって思いの丈を打ち明けないでいたらしいのか分からなかった。リトルプリンプトンでの惨めな生活の後だったから、夫人と一緒にいられる一瞬一瞬が幸福で、どんな些細な喜びも掴み取ろうとしたのだった。もう躊躇いはかなぐり捨てよう。自分を抑えておくのにはうんざりだ。自制しすぎたのだ。今はどんな危険を冒しても自分を解放しなくてはならない。纏も手綱も糞喰らえだ。たとえその炎に焼き尽くされようと、この情熱を抑えておくことはできないし、抑えておくつもりもない。俺の真面目さは馬鹿げている。どうして他の連中のように人生の喜びを、仮に儂いものであっても、享受してはいけないのか。どうして薔薇を摘み取ってはいけないのか、美しさがすぐに色褪せてしまうかどうかなんて気にせず。「大いに食べて、飲んで、陽気にやろうじゃないか。」彼は叫んだ。「どうせすぐ死ぬんだから。」

今日は水曜で、土曜にはリトルプリンプトンに帰ると約束してあった。しかしこの限られた時間を最大限活かすこと以外考えないことにしよう……。ジェームズはこの誘惑と一応は戦ったのだが、やはり勝てなかったのである。そして誘惑に負けたことを喜んでさえたのである。もうこの愛を押しえつけようとするのは止めよう。その力も、自分を守ろうという意思も残っていない。この情熱に全てを任せるしかない。将来がどうなるかと構ったことか。

「自分を苦しめるのは馬鹿だ。」彼は叫んだ。「何だかんだ言っても、愛が一番大切なんだ。」

ウォーレイス夫人は明日の午後は約束があるが、夕食ならご一緒できると言ってくれた。

「わが家の食事は、そりゃひどいもんですけど、でもできるだけのことはしますわ。それに、ゆっくりお話しできるし。」

その時まで自分は生きていられるだろうか。さまざまな気狂いじみた考えが脳裡を駆け巡る。

「道徳家を気取るのは馬鹿もいいとこだ。」彼は吐き捨てるように呟いた。

その夜、彼は眠れず、夫人の柔らかな手、赤い唇に熱くキスしている自分の姿を想像して、何度も寝返りをうった。ようやく朝になった。彼は大きな籠に入れた花をハーブムーン街の夫人の下宿に贈った。

「お花を贈ってくださいとあって、ありがとう。」ジェームズが到着すると、夫人は部屋中に撒き散らした薔薇を指差しながら言った。髪にも三輪挿しであって、片方の耳の後ろに留めてある。なんともエキゾチックで魅力的だ。

「そんな風に髪に留めるなんて、思いつくのはあなただけでしょうね。」

「どう？——野性的に見えて？」ジェームズの目の中に称讃の色を見て、夫人は嬉しそうだった。

「この間お会いした時と比べて、あなた、けっこう進歩したみたい。」

「さて、どこかへ行く？ それともここにこのまゐる？」二人で食後の煙草を吹かしている時、夫人が尋ねた。

「ここにいきましょう。」

夫人は意味のないお喋りを始めたが、それはかつてジェームズを喜ばせたものと同じものだった。今再び夫人の口からそれを聞いて、彼は魔法にかけられたように感じた。お馴染みの声音、何百回となく頭の中で繰り返した話。彼は至福の笑みを浮かべて夫人を見つめていた、夫人の一挙手一投足も

見逃すまいと。

「あなた、わたしの話何にも聴いてないようね。」夫人がしびれを切らしたように言った。「どうして返事をしないの？」

「どうぞ続けてください。あなたが話すところを見ていたんです。随分と久しぶりだから。」

「昨日は、わたしに会えなくても大して寂しくなかったみたいな話しっぷりだったわよ。」

「本心じゃなかったんです。あなたも分かっているんじゃない？」

夫人は揶揄するように微笑んだ。

「疑わしいとは思ったわ。もし本当なら、あんなひどいこと言えるはずないもの。」

「僕はあなたのことをずっと考えていました、ずっと。だから今はあなたのことが前よりよく分っている気がします。僕は変わっていません。かつて感じたことをいつも感じている。」

「どういうことかしら？」

「つまり、最後にお会いした時と同じように心からあなたを愛しているということです。いや、あの時の何倍も何十倍も愛しています。」

「それで、あの引つ詰めのお勤者の女性は？ あなた、その女性と婚約してらって、あのとき言ってたわよね？」

ジェームズは一瞬黙り込んでしまった。が、

「十月十日に結婚することになっています。」とやっとのこと答えた。その声には何の感情も表われていなかった。

「あまり嬉しそうじゃないわね。」

「どうして思い出させたんです？ とつても幸せだったのに。」ジェームズは叫んだ。「ああ、メアリーなんか大嫌いだ！」

「じゃあ、なぜ結婚するの？」

「仕方ないんです。そうするしかないんです。あなたのお蔭で思い出してしまった。どうしてそんなに残酷になれるんです？ ケープタウンから戻った時、僕は婚約を解消して、メアリーを惨めにしました。父の生活からも喜びを奪ってしまった。でも、僕は自分は正しいことをしていると信じていた。愛していないのに結婚するなんて気狂いじみてる、そう信じてた。それに、不潔だとも思った。ああ、あなたには分からないでしょう、——僕が何度そのことを考えて悩んだか。僕は正しいことをしたかった。でも、一方で、自分は人非人ひとでなしだとも思った。自分の育ちから逃れられないんです。このイギリスで僕らを縛っている鎖がどんなものか、あなたには想像できっこない。僕らは生まれてお襦むす裸はだかでくるまれた時から、偏見と無知と誤った考えにくるまれて育つんです。大きくなって、そうしたものはみんな馬鹿げたひどいものだど頭では分かっても、そこから逃れられない。肉体の一部になっ

てしまっているんです。——で、それから僕は病気に罹かった。もう少しで死ぬところだったんです。

その時メアリーが献身的に看護してくれた。自分に何が起こったのか分かりませんが、僕はすっかり弱っていた。僕はメアリーに感謝の気持を覚えた。また昔の自分に捉えられて、自分がしてしまったことを恥ずかしく思った。メアリーと両親を幸せにしたいと思った。僕はもう一度メアリーに結婚を申し込んだ。彼女は受け入れてくれた。僕はメアリーを愛せると思ったんです。でも、できない。できないんです。ああ、神よ！」

ジェームズは感情を制御できなくなってゆき、部屋の中を行ったり来たりすると、やがて椅子にぐったり沈み込んだ。

「僕が弱かったんです。それは分かっている。前は自分の強さを誇りにしていたけど、本当は弱いんです。女より弱い。風に揺れる葦。何の確信も目的も持っていない。自分自身の心が分かっている。信念に従って行動する勇気がない。人に苦痛を与えるのが怖い。みんなは僕を勇敢だと言うけれど、本当は哀れな臆病者にすぎないんです……。メアリーに畏おそいにかけられたように感じるんです。だから彼女を憎んでる。良いところがたくさんあることは知ってます。でも僕にはそれが見えない。彼女に触られるだけで、血が固まってしまう。どうしようもないんです。肉体的嫌悪しか感じないんです。でも、結婚するしかない。他にどうしようもないんです。もう一度恥辱はにかめを与えて惨めにしたくない。両親を不幸にしたくない。」

ウォーレス夫人は今は真面目な表情だった。

「他に好きな人がいるのね？」

ジェームズが癡狂な表情で夫人の方を向いた。

「分かっているくせに！ あなたを心から愛していること、最初にあなたに会った時から熱烈に愛していたことは分かっているくせに！ 感じなかったんですか？——あのお別れた時だつてこの愛は消せなかった。僕はずっとあなたを愛していた、そう感じなかったんですか？ 僕が死んでもこの愛は生き続ける、それはあなたにも分かっていたはずだ。僕はこの愛を何なんが何でも葬まうろうとした、あなたも僕

も自由の身じゃなかったから。旦那さんは僕の友人なんです。卑劣なことなんかできっこなかった。だからあなたから逃げたんです。なんて馬鹿な男だらう、きつとそう思ったでしょうね。でも今、僕たちは二人とも自由になれた……はずだった。だから、あなたに僕を愛させることもできたのかもしれない。幸せになるチャンスがあったのかもしれない。友達を裏切る自分を呪いながら、それでも僕が望んでいたことが現実起こっていったんです。でも全然知らなかった。僕は自分の弱さから、自由を手放してしまった。ああ、神様、どうしたらいいんだ。」

「ジェームズは両手に顔を埋めると、苦悶にうめいた。ウォーレイス夫人は暫く沈黙していたが、やがて、

「慰めになるかどうか分からないけれど、」と言った。「どうせ遅かれ早かれ判ることでしょうから、今言っておいた方がいいと思うんだけど、わたし結婚することにしたの。」

「何ですって！」ジェームズは椅子から飛び上がった。「嘘だ！　嘘だ！」

「嘘じゃない。もちろん本当のことよ。」

「そんなことできるはずない。お願いです、嘘だつて言うてください。」

「馬鹿なこと言わないの、いい子だから。あなたは一ト月後に結婚する。わたしを愛してるってあなたが思い込んでるからって、それだけの理由でわたしが一人でいなくちゃならないなんて、そんなことあなただつて考えないでしょ？　でも、言うべきじゃなかったかも。わたしは、ただ、言えばあなたも少しは楽になるかなって思ったの。」

「あなたは僕のことなんかこれっぽちも気にかけてなかったんだ。それは分かった。でも、そんなにはつきり言わなくてもいいでしょう！」

「ねえ、いいこと。わたしは結婚してたのよ。」

「あなたはどの程度気にしたんでしょうね、——旦那さんがアフリカの草原に死んで横たわっていると聞いた時。」

「あら、夫は熱病で死んだのよ、ダーバンの病院のベッドで、安らかにね。」

「悲しかったですか？」

「もちろんよ。あんな好い夫はいなかった、全然厳格じゃなかったし。」

ジェームズはどうしてこんなことを訊いてしまったのか分からなかった。思わず口に出してしまったのだ。ますます気が滅入った。自分に腹が立ち、自らを蔑んだ。

「今度結婚する人はブライアントさんというの。でも、もちろん、今すぐってわけじゃないのよ。」

夫人は続けた。自分の結婚のことで頭がいっぱいで、それを話すのが楽しそうだった。

「仕事は？」

「何もしてないわ。土地持ちなの。」夫人は誇らしそうに言った。

ジェームズは軽蔑するように夫人を見た。彼の夫人に対する気持には、これまでも愛と呼ぶにはふさわしくない要素が交じっていた。抑えようとはするのだが、夫人の教養のなさ、趣味の悪さ、俗物根性が鼻についてしまうがない時が間々あったのだ。なるほど馬術教師とポルトガル人の母との間に生まれただけのことはある、——今また彼は苦々しくそう思った。

「ねえ、ホントに、そんなに開分けがなくてどうするの？　少しくらい喜んでくれてもいいんじゃないな

い？」

「無理です。」彼は重苦しく答えた。「もう帰らせてください。あなたは分かっている、僕がどんなにあなたのことを思っていたか。あなたも僕の気持が分かってくれているものだと思像していた。少しはそれに応えてくれるんじゃないかとさえ思っていた。僕が馬鹿だったんです。」

「あなたはこれまでに会ったどんな子よりもいい子よ。わたし、あなたが大好きだわ。」

「でも、土地持ちの男の方が好きなんだ。賢いですね。なら、その男と結婚すればいい。さようなら。」

「わたし、あなたにひどい女だって思ってたほしくない。」夫人はそう言ってジェームズに近づき、腕を取った。誰に対してであれ優しく接し、自分を好きにさせたい、——それは夫人の本能だった。

「だって、わたしが悪いわけじゃないんですもの。」

「非難しているように聞こえましたか？ すみません。僕にそんな資格はありませんよね。」

「これからどうなさるおつもり？」

「分かりません。……耐えられなくなったら銃を使えばいい。ええ、有難いことに、最後には自殺して手があります。」

「何てことを！ あなたはそんな馬鹿なことするような人じゃないわ！」

「確かに僕らしくないですよね。」彼は呟いたが、表情は暗いままだった。「僕は怖ろしく散文的な人間ですから。じゃ、さようなら。」

ウォーレイス夫人は心からジェームズに同情していた。夫人は優しく彼の手をとった。好意を示す

のにこれが一番簡単な方法だと思っているのだ。

「二度と会えないかもしれないけれど、ジム、わたしたちお友達の間でいましよなね。」

「僕の妹になるって言うってくれるんですか。メアリーが副牧師に言った台詞と同じだ。」

「ねえ、帰る前にキスして。」

ジェームズは首を振った。口を開けば何かとんでもないことを言ってしまうそうだった。人生の明かりは全て消え去っていた。太陽は隠され、厚い雲が空一面を覆い、全てのものが暗闇に閉ざされていた。しかし彼は笑顔を見せようと努め、夫人の手に触れた。もう一度夫人の顔を見る勇氣はなかった。見れば、これまでの思い出が全て蘇り、苦しむことを経験から知っていたからだ。彼はどうかか気を落ち着かせると、

「今日の僕は馬鹿でした、謝ります。」と穏やかに言った。「どうか幸せになってください。今日言ったことはみんな戯言だと思っ忘れてください。さようなら。結婚式にはケーキを送らせていただきます。」

ジェームズは白けたような、不幸な気持でリトルプリンプトンへ戻った。ウォーレイス夫人とのことで気持が萎え、物憂く、何もかもどうでもよかった。世界は色を失い、太陽は光を失っていた。これまで、落ち着いて考えた時には、夫人が自分を愛することなど有り得ないのは分かっていたはずだ。夫人の性格は良く理解していたのだから、自分は玩具おもちゃに過ぎないこと、男からの称讃を鯉呼吸こゝろのように必要とする夫人の時間潰しに過ぎないことは承知していたはずだ。しかし、それでもなお、心の声は常に囁いていたのだ、——自分の愛がまったく不毛であるはずがない、この愛は無限の距離を旅し、ついには夫人のもとに届く、そして少なくとも夫人の心に優しい気持を目覚めさせるだろう、それほど強い愛なのだ。ジェームズは謙虚な男だったから、夫人に多くを求めたことはなかったが、時に自分は確かに愛されていると感じることもあった。だからこそ、真実が明白あからさまとなった今、胸が引き裂かれ、苦々しい思いに充たされるのだった。自分の全てだと思っていた女性が、自分のことなど忘れて結婚の約束をしていた。一方、自分を愛している女を自分は憎んでいる……。彼は本に向かうことでこうした思いを忘れようと努めた。しかし無駄だった。避けられぬ、悍ましい未来が頭に浮かんできて、それしか考えられなかった。一日また一日と、時はゆっくり単調に過ぎてゆく。そ

して夜が訪れるたびに、ああ、今日もあつという間に終わってしまったと身震いするのだった。彼はどうしたら良いのか分からず、拷問にかけられているような気持で、ただ流されていた。

「俺は何て弱い人間なんだ！」彼は叫んだ。「何て意気地なしなんだ！」

もしも自分に強い意志があるならどうするかは分かっていた。信念を持った男が自分のような立場に置かれたなら、この縛もれを無理矢理にでも断ち切ってしまうだろう。メアリーに手紙を書き、両親に手紙を書き、ここから飛び出すだろう。どうして他の人間のために俺の人生を犠牲にしなくてはならないのか。こんな状態を招いたのは、何も俺だけの責任ではない。俺だけが苦しむのは理不尽だ。

もし連隊長が今の状況を耳にして問い詰めるなら、辞表を出すまでだ。平和時における連隊の生活は決り切ったことの連続で、ジェームズはその退屈さに飽き飽きしていた。およそ必要とも思われぬ義務を来る日も来る日も果たし、同じ人間に会い、同じお喋り、同じ冗談、同じ揶揄やげうを聞く日々。このどうしようもない退屈さに加えて、まるで大きくなりすぎた高校生が馬鹿で無能な上級生の言いなりになっているような苛立たしさもあった。人生は短い。つまらぬことを真面目くさつてやるのは時間の無駄だ。それにあの馬鹿げた軍服、あんなものは軍以外の仕事をする時には何の役にも立たない。俺は若いのだ。世界は俺の前に広がっている。死ぬことを恐れなければ、様々な生き方が可能なのだ。アフリカが、生命いのちを強要する無慈悲な浅黒い両手を拡げて、俺の冒険心を呼び覚ましてくれた。世界は途方もなく広く、多種多様なのだ。俺の願う全てを試してみる余地は充分にある。たとえ困難があったとしても、乗り越えられるはずだ。生命の危険も冒険の味付けとなり、自由は強烈な葡萄酒となるだろう。自由——ああ、それこそが俺の願うものなのだ。全てを思いのままにできると感じられる

自由。他人の愛や憎しみ、習慣や因習に縛られていないと感じられる自由。あらゆる束縛にはもううんざりだ。俺には失うものは何もない。全てを勝ち取れるのだ。

しかし、己の自由意思で断ち切れると思っっている束縛こそが、実は、もつとも断ち切りがたいものなのである。そうした束縛は、普段は見えもしなければ感じられもしないのだが、突然、火と燃える枷かぎとなって手首を焦がし始める。そうになると、それを嵌められた哀れな者は最早どうしようもない。

ジェームズは自分には人を容赦なく無視する強さが欠けていると分かっていた。自分が人に与えるであろう苦痛を直視する勇氣はなかった。だから道化のように振舞っていた。しかし優しく振舞うのは単に臆病だからなのだ。残酷であるための不敵不敵ふてふてしさは自分には備わっていないのだ。ここを去ったとしても、苦悩はずっと続くだろう。想像の中に、辱められたメアリーの姿、不幸な両親の姿が現れ続けるだろう。自分のやったことを知ったら、三人は驚きと恐怖に打たれるにちがいない。最初のうちこそ、ジェームズがそんな卑劣な行動を取ったはずがない、これは冗談だろう、ジェームズは気がおかしくなったのだと考えるだろう。が、やがて、本当のことなのだと分かる時が来る。その時の屈辱感！自分がこれまでに受けた愛情と優しさに対して、どうしてそんな報い方ができよう。心から愛する父の打ち拉ひがれた姿が目には浮かぶ。

「そんなことをしたら父さんを殺すことになる。」ジェームズは呟いた。

それに母さんのこともある。優しくて愛情深い一方で、自分が信じる紳士としての道に息子が背くなら、あからさまに嫌悪感を示すことのできる人。瑕疵かき一つ無い美德の持主であり、自分自身に厳格であるがゆえに、他人にも厳しく徳を求めめる人。小さかった頃、母は彼がささいな罪を犯したのを知

って、怒りを含んだ冷たい態度で部屋の中を歩き回り、長い間話しかけてくれなかった。また、彼が嘘を吐いたのが判った時、母の顔には氷のような義憤が張り付いていた。ああ、善なる人！ 善なる人がなんと冷酷になりうるのか。

新しい人生という未知の危険に立ち向かう勇氣は持てそうもなかった、——誰にも愛されず、誰にも知られず、友達もいない人生に。そうした人生を送るには彼は情が厚すぎた。他の人たちの苦悩に痛みを感じないではいられないジェームズは、自分の手を汚すのをいつも怖れていた。全ての絆を断ち切り、頭脳と無慈悲な心だけを武器に世の中に出て行くためには、もつと鉄面皮でなくてはならぬのだ。取分け彼が怖れていたのは悔恨の情だった。自分のしたことをいつまでも気に病んで、ついには精神病に落ち入ってしまうかもしれない。常に自分の良心に責め立てられ、決して心の平安は得られないだろう。そのことは分かっていた。生きている限りメアリーの姿が目には浮かび、地の果てまで行っただとしても、無言で苦しむメアリーの姿を眼前に見ることになるのだ。ジェームズは自分という人間が分かりすぎるほど分かっていた。

唯一の解決法は、苦々しい気持が頂点に達した時思わず唇に出る言葉だった。

「自殺ならいつでもできる。」

彼がそう言った時ウォーレイス夫人は、「あなたはそんな馬鹿なことをするような人じゃない、」と答えたのだった。

馬鹿なことかもしれない。きっとそうなのだろう。しかし、畢竟、人生は一度きりなのだ。人は時に馬鹿なことをしなくてはならないこともある。

*

*

*

ラーチャーの家を訪ねてみようかという気持がふと起こって、ある日のこと、ジェームズはアシェフォードへ出掛けた。その近くにラーチャーの両親が暮らしているはずだ。彼はレジー・ラーチャーを救おうとした自分の行為については謙虚に考えていた。ああした場合に必要とされる勇氣は純粹に本能的なものなのだ。ラーチャーのもとに引き返した時、危険などとは少しも考えていなかった。そして、傷ついて動けないでいるラーチャーを見て、安全な場所へ運んでやるのは至極当然のことに思われた。戦闘の真つ最中には誰でも常に危険な行動を取っているのだ。少なくとも自分だけは弾に当たらないと誰もが思い込んでいる。ジェームズは自分が英雄的な行動を取ったなどとは決して考えていなかった。同じような行為は数多くなされているのであり、ただそれが見過ぎられているだけなのだ。彼の行動が目にとまったのは全くの偶然に過ぎない。

彼が干渉したことが逆に悲惨な結果を招いたのだ、そうジェームズは最初から確信していた。おそらくボーア軍の射撃手たちは傷ついた敵を放っておいたはずだ。そして戦闘が終わった後、ボーアの医者がレジーを連れ帰り、適切な治療をしてくれたに違いない。

ラーチャーの息絶えたのが自分の腕の中であつたのをジェームズは忘れることができなかつた。「もし俺が余計なことをしなければ、ラーチャーは今も生きていたのかもしれないのだ。」そう彼は何度も繰り返した。加えて、経験豊かな自分の方が未熟な兵士より軍にとつて遥かに有用である、そのより価値のある生命をひよつこのために危険に曝すのは、一般論として、称讃に値するどころか愚かなことなのだ。しかし、受けるに値するとはほとんど思えない名誉を受けるといふのは、それはそれ

れで彼の皮肉な氣質に訴えるものもあつた。

レジー・ラーチャーの両親はジェームズに会いたがつていた。ジェームズもレジーの両親がどんな人なのか興味があつた。また、心のどこかに、息子を亡くした後どんな風に暮らしているのか見たい気持もあつた。まだ悲しみに意気阻喪しているのか、それとも運命と諦めているのか、——ジェームズ同様レジーも一人息子だつた。ジェームズはあらかじめ知らせることなくラーチャーの家に向いた。駅からちよつと離れた、赤煉瓦の新しい家だつた。玄関に向かう途中、家の横のコートでテニスをしている人たちの姿が見えた。

ラーチャー夫人はご在宅かと尋ねると、居間に案内され、やがてテニスコートから夫人がやって来た。彼は自分が誰であるかを述べた。

「もちろんあなただとすぐ判りましたわ。新聞でお写真を拝見しましたから。」

暖かくジェームズの手を握りながら夫人はそう言ったが、どこか困惑の表情を隠そうとしているようにジェームズには感じられた。どうも訪問のタイミングが悪かつたようだ。

「今テニスパーティーをしていますの。こんなに好いお天気を無駄にするのは惜しいでしょ？」

芝生から陽気な笑え声と、大声でのお喋りが聞こえてくる。夫人は当惑顔で窓の外に眼をやつた、——初めての訪問でパーソンズ大尉は皆が息子の死を深く悼んでいることを予想していたであろうから、この騒々しいばかりのはしやぎようを見てどう思うことか。

「皆んなのところへ参りませんか？ 今お茶にしようと思つていたところなんです。きつとお腹がお空きでしょう。お知らせくだされば駅までお迎えの馬車をお出ししたんですが。」

もしあらかじめ日時を決めておいたなら、この人たちはきつと心に鍵を掛けてしまい、普段の自然な姿は見せないだろう、そうジェームズは予想し、わざと突然の訪問を選んだのだった。

二人は庭に出た。ジェームズはテニスの後で息を切らしている、胸の大きな、若さではち切れそうな二人の娘に紹介された。二人とも男物のような白のテニスウェアに身を包んでいる。喪中であることを示すのは船員結びセイラーズノットされた黒のネクタイだけだ。二人はジェームズの手を強く握った——力強く握手するのがこの一家の習慣なのだろう——が、何を話したらいいのか途方に暮れた様子だった。例によってジェームズが自分の方から話すことはなかったから、二人はちよつと考えた末、天気や、駅からここまでの道路の埃っぽさについて話し始めた。

やがてしなやかな手足をもった若い男が現れ、ジェームズに紹介された。この姉妹とは親しい関係にあるらしく、二人は彼をボビキンズと呼んでいた。

「いつ戻ったんだい？ 僕は義勇騎馬隊インベリブルホーヴリにいたんだ。でも熱病に罹かって帰国しなくちゃならなかったけどね。」

ジェームズは、義勇兵に対する職業軍人の本能的な嫌悪感から、少し躰を硬くした。

「そう、騎馬兵だったんだ？」

「そうさ。えらく大変だったよ、まったく。」

彼は自分の経験をさも満足そうに、よく響く声で語り始めた。顔をほてらした姉妹は讚嘆の表情でその話に耳を傾けている。この男はこの娘たちの両方と結婚するつもりでいるのだろうか。

ジェームズがそんなことを考えていると、ラーチャー氏が現れて、ボビキンズの話は打ち切られた。

ラーチャー氏は頬髭をたくわえた血色の良い男で、こざっぱりした服に身を包み、愛想が良かった。

花を摘みに行ってきたらしく、花束を持っていて、それを客の一人に手渡した。きっと以前は裕福な商人で、引退後田舎暮らしを始めたのだろう。家族の中では一番垢抜けない人だったが、一番気取らない人でもあった。氏はジェームズに心を込めて挨拶すると、新しく温室を作ったから行ってみませんかと誘った。

「主人は誰彼構わず温室に案内したがるんですよ。」とラーチャー夫人が詫びるように微笑むと、

「このアシフォード近辺じゃ一番大きい温室なんです。」とアーチャー氏が説明を加える。

おそらく息子の話をしたいのだろうと考えて、ジェームズは同意した。温室に向かいながらアーチャー氏は果物くだものの木々や鳩を指差し、自分は植物の手入れと鳥の世話が大好きで、その世話は自分一人で行っているのだと話した。そして温室に入ると、美しい蘭の花や、孔雀が羽を広げたような見事な羊歯を指し示しながら、

「ケープタウンじゃこうした植物が野生で見られるんでしょうな？」と言った。

「あそこでは何でも育つと思います。」

息子についての話は全く出ることなく、やがて二人は再び他の人たちに加わった。ラーチャー一家は少しばかり凡庸ではあるが、明らかに正常で健康な心を持った、尊敬に値する人たちだった。ただ、もし息子の悲劇的な死について何も訊く気がないなら、何故自分を招待したのだろう。息子のことはもう全部忘れたいと願っていて、そのことに言及するのが嫌なのだろうか。ジェームズはレジーがどうしてこのような環境の中で、あんなにも素直で純朴で魅力的な若者に育ったのか不思議な気がした。

というのも、かろうじて俗悪になることは免れ^{まぬか}ているものの、この家族にはどこか気取りのようなものがあるからだ。そうは言っても、ジェームズを大切に扱おうとしていることは確かで、彼が温室に行っている間に、ラーチャー夫人がジェームズが何者であるかを説明したらしく、お茶の席に戻ってみると、皆が彼を畏敬の念を持って眺めているのが感じられた。ジェームズにはそれが可笑^{おか}しかった。ラーチャー夫人がテニスに誘ったが、ジェームズが遠慮しておくと言うと、それ以上どうしたらよいか分からない様子だった。一度、義勇騎馬兵の鋭い冷かしに年下の娘が大声で笑った時、夫人は、ほとんど気づかないほどではあったが、視線をジェームズの方に送り、眉を顰^{ひそ}めて娘に控えるよう合図した。が、やがて話題は当り障りのないものとなり、気が付けばジェームズは娘たちとカンタベリーで開催されるクリケット週間について話していた。

結局、この一家がごく幸せであることは驚くには当たらないだろう。レジーが死んでから六ヶ月が経過しているのだ。いつまでも喪に服しているわけにはいかないし、生きている者が死んだ者を忘れるのは自然なことなのだ。それができなければ、生きていることが耐えられないものになってしまうだろう。それに、ラーチャー家の人たちが大声で笑い、大声で話すのはこの人たちには普通のことなのだろう。見たところ素朴で温かな、仲のいい家庭だ。ものを考えすぎて苦しむことのない人たちなのだ。たとえ息子の死を諦めきれないとしても、息子がいたことを忘れようと最善の努力をしている。結局それが一番なのだ。明るさを取り戻せないでいることを期待するのは残酷なこと、——残酷すぎることだろう。

「そろそろお暇させていただきます。」暫くしてジェームズは言った。「タンブリッジウェルズに行くと、皆彼を引き留めようとした。それが礼儀なのだ。しかし彼が帰ることを残念がっている様子はなかった。」
「ぜひいつかまたお出てくださいね、今度はわたしたちだけの時に。次はゆっくりお話しできると思っていますわ。」
「誘ってくださいさって有難うございます。」とジェームズは答えたが、来るという言質^{げんち}は与えなかった。夫人に伴われて彼は居間に戻った。ラーチャー氏も後に続いた。

「レジーの写真があります。ご覧になりますか？」
これが死んだ息子についての初めての言及だったが、夫人の声は震えてもいなければ、何か特別の感情を含んでもいなかった。
「ええ、ぜひ。」

自分がどんなにレジーが好きだったか、レジーの悲しい最後をどんなに悔やんでいるか、それを口にした気はしたが、ジェームズはその気持を抑えた。閉じられた悲歎の傷口を再び開ける必要はない。それは残酷というものだろう。

夫人は写真を取り出してジェームズに渡した。ラーチャー氏は夫人の横に立っていたが、何も言わなかった。

「それが一番上手に写っていると思います。」
婦人は組んだ手を少し振るわせた。そして、何かもつと言わなくてはと考えたようで、

「パーソンズ大尉、わたくしたち、あなたのなさってくださいましたことに本当に感謝しています。」と加えた。「それにヴィクトリア十字勲章をお受けになったこと、本当に嬉しく思っています。」

「今日は持ってこられなかったんですな？」とラーチャー氏が尋ねた。

「ええ。」

二人はジェームズを玄関の外まで送った。

「ぜひまたお越しくださいね。でも今度は、できたら、前もってお知らせくだされば有難いですわ。」

数日後ジェームズのもとにラーチャー夫妻から金の煙草入れが届けられた。片面にダイヤモンドでヴィクトリア十字勲章が、もう片面にジェームズの名が銘刻されている。実際に使うには立派すぎる、明らかに高価な物で、あまり趣味が良いとは言えない。

「息子の価値はこのくらいだと考えて、るんだらうか。」ジェームズが呟いた。

メアリーは目が眩んだようだった。

「何て美しいこと！ 価値がありすぎて、もちろん実用には向かないけど、でも客間に飾ったらきつと素敵よ。」

「ガラスのケースに入れて……なんて言うんじゃないだろうね？」ジェームズは苦笑いを浮かべた。

「あら、そのままにしておいたら汚れちゃうでしょ？」とメアリーは真面目に答えた。

「名前が彫ってなければ良かったな。金に困って質屋へ持って行った時、その分安くなっちゃうから

ね。」

「ジェームズ！」メアリーはショックを受けたようだった。「絶対そんなことしないで！」

ジェームズはラーチャー家の人たちに会って良かったと思っていた。人間の忍耐力は悲しみを上回るものであることが判って安心し、救われた思いだったからである。神々が人間に与えた最大の贈り物は、辛いことは忘れられるということだ。

息子の死から六ヶ月、レジーの家族は何事もなかったようにパーティーを開き、笑い、冗談を言えるようになっていた。そう考えると、ジェームズの進むべき道も少しははつきりした。もしも何もかもがどうしようもなくなったら、——ウォーレイス夫人に語ったあの絶望的な一歩が彼の唯一の逃げ場所なのだが——、その一歩を踏み出すに多少なりとも憂いが減ずるといふものだ。愛する人たちを悲歎に暮れさせることは避けられないが、しかしそれもそんなに長くは続かないのだ。それに、自分が不名誉に曝されるのを見るよりは、自分の死の方が皆にとって遥かに耐えやすいだろう。

時は迫っていた。そして彼はまだ躊躇っていた。少なくとも結婚を遅らすような予期せぬ出来事が何か起こってほしい、彼は取り乱した頭でそう願っていた。「死の家」はぞっとするほどに暗い。その門に逸散に向かう気には到底なれない。きつと何かが起こるはずだ。考える時間が欲しい。本当に逃げ道は他にないのか見極める時間が。確かなことが何も分からないとは何と怖ろしいことか。ジェームズは己の優柔不断に気が狂いそうだった。

侯爵夫人たちに袖にされたフォースイス少佐が、数週間を安上がりで過ごそうと、リトルプリンプトンにやって来た。まあ、そうせざるを得なかったというのが実際のところなのだろう。少佐は、

ジェームズの結婚も近いことだから、それが済むまでここにいるつもりだと言う。ジェームズが花婿付添人を誰にするかまだ決めていないと知ると、自分がやっても言った。経験豊富な私に任せておけ、豪華な結婚式で何度も務めたさ、なーに、どうやって地面に下りたらいいのかロープの使い方は承知の助、と可笑しな比喻でジェームズを納得させようとした。

「あと三週間だな。」ある朝、朝食に下りてきた少佐が上機嫌でジェームズに言った。

「そうですか。」

「わくわくしてきたんじゃないか？」

「ええ、無茶苦茶。」

「正直言つて、ジェイミー、おまえほど冷静な花婿は見たことないよ。えっ、私が介添人を務めた花婿殿たちの何人かなんぞ、どうやって落ち着かせたらいいか分からなかったぐらいだ。」

「叔父さん、僕は今日ちょっと気分がすぐれないんです。」

ジェームズは病気がりであることが鬱いでいることの充分な言訳になることが有難かった。気分がすぐれないと言えば、メアリーも村の巡回に付いてこなくていいと言う。――式が近づいているにもかかわらず、メアリーは病人や貧しい人たちへの巡回を怠ることはなかった。彼女はフォーサイス少佐に、ジェームズのことには心配する必要はない、静かに本を読ませておけば大丈夫だと告げていた。彼が長時間一人で田舎を散歩するのを邪魔する者もいなかった。しかし、読書は今は見せかけに過ぎなかったのである。ジェームズは追い詰められ、頭は混乱し、本に向かって一言も理解できなかった。ただ相も変わらず同じ問題と向き合っていた。何とかして逃げ道を探さなくては。彼は乗り越え

られない壁を前にして、それでもなお、何か起こるにちがいない、この込み入った状況や何もかもを一挙に解決するような大団円が待っているにちがいない、そう盲目的に期待していた。

孤独な逍遥の中にのみジェームズは慰めを見出していったのだった。人で溢れたロンドンにおいてさえ、彼は邪魔されることなく彷徨うことのできる人通りの少ない地区を知っていた。だから、ここブリンプトンでは尚更のこと、木々と花々と広い牧草地のなかで自分を忘れることができた。さらに、長い間故郷を留守にしていたことが感覚を研ぎ澄ましたのだろう、イギリスの田園の得も言われぬ魅力に初めて気付いたのだった。彼は春が大好きだった。無数の金鳳花が花を咲かせ、緑の野原が金色の布で覆われたようになる。その上をペルジーノの描いた天使たちが歩き回ってもおかしくないほどだ。色彩は絶妙で、いかなる絵具、いかなる刷毛を使っても再現できそうにない。すべてが春の大気に包まれ、輪郭が和らぐ。時々ジェームズは辺りで一番高い丘に登って、まばゆい陽光に照らされた平原を見下ろした。麦畑、牧草地のクローバー、その中を走る小径と小川、そうしたものが自ら光を発しているかのように霊妙で調和のとれた構図を成している。彼は心地よい夢想到に捕らえられるのだった。官能的と言ってもよい、分析できない白昼夢だった。

共有地の反対側に高い樅の林があった。ごつごつとして黒い、暗い緑の葉は銀色の霧に包まれている。まるで枝の間に百年の霜が冷たい蒸気となって去りがたく残っているかのようにだ。その樅の林は

丘の端から頂に向かってしばらく鬱蒼と続くのだが、そのあちこちに巨大な樅の木が聳え立っていて、まさに春という若き神の花嫁のように、新緑の若葉を吹き出そうとしていた。樅と樅との素晴らしい対象、――樅が不死を象徴するなら、樅は永遠の若さを象徴していた。

そして爽やかな夏が来ると、静謐で冷やりとした松林がジェームズの気分合致したのだった。松林は生命の森のようだった。黄泉の国の死神が詩人となって仄暗い迷宮を彷徨っている。高くほっそりとした松の木々は大洋を航海する船のマストのようだ。優しいアロマの香り、柔らかな光、それと気づかないほどに微かな紫の霞。松林では日中でも暑さはほんの少ししか感じない。こうしたものすべてがジェームズに何とも言えぬ安らぎを与えてくれた。松林にいと悩みを忘れ、自分の真の人生であるように思われるあの愛に身を任せられる。ここではウオーレイス夫人の思い出が血肉を持って現れ、それがあまりに真に迫っているので、思わず両手を差し出して夫人を握まえたくなる……。茶色に変色した松の針葉は、踏んでも柔らかく、足音はほとんどしない。松の香りが眠気を誘う東洋の薬のようにジェームズの肺を充たすのだった。

しかし、そうしたものはなくなってしまうていた。求めてもいないのに、あの懐かしい笑い声が再び彼の耳に鳴り響く。あのほっそりした指の感触を両手に感じる。ジェームズは悍しい気持ちでその笑い声、指の感触を払いのけた。今やウオーレイス夫人がもたらすものは苦々しさだけだった。彼は夫人を忘れようと必死に務めた。気が狂いそうになるほど苦しかった。病気になる前にもひどく苦しんだが、今はその何倍もの力で蘇る恋情に苦しめられ、かつては喜びを与えた自然も耐えがたいほどに単調なものとなっていた。区分けされ、整えられた田園風景にはぞっとするだけだ。一インチた

りとも人の手が加えられていないところはない。まるで監獄だ。俺の手足は重い鉄の鎖に繋がれている……。空には幾重もの暗い雲。その鋭い曲線は、巨人族の彫刻家の手になるもののように巨大で、ほとんど息ができないほどだ。黒ずんだ榆の木が整然と配置され、牧草地も入念に手入れされている。それを黒々として物寂しい丘が取り囲んでいる。豊かで肥沃なケントの大地自体が圧迫感を増加する。この鉄の鎖から逃れることは不可能なのだ。ここから逃げ出す力はもう俺には残っていない。ああ、ここなんか大嫌いだ！

ある情緒に影響された人たちが何世紀にもわたって受け継いできたある基準、ある生き方がジェームズには耐えられなかった。彼はふがいない鳥のようだった。籠の中に生まれ、自由を手にする力を持たぬ鳥。自由に生きたいという渴望も所詮は実を結ばぬ定めなのだろう。自分は女より弱く、無力なのだ、そうジェームズは冷やかな自嘲を込めて認めた。何の目的も持たぬ、虚偽だらけの小さな村で暮らしてゆく気力もなければ、自分の人生を生きてゆく胆力もない人間。何もかもが不確かで、古いものと新しいものとの間で引き裂かれ、彼はぐらついていた。理性は彼を前に進ませようとする。良心は彼を引き戻そうとする。彼の家系がジェームズに及ぼす力は途轍もなく大きなものだった。彼には浮浪者のエネルギーさえなかった。自分の全財産を持つところ定めずさまよい、将来のことは神々の手に任せている浮浪者。ジェームズはそうした若者を心から羨んだ。家もなければ金もない、しかし自由なのだ。少なくとも、俺のように足枷に縛られてはいない。足枷とは、はめているのも塗炭の苦しみなら、断ち切るのもまた塗炭の苦しみなのだ。ああ、この足枷を引きちぎることができれば、世界を自分の僕にすることもできるのだが。自由、自由！ 自分が囚われの身であることを意

識してさえないなければ！ 意識していることが苦悩のもとなのだ……。ジェームズは再び、きちんと野原を囲んでいる針金の柵の脇を歩き始めた。その端正で硬直した柵を見ていると頭が痛くなる。ほんの少しでいい、何ら人間の手が入っていない土地が見たい。世界の全部が全部監獄ではないことを思い出させてくれるような土地が。しかし、それはどこにも見つからなかった。

秋が既にやって来ていた。朽ち、色付いた木々の葉は、避けられぬ死が近いことを知って、深く物思いに沈んでいるようだ。が、枯れ葉の官能的な色合い、林檎の赤と金の輝き、そして最初の落葉の豊かな色調の中には、たとえ朽ち果て、死のうとも、そこにはなお別の生命の始まりがあることを予感させるものがある。しかし、ジェームズにとって、秋は何らそうした慰めのない、死の前触れだった。ウオーレイス夫人が自分を愛することは有り得ないと知った時から、彼には生きる目的がなくなっていた。これまでは夫人への愛が彼にとって唯一の生きる支えだったのだが、その愛も今は歎かわしく憎むべきものとなっていた。畢竟、俺の人生は俺のものなのだ。その人生でやりたいことをやっでどこが悪いというのだ。他の人間には、たとえ俺を愛しているからといって、俺の自尊心まで奪う権利はない。もし俺に両親やメアリーに対しての義務があるのなら、俺自身に対する義務もあるはずだ。ジェームズは、これまでも増して、メアリーとの結婚は墮落以外の何ものでもないと感じた。愛のない結婚は売春と同じだ、——彼は新たな感情を持つてそう繰り返した。皆が無知ゆえに軽蔑する肉体を汚れないものに保つ方法がもし死以外にないとするなら、そうだ、俺は死ぬことを怖れはしない。彼はあまりに長い間死と向い合っていたので、死ぬことを考えても恐怖は感じなくなっていた。死ぬことはありふれた機械的なこと、生まれることほど苦痛を伴うものではなく、すぐに終わること

なのだ。肉体がすべて、肉体は絶対に不死なのだ。意識の消滅は新しいものが誕生する徴なのだ。腐敗の中から新たな生命が湧き出すのだ、ちょうどローマの石棺の中から薔薇が咲くように。肉体は土と一つになって、永遠の循環を続けてゆくのだ。

しかしある日の散歩の最中、彼はこうした考えは気狂いじみて馬鹿げている、こうしたことを考えるのはまだ健康が回復していないからにすぎないのだ、と苛立たしげに呟いた。何だかんだ言っても、生命ほど大切なものはない。それを壊れた玩具のように捨ててしまうのは愚かだ。ジェームズは自分に強要されているように思われる運命に抗った。努力してみようじゃないか。何が起ころうともこの忌わしい絆を断ち切るのだ、そう決心した。少しの勇氣と、少しの強い心、必要なのはそれだけだ。みんなが俺に求める犠牲は大きすぎる……。

散歩から帰ると、しかし、やはりすべては避けられないことなのだという思いに襲われ、ジェームズは絶望に肩を竦めるのだった。どうしようもないのだ。リトルプリンプトンの雰囲気が寄って集って彼を圧迫し、無力感に襲われる。目に見えない強い力が彼を取り巻き、血管からすべての男らしさの血を吸い取って、思考力を鈍らせる。彼を、己の意思を持たず、己自身のものではない原理に従って自動的に動く、単なる操り人形にしてしまう。父はいつもながら居間の暖炉のそばに腰掛けて――よほど温かな天気でなければここを離れないのだ――時に声に出してみたり、ちよつとした感想を口にしながら新聞を読んでいる。母はテーブルのところで背もたれの堅い椅子に座って編物をしている、――相も変わらず編物だ。見たところ二人とも満足感と優しさを漂わせている。それはまるでどんな形にも自分を合わせられる蠟のようだ。しかし実際は二人とも鉄なのだ。最近になってやつと

ジェームズは、二人の愛がどんなに無慈悲なものか、二人の偏狭な考え方がどんなに冷酷なものかに気づいた。二人のなかでは父が取分け残酷で仮借ないように思われた。母の怒りには耐えられる。しかし父の弱さはそれ自体破壊的な凶器だった。絶望した様子、無言の悲しみ、他の人たちの辛抱強さに頼り切った姿は、どんな専制君主のそれより周囲の者を圧倒した。ジェームズは閉じ込められた籠の中で羽根をばたつかせている鳥でしかなかった。その籠の格子をなすものは、愛情深い優しさであり、信頼であり、涙であり、悲痛な沈黙であり、苦い幻滅であり、老齢だった。

「メアリーはどこ？」ジェームズは尋ねた。

「庭よ。ウイリアム叔父さんと散歩してる。」

「二人はよつぽど相性が合うみたいだ。」大佐が笑みを浮かべた。

ジェームズは父を見た。こんなに年老いて弱々しい父を見たことはないと思った。手の甲の血管は透けて見える。薄くなった白髪、丸くなった背中がその印象を強めている。

「父さん、結婚式が近づいて嬉しいでしょう？」父の肩に優しく手を置いて、ジェームズは尋ねた。

「嬉しいね。」

「早いとこ僕を追い出したいんでしょう？」

「男は父母を離れ、妻と結び合い、二人一体となるべし（注22）さ。私たちはおまえなしでやっていかなくちやな。」

「父さんは僕よりメアリーの方が好きなんじゃないかな？」

これに対し大佐は何も答えなかったが、パーソンズ夫人が笑って言った。

「あたしの印象じゃ、お父さんはメアリーにすっかり夢中になってしまつて、あなたがメアリーに値しないんじゃないかつて考えてるみたいよ。」

「ほんと？　なのに父さんは僕にメアリーと結婚してほしいんだ？」

「そうだ。心からな。」

「じゃあ、婚約を破棄した時にはさぞ惨めだったことでしょうね。」

「その話はするな。もうすべて決まつたことだから言つてもいいと思うが、ジェイミー、おまえがメアリーとの約束を破るくらいなら、私のこの足元で死んでくれた方がいい。」

ジェームズは笑つた。

「母さんはどう？」彼は陽気に尋ねた。

母は何も言わず、真剣な表情で息子を見た。

「そうか。母さんも同じか。メアリーと結婚しないなら死んでくれた方がましつてわけだ。父さんも母さんもよっぽど血に飢えてるみたいだな。」

息子が明るい笑顔を浮かべているので、二人はそこに重い意味が含まれていることには気づかなかつた。しかしジェームズはこの愛情深くも無慈悲な両親が彼の死刑執行令状に署名したのだと感じた。二人は笑みを浮かべて黄泉の国への扉を開けたのだ。そしてジェームズもその国へ笑みを浮かべて入つてゆく心の準備が整つたのだつた。

その時メアリーが入つてきた。後ろにフォースイス少佐もいる。

「あら、ジェイミー、帰つてたの？」彼女が大きな声で言つた。このきつい金属的な声はメアリーの心の卑しき、自己満足あつらひを露あらわしているように思える。「どこに行つてたの？」

メアリーは背筋を伸ばして自信たつぷりテーパーの横に立つた。文句の付けようのない美德と、偏狭だが強い意志とをもつて、メアリーは他の人たちを完全に支配している。彼女自身皆を意のままにできると感じ、実際、先程までフォースイス少佐の是認しかねる行動について、やんわりと少佐を説諭していたのだ。今日は秋の装いだった。と言つても無地のサージのスカートに、雨模様ということもあつて、冬にも被かぶつていた使い古しの麦藁帽姿。メアリーはどんな物でも使えるだけ使うという主義の人なのだ。そしていよいよ古くなつた物は、結婚前日貧しい人たちに恵んでやるつもりでいる。

「顔、赤い？」とメアリーが訊いた。「今日は風が強いから。」

ジェームズには今日のメアリーは一段と女性らしさに欠けるように見えた。最初彼自身を驚かせた肉体的拒否感が、今は抑えきれない嫌悪感へと変わつていた。メアリーのする何もかもに苛立つた。俺がメアリーを見る時の目に嫌悪感が表われているのに気が付かないのだろうか。そう考えながら彼は心の中で質問に答えた。

「そんなことないよ。ただ、君と結婚するくらいなら自殺するね。」

自分がメアリーを厭いとうのが理屈に合わないのは分かつていた。しかしどうすることもできなかつた。両親がメアリーに傾倒していることも彼女への嫌悪感を増すだけだつた。二人はメアリーのど

こが好いと思っっているのだろう。メアリーが帽子を取り、髪をいやというほど後ろに引つ張って、これ以上ないほどにきちんと整えるのを、彼は敵意のようなものを持って眺めていた。次に彼女は母が縫物を入れてある籠から編みかけの靴下を取ってきて腰掛けた。彼女の行動のすべてに耐えがたい恩着せがましさがあつた。なのにメアリーはいつも以上に自分に満足しているように見える。ジェームズは彼女を傷つけてやりたいという狂気じみた欲求を感じた。この自己満足を粉々に砕くような、急所を突く一言を言つてやりたい。そう思いながら、しかし、ジェームズは上機嫌を装い、笑つて冗談を言つていた。

「午前中は何をしていたんだい、メアリー？」パーソンズ大佐が尋ねた。

「自転車でタンブリッジウェルズに行つてドライランドさんとゴルフです。あの人とってもお上手なんですよ。」

「負けたのかい？」

「それが、勝っちゃつたんです。たまたまですけど。」メアリーは謙遜して答えた。「でもドライランドさんはとっても負け上手なんです、——女性に負けると怒りだす男性もいるでしょう？」

「あの副牧師は良いところがたくさんあるようだね」とジェームズが言つた。

「あなたのこと話してたわ、ジェイミー。あなたが自分を嫌つてるんじゃないかつて言つてた。で、わたし、絶対そんなことないつて言つておいた。あの人、ほんとに良い人よ。好きにならずにいられない。あなたにゴルフを教えたいつて言つてたわ。」

「で、そうするつもりなのかな？」

「だめよ。わたしが教えるつもりなんだから。」

「僕に教えることがいっぱいあるんだ。きつと持て余しちゃうだろうな。」

「あつ、そうだ。父さんが明後日ウィリアム叔父さんと三人で狩をするのを忘れないように言つてた。十時に迎えに来てくれるつて。」

「ああ、憶えてるよ。叔父さん、僕ら明日銃の点検をしておかなくちゃいけませんね。」

ジェームズはついに決断したのだった。もう時間を浪費するつもりはなかつた。実際、浪費できる時間は残されていなかった。結婚の準備があらかた終わったことで、その日が間近に迫つていふことを否応なく考えざるを得なかつた。結婚祝いの品もすでに幾つか届いている。父と母がこれから自分のやろうとしていることを容易にしてくれたのが心底ありがたかつた。これが父と母そしてメアリーへの一番の思いやりなのだ。どんなことになつてもメアリーと結婚はできない。それはこれまで吐かざるを得なかつた幾つかの嘘に、さらに大きな嘘を重ねることになる。そんな惨めなことには耐えられない。メアリーが当然の権利として要求しているものを満足させる唯一の途は、自分が死ぬことなのだ。半年も経てば、自分もあの可哀想なレジー・ラーチャーと同じように忘れられるだろう、それは疑いない。忘れられてもいいではないか。ジェームズは何もかもにうんざりしていた。静かに死にたかつた。ウォーレイス夫人への愛がこの世で彼に平安を与えることは有り

得ない。愛するだけ無駄なのだ。しかし克服できるものでもない。

クリボン大佐が狩に招待してくれたのは絶好の機会だった。彼は自分の死が何としても偶発的なものに見えるよう願っていた。最も自然に見えるのは銃の手入れをしている時だろう。以前にも銃で撃たれたことはある。その時の痛みは大したものではなかった。だから怖がることはない。

彼はようやく生気を取り戻した。読書も散歩もせずに、父と話した。最後に残す印象はできるだけ魅力的なものにしておきたかった。そのために自分の最高の姿を見せるよう大いに気を配った。

その夜はぐっすり眠った。そして翌朝、ジェームズはいつになく念入りに服装を整えた。プリンプトンハウスの朝食は八時である。朝食後ジェームズはいつものようにパイプを燻らしながら新聞を読んだのだが、自分が落ち着いていることに少しばかり驚いていた。何の疑念も感じなかったからだ。これまで心身を麻痺させていた躊躇いは全くななくなっていた。

「自由の始まりだ。」彼はそう思った。もはや人間の興味は消え失せ、漠然とした愉しさを感じるだけだった。そして自分が今演じている喜劇の可笑しさを理解し、芝居がかった態度を取っていない自分を、冷静な観客のように、褒めてやった。

「じゃあ、叔父さん、」ジェームズは腹を決めて言った。「どうです、そろそろ銃の手入れを始めませんか？」

「私はいつでもいいよ。」

「それじゃあ。」

二人は馬具倉庫と呼ばれている部屋に入った。ジェームズは入念に銃を磨き始めた。

「上着は脱いだ方がいいな。」彼は言った。「その方がやり易い。」

銃はここ半年以上使われていなかったから、やることは沢山あった。ジェームズは屈み込むと、安全装置の錆をこすった。

「おいおい、」とフォーサイス少佐が言った。「おまえさんみたいにぞんざいに銃を扱う男は見たことないぞ。それでよく軍人と言えるな、」

「そうなんです。」ジェームズは笑って答えた。「皆んなからいい加減な奴だっていつも言われてます。」

「だが、頼むよ、注意してやってくれ。弾が入っているかもしれないぞ。」

「入ってなんかいやしませんよ。それに安全装置が付いてますし。」

「しかし、そんな持ち方をしちゃいかん。」

「これが暴発して僕が死んだら面白いでしょうね。メアリーは何て言うだろう？」

「これまで何遍も間一髪のところまで死なずに済んだおまえさんのことだ、滅多なことじゃ死にやしないさ。きつと嫌になるほど長生きするよ。」

暫くしてジェームズは伯父の方を見て言った。

「ああ、ひどい油ですね。新しいのはないのかな。」

「私もそう思ってたところだ。」

「叔父さん、叔父さんは賄いと仲良しなんですよ？　ひとつ彼女に頼んでちよつと貰ってきてくれませんか。」

「あの女、私のためなら何でもしてくれるさ。」フォーサイス少佐は満足そうな笑みを浮かべた。侯爵夫人であろうと台所で働く女であろうと、自分の魅力には勝てない、そう少佐は豪語していた。彼はカップを手にとり、急ぎ足で部屋を出て行った。

ジェームズはすぐに立ち上がり、棚の引出しから弾を取り出し、それを銃に込めると、銃床を床に付け、銃口を心臓に向けた。そして――引き金を引いた。

エピローグ

クリボーン夫人がK C B（注23）サー・チャールズ・クロウ大將（バース市グラッドホーントラス八番地）に宛てた手紙。

チャールズさま

新しいお住まいをバースに購入し落ちつかれたとのこと、おめでとうございます。そしてわたくしたちをご招待いただき本当にありがとうございます。わたくしはバースがそれはそれは大好きなのでございます。バースでは素敵な方々にお目にかかれまし、大昔からの友人にもお会いできますから。皆さんどんな風にお歳を召したか拝見できるのも楽しみです。ご親切なご招待を受けてよいものやら悩みましたが、こちらで起こったあの本当に恐ろしい出来事の後すこしばかりここを離れるのは嬉しいことと、ご厚情に甘えさせていただくことにいたしました。この冬はずっと心が安まりませんでした。加えてリユーマチにも何度か襲われました。これまでリユーマチで苦しんだことなど一度もなかったのですが。

前にもお知らせいたしました、ジェームズ・パーソンズ大尉が娘メアリーとの結婚式を二週間後

に控えて、かわいそうに、突然不可思議な死を迎えました。銃の手入れをしている最中それが暴発して弾に当たってしまった、偶然の事故だった、——そう皆考えています。でもわたくしはあれはそのようなものではないと確信しております。あの恐ろしい出来事があってから半年、わたくしは良心の呵責にさいなまれ、一睡もできないのでございます。恐ろしく苦しいのでございます。きつとあなた様もわたくしの変わりようをご覧になればびっくりなさることでしょう。わたくしの容姿は老人のようになり始めています。絶対ご内密にお願いいたしますが、ジェームズは自殺したのです、——わたくしはそう信じております。彼はわたくしに愛を告白したのでございます。もちろん、わたしはあなたの母親でもおかしくない歳なのだとその場はずめましたが、恋は盲目なのでございます。インドでは、かわいそうに、あのアルジー・ターナーもわたくしのために毒をおおって悲劇的な最後を迎えました。それを思うとどうやって自分を許したらよいのか分かりません。わたくしはジェームズ大尉の愛をおおるようなことは何もしておりません。なのに、彼は愛を告白した。わたくしはあの時あまりの驚きでもう少しで気絶するところでした。ジェイミーは、自分が愛していない女、しかもわたくしの娘と結婚するくらいなら死を選ぼう、そう考えたに違いありません。ああ、あなた様ならわたくしがどう感じているかお分かりいただけますよね！ もちろんこのことは夫にも他の誰にも絶対気づかれないようにしております（夫は最近痛風がひどく、毎日とても苛立っております）。ですからジェームズ大尉の死の真相について疑いを抱いだいている人は誰もおりません。

でもわたくしは決して忘れられないでしょう。あのかわいそうなアルジー・ターナーのことを考えると耐えられませんでしたのに、今はそれに加えてジェームズ・パーソンズ大尉の胸に広がった真つ

赤な血のことを考えてしまう。二人とも本当に好い青年でした。思うに、大尉のことを心から悲しんでいるのはわたくしただ一人のようでございます。もしわたくしに息子がいてその子が亡くなったら、気が狂ってしまうか、一週間はヒステリーの発作に襲われるでしょうに、パーソンズ夫人はただ「神は与え給う、そして奪い給う。御名みなに祝福を（注24）」と言ったきりなのでございます。なんて不敬な、なんて冷たい、そう思わずにはおられません。わたくしは本当に動転してしまい、数日の間、夜は娘と一緒にいてもらわなくてはなりませんでした。わたくしはメアリーが本当に大尉を愛していたとは信じておりません。娘のことを悪く言うのは嫌ですが、わたくしには真実を語る義務があると感じますので申し述べますが、わたくしの考えでは、娘が愛していたのは自分自身だと思えます。自分が首尾一貫した人間であること、リトルプリンプトンでの好い評判、そちらの方をより愛していたのです。パーソンズ大尉のご両親が娘を持ち上げたように持ち上げられたら、誰だっておかしくなるに違いありません。二人は娘にやりたいようにやらせすぎたと思うのです。わたくしは、正直、あの二人はあまり好きになれません。もちろん良い人たちですが、でも所詮歩兵であって騎馬兵ではありませんから。

辛いことにジェームズ大尉はほとんど即死でした。大尉は発見された時、「これは事故だ。弾が装填されているとは知らなかった。」と言ったそうです。（それは有り得ないことです。よくも皆んな騙されたものです。でも、まあ、皆んなは大尉の秘密を知りませんから。）今わの際さいわの言葉は「メアリーに伝えてほしい、副牧師と結婚するように。」とのことでした。

もし婚約者が亡くなったなら、わたくしならどんなことがあっても他の誰とも結婚しません。オー

ルドミスを通します。でも、そうしたまともな気持を持っている人が何と少ないことでしょう。副牧師のドライランドさんがもうメアリーにプロポーズしたのでございます、メアリーは断りましたが。ドライランドさんは愉快な話がお上手で、押し出しも立派な青年です、——わたくしの理想ではありませんが。でも、もちろん、これは大したことはありませんよね。さて、お葬式から一ヶ月ほど経って、再びプロポーズしたそうです、娘はまた断りましたが。わたくしはドライランドさんのやっていることは品がないと思うのですけれど、娘はとても高貴なことだと言っているのです。

どうやらパーソンズ大佐も奥様も副牧師の申し出を受け入れるようにメアリーに圧力をかけたようです。これはジェイミーの最後の願いだし、最後までメアリーの幸せを考えていたのだからと。ドライランドさんが立派な青年であることに疑いはありませんが、でも、もしパーソンズ夫妻が本当にご子息を愛していたのなら、メアリーに結婚するよう勧めはしなかったでしょう。それではあまりに薄情だと思います。

さて、実は数日前ドライランドさんがやって来て、セント州ストーンフェアリーの教区牧師に任命されたと仰しゃいました。わたくしは早速ジャクソン夫人——リトルプリンプトンの教区牧師の奥様です——のところへ行行って、聖職者目録で確かめていただきました。俸給は年三百ポンドで、まずまずの住居も付いているとのことでした。もちろん大した額ではありませんが何も無いよりはましでしょう。で、今日の午前中わが家に姿を現して、メアリーと二人だけで話したいと仰しゃいました。後で判ったのですが、ドライランドさんは、当然この教区を去らなければならぬがこれから住むことになる牧師館には悲しいかな女主人がいないと言って、膝を折って三度目のプロポーズをしたそうです。

す。ドライランドさんはわが家に来る前にパーソンズ夫妻のところへも行っていました。そこで、大佐がメアリーをお呼びになって、自分たちのためにもこの申し出を断らないでほしい、結婚するのはメアリーの義務だと思う、と伝えたそうです。で、結果として、メアリーはプロポーズを受け入れ、二人は特別許可証（注25）を得て一ヶ月後にささやかな結婚式を挙げることになりました。亡くなられたストーンフェアリーの牧師の奥様は六週間後に牧師館を出ることになりますから、二人がそこに落ち着くまで、二週間のハネムーンができることになります。二人はそれをバリで過ごそうと考えています。

わたくしの考えでは、いろいろ考え合わせてみますと、この結婚はあのメアリーが期待できる最善のものだと思います。聖職者委員会から支払われる俸給は、当然、教会所有地からの収入より安全です。メアリーはもう若いとは言えませんが、これが結婚の最後のチャンスだったでしょう。わたくし自身の娘ですが、正直、服装の趣味は決して良いとは言えませんし、それに顔も平凡で、十人並み以上ではありません。（メアリーがわたくしの娘だとは誰も考えません。）これから年齢を重ねるにつれて、ますます平凡になってゆくでしょう。わたくしは十八の時よく母の女中に言われたものです、「お嬢様、お嬢様のようなスタイルを持たら良いのに、とお思いの若い奥様がたくさんいらっしゃいます。」でも、かわいそうに、メアリーはスタイルが良いとはとても申せません。田舎牧師の妻がお似合いです。娘は忠告を与えたり、貧しい人の世話をするのが大好きですから、垢抜けていなくても問題にはならないでしょう。わたくしはできるだけのことをしたつもりなのですが、残念なことに、娘は美しく装うという考えが身につきませんでした。

ドライランドさんは今、もちろんのことですが、無上の悦びに浸っています。タンブリッジウェルズに行つて婚約指輪をあつらえたかと思えば、つい先日は、婚約のプレゼントだと言つてサー・ホール・ケイン（注26）の全集を送ってきました。気前の良いのは明らかです。オシドリ夫婦となることは間違いないでしょう。それにわたくしは一人娘が片づいたことを嬉しく思つております。娘は夫とわたくしにとつてどちらかと言えば厄介な存在だったからです。わたくしと夫は今でもお互いをとても愛していますから、第三者の存在が邪魔に思えることが時々あつたのでございます。信じてくだらないでしょうが、結婚して間もなく三十年、今でもわたくしたちはお互いの手を取りあつてソファに腰掛けている時が一番幸せなのでございます。わたくしはおセンチな女ですが、それを恥じてはおりません。夜など一緒に座つておりますと、わたくしがリユーマチの痛みに襲われるのではないかと心配してくれることもございます。でも、わたくしはいつも充分暖かい服装をするよう心がけておりますし、夫にも必ずマフラーを掛けるようにしております。

どうぞ奥様に呉々も宜しく、もうすぐお目にかかれるのをとても楽しみにしておりますとお伝えください。

かしこ

クララ・ド・テュレヴィュー・クリボーン

〔完〕

注

〔注1〕『フェードル』ギリシャ神話に取材したラシーヌの悲劇（二六七七）。テゼの妻フェードルが義理の息子イポリットを愛し、拒絶されたために、イポリットを無実の罪に陥入れ、自らも滅ぶ。

〔注2〕西洋の悪魔にはオックステール（牛の尾）が付いている。

〔注3〕旧約聖書サムエル記 第十一章一節など。

〔注4〕Marie Corelli（一八五五—一九二四）本名 Mary Mackay 英国の作家。

〔注5〕中世の動物寓話集にある。

〔注6〕コンソル公債 一七五一年各種公債を年三分利付きで整理して設けられた永久公債。現在は二分五厘利付き。

〔注7〕クロケット 通例二人一組（または個人）の二組で、芝生の上で行われるゲーム。現在のゲートボールに似ている。

〔注8〕この遣り取りは、諺「慌てて結婚ゆっくり後悔（Marry in haste, and repent at leisure）」をふまえている。

〔注9〕結婚予告（banns）とは、教会で結婚式を挙げる前に、引き続き三回日曜日に予告し、異議の有無を尋ねること。

(注10) フレデリック・スレイ・ロバーツ (一八三二—一九一四) 英国の軍人、陸軍元帥 (一八九五)

(注11) 旧約聖書「箴言」八章十三節

(注12) 初期キリスト教会の神父アタナシウス (二九五年頃—三七三年) ニカイア公会議で唱えた三位一体説。アタナシウスは「正統信仰の父」と呼ばれる。

(注13) ボーリングに似たゲーム

(注14) DV ラテン語で *Deo volente* (= if God permits)

(注15) ギリシア神話で、オデュッセウスの妻。トロイア戦争で夫が出征中に言い寄る求婚者を退け、二十年間孤閨を守り、夫と再会の喜びを得た。

(注16) マタイによる福音書五章十五節

(注17) Paul Kruger (一八二五—一九〇四) 南アフリカのボーア人の政治家。トランスヴァール共和国大統領 (一八八三—一九〇〇)

(注18) ウィリアム・S・ギルバート (一八三六—一九一一) 台本、アーサー・サリバン (一八四二—一九〇〇) 作曲による喜歌劇 (一八八五)

(注19) マタイによる福音書 六章十節

(注20) 南アフリカの地名 一八九六年、この地でボーア人と英国軍の戦闘があった。

(注21) ギリシャ神話に登場する女性

(注22) 旧約聖書「創世記」二章二十四節

(注23) Knight Commander of the Bath バース上級勲爵士

(注24) 旧約聖書「ヨブ記」一章二十一節

(注25) 予告 (banns) なしに定時以外または教区外で牧師に結婚式を挙げてもらえる許可証。カンタベリー大僧正から出される。(注9参照)

(注26) Sir Thomas Henry Hall Caine (一八五三—一九三二) 英国の作家。マン島を背景に数々のロマンス作品を書いて人気を得た。

訳者あとがき

モームが一九〇一年に発表した *The HERO* の全訳、本邦初訳である。

モームは一八九七年二十三歳の時の処女作『ラムベスのライザ』から『人間の絆』（一九一五）までの間に計七つの長編小説を発表しているが、この『英雄』はその二作目に当たる。この七つの作品は習作程度のものと云うのが大方の研究家の評価であって、熱烈なモームファンでも読んだことのない人が多いのではあるまいか。

モームの作品で現在でも一般読者に読まれているものは『人間の絆』以降のものがほとんどである。私は彼の最高傑作は『人間の絆』だと信じて疑わないのだが、かねがねその傑作がどのようにして生まれたのかに興味を持っていた。これが突然生まれた筈はない、必ず『人間の絆』の誕生を予感させるものがそれ以前の作品の中にある筈だ、そう思って八つの作品を読んできたのだが、この八作のうちで『人間の絆』と濃い血縁関係にあるのは『英雄』『回転木馬』（一九〇五）『探険家』（一九〇八）の三作だと云うのが現時点での私の結論である。（最も深い血縁関係にあるのは間違はなく『回転木馬』）『ラムベスのライザ』はチャーミングな作品だが、ロンドンの下層階級がテーマとなっているのはこの一作だけ、*The Making of a Saint*（一八九八）は十五世紀イタリアを舞台にした歴史小説、『クラドック夫人』（一九〇二）はケント州を舞台にしているという点では血縁関係にあるものの、その関係性は薄い、*The Bishop's Apron*（一九〇六）は宗教と上流階級を揶揄した軽い

作品、『魔術師』（一九〇八）はモームには珍しいオカルト小説である。

では、どんな点で血縁関係にあると云えるのか。

一言で云えば「真面目さ」である。『人間の絆』を書き終えた後のモームの作品は、傍観者的態度と云おうか、斜に構えた態度と云おうか、余裕と辛辣な皮肉に溢れたものが多い。それに対してこの三つの作品には、『人間の絆』と同じように主人公が一途すぎて、読者の気を滅入らすところがある。しかし、後のモームの作品にはあまり感じられない、この息苦しいばかりの真面目さもまたモームの一面なのだ。

具体的に二つだけ云っておく。一つ目。モームの一貫したテーマはロバート・L・コールドーが云っているように「自由の探求」である。"human bondage" とは「人間を束縛するもの」の意味だ。『人間の絆』は主人公フィリップがいかにその束縛から解放されるかの物語だと言ってもよい。『英雄』ではその脱出願望が赤裸々に語られている。二つ目。自分が愛する人に愛されない者の悲劇。これはモームのもう一つの大きなテーマだと私は考えているのだが、フィリップのミルドレッドへの愛（『月と六ペンス』ではダーク・ストルーヴのブランシユへの愛）が報われないように、ジエームズのウォーレイス夫人への愛も結局報われないままだ。

また、これは『人間の絆』と直接に繋がっているとは云えないが、『英雄』にはモームの厭戦思想が色濃く表われていることにも注目したい。コスモポリタンと言われるモームだが、イギリスに対する愛情は強かった。だから国家存亡の折には、英国諜報部MI6のスパイを務めたことでも判

るように、命を危険に曝しても祖国のために働いた。しかし、根本は戦争を厭う人であったのだ。それは『アシェンデン』(一九二八)『むくいられたもの』(一九三二)『夜明け前のひととき』(一九四二)に取分け強く表われているが、この『英雄』でも主人公ジェームズが両親と交わす会話(第4章、特に第16章)を読めばそれが解っていただけだろう。また、ジェームズが戦場で戦友を助けようとした行為を決して「英雄」的な行為だと考えていないこともその象徴である。

『英雄』が傑作だと云うつもりは毛頭ない。秀作ですらないかもしれない。欠点は多い。幾つか挙げてみる。

・地の文に著者(I)が出てきて読者(you)に直接語りかけることがあって、物語の流れにそぐわないところがある。取分け、一般論を述べたり、アフォリズムを使用したりする箇所に見られる(暗い話なので、なるだけ笑ってもらおうと、アフォリズムを多用しているのかもしれない)。

後のモームには見られない稚拙さだ。

・若さ故の気負いからか、言葉を変えながら同じことを何度も繰り返すため、くだい。また、同じような描写が異なる章に現れて、あれ、前にもこんな文を訳したぞ、と感じたことがあった。

・時間の行き来が上手く出来ていない。ウォーレイス夫人が登場する場面は、過去の回想であるのがほとんどだが、数カ所ジェームズの空想が混じっている。それが最初良く掴めなかった。(訳文ではその点私なりに工夫したつもり)。

・ジェームズ以外の人物描写に奥行きが感じられない。これが最大の欠点かもしれない。せめて

運命の女ウォーレイス夫人がもつと描き込まれていたら——『人間の絆』のミルドレッド、『お菓子とビール』のロージーを思い浮かべてほしい——この作品ももつと読まれていただろうに、と思わずにいられない。

以前「日本モーム協会」の講演で述べたことだが、モームは、『英雄』『クラドック夫人』『回転木馬』『探険家』と書き進めながら、ケント州を舞台にバルザックの「人間喜劇」のような作品群を書いてみようと思いついてはいたのではあるまいか。この作品の第21章には、ボビキンズという若者がラーチャー姉妹と恋の戯れをする場面があるが、これなど『探険家』の主人公ルーシーの父フレッド・アラトンを読み起こさせる。(ボビキンズという名前も『探険家』に出てくる。)『クラドック夫人』の主人公の夫エドワードは落馬がもとで死んだが、『探険家』のジュリア・クローリーが借りるのは彼の住んでいた館だ。『回転木馬』のミス・リーは『クラドック夫人』そして『魔術師』にも登場する。そう思って『英雄』を読んでもみると、メアリーとその両親、ジャクソン牧師夫妻、ドラマランド副牧師などが登場する場面は、封建的な田舎紳士階級の風俗喜劇とも読める。ただ、それがジェームズの悲劇と齟齬をきたしていることは否めない。しかし、バルザックの膨大な「人間喜劇」の作品群の全てが傑作だと云うわけではないように、小説・戯曲・旅行記・随筆と膨大な著作を残したモームであるから、その作品の全てが傑作ともいえないのは已むを得ないことなのだ。

翻訳に当っては例によって石川芳恵先生に大変お世話になった。この場を借りてお礼申し上げます。